



Title	批評家クルティウスのヨーロッパ精神：同時代の作家や知識人との交流の中で
Author(s)	津田，雅之
Citation	大阪大学，2016，博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/59505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平成 28 年度博士学位申請論文

批評家クルティウスのヨーロッパ精神
—同時代の作家や知識人との交流の中で—

大阪大学大学院文学研究科 文化表現論専攻 比較文学専門分野

津田 雅之

目次

序論

第 1 節	クルティウスの育った環境や経歴	6
第 2 節	批評家としてのクルティウス	7
第 3 節	クルティウスの批評活動に関する研究史	10
第 4 節	本論文の位置	23
第 5 節	本論文の構成	24
第 6 節	批評家クルティウスの“ヨーロッパ精神”	28

第 1 章 批評家クルティウスの軌跡

第 1 節	『新しいフランスの文学開拓者達』	31
第 2 節	マールブルク時代の批評	34
第 3 節	ハイデルベルク時代の批評	39
第 4 節	1930 年代前半の批評	44
第 5 節	第二次世界大戦後における批評活動の再開	47

第 2 章 ロマン・ロラン論

第 1 節	ロマン・ロラン評価と先行研究	50
第 2 節	ヨーロッパを描くロマン・ロラン	52
第 3 節	『新しいフランスの文学開拓者達』におけるロマン・ロラン論	54
第 4 節	クルティウスのヨーロッパ理念の軸としてのライン河	60
第 5 節	結論	64

第 3 章 クルティウスとジッド、ポンティニー、コルパハ

第 1 節	『新しいフランスの文学開拓者達』におけるジッド論	66
第 2 節	1922 年と 1924 年のポンティニー論	69
第 3 節	ルクセンブルク市郊外のコルパハのサロン	76
第 4 節	クルティウスとジッドの往復書簡	80
第 5 節	結論	90

第 4 章 フーゴー・フォン・ホフマンスタール論

第 1 節	文学的伝統の継承者ホフマンスタール	91
第 2 節	ホフマンスタールの講演「ヨーロッパの理念」	92
第 3 節	クルティウスによる『ドイツ読本』の書評	94
第 4 節	1929 年に発表された二つの追悼文	95

第 5 節	批評「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」	101
第 6 節	結論	104
第 5 章	ホセ・オルテガ・イ・ガセット論	
第 1 節	オルテガによる二つのヨーロッパ論	106
第 2 節	1924 年のオルテガ論の概要	110
第 3 節	1949 年のオルテガ論の概要	116
第 4 節	クルティウスとオルテガの往復書簡	121
第 5 節	結論	126
第 6 章	クルティウスにおける批評と主著の関係	
第 1 節	『ヨーロッパ文学とラテン中世』の概要	128
第 2 節	クルティウスにおける批評と主著の関係	132
第 3 節	結論	148
	結論	150
	初出一覧	154
	参考文献	156

略号表

クルティウスの作品

<i>Brunetière</i>	<i>Ferdinand Brunetière; Beitrag zur Geschichte der Französischen Kritik</i>
<i>WB</i>	<i>Die literarischen Wegbereiter des neuen Frankreich</i>
<i>Barrès</i>	<i>Maurice Barrès und die geistigen Grundlagen des französischen Nationalismus</i>
<i>Balzac</i>	<i>Balzac</i>
<i>FGE</i>	<i>Französischer Geist im neuen Europa</i>
<i>FK</i>	<i>Die französische Kultur: eine Einführung</i>
<i>DGG</i>	<i>Deutscher Geist in Gefahr</i>
<i>ELLM</i>	<i>Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter</i>
<i>LKD</i>	<i>Literarische Kritik in Deutschland</i>
<i>KEEL</i>	<i>Kritische Essays zur europäischen Literatur</i>
<i>FGZJ</i>	<i>Französischer Geist im zwanzigsten Jahrhundert</i>
<i>BT</i>	<i>Büchertagebuch</i>
<i>GARP</i>	<i>Gesammelte Aufsätze zur romanischen Philologie</i>
<i>LZ</i>	<i>Goethe, Thomas Mann und Italien - Beiträge in der Luxemburger Zeitung (1922-1925)</i>
<i>EHH</i>	<i>Escritos de humanismo e hispanismo</i>

クルティウスの書簡集

<i>BJC</i>	Gottfried Benn, <i>Briefe an Ernst Jünger, E.R. Curtius, Max Rychner u.a.</i>
<i>GBSC</i>	Gundolf, <i>Briefwechsel mit Herbert Steiner und Ernst Robert Curtius</i>
<i>EOC</i>	“Epistolario entre Ortega y Curtius”, in: <i>Revista de Occidente</i>
<i>BO</i>	„Ein Briefwechsel mit José Ortega y Gasset 1923-1949“, in: <i>Merkur</i>
<i>DFG</i>	<i>Deutsch-französische Gespräche 1920-1950: La Correspondance de Ernst Robert Curtius avec André Gide, Charles Du Bos et Valéry Larbaud</i>
<i>RCB</i>	Max Rychner und Curtius, <i>Aus dem Briefwechsel</i>
<i>BKW</i>	<i>Briefe</i> , in: <i>Kosmopolis der Wissenschaft: E.R. Curtius und das Warburg Institute</i>
<i>LCP</i>	« <i>Lettres à Catherine Pozzi (1928-1934)</i> », in: <i>Ernst Robert Curtius et l'idée d'Europe</i>
<i>CGC</i>	Curtius e Karl Eugen Gass, <i>Carteggio e altri scritti</i>
<i>BHJ</i>	Curtius, <i>Briefe aus einem halben Jahrhundert. Eine Auswahl</i>
<i>CRF</i>	Curtius und Rychner, <i>Freundesbriefe 1922-1955</i>

凡例

- ・欧文の書名はイタリック体で記し、英語、イタリア語、スペイン語による論文名は“ ”で、フランス語による論文名は« »で、ドイツ語による論文名は„ “で囲んだ。また、邦文の書名、雑誌名は『 』で、論文名は「 」で囲んで記した。
- ・引用文献、参考文献は、執筆者、書名、出版地（欧文文献のみ）、出版社、刊行年、頁の順に記す。
- ・欧文文献からの引用は、拙訳による。

序論

第1節 クルティウスの育った環境や経歴

エルンスト・ロベルト・クルティウス (Ernst Robert Curtius, 1886-1956) は、ホメロス Ὅμηρος の時代からヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe の時代までの修辞学の連続性¹を論じた『ヨーロッパ文学とラテン中世』*Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter* (1948) の著者として、幅広く知られている。この大著における第5章の「トポス論」„Topik“、第6章の「女神である自然」„Göttin Natura“ と第10章の「理想的風景」„Die Ideallandschaft“ において展開される地上楽園論や庭園論は名高いものだ。

まず、育った環境や経歴に触れておきたい。彼の父方は北ドイツの学者の家系であり、祖父エルンスト・クルティウス Ernst Curtius (1814-1896) は、ゲッティンゲン大学教授として、ギリシア古典学を講じた。敬虔な牧師であった父フリードリヒ・クルティウス Friedrich Curtius (1851-1933) は、普仏戦争後のアルザスに移り住む。クルティウスの父方が代表していたのは、知的で、ギリシア的で、プロテスタントの、プロイセンのドイツであった²。

クルティウスの母方は、スイスのベルンの貴族の家であるエルラッハ＝ヒンデルバンク家であった。この家は英国貴族の分家で、南西ドイツのバーデン公国と良好な関係にあった³。祖母ゾフィー・フォン・エアラッハ＝ヒンデルバンク Sophie von Erlach-Hindelbank は、英国への帰属意識を持つポリグロットの教養人であった。祖母に宛てたクルティウスの手紙はフランス語で書かれていた。彼は、ベルンに属しているとは感じていても、プロイセンには親近感を持っていなかったとクリストフ・ドレーゲ Christoph Dröge は考えている⁴。母親ルイーゼ・クルティウス(ルイーゼ・フォン・エアラッハ＝ヒンデルバンク) Louise Curtius (Louise von Erlach-Hindelbank) に連れられ、祖母のもとに幼年時代から通ううちに、英語やフランス語を習得するだけでなく貴族主義的価値観⁵も養ったようである⁶。

クルティウスは、1886年にアルザスの小都市タンで生まれた。19世紀中葉以降のアルザスではフランス語が知的エリート層においてドイツ語よりも優位に立つが、それは1870年にドイツ領となっても続いた⁷。それゆえ、青年時代の彼は熱心にフランス文化を吸収した。彼は10代の頃にアルベルト・シュヴァイツァー Albert Schweitzer からゲーテやロマン・ロラン Romain Rolland の『ジャン・クリストフ』*Jean-Christophe* (1904-1912) を教わる。また、

¹ この修辞学の連続性は、別の表現で言えば、歴史的な(時間的な)広がりを持つヨーロッパ文学である。

² Christoph Dröge, « Avec Goethe, contre Berlin », in: Jeanne Bem et André Guyaux (éds.), *Ernst Robert Curtius et l'idée d'Europe*, Paris, Honoré Champion, 1995, p. 201.

³ Ibid.

⁴ Ibid.

⁵ この貴族主義的価値観は、第4章で触れるフーゴ・フォン・ホフマンスタール Hugo von Hofmannsthal の貴族主義や第5章で扱うホセ・オルテガ・イ・ガゼット José Ortega y Gasset のエリート主義と関わる。

⁶ Christine Jacquemard-de Gemeaux, *Ernst Robert Curtius (1886-1956): Origines et cheminement d'un esprit européen*, Bern, Peter Lang, 1998, pp. 32-42.

⁷ ウージェーヌ・フィリップス『アイデンティティの危機 アルザスの運命』(宇京頼三訳、三元社、2007年、42-45頁)。

アルザス出身の詩人エルンスト・シュタードラーErnst Stadler⁸からの影響で、彼は 1913 年からフランスの文芸雑誌『新フランス評論』*La Nouvelle Revue Française* を読むようになる⁹。

1904 年から 1906 年まで、クルティウスはベルリンでインド＝ヨーロッパ文献学やサンスクリット語を学んだ。しかし、彼はベルリンの文化に馴染めず、アルザスへの望郷の念からストラスブール大学でロマンス語文献学を勉強することになる¹⁰。

ストラスブール大学時代は、ロマンス語文献学者グスタフ・グレーバーGustav Gröber に師事し中世フランス文学を専門的に学び、パリやハイデルベルクでの研究滞在を経て、1910 年に『王の四書』*Li Quatre Livre des Reis* に関する博士論文を提出する。一方、グレーバーの指導の下に 1913 年にボン大学に提出した教授資格論文では、彼は 19 世紀フランスの文学史家・文芸批評家のフェルディナン・ブリュヌティエールFerdinand Brunetière を扱った。

彼は、私講師としてボン¹¹、専任教員としてマールブルク¹²、ハイデルベルク¹³、ボン¹⁴といった大学で教育や研究を行った。戦間期にクルティウスは、当時のヨーロッパ各国の現代文学や 19 世紀の文学を新聞や雑誌で論じていたが、第二次世界大戦中はずっと古典文学の研究に打ち込むことになる。その果実が『ヨーロッパ文学とラテン中世』である。

彼が発表した本の中で最も知られているのは、近代以前の文学について論じている『ヨーロッパ文学とラテン中世』である。しかし、彼は第一次世界大戦直後から 1930 年代前半にかけて、そして、第二次世界大戦後の 10 年間に、盛んにジャーナリズムで文芸批評を発表していた。本論文は、この批評家としてのクルティウスを主題としている。

第 2 節 批評家としてのクルティウス

クルティウスの文芸批評は、どのような性質のものだったのだろうか。批評家としての彼の役割は、第一に、雑誌や新聞や著書を通じてドイツ語圏ではまだ知られていない外国文学を紹介することにあった。彼の批評の特徴を浮かび上がらせるために、同じように外国文学の紹介に熱心であったフランスの作家・文芸批評家のシャルル・デュ・ボス Charles Du Bos と書簡においてなされた対話を引用することにする。一つ目の引用は、1922 年 11 月 27 日にデュ・ボスからクルティウスへ宛てられた手紙である。二つ目の引用は、1923 年 1 月 5 日に出された、この手紙へのクルティウスの返事である。

Il me semble que dans cet ouvrage comme dans celui qui l'avait précédé vous avez su trouver une

⁸ この詩人に関しては、三浦安子『エルンスト・シュタードラーの抒情詩』（同学社、2005 年）を参照。

⁹ Jacquemard-de Gemeaux, *Ernst Robert Curtius (1886-1956): Origines et cheminements d'un esprit européen*, op. cit., p. 50.

¹⁰ Dröge, « Avec Goethe, contre Berlin: l'image de l'Allemagne chez Curtius et Gide », op. cit., p. 202.

¹¹ 1913 年 10 月 22 日から、1920 年 3 月まで。

¹² 1920 年 4 月 1 日から、1924 年 3 月まで。

¹³ 1924 年 4 月 1 日から、1928 年 12 月まで。尚、1928 年の冬はサバティカルでローマに滞在している。

¹⁴ 1929 年 1 月 2 日から、1951 年 3 月まで。

forme d'exposé qui vous est très personnelle, intermédiaire entre l'essai proprement dit et le cours: vous renseignez et n'enseignez point: votre clarté esquivé le superficiel et vous apportez ainsi beaucoup à ceux-là même qui connaissent bien votre sujet¹⁵.

あなたは、この作品では、この前の作品でもそうでしたが、本来の意味でのエッセイと講義の中間のような、あなた独自の表現形式を見出すことに成功したように思われます。あなたは情報を与えますが、それでいて、少しも教えてはいません。つまり、あなたの明快さは、表面的なものを巧みに避け、あなたは、あなたが扱う主題に関してよく知っている人々にさえ多くをもたらしています。

Mon travail est en partie nécessairement un travail de vulgarisation et, comme vous le dites fort bien, de renseignement. Avant d'analyser je dois *informer*. C'est une tâche quelque peu ingrate mais à laquelle je ne peux me dérober sous peine de perdre tout contact avec le public général que je voudrais atteindre. Mes livres doivent être en quelque sorte des *rapports* sur la littérature française. Pourvu que ces rapports soient fidèles, complets, précis. C'est une ambition bien modeste, mais qui n'est peut-être pourtant pas inutile vu l'ignorance mutuelle épaisse dans laquelle vivent nos pays (je parle de la moyenne du public cultivé, bien entendu)¹⁶.

私の仕事の一部分は、必然的に普及のための仕事であり、そして、あなたが非常に上手く言ったように、情報を与える仕事です。分析に入る前に、私は知識を伝えなくてはなりません。これは少しばかり遣り甲斐のない仕事です。しかし、これは私が辿りつきたいと思っている一般の読者とのどんな接触も失わないために怠ることは出来ません。私の本は、言わばフランス文学に関する報告書である必要があります。この報告書が忠実で非の打ち所がなく正確なものであればいいのですが。これはとても控えめな野心です。しかし、この野心は、おそらく我々の国民の相互の大変な無知から見れば（私は当然のことながら普通の教養ある読者のことを言っているのです）、役に立たないことではないのです。

デュ・ボスは批評家であったために、クルティウスが執筆する批評の方法論に敏感であった。彼は、エッセイと講義の中間である点がクルティウスの批評の個性と見る。クルティウスは文芸批評において、作家の生涯や作品の概要に関して情報量を落とさない形で一般の読者に解説していた。必要であれば作品中の文章やその作品についての主要な批評をドイツ語に翻訳する。また、読者の理解にとって有用であれば、彼は比較という方法を採用。その上で、クルティウスは直観を重視した作品論を付け加えていた。これに加え、現代文学を論じる際もしばしば古典文学作品に言及するのは、彼に独特な部分であった。

彼はこうした方法で批評を寄稿したのだから、この方法論は『ヨーロッパ文学とラテン中世』の書き方にも影響を与えたであろう。この大著の英語版の序文に書いている。

¹⁵ DFG, S. 187.

¹⁶ Ebd., S. 189.

I venture to hope that even specialists in these periods will find something useful in my book. My book, however, is not addressed to scholars, but to lovers of literature, that is, to those who are interested in literature as literature¹⁷.

これらの時代の専門家達でさえ、私の本に何か有用なものを見出してくれることを思い切って望みたい。だが、私の本は学者達に向けて書かれたのではなく、文学愛好家つまり文学としての文学に興味がある人達に向けられている。

デュ・ボスは、クルティウスの批評が“扱う主題に関してよく知っている人々にさえ多くをもたらす”と述べたが、クルティウスの主著の目的は専門家達が評価する本になることだった。だが、彼は専門家達以上に文学愛好家達をこの大著の読者に想定していたのだ。

第二次世界大戦中に彼が学術雑誌に発表した論文を集めた『ロマンス語文献学論集』*Gesammelte Aufsätze zur romanischen Philologie* (1960) は主著と比べ、学術的な形式で書かれている。もし、『ヨーロッパ文学とラテン中世』が『ロマンス語文献学論集』のような形式で執筆されていたら、この本が多くの人から読まれることにはならなかったであろう。

クルティウス研究で名高いクリスティヌ・ジャックマール＝ド・ジュモー Christine Jacquemard-de Gemeaux は、彼の作家でありたいという野心に関して、こう書いている。

Son ambition profonde était manifestement d'être écrivain; c'est surtout en compagnie des grands noms de la littérature européenne qu'il aimait séjourner à Pontigny, [...], c'est par le moyen d'essais qu'il avait touché aux portes de la littérature. Ses regrets de ne pas avoir franchi le pas qui aurait fait de lui un écrivain reconnu affleurent parfois au détour de la correspondance avec des femmes comme Catherine Pozzi, ou Anne Heurgon à laquelle il confie par exemple au sujet de son travail: « c'est la plus vive joie et c'est en même temps une ascèse, car je fais de la science et pourtant il y a en moi autre chose... »¹⁸

明らかに、彼の奥の深いところに秘めていた野心は、作家でありたいということだった。つまり、彼がポンティニーに滞在することを好んでいたのは、特にヨーロッパ文学の大家達と一緒にいるという状態のためであり、[...]、彼が文学の門戸を叩いたのは、エッセイを通じてであった。彼を著名な作家に変えたかもしれない一歩を踏み越えなかったという後悔は、時折、カトリーヌ・ボッジやアンヌ・ウルゴン＝デジャルダンといった女性達との書簡のふとした機会に、顔を覗かせている。例えば、彼は、自分の仕事に関して、アンヌ・ウルゴン＝デジャルダンにこう打ち明けている、「それは無上の喜びであると同時に禁欲です。なぜなら、私は学問をしているのですが、私の中に別のものがあります…。」。

¹⁷ Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages*, New York, Princeton University Press, 1953; repr. 1973, p. viii.

¹⁸ Jacquemard-de Gemeaux, *Ernst Robert Curtius (1886-1956): Origines et cheminements d'un esprit européen*, op. cit., pp. 203-204.

クルティウスは学者として知られているが、ジャックマール＝ド・ジュモーは彼の作家 *écrivain* という存在への憧れに触れている。フランスの作家達が集うポンティニー修道院での国際的な会合への参加や彼のエッセイ風の文体といったものが、作家でありたいという野心が反映されていると彼女は言うのである。同時に、彼女、クルティウスを“著名な作家に変えたかもしれない一歩” « *le pas qui aurait fait de lui un écrivain reconnu* » を踏み出さなかったという後悔を指摘し、アンヌ・ウルゴン＝デジャルダン Anne Heurgon-Desjardins への手紙がその証拠であるとしている。この指摘は、ジャーナリズムでのエッセイ風の文体による批評活動が続けたことや、主著が一般の読書人に向けて書かれたことと関連する。

第3節 クルティウスの批評活動に関する研究史

ここで、クルティウスに関する研究史を整理したい。本論文は、彼の批評活動を主題とするものなので、彼の文学史研究に関する文献には、ほとんど触れないことにする。

彼の本は出版後、無視されずに、『ノイエ・ルントschau』 *Die Neue Rundschau*、『新メルクーア』 *Der Neue Merkur*、『フランクフルト新聞』 *Frankfurter Zeitung*、『新フランス評論』、『タイムズ文芸付録』 *Times Literary Supplement* などの媒体で、書評の対象となった。

しかし、彼の批評活動の全体を論じようという試みを初めて行ったのは、前節で触れたデュ・ボスである。彼は、1930年にクルティウスの『フランス文化論』 *Die französische Kultur* が刊行された直後に、『新フランス評論』の9月号に長めのクルティウス論を発表した。

デュ・ボスは、導入部で、18世紀後半から19世紀前半にかけて活躍したモラリスト文学者ジョゼフ・ジュベール Joseph Joubert の文章を引用している¹⁹。この文章は、世の中には自分の狭い専門のことだけを知る者が多く、物事を明快に見ることの出来る、ゆったりとした精神の持ち主が少ないことを述べたものである。このデュ・ボスのクルティウス論の冒頭では、クルティウスの精神は広大であり、ボローニャやヴェローナに聳えているルネサンス建築のような安定感があることが指摘されている。ジュベールの理想とする人間像の条件をクルティウスが満たしていると彼は感じているのである。

次に、デュ・ボスは、クルティウスが複数の伝統や多様な文化を自分のものにしていることを説明しようとする。このことを具体的に、クルティウスが、ギリシアとローマという古代の二つの大きな文化を見据え、ドイツ、イタリア、スペイン、フランス、英国といった国の近代文学も自発的に学んだことを述べている。また、デュ・ボスは、外国文化の導入の仕方に関して、クルティウスには才能があり、学問的にも手堅い部分があると言い、その手堅さをイタリア建築の頑丈さのようであると感じている。さらに彼は、親密さと責

¹⁹ Charles Du Bos, « Ernst Robert Curtius », in: *Approximations*, Paris, Éditions des Syrtes, 2000, p. 1039.

任がクルティウスの文芸批評の二大特徴であると指摘している²⁰。

1932年の『危機に立つドイツ精神』*Deutscher Geist in Gefahr*は、人文主義を擁護している。それゆえ、この頃から、クルティウスにおける批評と文献学の関係を論じる文章が、少しずつ出始めるようになる。とはいえ、1930年代や第二次世界大戦中は、1930年のデュ・ボスの論考のようにクルティウスの書いたものを全て読んだ上で、注を付け、参考文献を挙げながら、長い分量でじっくり彼を分析するようなものは書かれなかった。

『ヨーロッパ文学とラテン中世』の出版は、1948年である。一方、1950年に、『ヨーロッパ文学をめぐる批評エッセイ』*Kritische Essays zur europäischen Literatur*が、1952年に『20世紀におけるフランス精神』*Französischer Geist im zwanzigsten Jahrhundert*が刊行された。このために、この大著が文学愛好家や文学研究者にインパクトを与えたことは事実だが、1950年代に書かれたクルティウス論には、短い分量のものとはいえ、批評活動だけを論じたものも、批評と主著の関係を扱ったものもある。例えば、クルティウスにおける批評と文献学の関係に関して、アール・ジェフリー・リチャーズ Earl Jeffrey Richards によると、1949年に発表されたレオ・シュピッツァー Leo Spitzer の『ヨーロッパ文学とラテン中世』の書評のように、断絶を見るという立場がある²¹。しかし、どちらかと言えば、彼の批評活動とこの主著は、連続していると考える論者の方が多かった²²。

クルティウスは死後忘れ去られることなく、1960年代も様々な文芸雑誌や学術雑誌に、友人、敵対する文献学者、文学研究者などが、短い分量のクルティウス論を発表した。

ここで、1967年の今井道児の二つのクルティウス論、そして、1969年刊行の『ヨーロッパ文学をめぐる批評エッセイ』の邦訳に付いている松浦憲作による解説文に、光を当てる。

今井の論文「E. R. クルティウスとフランス」は、1920年代という第一次世界大戦後の危機の時代における、クルティウスのフランス文化に対する関係を扱ったものである。冒頭で、彼は、アルザスに育ったクルティウスがドイツ文化に完全に同一化することなく当然のごとくフランスに興味を持つが、そのきっかけはフランスの古典文学ではなく、典型的な外国人らしく、フランスの大衆文化であったことに注意を促している²³。

続いて、今井は青年時代のクルティウスがシュテファン・ゲオルゲ Stefan George の弟子であるフリードリヒ・グンドルフ Friedrich Gundolf と交わした書簡について論じている。この書簡を通して、今井は、クルティウスが自分に構成力が欠けていることをグンドルフに告白していることに触れる。批評エッセイを多く書いたクルティウスは、構成が苦手であるという資質を若い頃から自覚していたのである。グンドルフやゲオルゲとの付き合いに関して、今井は、『新しいフランスの文学開拓者達』*Die literarischen Wegbereiter des neuen Frankreich* に対し、彼らが下した低い評価について論じている。ゲオルゲがこの本を貶めた

²⁰ Ibid., p. 1054.

²¹ Earl Jeffrey Richards, *Modernism, Medievalism and Humanism: a research bibliography on the reception of the works of Ernst Robert Curtius*, Tübingen, Niemeyer, 1983, p. 86.

²² Ibid., pp. 80-99.

²³ 今井道児「E. R. クルティウスとフランス」(『人文科学研究』、(31)、新潟大学人文学部、1967年、3-5頁)。

理由は、クルティウスがドレフュス事件の文学への影響を重く見ており、ゲオルゲがアンドレ・ジッド André Gide やロマン・ロランを否定していたためであると今井は推測する。

また、『新しいフランスの文学開拓者達』の意義を今井は、フランスの精神動向のドイツへの紹介と考えている。マールブルク時代に発表したバレス論やバルザック論に関しては、今井は、古典主義的フランス観への批判の反映であると説明する。この論文で彼が描くクルティウスの像は、独仏文化の相互理解を促進させる著述家というものであり、ドイツ対フランスの弁証法からクルティウスのヨーロッパが生まれると今井は見ている²⁴。

もう一つの今井の論文「E. R. クルティウスにおける批評」は、クルティウスの批評活動全体を総括する試みである。今井は文芸批評というものが芸術的独創性と学者的研究の間にあるものであると考え、クルティウスを学者的批評家の方であると捉えている²⁵。

今井は、処女作から 1932 年の『危機に立つドイツ精神』までを第 1 期、1930 年代後半から『ヨーロッパ文学とラテン中世』までの時期を第 2 期、晩年を第 3 期に分類している。彼の考えでは、第 1 期が活動の華やかさという点でクルティウスが最も批評家らしい活躍をした時期であり、彼は依頼された論考や講演をこなし、文章表現を磨いていったのだ。

今井によると彼の批評原理は、記述、分析、発見の熱狂の三点であり、その批評は、作品や時代を論じることよりも作家論であることが重視されている。同時に、彼が一般読者に対する案内や奉仕を軽視しなかったことが指摘されている。また、1920 年代に行っていたフランス文学の紹介を 1930 年前後にクルティウスが止めたことに関して、「彼の独・仏相互理解のための努力は、やがて両国の政治、社会情勢の前に挫折する。」と述べている²⁶。

松浦が執筆した『ヨーロッパ文学をめぐる批評エッセイ』の邦訳の解説文では、冒頭に、ドイツの文学研究者ではゲルマニストが専門に局限されがちであるのに対し、クルティウスのようなロマニストの方は視野が広いことが触れられている²⁷。クルティウスの 1930 年頃までの批評活動の説明の仕方は、今井の論文と概して同じである。

しかし、松浦は 1920 年代の批評の文体が記述的・分析的な紹介を交えていたものであったのに対し、第二次世界大戦後のものは、価値判断を正面に押し出したものになったことを述べている。彼は、1950 年に発表され、『ヨーロッパ文学をめぐる批評エッセイ』に収録された修辞学に関する論考「アルゴナウテンの船」„Das Schiff der Argonauten“ を“かの『ヨーロッパ文学とラテン中世』の小規模だが見事な雛型である”と書いている²⁸。さらに、松浦は、彼が批評の対象としなかった作家達がいかに多いかを語り、批評の対象としないことが批評の第一段階であるとするクルティウスの見解に触れている。

1970 年には、充実したクルティウス論を含む重要な論文集が出版された。アメリカの学者アーサー・R・エヴァンズ Arthur R. Evans 編の『四人の現代の人文主義者達をめぐって ホ

²⁴ 同上、23 頁。

²⁵ 今井「E. R. クルティウスにおける批評」（『ドイツ文学』、(39)、日本独文学会、1967 年、69 頁）。

²⁶ 同上、73 頁。

²⁷ 松浦憲作「解説（初出：1969 年）」（『ヨーロッパ文学評論集』、みすず書房、1991 年、409 頁）。

²⁸ 同上、414 頁。この論考は元々、雑誌 *Romanische Forschungen* に掲載されたから、文献学的であるのだ。

フマンスタール、グンドルフ、クルティウス、カントロヴィッチ』 *On Four Modern Humanists. Hofmannsthal, Gundorf, Curtius, Kantorowicz* である。これは 20 世紀前半のドイツ語圏で人文主義的であった四人の知識人を論じた本である。

エヴァンズは、序文で、二つの世界大戦によりヨーロッパの人文主義が危機に陥ったことを語る。続いて、この四人が“良きヨーロッパ人達” “good Europeans” であるという共通点があることを指摘する。この四人が人文主義者であったことから、この “ヨーロッパ” は空間的な広がりだけでなく、歴史的な広がりも指していると考えることが可能である²⁹。さらに、彼は、次のように書いている。

A more specific, particularized unity is given to their lives and work by the fact that each one of these men, in varying degrees, came under the personal and powerful influence of Germany's poet and sage, Stefan George³⁰;

さらに具体的で特殊な一体性が、この四人の生と作品に与えられるのだ。それは、彼らみんなが、程度の差はあるとはいえ、ドイツの詩人で賢人であるシュテファン・ゲオルゲの個人的で力強い影響によって支配されたという事実によってである…。

この本では、ホフマンスタール、グンドルフ、中世史の研究者であるエルンスト・カントロヴィッチ Ernst Kantorowicz と並列させることで、クルティウスに批評や文学史を書かせた要因の一つとしての詩人ゲオルゲという存在が浮かび上がるようになっている。

この本に収録されたクルティウスに関する章は、編者エヴァンズが自ら執筆している。彼は生涯と作品の両方を丁寧に論じる。まず、彼はギリシア文化の専門家であったクルティウスの祖父について詳細に記述して、クルティウスが北ドイツの学者の家系であることを強調する³¹。一方、母方のベルンの家系については、あまり触れていない。

この論考が新しいのは、ストラスブール大学での恩師グレーバーから何を学んだのか考察していることである。エヴァンズは、グレーバー自体が、中世文学³²だけでなく現代文学にも大変な興味を持っており、この姿勢がクルティウスに影響を与えたと考える³³。

ゲオルゲに関しては、彼はクルティウスの『新しいフランスの文学開拓者達』がゲオルゲ派の出版社ゲオルク・ボンディから出版されたことやゲオルゲ・クライスとフランスの

²⁹ デイヴィッド・ダムロッシュ David Damrosch は、人が世界文学を考える際に空間的な広がりとは比べ歴史的な広がり軽視される傾向があることを指摘する（デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か』、秋草俊一郎・奥彩子・桐山大介・小松真帆・平塚隼介・山辺弦訳、国書刊行会、2011 年、34-35 頁）。彼によると、この傾向は、帝国主義、ナショナリズム、グローバリゼーションを研究する者に多いようである。

³⁰ Arthur R. Evans, “Preface”, in: Evans (ed.), *On Four Modern Humanists. Hofmannsthal, Gundorf, Curtius, Kantorowicz*, Princeton, Princeton University Press, 1970, p. vii.

³¹ Evans, “Ernst Robert Curtius”, in: *ibid.*, pp. 85-89. エヴァンズは、1906 年に画家ラインホルト・レプシウス Reinhold Lepsius のベルリンの邸宅で、クルティウスがゲオルゲ、グンドルフ、デュ・ボス、ゲオルグ・ジンメル Georg Simmel と知り合えたのはレプシウスが、父方の遠い親戚であったからだと説明している。

³² エヴァンズは、グレーバーが 1902 年の時点で後期古代や中世のラテン文学が後代のロマンス語文学にも影響を与えたと考えており、この発想はクルティウスの主著と通底するものであることを述べている。

³³ *Ibid.*, p. 92.

雑誌『新フランス評論』のグループには深遠さ、厳密さ、ヨーロッパ主義を希求するところに共通点があることを指摘する³⁴。そして、彼は、ジッド、デュ・ボス、ヴァレリー・ラルボーValéry Larbaud といったコスモポリタンな精神を持つ作家達と友情を築き、ルクセンブルクのマイリッシュ夫妻のサロンやポンティニー修道院の会合にクルティウスが出席したことや、知的関心をスペインにも広げることでヨーロッパ性を深めていき、その中で伝統を身につけたホフマンスタールの例外的な才能に気付いていく様子を書いている。

また、クルティウスのホフマンスタールへの関心と、同じように伝統を重視した詩人 T・S・エリオット Thomas Stearns Eliot への関心が高まった時期が共に 1927 年頃であることから、彼において、ホフマンスタール受容とエリオット受容は結び付いていたとエヴァンズは考えている。これに加え、主著に関しても、彼は独創的な見解を披露する³⁵。結論部分では、クルティウスの散文の引き締まったエレガントな文体はドイツの学者の書くものではなく、フランスの文人が書く性格のものであることが指摘されている。

1970 年代のクルティウス論で重要なものが、チェコ・スロヴァキアに生まれ、イエール大学で比較文学を講じたルネ・ウェレック René Wellek³⁶の論文「エルンスト・ロベルト・クルティウスの文芸批評」“The Literary Criticism of Ernst Robert Curtius” (1978) である。

彼はライフワークとして『近代批評史』*A History of Modern Criticism 1750-1950* (1955-1992) に取り組んだ。それゆえ、彼は批評の専門家である。また、ウェレックが若い頃にハイデルベルク大学でグンドルフに学んでいたために、グンドルフの身近にいたクルティウスの文芸批評をアメリカに渡る前から十分に知っていたように思われる。

エヴァンズのクルティウス論では生涯と作品が密接に関連させられていた。これに対し、ウェレックの論文は批評作品だけを対象とし、生涯についてはほとんど触れられていない。

この論文の冒頭でウェレックは、クルティウスが『ヨーロッパ文学とラテン中世』の著者として名高いことが述べられる³⁷。これは、1978 年頃、アメリカの大学人の間で、クルティウスが文献学者として認知されていることを物語る。続けて、ウェレックは、彼はこの大著が出版されるまでは、長い期間、ドイツにおいて有名な批評家であったと言う。

クルティウスが現代文学をめぐる批評活動を休止して中世文学研究を始めたことに関して、シュピッツァーは批評活動を続けてきたことに対する因習打破であるとコメントした。これに対しウェレックは、第二次世界大戦に批評活動を再開しているという事実を理由に、

³⁴ Ibid., pp. 96-97.

³⁵ クルティウスが主著で実行したことは、ヴァールブルク学派の学者達が美術史学で行った画家の個性を重視しないイコノグラフィーや作家アンドレ・マルローAndré Malraux が、『空想美術館』*Le Musée imaginaire* (1947) で行った試みと連動していたという見解である (Ibid., pp. 119-121.)。クルティウスは、ヴァールブルク研究所の人々と個人的な交流があったので、ヴァールブルク学派とは相互に影響関係はあるだろう。マルローとは直接的な付き合いはなかったが、二人とも『新フランス評論』の関係者であり、クルティウスはマルローの作品も読んでいたので、作品の共通性を考えてみる価値はある。ちなみに、マルローがスペイン市民戦争にコミットした時期に、クルティウスはスペイン研究を進めていた。

³⁶ Cfr. Lorenzo Renzi, “Curtius e i grandi romanisti tedeschi nell’opera di René Wellek”, in: Ivano Paccagnella e Elisa Gregori (a cura di), *Ernst Robert Curtius e l’identità culturale dell’Europa*, Padova, Esedra, 2011, pp. 199-216.

³⁷ René Wellek, “The Literary Criticism of Ernst Robert Curtius”, in: *A Journal for Descriptive Poetics and Theory of Literature*, 3, Amsterdam, North-Holland Publishing Company, 1978, p. 25.

反論を行っている。そして、彼は、クルティウスは文献学と批評の間に矛盾を見出していたのではないことを強調する。ウェレックの考えでは、ナチス時代のドイツで文章表現の自由が制限されたと感じたから、彼は批評を書かなかったのである。

次に、ウェレックは年代順にクルティウスの批評を検討する。彼の批評は、戦間期のものも第二次世界大戦後のものも対象となっている。ブリュヌティエール論について、クルティウス独自の見解は少ないが、ブリュヌティエールから批評的判断を大胆に表明することやフランス独特の保守的な伝統を学んだとウェレックは考える³⁸。彼も、初期のクルティウスの批評の最大の関心がフランスとドイツの対立の緩和であるとする。今井の論文「E. R. クルティウスとフランス」のように、彼も『新しいフランスの文学開拓者達』をめぐるゲオルゲの低い評価に触れ、ゲオルゲからの離反がホフマンスタールやルドルフ・ボルヒャルト Rudolf Borchardt の作品に向かうきっかけになったと判断する。

そして、クルティウスのバルザック論やプルースト論は、芸術と哲学を近付ける試みであったという意見を述べている³⁹。このバルザック論は神秘主義的側面に光を当てている。ウェレックは、クルティウスが第二次世界大戦後に発表したアンリ・ブレモン論やジャック・マリタン論を根拠に、フランスの神秘主義がクルティウスを惹き付けたと主張する。

彼は、クルティウスの批評の原理に関して、アルベール・ベガン Albert Béguin の追悼文を引用している。それは彼の批評はドイツ人には珍しく思想の上でも方法論的な面でも体系的でないから、その原理を見定めるのは困難だという言葉である。しかし、ウェレックは、彼の批評原理を解明しようとする。彼の批評は、ヴィルヘルム・ディルタイ Wilhelm Dilthey やフリードリヒ・シュライアマハー Friedrich Schleiermacher の影響で、本能的直観や洞察を重視したものであり、作品の評価は因果関係からは説明出来ないとするというのがウェレックの判断である⁴⁰。ただ、ウェレックは、直観だけが批評原理ではなく、個々の部分の注意深い照合や比較といった理性的な作業も不可欠としている。さらに、ウェレックは、オルテガの主張する遠近法主義と彼の批評原理を結び付ける。また、クルティウスの批評作品の中でも最良のものである、バルザック論、プルースト論、ウェルギリウス論、エマーソン論は、方法論としては、テマティズム⁴¹であることが指摘されている⁴²。

1980 年代に入ると、クルティウスは、よりアカデミックな場で分析対象となっていく。その転機となったのは、1983 年にアメリカ人の中世文学研究者アール・ジェフリー・リチャーズが発表した書物『モダニズム・中世主義・人文主義 エルンスト・ロベルト・クルティウスの作品の受容に関する研究書誌』 *Modernism, Medievalism and Humanism: a research bibliography on the reception of the works of Ernst Robert Curtius* である。

この本は、クルティウスが発表した本や論考について 1912 年から 1982 年にかけて、英

³⁸ Ibid., p. 27.

³⁹ Ibid., p. 34.

⁴⁰ Ibid., p. 37.

⁴¹ Cfr. Mario Mancini, “Il giardino dei topoi”, in: Paccagnella e Gregori (a cura di), op. cit., p. 2.

⁴² Wellek, op. cit., p. 42.

語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語で書かれた文献を可能な限り集めて⁴³、5行から10行くらいの文章で要約したものである。これに加え、彼が発表した著書や翻訳、様々の国のジャーナリズムのために寄稿した論考、そして、死後に刊行された書簡集が、年代順に整理されている⁴⁴。そのため、200頁にも満たない小著に過ぎないが、クルティウスの研究史において、この本の意義は極めて大きなものなのである。

その証拠の一つが、リチャーズの本の抄訳が、1984年に出版された『ヨーロッパ文学をめぐる批評エッセイ』のイタリア語訳⁴⁵の末尾に解説として収録されていることである⁴⁶。

また、このイタリア語訳には、訳者であるレア・リッター・サンティーニ Lea Ritter Santini による長大な序文「類似の楽しみ」“Il piacere delle affinità”が収録されている。この論考は、エヴァンズのクルティウス論のように、生涯と作品を交互に語るスタイルで書かれている。彼女によると、クルティウスは、生涯において二項対立の中で生きてきた⁴⁷。具体的には、ドイツとフランスの二項対立、そして、学者と批評家の二項対立である。この二項対立を、サンティーニはクルティウスの採る比較という方法に結び付けている。

このクルティウス論の独自な部分は、同時代の知識人作家ヘルマン・ブロッホ Hermann Bloch とクルティウスがホフマンスタール論、ジョイス論、エリオット論を書いた点で共通していることに着目し、両者の仕事を比較対照している部分である。

クルティウスの生誕百年である1986年には、彼が勤務したハイデルベルク大学とボン大学で、彼に関する学会が開催され、開催後に論文集が刊行された⁴⁸。この二つの学会の参加者には、ボン大学でクルティウスに直接学んだ研究者も数名含まれており、彼の教育活動の様子を知る上では貴重な論文集である。だが、この二つの学会は、彼の主著をロマンス語文献学者達が論じるものを中心となっており、批評活動はあまり再検討されなかった。

第二次世界大戦後、ドイツ⁴⁹とフランスの対立はなくなっていき、互いの文化を尊重するようになる。1951年の欧州石炭鉄鋼共同体⁵⁰や1958年の欧州経済共同体により、経済的な分野で独仏の統合が実現する。ただ、冷戦時代は、ドイツとフランスを隔てる壁は厚かった。1985年に加盟国間の国境検問所・国境検査所の廃止を目的とするシェンゲン協定⁵¹が、

⁴³ この本で扱われているクルティウスに関する文献は全部で436あり、今井や桂芳樹が執筆した日本語論文の要約も含まれている。おそらく、リチャーズは、日本語論文の欧文要旨を参照したのだろう。

⁴⁴ Richards, *Modernism, Medievalism and Humanism: a research bibliography on the reception of the works of Ernst Robert Curtius*, op.cit., pp. 170-188.

⁴⁵ イタリア語訳の表題は『文学の文学』 *Letteratura della letteratura* であり彼の批評が文学であることを示す。批評を“文学の文学”としたのは、フリードリヒ・シュレーゲル Friedrich Schlegel である (KEEL, S. 32-33.)。

⁴⁶ Richards, “Bibliografia scelta su Ernst Robert Curtius”, in: Curtius, *Letteratura della letteratura*, Bologna, Il Mulino, 1984, pp. 431-486.

⁴⁷ Lea Ritter Santini, “Il piacere delle affinità”, in: ibid., pp. 30-31.

⁴⁸ Vgl. Walter Berschin und Arnold Rothe (Hg.) *Ernst Robert Curtius: Werk, Wirkung, Zukunftsperspektiven : Heidelberger Symposium zum hundertsten Geburtstag 1986*, Heidelberg, Winter, 1989; Wolf-Dieter Lange (Hg.), „In Ihnen begegnet sich das Abendland“ *Bonner Vorträge zur Erinnerung an Ernst Robert Curtius*, Bonn, Bouvier, 1990.

⁴⁹ 戦後のドイツは、米ソ英仏による占領を経て東西に分裂した。NATOに加盟した西ドイツは1955年にパリ協定で主権を回復。東ドイツは1954年にソ連により主権国家となり、翌年、ワルシャワ条約に調印する。

⁵⁰ 欧州石炭鉄鋼共同体の設立には、東欧に見られる政治・経済上の統率に対抗するという目的も含まれていた (島田悦子『欧州石炭鉄鋼共同体 EU統合の原点』、日本経済評論社、2004年、105-109頁)。

⁵¹ 移動の自由を促進させるこの協定はドイツ統一を導くため、西ドイツは、この協定に否定的であった。

フランス、西ドイツ、ベルギー、オランダ、ルクセンブルクの間で締結される。この協定を契機に、1990年代に入ると独仏の人的交流は盛んなものになり知識人の間ではヨーロッパに関して議論をする機会が増えてゆく⁵²。こうした流れは文学研究にも影響を及ぼした。

1992年1月に開催された学会『エルンスト・ロベルト・クルティウスとヨーロッパの理念』*Ernst Robert Curtius et l'idée d'Europe*は、開催地が独仏国境地帯であることに大きな意味がある。なぜなら、欧州議会のあるアルザスの人々は、ヨーロッパに属しているという意識が強いためである。この学会が、特に彼のヨーロッパ論を対象としたのは当然である⁵³。

このミュルーズ大学での学会を主催したのは、アンドレ・ギュイヨー André Guyaux とジャンヌ・ベム Jeanne Bem である。二人がフランス近代文学の専門家であるために、クルティウスが近現代のフランス文学を扱った批評に関する発表がいくつも行われた。具体的には、20世紀の文芸批評や文学理論に詳しいアントワーヌ・コンパニオン Antoine Compagnon の「クルティウスとフランスの文芸批評家達」*« Curtius et les critiques français »*、マルセル・ブルースト Marcel Proust の専門家のマリー・ミゲ Marie Miguët の「クルティウスのブルースト論」*« Le Proust de Curtius »*⁵⁴、ロマン・ロラン研究の第一人者ベルナール・デュシャトレ Bernard Duchatelet の「クルティウスとロマン・ロランの往復書簡」*« La correspondance Curtius-Romain Rolland »*、当時、ボン大学ロマンス語文献学講座で教えていたドレーゲの「ゲーテへの共感とベルリンへの反感」*« Avec Goethe, contre Berlin »* である。

コンパニオンの論考は、彼の批評とフランスの批評家達との関係を探っている。この論考の意図は、彼がフランスの批評から学んでいないという見解を改めることであった⁵⁵。

コンパニオンは教授資格論文で取り上げたブリュヌティエール⁵⁶をクルティウスがどう読んだのか分析し、主著で詳細に展開されるトポス論や常套句は、実は、ブリュヌティエールの“固定観念”*« idées fixes »*に基づくものであるという驚くべき意見を言っている⁵⁷。

彼の同時代人であったアルベール・チボーデ Albert Thibaudet とデュ・ボスに関して、コンパニオンは、知的交流の様相を具体的に論じている。クルティウスとチボーデは、個人的に知り合うことはなかった。だが、お互いの仕事を、伝記を重視するギュスターヴ・ラ

⁵² 饗庭孝男『ヨーロッパとは何か』（小沢書店、1991年）なども、こうした文脈で執筆された本である。

⁵³ クルティウスにおけるヨーロッパを直接主題とした発表は、1920年代に独仏間の橋渡しをするうちにクルティウスにヨーロッパへの関心が芽生えたと考えるアラン・ミシェル Alain Michel の「クルティウス・ヨーロッパ・ラテン中世」*« Curtius, l'Europe, et le Moyen Age latin »*、クルティウスのヨーロッパがヒトラーからの有害な影響であるとするルネ・エチャンブル René Étiemble を批判し、彼のヨーロッパは諸国家を合わせたものではなく知的な実験室であるとするリチャーズの「クルティウスや彼の誹謗者達におけるヨーロッパ意識」*« La conscience européenne chez Curtius et chez ses détracteurs »*、クルティウスの仕事を羅針盤に見立て、彼のヨーロッパが空間的なものであるとするハラルト・ヴァインリヒ Harald Weinrich の「クルティウスのヨーロッパ的羅針盤」*« La boussole européenne de Curtius »* である。

⁵⁴ このミゲの論考では、クルティウスのブルースト論がヌーヴェル・クリティックの方法論に近いものであったことが主張されている。この主張により、ブルーストを頻繁に論じたヌーヴェル・クリティックの批評家達の仕事はクルティウスの影響下にあると、我々は考えることが出来るだろう。

⁵⁵ Antoine Compagnon, « Curtius et les critiques français », in: Bem et Guyaux (éds.), op. cit., p. 119.

⁵⁶ Cf. Compagnon, *Connaissez-vous Brunetière?*, Paris, Édition du Seuil, 1997.

⁵⁷ Compagnon, « Curtius et les critiques français », op. cit., p. 131.

ンソン Gustave Lanson の批評の方法論とは異なるものであると考えていたのである⁵⁸。

クルティウスとデュ・ボスは 1920 年代に友情を保った。形而上学的なもの、あるいは、神秘主義的なものに対する共通の関心がこの友情を支えたとコンパニオンは考える⁵⁹。

デュシャトレの論考は、クルティウスとロマン・ロランの関係を扱った論文である。主題は、1912 年から 1930 年にかけて交わされた書簡の分析である。ロランの書いた手紙は 15 通、クルティウスの書いた手紙は 13 通ある⁶⁰。これらの多くはドイツ語で書かれていた。デュシャトレは、ローマで出会った二人の信頼関係が発展する様子を描写している。

ドレーゲの論考は、まず、青年時代の伝記的事実を紹介する。そして、アルザスへの執着が強かったクルティウス⁶¹が、第一次世界大戦でドイツ領としてのアルザスを喪失したショックは大きく⁶²、彼が通ったルクセンブルクのサロンをアルザスの代わりと解釈する⁶³。

次に、『ルクセンブルク新聞』*Luxemburger Zeitung* のために書いたナードラー論から、彼にとってドイツは、ローマ帝国の文化の影響を受けた西の方のドイツであり、デュ・ボスがクルティウスの文章に感じる明快さを、ラテン系の文化に結び付けている。そのため、クルティウスがジッドと関心を共有したゲーテは、彼にとって、ラテン文化に明るいヨーロッパ的な万能人であってワイマールの政治家ではないことをドレーゲは指摘する。

この論考の末尾で彼は、クルティウスは生涯において独仏を、パリやベルリンだけではなく、ストラスブール、ハイデルベルク、ケルン、ボン、ブリュッセル、メッス、トリアー、ルクセンブルク、フライブルク、バーゼル、コルマール、ローマから見たのであり、ヨーロッパ的な地方主義の弁護者としてアクチュアリティを持っていると述べる⁶⁴。

1992 年の学会では、ミュルーズ大学と近い距離にあるフライブルク大学に所属していた二人の研究者の発表が行われた⁶⁵。彼らは、後にこの大学に提出される、シュテファニー・ミュラー-Stefanie Müller のクルティウスに関する博士論文に影響を与えることになる⁶⁶。

⁵⁸ Ibid., pp. 119-121.

⁵⁹ Ibid., pp. 121-122.

⁶⁰ Bernard Duchatelet, « La correspondance Curtius-Romain Rolland », *ibid.*, p. 145.

⁶¹ クルティウスは、ストラスブールをローマ風でゴシック風でドイツ風と見ていた (Christine Jacquemard-de Gemeaux, *Ernst Robert Curtius (1886-1956). Origines et cheminements d'un esprit européen*, op. cit., p. 30.)。

⁶² 1920 年のクルティウスは、フランス領となってもアルザスの若者がドイツ風だと形容した (Ibid., p. 27.)。

⁶³ Dröge, « Avec Goethe, contre Berlin: l'image de l'Allemagne chez Curtius et Gide », op. cit., pp. 202-204.

⁶⁴ Ibid., p. 215.

⁶⁵ この二人の発表は、クルティウスがどのような知識人であったのかを社会学的に分析したヨーゼフ・ユルト Joseph Jurt の「クルティウスとドイツ社会における知識人の位置」« Curtius et la position de l'intellectuel dans la société allemande » とクルティウスとフーゴー・フリードリヒ Hugo Friedrich のダンテ・アリギエーリ Dante Alighieri をめぐる第二次世界大戦中の知的交流を扱ったフランク＝ルットガー・ハウスマン Frank-Rutger Hausmann の「クルティウス、フーゴー・フリードリヒ、そのダンテ解釈」« Curtius, Hugo Friedrich et l'interprétation de Dante » である。ハウスマンは大学退職後、クルティウスに関する二つの書簡集を 2015 年に刊行した。Vgl. Curtius, *Briefe aus einem halben Jahrhundert. Eine Auswahl*, Baden-Baden, Valentin Koerner, 2015; Curtius und Max Rychner, *Freundesbriefe 1922-1955*, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 2015.

⁶⁶ ミュラーの本には、階級に関する社会学的な分析が何度もなされている。この本の序論には、フライブルク大学で彼女が行ったクルティウス研究において指導的な立場にあったと推測されるユルトのクルティウス研究が言及されており (Stefanie Müller, *Ernst Robert Curtius als journalistischer Autor (1918-1932): Auffassungen über Deutschland und Frankreich im Spiegel seiner publizistischen Tätigkeit*, Bern, Peter Lang, 2007, S. 4-5.)、ミュラーの研究がユルトの仕事を継承したものであることは明白である。

この学会でクルティウスとカール・マンハイム **Karl Mannheim** の論争について発表した⁶⁷ ジャックマール＝ド・ジュモーが 1996 年に、クルティウスに関する世界で初めての博士論文『E. R. クルティウス (1886-1956) ヨーロッパ精神の起源と進展』*E. R. Curtius (1886-1956). Origines et cheminements d'un esprit européen* をパリ第四大学に提出し、1998 年に出版した。

この学術書は、ランドリー・シャリエ **Landry Charrier** の言うように⁶⁸、現在までのところクルティウスに関する研究書の中で最も完成度の高い本となっている。この本では主著である『ヨーロッパ文学とラテン中世』の分析に力が入れている。

一方、クルティウスの文芸批評については、ゴットホルト・エフライム・レッシング **Gotthold Ephraim Lessing** 以来のドイツの文芸批評の伝統と関連させられながら、ドイツの知的社会で影響力を行使することが、彼の批評の目的であったと述べられている⁶⁹。彼女によると、同時代のドイツ語圏の批評家でクルティウスが一目置いていたのは、ボルヒャルトとルドルフ・アレクサンダー・シュレーダー **Rudolf Alexander Schröder** であるという⁷⁰。

ジャックマール＝ド・ジュモーは、エヴァンズのクルティウス論のように生涯と作品を結び付けながら年代順に語る。それまでのクルティウス研究は、父方の学者的伝統について記述する文献は多くあったが、彼女は、新たにスイスのベルンの貴族であった母方の文化的環境を詳しく記述した⁷¹。これは、彼女のボン大学留学時代の指導教官がドレーゲであり、彼が母方の方への関心が高い⁷²ためであろう。また、彼女は、ボン大学所蔵のクルティウスに関する一次資料を数多く参照し、未刊行の複数の文献⁷³を初めて分析している。

この本で特に充実しているのは、アルザスに関する記述、クルティウスがドイツロマン主義の時代に活躍したアダム・ミュラー **Adam Müller** とフリードリヒ・シュレーゲル、そして、同時代人であるロシアの神秘主義者ヴァチェスラフ・イヴァーノフ **Вячеслав Иванов** をクルティウスがどのように受容したのかということに関する記述である。彼女がフランス人のゲルマニストであることもあり、ドイツ語圏の文化的特殊性や彼のフランス文学論は、当時の最新の文献を使用しながら精緻に分析されている。しかしながら、この本の、英語圏やスペイン語圏の文学作品と彼の関係を論じた記述には物足りない部分がある。

この質の高い研究書の刊行から、約 10 年後、彼の批評活動を考える上で唆を与える二つの研究書が出た。その一つは、若い頃にエーリッヒ・アウエルバッハ **Erich Auerbach** の薫陶を受けた中世フランス文学の研究者ウィリアム・カリン **William Calin** による『20 世紀における人文主義的な批評家達』*The Twentieth-Century Humanist Critics* (2007) である。

もう一つは、2005 年にフライブルク大学ロマンス語文献学科に提出された博士論文を元

⁶⁷ Cf. Jacquemard-de Gemeaux, « Curtius et Karl Mannheim », in: Bem et Guyaux (éds.), op. cit., pp. 231-237.

⁶⁸ Landry Charrier, *La Revue de Genève (1920-1925)*, Genève, Slatkine, 2009, p. 69.

⁶⁹ Jacquemard-de Gemeaux, *Ernst Robert Curtius (1886-1956). Origines et cheminements d'un esprit européen*, op. cit., pp. 212-217.

⁷⁰ Ibid., pp. 222-223.

⁷¹ Ibid., pp. 32-42.

⁷² Dröge, « Avec Goethe, contre Berlin », op. cit., p. 201.

⁷³ 具体的には、「中世における古代」 „Die Antike im Mittelalter“、「財産と教養」 „Besitz und Bildung“、「ノヴァーリス」 „Novalis“、「伝統と革命」 „Tradition und Revolution“である。

にしたシュテファニー・ミュラーの研究書『1918年から1932年にかけてのジャーナリスト
イックな書き手としてのエルンスト・ロベルト・クルティウス 彼の著作活動に表れた独
仏に関する見解』*Ernst Robert Curtius als journalistischer Autor (1918-1932): Auffassungen über
Deutschland und Frankreich im Spiegel seiner publizistischen Tätigkeit* (2008) である。

カリンの『20世紀における人文主義的な批評家達』は、クルティウスと批評活動と主著
の両方を論じている。彼の考えでは、クルティウスはジュネーヴ学派やアメリカの神話批
評の先駆と言える⁷⁴1920年代の批評活動から、1930年代に入ると中世文学研究に転向した
のである。つまり、カリンは、クルティウスのジャーナリズムでの文章と主著に連続性を見
出そうとはしていないのだ。

この本は、内容的にも、アメリカの大学人が書いたという点でも、複数の対象を扱う点
でも、エヴァンズ編の論文集に似ている。だが、カリンの本とエヴァンズ編の本には、約
40年間の隔りがある。それゆえ、この本では、ニュー・クリティシズム、ポストモダン、
ポストコロニアル理論、ジェンダー理論などと人文主義の関係も論じられている。

カリンが論じたのは、シュピッツァー、クルティウス、アウエルバッハ、ベガン、ジャ
ン・ルッセ Jean Rousset、C・S・ルイス C. S. Lewis、F・O・マシーセン F. O. Matthiessen、
ノースロップ・フライ Northrop Frye の八人である。カリンによると、クルティウスは、ワ
イマール時代の文化的無秩序に抵抗したところがシュピッツァーと類似しており⁷⁵、ドイツ
文化の視野の狭さに限界を感じフランス文学やイタリア文学の探求をし、中世学者である
と同時にモダニストであった点でシュピッツァーやアウエルバッハと共通していた⁷⁶。また、
彼は、ベガンやルッセと同じようにフランス古典主義に批判的であり⁷⁷、そして、一般向け
のメディアでも仕事をする知識人であり同時代の作家達と積極的に交流した点でベガンや
フライに似ていた⁷⁸。さらに、クルティウスは、歴史よりも形式を重視した文学論を書き、
批評と研究の融合⁷⁹を主張した部分がフライに近かった⁸⁰。

一方、ミュラーの研究書は、クルティウスが戦間期に行った批評活動だけに絞って分析
したものである⁸¹。彼の本の中で最も有名なものは、『ヨーロッパ文学とラテン中世』であ
る。それゆえ、この大著しか知らない者が、この研究書を手に取った時に感じるインパ
クトは大きなものだろう。だが、博士論文を元にした本であるにもかかわらず、この主題に
関する重要な先行研究であるデュ・ボス、ウェレック、エヴァンズ、サンティーニによる
クルティウス論を無視し、参考文献にも挙げていないのは致命的である。

⁷⁴ William Calin, *The Twentieth-Century Humanist Critics*, Toronto, University of Toronto Press, 2007, p. 32.

⁷⁵ Ibid., p. 143.

⁷⁶ Ibid., p. 45, 162.

⁷⁷ Ibid., p. 142.

⁷⁸ Ibid., p. 144, 163.

⁷⁹ 批評と研究の融合という点は、クルティウスの弟子に当たるグスタフ・ルネ・ホッケ Gustav René Hocke
にも当てはまる。Vgl. Gustav René Hocke, *Im Schatten des Leviathan*, München, Deutscher Kunstverlag, 2004.

⁸⁰ Calin, op.cit., pp. 38-39.

⁸¹ このミュラーの研究を補足するものとしては、Charrier, *La Revue de Genève (1920-1925)*, Genève, Slatkine,
2009.や Ève Rabaté, *La Revue Commerce*, Paris, Classiques Garnier, 2012.を我々は挙げる事が出来る。

この本で、ミュラーが描き出そうとしている批評家クルティウスの像は“独仏の仲介者”という像である。この“独仏の仲介者”という像は、今井の論文「E. R. クルティウスとフランス」を含め、数多くのクルティウス論で指摘されたことである。彼女は、書物に収録されていないクルティウスのジャーナリズムの論考もきちんと参照した上で、これを主張している点は博士論文らしいと言える。ただ、この“独仏の仲介者”という像を描くのに、ミュラーは専らドイツにおけるフランス像ばかりを対象とし、ジャックマール＝ド・ジュモーなどとは異なり、フランスにおけるドイツ像にはあまり目を向けようとしない。これでは、“独仏の仲介者”という像は、十分には浮かび上がらないだろう。

この本で優れているのは、アルザス、父親フリードリヒ、クルティウスのマックス・ヴェーバー受容、若い頃のクルティウスに影響を与えた聖職者アルバート・ウェイ Albert Way に関する記述が、それまでの文献よりも充実していることである。一方、問題点は、ミュラーは、ドイツの文脈ばかりに目を向けて、ドイツ語圏全体にはそれほど興味を持っていないのである。その結果、ヨーロッパへと繋がるような多文化性を持つドイツ語圏の国である、スイス、オーストリア、ルクセンブルクの特異性には触れていない⁸²。それゆえ、この研究は彼のヨーロッパ性を考察する際には、あまり有効なものではない。

1990年代以降、欧州統合はますます深化し、ヨーロッパをめぐる議論は頻繁になされるようになる。また、1990年代における文学研究ではポストコロニアル理論⁸³が流行した。2000年代になると、グローバリゼーションが話題になり始めた。こうした状況の中、ヨーロッパ論でもヨーロッパ中心主義の是非を問うようなものも行われるようになった。

2009年に7月中旬、イタリアのブレッサノーネとオーストリアのインスブルックで、学会『エルンスト・ロベルト・クルティウスとヨーロッパの文化的アイデンティティ』 *Ernst Robert Curtius e l'identità culturale dell'Europa* が開催された。主催したのは、パドヴァ大学のイヴァーノ・パッカネッラ Ivano Paccagnella とエリーザ・グレゴリー Elisa Gregori の二人⁸⁴である。なぜ、この学会は国境地帯で開催されたのだろうか。その理由の一つが、1992年の学会と同じように、ヨーロッパをめぐる知的な議論を深めるためであろう⁸⁵。

⁸² 例えば、ミュラーは、クルティウスの母方やマイリッシュ夫妻を軽視している。

⁸³ 西洋中心主義を批判するエドワード・W・サイード Edward Wadie Said は、クルティウスなどのドイツのロマンス語文献学者が、自己の属する文化とは異なった異民族の文化の中に分け入る人文学を实践したことに触れている（エドワード・W・サイード『オリエンタリズム 下巻』、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社ライブラリー、1993年、138頁）。サイードと西洋文学だけを対象とするクルティウスやアウエルバッハの立場は、一見異なったものに見えるが、複数の対象を華麗に論じる比較文学的な方法論において、サイードはドイツのロマンス語文献学に多くを学んだと考えられる。サイードと20世紀ドイツのロマンス語文献学の関係については、宮崎裕助「ヒューマンイズムなきヒューマニティーズ サイード、フーコー、人文学のディアスポラ」（西山雄二編『人文学と制度』、未来社、2013年、43-69頁）を参照。

⁸⁴ 二人は、2007年にはアウエルバッハに関する学会を、2008年にはシュピッツァーに関する学会を主催した。Cfr. Ivano Paccagnella e Elisa Gregori (a cura di), *Mimesis. L'eredità di Auerbach*, Padova, Esedra, 2009; Leo Spitzer: *lo stile e il metodo*, Padova, Esedra, 2010. マリオ・マンチーニ Mario Mancini の書物『経験としての文体論』 *Stilistik als Erfahrung* (2012) は、この三つの論文集中に彼が寄稿したものを翻訳して集めたものである。

⁸⁵ クルティウスにおけるヨーロッパを論じた発表には、ホフマンスタールやクルティウスのフリードリヒ・シュレーゲル受容を論じたロレッタ・ボスコ Lorella Bosco の「ヨーロッパの理念 シュレーゲル、ホフマンスタール、そして、クルティウス」“L'idea di Europa: Schlegel, Hofmannsthal e Curtius”、国民文学がヨ

学会を元にした論文集の序文「ローマへ向かう途上にいるクルティウス」“Curtius sulla strada verso Roma”において、ジャンフェリーチェ・ペロン Gianfelice Peron は述べている。

Il concetto di identità europea è il nucleo tematico sul quale è imperniata per gran parte l'opera curtusiana, feconda e sfaccettata, tesa a definire l'eredità, l'unità, la tradizione, la continuità, le radici, i fondamenti, insomma gli elementi unificanti e caratterizzanti la cultura europea occidentale sia in senso verticale/diacronico, dall'antichità all'età moderna, sia in senso orizzontale/sincronico, nel rapporto delle varie letterature e culture contemporanee, europee e non solo, tra di loro⁸⁶.

ヨーロッパのアイデンティティという概念は、クルティウスにおいて核心をなす主題である。この主題を軸として、古代から近代まで縦の線で通時的な意味においても、そして、近現代のヨーロッパ諸国を中心とする（それ以外のものも含めた）、文学と文化の関係における水平の線で共時的な意味においても、遺産、統一体、伝統、連続性、諸起源、基礎原理、要するに西欧のヨーロッパ文化を統合し特徴づける様々な要素を定義することを目的として、多産で多面的なクルティウスの大部分の作品は書かれたのだ。

クルティウスの著作群の特徴としてペロンは、遺産や連続性や基礎原理といった文学作品群を繋ぐものの追求を指摘している。さらに、彼は、歴史的にも空間的にもヨーロッパのアイデンティティへの関心が、多産な人物であったクルティウスの仕事の核であることを言っている。ヨーロッパ的ヴィジョンはアウエルバッハの仕事にも見られるものだとしても⁸⁷、これがクルティウスにとって根幹を成していることは疑いない。文学におけるヨーロッパを話題にするのなら、クルティウスは無視出来ない巨大な存在である⁸⁸。

この学会で、クルティウスの批評活動を扱った発表には、ヘルムート・メーター Helmut Meter の「戦間期のクルティウス思想における“ドイツ精神”と“フランス精神”」“« Spirito tedesco » e « spirito francese » nel pensiero di Curtius tra le due guerre”、カルロ・ドナ Carlo Donà の「ドイツ精神とミッドライフ・クライシス 『危機に立つドイツ精神』(1932) 」“Lo spirito tedesco e la crisi della mezza età. *Deutscher Geist in Gefahr* (1932)”⁸⁹などがあつた。

ヨーロッパ文学を分けたものであることや文化的なヨーロッパの不明確さを述べたレーモ・チェゼラーニ Remo Ceserani の「様々なヨーロッパ論」“Un'idea diversa dell'Europa”、エリオットの『荒地』*The Waste Land* (1922) や雑誌『クライテリオン』*Criterion* のヨーロッパ性を論じたマリオ・ドメニチェリ Mario Domenichelli の「廃墟のヨーロッパ、つまり、『荒地』」“Le macerie d'Europa, The Waste Land, Das wüste Land”、クルティウスが東欧を軽視することを批判するヴォルフガング・クレーマー Wolfram Krömer の「半分に減らされたアイデンティティ クルティウスによって無視されたヨーロッパとその文化の諸相」“Un'identità dimezzata? Aspetti dell'Europa e della sua cultura negletti da Ernst Robert Curtius”などがあつた。

⁸⁶ Gianfelice Peron, “Introduzione. Ernst Robert Curtius sulla strada verso Roma”, in: Paccagnella e Gregori (a cura di), op. cit. p. XI.

⁸⁷ Calin, op.cit., p. 46.

⁸⁸ クルティウスのこうした側面を、桂芳樹は誇張して“ヨーロッパ・イデオロギー”と表現している（桂芳樹「比較文学の課題 E. R. Curtius のヨーロッパ文学の研究方法与ドイツ比較文学の成果にもとづいて」(『ドイツ文学研究』、(8)、日本独文学会東海支部、1976年、198頁)。

⁸⁹ ドナは、ジャーナリズムに発表した批評を集めた『危機に立つドイツ精神』を中心に、クルティウスの批評活動全般を扱っている。1923年から1932年まで年に10本から20本くらい、ジャーナリズムに寄稿

クラゲンフルト大学でロマンス語文献学を講じたメーターの論考は、戦間期におけるクルティウスの批評活動を、著書の表題に使用した“フランス精神”や“ドイツ精神”という表現を軸に考察したものである。彼は、イタリア語の *spirito* に相当するドイツ語の“精神” *Geist* という言葉がクルティウスにおいて何を意味したのか、説明している。

Per Curtius, il concetto di « spirito », nella sua più alta realizzazione, sembrerebbe l'equivalente di genio. A volte interferisce col termine di « anima » o ne è persino un sinonimo. Altre volte si presenta come una variante di « essenza ». Comunque è un principio identitario nazionale di stampo intellettuale, culturale, sensitivo e immaginativo. Gli « spiriti » nazionali, come quello francese, da una parte sono essenze specifiche, individuabili indipendentemente dal rispettivo momento storico; dall'altra si costituiscono solo storicamente, e storicamente sono soggetti a cambiamenti che richiedono sempre una nuova definizione⁹⁰.

クルティウスにとって、“精神”という概念は、かなり具体的に言うのであれば、特性という意味に相当するように思われるのではなかろうか。この概念は、時に、“感情”という言葉とごっちゃになることも、同義になることさえある。場合によっては、“本質”という言葉のヴァリエーションとして現れる。しかしながら、この概念は、知的、文化的、感覚的、想像の領域での、国家的（国民的）アイデンティティの原則なのだ。国家的な“精神”は、一方で、例えば、フランス精神のように、歴史に関係なく同定可能な特定の種類のものなのだが、もう一方では、国家的な“精神”は、歴史によってのみ成立するものであり、常に新たな定義を必要とする、歴史的に変化するものでもあるのだ。

彼は、クルティウスの使う“精神”の意味の不明瞭さや、その意味は歴史的に変容することもあり得ることに触れている。続いて、メーターは、クルティウスの『新しいヨーロッパにおけるフランス精神』 *Französischer Geist im neuen Europa* における“フランス精神”や『危機に立つドイツ精神』における“ドイツ精神”を検討し、の“精神”には、国家的なもの（国民的なもの）とヨーロッパ的なものが混じり合っていることを指摘している⁹¹。

以上、1930年のデュ・ボスのクルティウス論から、2011年に刊行された論文集まで、クルティウスに関する研究を、彼の批評活動を扱ったものを中心に概観した。

第4節 本論文の位置

しているのに、1930年に3本しか書いていないのは、ジョイス論と『フランス文化論』のために勉強していたからであると彼は考えている。この論考で、ドナは『危機に立つドイツ精神』におけるプロレタリア文学やユダヤ人に対する攻撃に関して、クルティウスの友人達の書簡を引用して考察している。

⁹⁰ Helmut Meter, “« Spirito tedesco » e « spirito francese » nel pensiero di Curtius tra le due guerre”, in: Paccagnella e Gregori (a cura di), op. cit., p. 27.

⁹¹ Ibid., pp. 28-34.

この節では、本論文とこれまでの研究との違いについて書いておきたい。クルティウス研究において最も完成度が高いジャックマール＝ド・ジュモーの研究書(1998)は、彼の批評よりも文献学を重視している。これに対し、本論文の主題は、彼の批評活動である。しかし、クルティウスの作品だけではなく生涯も重視し、彼の仕事の本質を“ヨーロッパ精神”とする点は、彼女の本と本論文は共通している。

これまで記述してきたように、クルティウスの批評活動を論じた文献は数多くある。本論文がそれらと異なるのは、まず、彼が批評の対象とした作品の内容にも触れるということである。これにより、彼の仕事を同時代人のそれと関連付け易くなるであろう。

また、本論文はクルティウスの批評全てを対象としていない。1992年や2009年の学会で示されたように、ヨーロッパのアイデンティティへの関心が彼の仕事の核である。パスカル・ドゥテュランス Pascal Dethurens の『文学におけるヨーロッパをめぐって 1918年から1939年という精神の危機の時代における文学創造とヨーロッパ文化』*De l'Europe en littérature. Création littéraire et culture européenne au temps de la crise de l'esprit (1918-1939)* (2002) やコンパニオン編の論文集『1919年から1939年という動乱の時代における文芸共和国』*La République des Lettres dans la Tourmente (1919-1939)* (2011) で論じられたように、彼が批評活動を行った時期にはヨーロッパのアイデンティティへの関心が高かった作家や知識人が多くいた。本論文は、こうしたヨーロッパ人達を彼が論じた批評に対象を限定する。

クルティウスは、主著の第15章で、ドイツの文芸学には、歴史的にも空間的にもヨーロッパ的なパースペクティヴが欠けていることを述べた⁹²。彼は、空間的な広がりも歴史的な広がりもあるヨーロッパを求めているのだ。しかし、主著の主題は古代から近代までの修辭学の連続性であるために、主著におけるヨーロッパは、歴史的なヨーロッパである。

これに対し、戦間期に彼が批評で主張したヨーロッパは、空間的なものであった。本論文は、この空間的なヨーロッパの形成過程を彼の批評や書簡を手掛かりに検討することにした。最初の章で彼の批評活動を概観する。第2章から第5章までは、同時代のヨーロッパ人とクルティウスの関係を分析する。最終章では、批評と主著の関係を考察することにした。なぜなら、彼の批評の中には歴史的なヨーロッパも含まれているからである。

本論文は、クルティウスだけでなく、ヨーロッパ的意識を持った作家や知識人の作品にも触れるのだから、アプローチは、エヴァンズ編の論文集『四人の現代の人文主義者達をめぐって ホフマンスタール、グンドルフ、クルティウス、カントロヴィッチ』(1970) やカリンの『20世紀における人文主義的な批評家達』(2007) に近いものになるであろう。また、クルティウスの書簡を検討することも、本論文の特徴である。これにより、近現代におけるインテレクチュアル・ヒストリーにおいて、彼を位置付けることが可能になる。

第5節 本論文の構成

⁹² ELLMA, S. 295.

次に、六つの章から成るこの博士論文の構成について説明することにしたい。

第1章では、クルティウスの批評活動全体を概観し、文献学者とされている従来のイメージを打ち破ることを目的とする。批評家としての彼の仕事は、ドイツにおけるフランス現代文学の紹介者として始まった。この章では、処女作『新しいフランスの文学開拓者達』、マールブルク時代の批評、ハイデルベルク時代の批評、1930年代前半の批評、第二次世界大戦後の批評という五つの節に分けて、仕事の流れを追っていく。これにより、我々は、彼の知的関心には変化していった部分とずっと変わらなかった部分があることを確認出来るだろう。例えば、彼は、第一次世界大戦直後にフランス現代文学の紹介者として出発したが、この紹介を1930年前後に止める。また、1920年代初頭にはそれほど関心を持っていなかったスペイン文学が1920年代半ばになると情熱の対象へと変容する。

また、この章では、彼の周囲にはどんな作家や知識人がいたのかを、あるいは、彼がどのような文化的なグループに所属していたのかを具体的に描き出すようにしたい。さらに、彼の批評がどのような反応を引き起こしたのかということにも注目する。彼の批評はエッセイ風の文体で書かれおり⁹³、ドイツのアカデミズムにはこうした方法論を強く批判する者が多く、クルティウスはドイツの大学人の間で孤立せざるを得なかったからである。

第2章では、クルティウスが『新しいフランスの文学開拓者達』で一章を割いたロマン・ロランと彼の関係を考えることにする。ロランに注目するのは、空間的に“ヨーロッパ精神”を備えていたからである。彼は特に、イタリアとドイツの文化に通じていた。

先ほど引用したペロンの論考の表題が、「ローマへ向かう途上にいるクルティウス」となっているように、ローマはクルティウスの終着点であり、主著の核心を成している。この永遠の都に青年時代からロランは長く滞在した。物語の舞台がヨーロッパ各地を移動する長編小説『ジャン・クリストフ』でもローマは重要な位置を占めている。

ロラン論では、ライン河のことが三度言及されている。『ジャン・クリストフ』で繰り返し描かれ、クルティウスもこの作品における重要性を指摘するライン河が、フランク王国のことが話題になる主著において、どのような形で登場するのか見ていくことにする。

また、このロラン論では、戦争中にロランがスイスで行った反戦運動も論じられた。この批評を通じて、二人の“ヨーロッパ精神”と第一次世界大戦の関係を考察したい。

最後に、共産主義に共感するロランとクルティウスの関係に触れ、スラヴ語圏の文化が軽視されているクルティウスの主著におけるヨーロッパの領域の範囲を考えたい。

第3章では、彼と『新フランス評論』の作家達との関係について、彼のジッド論、ジッドが定期的に参加したポンティニーの旬日会、アリーヌ・マイリッシュ Aline Mayrisch によるルクセンブルクのサロン、クルティウスとジッドの書簡を論じることにする。

まず、『現代フランスの文学開拓者達』のジッド論において、“ヨーロッパ精神”へと繋

⁹³ オルテガは、『大衆の反逆』 *La rebelión de las masas* (1929) の中で、ドイツの大学には義務づけられた業績発表の形式があり、フランスの作家や英国のエッセイストが書くような形式の文章が許されないことを指摘している (Ortega, *Obras Completas*, t. 4, Madrid, Revista de Occidente, 1957, pp. 246-247.)。

がるような彼の外国文学受容をどのように論じているのかに注目する。

エッセイ風の批評を書いたためアカデミズムで孤立したクルティウスにとって、『新フランス評論』の作家達との友情は重要であった。哲学者ポール・デジャルダン Paul Desjardins によるポンティニーの旬日会とアリーヌ・マイリッシュによるルクセンブルクのサロンは、“未来のヨーロッパの二つの小さな核”と言われ⁹⁴、友情を育む機会であった。クルティウスの 1922 年と 1924 年のポンティニー論を再考する。なぜなら、この会合の国際性は“ヨーロッパ精神”と、その反アカデミズム的傾向は主著の方法論と関連し、ここで見られるフランスの社交的伝統の礼賛はこの頃のフランス寄りの姿勢を示すからである。

続いて、ロカルノ体制という文脈の中で欧州統合に貢献した実業家エミール・マイリッシュ Émile Mayrisch の妻であるアリーヌ・マイリッシュによるサロンがクルティウスにとって何を意味したのか、ポンティニーの旬日会との比較などを通して考えることにしたい。

次に、主著に結実するクルティウスの“ヨーロッパ精神”の形成過程を、クルティウスとジッドの間の書簡を通して検討する。1920 年代初頭から続けられた彼らの書簡の分量は多く、主著のことも言及されている。我々は、書簡を通じて、独仏間の政治的緊張関係やクルティウスの知的関心の変化や“ヨーロッパ精神”の形成過程を容易に確認出来る。この書簡ではお互いの著書を送り合い、意見を言い合う様子が記されている。

第 4 章では、主著の中で何度も言及されるホフマンスタールに関するクルティウスの仕事を分析する。クルティウスはホフマンスタールとは友情を築かなかったが、早くからヨーロッパ的な意識が強かった彼の仕事への敬意を持ち続けた。ホフマンスタールは、少年時代から晩年までヨーロッパの他の国々の文学を原語で読み、ヨーロッパ各地をよく旅行した“偉大なる精神のコスモポリタン” „große Kosmopolit des Geistes“である⁹⁵。

第 1 節では、クルティウスが 1949 年のゲーテ論において、ホフマンスタールがヨーロッパの文学的伝統を継承していると指摘していることに着目する。

第 2 節では、1917 年にホフマンスタールが行った講演「ヨーロッパの理念」 „Die Idee Europa“ に触れる。彼におけるヨーロッパが、二つのローマ帝国の流れを汲み、ドイツ系、ラテン系、スラヴ系の民族からなるオーストリアに立脚していることを確認したい。

第 3 節では、二人がバルザックの神秘主義的側面を共有し、ホフマンスタールが編集した『ドイツ読本』 *Deutsches Lesebuch* (1922) をめぐるクルティウスの書評から、ホフマンスタールが 1750 年から 1850 年のドイツ文学に好奇心を持っていることが示されるだろう。

第 4 節では、1929 年に死んだホフマンスタールに関する二つの追悼文から、保守革命を主張するホフマンスタールをクルティウスが精神的指導者と見做していること、そして、彼の作品における王権や貴族が肝心であるとクルティウスが考えていることに触れる。また、若い頃にホフマンスタールがロマンス語文献学を修めたことにクルティウスが共感していることに目を留めたい。なぜなら、複数のロマンス語を読みこなしたことは、二人の

⁹⁴ Tony Bourg et Joseph-Émile Muller (sous la direction de), *Les Mayrisch. L'apport et le rayonnement européen d'une famille luxembourgeoise*, Luxembourg, Musée d'histoire et d'art, 1980, p. 20.

⁹⁵ KEEL, S. 120.

“ヨーロッパ精神”の形成において本質的なことであったからだ。さらに、ホフマンスタールにおける保守革命に関しては近代以前の文学を論じる主著との関連性を検討する。

第5節では、1934年の批評「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」„George, Hofmannsthal und Calderón“から、ハプスブルク帝国への帰属感を元にしたホフマンスタールのカルデロン受容にクルティウスが大変関心を払っていることを確認する。

最後に、ドナウ河流域の文化に愛着を持っているホフマンスタールとの差異である、クルティウスのスラヴ圏の文化への無関心にも触れることにしたい。

第5章ではオルテガとクルティウスの関係を扱う。オルテガが『大衆の反逆』の中で欧州統合を主張したのに対し、クルティウスの主著は欧州石炭鉄鋼共同体が設立された時期に出版された。二人に共通していたのは歴史的にも空間的にも限定されないような教養を持っていたことである。彼らの“ヨーロッパ精神”は、この教養を背景としていた。

二人は共に、若い頃はジャーナリズムで外国の現代文化の紹介に努めたが、後期の仕事は古い時代の文化を論じたものが多い。二人の間の書簡を検討すれば、若い頃から老年期への知的好奇心の変化を追うことが出来る。この書簡で触れられているお互いの大学に講演に招待し合う行為があるからこそ、二人はヨーロッパ的な学者である。

クルティウスはオルテガに関する長めの論考を1924年と1949年の二回にわたって発表している。スペイン文学に多くの頁が割かれているのは『ヨーロッパ文学とラテン中世』の特徴の一つであるが、クルティウスのオルテガ論を起点として、彼とスペインの関係が“ヨーロッパ精神”の形成において何を意味したのか検討する。

さらに、クルティウスのオルテガ論から、アカデミズムとは距離を置いた活動を行っていたクルティウスとオルテガにおいて、どのような批評の原理が存在したのか考えたい。クルティウスの批評は、直観に基づくエッセイ風のものであるのに対し、オルテガの批評は、直観よりも実証を重視し、構成への強い意志を感じさせるものであった。

第6章では、批評と主著の関係を論じる。批評活動をしていた戦間期のクルティウスにおいて拡大したのは空間的なヨーロッパである。一方、主著の主題は歴史的な広がりを持つヨーロッパである。批評と主著には、空間的なヨーロッパと歴史的なヨーロッパという違いがあった。だが、両者に接点がないわけではない。というのは、批評対象にした現代文学の作家達には主著で扱っている時代の文学を読んでいる者も含まれていたし、ロマンス語文献学を学んだクルティウスも若い頃から近代以前の文学も読んでいたからである。

この章では、まず、古代以来の修辞学の伝統が語られているクルティウスの主著『ヨーロッパ文学とラテン中世』の概略を述べることにしたい。

次に、第2章から第5章で扱った四人の同時代のヨーロッパ人達や彼らを扱ったクルティウスの批評と主著の関係を分析する。ジッドやホフマンスタールのように主著と深く関連する者もいれば、ロマン・ロランやオルテガのように、それほど接点のない者もいることが明らかになるだろう。これは、第2章から第5章で扱ったヨーロッパ人達の共通性が第一に空間的な“ヨーロッパ精神”であるためである。また、クルティウスが批評で扱っ

た同時代人の文学者には、エリオットのように歴史的なヨーロッパに対する意識が強く、『ヨーロッパ文学とラテン中世』と密接に繋がりがあがる者があることも示されるだろう。

第6節 批評家クルティウスの“ヨーロッパ精神”

彼の主著で扱われている地域は、9世紀のフランク王国の領土にイングランド、アイルランド、イベリア半島を加えた部分である。それゆえ、クルティウスのヨーロッパは、北欧やスラヴ文化圏を含むものではない。本論文で扱う“ヨーロッパ精神”を備えたロマン・ロラン、ジッド、デジャルダン、マイリッシュ夫妻⁹⁶、ホフマンスタール、オルテガにおけるヨーロッパの領域は、主著で扱われている地域と大部分は共通したものである。

しかし、ロランの場合はソ連を除外したヨーロッパは無意味なものだと考えていた⁹⁷、ホフマンスタールはハプスブルク帝国の一部であったスラヴ文化圏にも親近感を持っていた。クルティウスがスラヴ文化を軽視したことは、1925年のロカルノ条約において、ポーランドの外相アレクサンデル・スクシンスキ Aleksander Skrzynski とチェコの外相エドヴァルド・ベネシュ Edvard Beneš が蚊帳の外に置かれ発言権を持っていなかったこと⁹⁸と同じ位相にあることと言える。これに加え、ロランやマイリッシュ夫妻はイベリア半島の文化について特に興味を持っていたわけでない点がクルティウスとは異なる。

“ヨーロッパ精神” „Europäischer Geist“ という表現についても、説明しておきたい。既に触れたように、メーターによると、クルティウスにおける“精神”というのは、特性、感情、本質といった意味に近く、知的、文化的、感覚的なものである。

一方、主著である『ヨーロッパ文学とラテン中世』の表題には、ヨーロッパ文学 Europäische Literatur が含まれている。ヨーロッパ文学は、ドイツ文学やフランス文学といった国民文学と比べ一般的なものではなかったが、EUにおいては国家主権が重視されないために、ヨーロッパ文学は現実性を帯びてきている。ただ、『ヨーロッパ文学とラテン中世』におけるヨーロッパ文学は古典文学を軸としている。それゆえ、近現代におけるヨーロッパ文学を考察するなら、彼が執筆した同時代の作家達に関する批評に目を向けることは有効である。

クルティウスは文学 Literatur だけでなく、精神 Geist という単語で説明しようとする傾向があった。『新しいフランスの文学開拓者達』(1919)の序文で“フランス精神の方法をめぐるイメージ” „Vorstellungen von französischer Geistesart“ という表現を使っている⁹⁹。文学 Literatur と言わず精神 Geist とすれば、文学だけでなく哲学も対象とすることが出来る。その証拠に、『新しいフランス文学の文学開拓者達』の中でアンリ・ベルクソン Henri Bergson に多くの頁が割かれている。『新しいヨーロッパにおけるフランス精神』(1925)の表題が、

⁹⁶ エミール・マイリッシュが中心的存在であった経済協定には、1927年に東欧諸国も加わっていた。

⁹⁷ Bernard Duchatelet, *Romain Rolland tel qu'en lui-même*, Paris, Albin Michel, 2002, p. 292.

⁹⁸ 牧野雅彦『ロカルノ条約 シュトレゼマンとヨーロッパの再建』(中央公論新社、2012年、113頁)。

⁹⁹ WB, S. 1.

Französische Literatur im neuen Europa ではなく、*Französischer Geist im neuen Europa* となっているのは、この本に文明をめぐる省察やベルクソニズムや哲学者も多く参加したポンティニーの旬日会に関する論考が含まれているためであろう。

特筆すべきなのは、『新しいヨーロッパにおけるフランス精神』に収録された論考「ヨーロッパ精神とフランス文学」„Europäischer Geist und französische Literatur“である。これは、雑誌掲載時は「現代フランス文学におけるヨーロッパ精神について」„Vom europäischen Geiste in der modernen französischen Literatur“という表題だった。彼は、全欧の精神共同体の観念である“ヨーロッパ精神”« l’esprit européen » を説くスタール夫人の画期性を説明する。

Aber auch in Frankreich hat die Idee europäischer Geistesgemeinschaft im Sinne der polyphonen Harmonie eine große Tradition. Diese Idee ist zum erstenmal bewußt erfaßt und fruchtbar verwirklicht worden durch Frau v. Staël. Dem abstrakten Kosmopolitismus des 18. Jahrhunderts, der den Menschen entnationalisierte, um ihn zum Weltbürger zu erheben, stellt sie den Begriff einer europäischen Kultur entgegen, die nicht Nivellierung, sondern Synthese der verschiedenen Nationalkulturen bedeutet. In dem Buch über Deutschland, das 1813 erschien, steht der denkwürdige Satz: Il faut, dans nos temps modernes, avoir l’esprit européen¹⁰⁰. Dieses Buch begründet die vergleichende Betrachtung der modernen Kulturen. [...] Die Harmonie des geistigen Reichs gleicht einem Orchester, in dem kein Instrument entbehrt werden kann. Jeder Nationalgeist ist ein solches musikalisches Instrument, ist also zugleich individuell und universal. Was wäre das für ein Musiker, der nur ein Instrument gelten ließe und hören wollte? Er würde nie eine Beethovensche Symphonie vernehmen können. Die Kulturnationalisten sind solche schlechten Musikanten. Der wahre Musiker ist darum kein schlechter Geiger oder Bläser, weil er in der Symphonie mitspielt. Der geistig lebendige Mensch ist darum kein schlechter Deutscher oder Franzose, weil er an dem europäischen Konzert mitwirkt¹⁰¹.

だが、フランスでも、ポリフォニックな和音の意味でのヨーロッパ的な精神共同体という

¹⁰⁰ この文章を、スタール夫人は『ドイツ論』の、第2部『文学と芸術』*La littérature et les arts* の第28章「小説について」« Des Romans » でジャン・パウル Jean Paul を論じている一節で書いている。

[...], et néanmoins rien de ce qu’il a publié ne peut sortir de l’Allemagne. Ses admirateurs diront que cela tient à l’originalité même de son génie; il me semble ses défauts en sont autant la cause que ses qualités. Il faut, dans nos temps modernes, avoir l’esprit européen; les Allemands encouragent trop dans leurs auteurs cette hardiesse vagabonde qui, tout audacieuse qu’elle paraît, n’est pas toujours dénuée d’affectation. (Madame de Staël, *De l’Allemagne*, II, Paris, Garnier Flammarion, 1968, p. 50) …しかしながら、彼が発表した作品は何一つドイツから出ることには出来ていない。彼の賛美者達は、そのことは彼の才能の独自性自体に起因すると言うだろう。私には、彼の短所は、彼の長所と同じように、作品が国外で受容されないことの理由となっているように思われる。現代においては、ヨーロッパ精神を持たなければならない。ドイツ人達は、自国の作家達の散漫とも言える果敢さをあまりに励ましすぎるし、この果敢さは、どんなに大胆なものに見えても、常に気取りが取り払われているとは限らない。

彼女はドイツ人の読者だけに向けて書くのではなく、“ヨーロッパ精神”を持ち、国外でも通用するような作品を書く必要性を説く。どのような作品なら受け入れられるのかを示すために、彼女は『ドイツ論』でドイツの文化と、英国、フランス、オーストリア、スイスの文化を比較検討している。ただ、彼女の“ヨーロッパ精神”は、アメリカやロシアに対する脅威を前提とした欧州統合の動きとは同一のものではない。

¹⁰¹ *FGE*, S. 291-292, 298.

観念は偉大なる伝統を有している。この観念を最初に自覚的に把握し実り豊かに実現したのは、スタール夫人である。18 世紀の抽象的なコスモポリタニズムは人間を世界市民にまで高めようとして民族性を取り除いたが、スタール夫人は様々な民族の文化の平均化ではなく総合を意味するヨーロッパ文化の概念を提示した。1813 年に出版されたドイツに関する本の中には、“現代においては、ヨーロッパ精神を持たなければならない。”という記憶すべき文が書いてある。この本は近代の様々な文化の比較研究を基礎づけている。[……] 精神的な世界の和音はオーケストラに似ており、どの楽器もそれなしで済まされないものである。あらゆる民族的な精神はそのような楽器であり、要するに、個別的であると同時に普遍的である。一つの楽器だけを認めこの楽器だけを聴こうとするような音楽家は、どうだろうか。この音楽家はベートーヴェンの交響曲を耳にすることは決して出来ないだろう。文化的な民族主義はこのような悪質な音楽家である。真の音楽家が交響曲の演奏に加わるからといって、それゆえに悪質なヴァイオリニストや悪質な管楽器奏者であるということにはならない。活気に満ちた精神の人がヨーロッパ的な演奏会に参加するからといって、この人が悪質なドイツ人や悪質なフランス人であるということにはならない。

引用の冒頭が逆接の接続詞で始まっているのは、クルティウスがフランスの自国中心主義に触れていたからである。スタール夫人の説く“ヨーロッパ精神”とは、各民族の文化を総合することにより形成されるポリフォニックな和音のようなヨーロッパである。“ポリフォニックな和音”のヨーロッパは、EU が掲げる複言語主義 *plurilingualism* と関連するような、近代諸言語によるヨーロッパと言い換えることも可能だろう。また、“ポリフォニックな和音”という表現で示されているように、この引用部分で彼は音楽的な比喩を何度も用いている。文化的特徴の異なるヨーロッパの諸民族¹⁰²を、オーケストラを構成する性質の異なる楽器に喩えているのだ。彼が考える“ヨーロッパ精神”とは、ヨーロッパの諸民族による“ポリフォニックな和音”が含まれる交響曲のようなものである。

この論考でクルティウスは、ロマン・ロランや『新フランス評論』の作家達を“ヨーロッパ精神”の持ち主であると書いた。本論文では、同じようにこの精神を備え¹⁰³、ヨーロッパを思い描いていたホフマンスタールとオルテガも詳しく扱うことにする。

¹⁰² クルティウスは、個人に違いがあるように、国家にも差異が存在すると考えていた (Jacquemard-de Gemeaux, Ernst Robert Curtius (1886-1956): *Origines et cheminements d'un esprit européen*, op. cit., pp. 127-128.)。

¹⁰³ 仮に、この“ヨーロッパ精神”を持つヨーロッパ人がどのようなものなのか、具体的に記述するなら次のようになるだろう。彼らは、読書や旅行を通じて外国文化の受容に熱心であり、これを自国で精力的に紹介したり翻訳したりする。また、“ヨーロッパ精神”を備えた人物は、文芸共和国の知識人のように、ヨーロッパ各地に多くの友人を持つことが多い。その結果、外国語や自国語で書簡の遣り取りをし、作家であれば自著を送り合い、学者であれば自分の大学での講演に招待し合うことはあるだろう。場合によっては、ヨーロッパ人は、数カ国語の読み書きをすることがある。この数カ国語の読み書きは、EU がヨーロッパに共存する諸文化と多様性を尊重するために掲げている、母語以外の EU 域内の二つの言語を学習することを推奨する“母語プラス二言語”政策と関連する。この政策に関しては、木戸紗織「ルクセンブルクの多言語社会に関する考察 欧州連合の“母語プラス二言語”政策の実践例として」(『都市文化研究』(10)、大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、2008 年、53-66 頁)を参照。

第1章 批評家クルティウスの軌跡

第1節 『新しいフランスの文学開拓者達』

本章では、クルティウスが批評家として同時代のどのようなものを論じていたのか概観する。その際、彼のヨーロッパのアイデンティティへの関心に注意することにした。

批評家としての彼の処女作は、『新しいフランスの文学開拓者達』(1919)である。序文では、現代フランス文学の受容がドイツで遅れていることが触れられている¹⁰⁴。こうした事情のために、批評家クルティウスには外国文学を紹介するという側面が強かった。

彼が扱ったフランスの作家は、アンドレ・ジッド (1869-1951)、ロマン・ロラン (1866-1944)、ポール・クローデル Paul Claudel (1868-1955)、アンドレ・スュアレス André Suarès (1868-1948)、シャルル・ペギー Charles Péguy (1873-1914)である。この五人は 1870 年前後に生まれたことで共通しており、彼が青年時代から愛読していた二つの文芸雑誌の関係者である。ジッド、クローデル、スュアレスは『新フランス評論』の執筆者であり、ペギーが編集主幹を務めた『半月手帖』 *Les Cahiers de la Quinzaine* にロランは寄稿していた。

しかし、この五人の他にも、クルティウスが、この本の序文において詳しく論じた人物がいる。哲学者のベルクソン¹⁰⁵である。まず、彼はベルクソン哲学の特徴が、生を直接に把握する思惟態度であるとし、この“直接” „Unmittelbarkeit“ は、知覚の中ではなく、最も内面的な精神の実在の中に、つまり、直観によって見出すものであると語っている¹⁰⁶。彼がベルクソンにおける直観の重要性の強調していることに、目を留めておきたい。

次に、五人のフランスの作家達に関する彼の論考を扱うことにする。

クルティウスは、ジッドの作品が少数の人々向けであると考えている¹⁰⁷。彼の古典主義や外国文学受容を語るこの批評については、第3章第1節で詳述することにした。

ロマン・ロラン論には、『ジャン・クリストフ』への共感が表れている。イタリアやドイツに明かったロランとクルティウスの関係については、次章で論じることになるだろう。

クルティウスのクローデル論は、まず、時代と関わるような作品を書いたジッドやロランとは異なり、クローデルの作品は内的必然性を感じさせるものであることを指摘する¹⁰⁸。続いて、彼は、ジッドがクローデルの戯曲を“上演されないが重要な作品”と、シャルル・ルイ＝フィリップ Charles-Louis Philippe が“クローデルはダンテに比すべき存在”と語ったことを紹介している。また、クルティウスは、ダンテを想起させる宗教的作品を書いたクローデルが、無宗教的な環境に育った後にカトリックに改宗したことにも触れている¹⁰⁹。

¹⁰⁴ WB, S. 1.

¹⁰⁵ 1909 年、パリに研究滞在していたクルティウスはベルクソンの講義に通っていた (Jacquemard-de Gemeaux, Ernst Robert Curtius (1886-1956): *Origines et cheminements d'un esprit européen*, op. cit., p. 58.)。

¹⁰⁶ WB, S. 33.

¹⁰⁷ Ebd., S. 79.

¹⁰⁸ Ebd., S. 127.

¹⁰⁹ Ebd., S. 130-131. プロテスタントであった両親の反対に関わらず、クルティウスにカトリック文化へ

クルティウスは、クローデルの作品の特徴を神との格闘であると評し¹¹⁰、彼の世界観は、神が支配する中世的なものであると言う。クルティウスは、クローデル作品と先行するキリスト教文学との関係について、ダンテやスペイン演劇に近いものとしている。ダンテやスペイン演劇は、以後、断続的に取り上げられ、主著において論じられることになる。

次に、彼はスュアレス論で、フランス文化にはケルト、ラテン、ゲルマンの要素が混合していることに注意を促す¹¹¹。これは、ブルターニュ地方やドイツ音楽に愛着を持つスュアレスの世界を説明することを意図しているのだろうし、クルティウスが必ずしもパリやフランス古典主義がフランスを代表するものではないと考えていることを示す。また、ハイブリッド性の指摘は、ジャン・ラシーヌ Jean Racine よりもウィリアム・シェイクスピア William Shakespeare を、ラファエロ・サンティ Raffaello Santi よりもレンブラント・ファン・レイン Rembrandt van Rijn を評価するスュアレス¹¹²のヨーロッパ主義と関わるものである。クルティウスは、スュアレスがヨーロッパ人を語る文章を、自ら訳して紹介している。

...; aber es wird weder in der Kunst noch in der Dichtung einen großen Mann geben, der nicht europäisch wäre. Es gilt von jetzt ab, den Geist Europas selbst in das Werk hineinzutragen, in dem der Genius eines Volkes oder einer Rasse triumphiert. Europäisch sein, das heißt nicht fünf Sprachen lesen und schreiben, selbst wenn man in allen ein begabter Schriftsteller wäre. Auch nicht sein Leben damit zubringen, daß man von Land zu Land irrt, daß man in London bekannt ist, Freunde in Berlin hat, den Ruhm in Genf und ein Bett in Rom. Endlich auch nicht der Untertan aller Nationen scheint, eher als Bürger seines eigenen Vaterlands. Es handelt sich darum, freier Bürger aller zu sein, im Geiste¹¹³.

…しかし、芸術でも文学でもヨーロッパ的でないような偉人は一人もいないだろう。一民族もしくは一民族の精神が凱歌を揚げる作品にヨーロッパそのものの精神を運び込むことが、今後は必要だ。ヨーロッパ的であること、それは五ヶ国語で読み書きをすることではない、たとえ、その人がどの言語を操る能力のある作家であるにしても。また、その人がある国から別の国へと放浪しロンドンで有名でありベルリンに友人がいてジュネーヴでは名声をローマでは寢床を持つというような生活を過ごすことでもない。最後に、自分の祖国の市民たるよりはむしろあらゆる国の臣民たるように見えることでもない。ヨーロッパ的であることにおいて重要なのは精神においてあらゆる国の自由な市民であることである。

全ての偉大な芸術家や作家はヨーロッパ人である、というスュアレスのテーゼは、作家らしい強弁である。この引用部分に、我々は彼のヨーロッパ主義を見て取ることが出来る。しかし、この考え全体にクルティウスが同意したのかどうかは微妙である。“一民族もしく

の興味を植え付けたのは、英国国教会の聖職者アルバート・ウェイである (Müller, a. a. O., S. 101-114)。

¹¹⁰ WB, S. 134.

¹¹¹ Ebd., S. 173.

¹¹² Ebd., S. 198-201.

¹¹³ Ebd., S. 264.

は一種族の精神が凱歌を揚げる作品に、ヨーロッパそのものの精神を運び込むこと” に関しては、彼は同意しただろう。だが、クルティウスは、五ヶ国語で読み書きが出来たり¹¹⁴、外国滞在を繰り返したりすることを肯定的に考えていたのではないだろうか。

最後のペギー論でクルティウスは、ドレフュス事件との関わり、主宰した雑誌『半月手帖』、そして、彼の宗教的作品を論じている。彼は、ペギーは詩人としての才能よりも散文家としての才能があると判断する¹¹⁵。また、彼の形而上学的思惟に関しては、ベルクソンからの影響が強いが、精神と物質の対立を肯定する点でベルクソンとは異なると語る。

一方、ペギーのカトリシズムにおいて、クルティウスは、ローマとの強固な繋がりが特徴的であるとしている¹¹⁶。ペギーの作品で展開されているローマ・カトリック教会をめぐる文学に関して、クルティウスは以後探求するようになり、カトリックに改宗しないとしても、最終的には『ヨーロッパ文学とラテン中世』で丁寧に論じられることになる。

この処女作は、エッセイ風の文体で書かれているために、ドイツのアカデミズムには彼の方法論を強く批判する者が多く良い評価を得ることは出来なかった。その結果、批評家クルティウスはドイツの大学人の間で孤立せざるを得なかったのである¹¹⁷。

しかし、アカデミズムの外ではこの処女作は好意的に迎えられた。例えば、ヘルマン・バル Hermann Bahr、ヘルマン・ヘッセ Hermann Hesse、マリオ・プラーツ Mario Praz などの書評で好意的に評される¹¹⁸。また、トーマス・マン Thomas Mann やヴァルター・ベンヤミン Walter Benjamin もその日記において、この書物から受けた感銘について書いている¹¹⁹。作家達による評価は、クルティウスの作家でありたいという野心と関連することである。

こうした反応に加え、フランス語圏においてもこの本は知られることになる。これは、『新フランス評論』にドイツ文学に関する論考を寄稿していたアリーヌ・マイリッシュの尽力によるものである。この雑誌の 1920 年 10 月号に発表された文章を引用する。

En un résumé excellent, Curtius expose ensuite à quel point jusqu'ici a été fausse et incomplète

¹¹⁴ 多言語に渡る広範な読書が常に特殊な才能を持つ少数の人々にのみ可能であることを、クルティウスは『ヨーロッパ文学とラテン中世』の中で書いている (ELLMA, S. 506-507.)。

¹¹⁵ WB, S. 223-224.

¹¹⁶ Ebd., S. 231-234.

¹¹⁷ Richards, *Modernism, Medievalism and Humanism: a research bibliography on the reception of the works of Ernst Robert Curtius*, op. cit., p. 3, 17. この孤立は、ホフマンスタールが大学に残らなかったことや、ペガンが大学を辞職したことを (Calin, op.cit., p. 165.)、想起させる。孤立の根拠として、フリッツ・シャルク Fritz Schalk は、文集『友人達の贈り物 1956 年 4 月 14 日に 70 才になるクルティウスのために』*Freundesgabe. Für Ernst Robert Curtius zum 14. April 1956* (1956) に文章を寄せているのは、親しかった作家や詩人達ばかりで、同業者がいないという事実を挙げた (Ibid., p. 116.)。また、生松敬三は、『新しいフランス文学の文学開拓者達』に対してドイツ国内に冷たい批評もかなりあり、クルティウスがギルド的批評と思っていたことを記述している (生松敬三「E・R・クルティウス覚え書 (二)」(『中央大学文学部紀要』、(78・79)、1976 年、33 頁)。一方、カリンは、彼の批評活動がヴィクトール・クレンペラー Victor Klemperer、オイゲン・レルヒ Eugen Lerch、オスカー・シュルツ＝ゴラ Oscar Schultz-Gora といった同業者達から攻撃された要因として、現代文学について書いたこと、現代のフランスの作家達を真剣に扱ったこと、フランス文化に対する過度の親近感、非アカデミズム性、一般大衆を意識した書き方、優雅な文体を挙げる (Calin, op.cit., p. 33.)。

¹¹⁸ Richards, *Modernism, Medievalism and Humanism: a research bibliography on the reception of the works of Ernst Robert Curtius*, op.cit., pp. 21-26.

¹¹⁹ Ibid., pp. 146-156.

l'image que l'Allemagne intellectuelle se faisait de la France contemporaine¹²⁰.

次に、クルティウスは見事な要約によって、今日に至るまでどれほどドイツの知識人が現代フランスに関して、誤りのある不完全なイメージを持っていたのかを明らかにしている。

アリーヌ・マイリッシュは、1920年代の経済的側面での欧州統合に貢献したルクセンブルクの大製鉄会社アルベットの経営者エミール・マイリッシュの夫人である。彼女は、1920年代と1930年代に、ルクセンブルク市郊外の城館で、フランス、ドイツ、ベルギーの作家、知識人、芸術家を招いた文化的なサロンを営んだ。この城館でクルティウスは『新しいフランスの文学開拓者達』で論じたジッドと知り合い、約30年にも及ぶ友情を築く。

第2節 マールブルク時代の批評

マールブルク時代のクルティウスは、書物としては、1921年に『モーリス・バレスとフランスのナショナリズムの精神的根拠』*Maurice Barres und die geistigen Grundlagen des französischen Nationalismus*、1923年に『バルザック論』*Balzac*を出版し、同時に、フランスを中心とした同時代の文学を論じた批評を、『新メルクーア』、フィッシャー社の『ノイエ・ルントシャウ』、『ルクセンブルク新聞』、『フランクフルト新聞』などの媒体で発表した。

『モーリス・バレスとフランスのナショナリズムの精神的根拠』は、ロレーヌ出身で地方分権を主張した好戦的な作家バレスに関するモノグラフである。彼は、ブーランジェ事件、ドレフュス事件とのバレスの関わり合いを通してナショナリズムを批判すると共に、エル・グレコ論や旅行記にも触れながら、審美的側面や宗教的側面にも目を配っている。

クルティウスの主著におけるダンテ論は、よく知られている。『バルザック論』では、『神曲』*La Divina Commedia*と『人間喜劇』*La Comédie humaine*のつながりが触れられている。

La ‚Comédie Humaine‘, schreibt Balzac im September 1841 an Frau von Hanska, tel est le titre de mon histoire de la société peinte en action. [...] Die Beziehung auf Dante, den die Romantik neu erweckt hatte, lag Balzac ohnehin nahe. Schon in der *Physiologie du Mariage* spielt Balzac mit dem Titel des Danteschen Gedichts, wenn er von der *divine comédie du mariage* spricht. Anspielungen auf Dantes Einteilung des Universums, Vergleiche von Paris mit dem *Inferno*, Zitate aus dem *Paradiso* finden sich häufig in der *Menschlichen Komödie*¹²¹.

バルザックは1841年9月、ハンスカ夫人に宛てて、『人間喜劇』、これが、私が描いている途中の社会の物語の表題です。」と書いている。[...] ロマン主義が新たに甦らせたダンテとの関係は、いずれにせよバルザックの近くにあるものだった。既に『結婚の生理学』

¹²⁰ Aline Mayrisch-de Saint-Hubert, « Regards sur l'Allemagne. Articles publiés à la NRF (1919-1921) », in: *Galerie*, numéro 1, Luxembourg, 1988, p. 17.

¹²¹ *Balzac*, S. 336.

の中で“結婚の『神曲』”について語った時、彼はダンテの詩の表題を使って遊んでいたのである。ダンテが描いた宇宙の区分の仄めかし、『地獄篇』とパリと間で何度もなされる比較、いくつかの『天国篇』からの引用は、『人間喜劇』の中に頻繁に見つかるものだ。

このように、クルティウスは、バルザックのダンテ受容を意識しながら『バルザック論』を執筆したのである。彼は、主著で再びダンテとバルザックを近づけ、20年以上前に長めの本を書いたバルザックに対する強いこだわりを示すことになる¹²²。

このバルザック論は、同じ時期に書かれたプルースト論と同様に、専門家の間でも高く評価されている仕事である¹²³。カリンは『バルザック論』の意義をこう説明している。

Curtius, in his magnificent 543-page study, is the first modern academic to break away from the standard French view of Balzac as the founder of realism in the novel and the first in a line of French novelists of realism. Curtius envisages Balzac differently. His Balzac is a writer obsessed: with secrecy, the secrets of the universe, and secrecy and deception in society, and with magic, occultism, augury, second sight, magnetism, and alchemy, ever seeking a vision of the all, the quest for the absolute¹²⁴.

543 頁に及ぶ壮大な研究によって、クルティウスは、リアリズム小説の創始者でありフランスのリアリズム小説の先頭に立つものとしてのバルザックというフランスの標準的な見方を打ち破った最初の現代の学者である。彼はバルザックを別の方向から考察する。クルティウスの手によるバルザックは、秘密、宇宙の神秘、社会における秘密と詐欺、魔術、神秘学、占い、透視力、磁気学、錬金術といった強迫観念にとりつかれた、絶えず万物のヴィジョンを追い求める、つまり絶対の探求をする作家である。

この著作が登場するまでバルザックは、地方から出てきた青年がパリで直面する現実や社交界を出入りする人間達の欲望を荒々しい筆致で描くリアリズム小説の書き手として認知されていた。しかし、『セラフィタ』*Séraphita* (1834) や『絶対の探求』*La Recherche de l'absolu* (1834) といった作品が表象した神秘主義¹²⁵にも注目することを『バルザック論』は提起しているのだ。そして、この『バルザック論』の翌年に発表されたエマーソン論では、クルティウスは、バルザックの神秘主義的側面をエマーソンのそれと結び付けている¹²⁶。

『新メルクーア』の1922年2月号などで発表されたプルースト論では芸術創造の役割や特徴的な文体が分析された。この批評は、後の研究において土台となったものである¹²⁷。

¹²² ELLMA, S. 19.

¹²³ Calin, op.cit., p. 31.

¹²⁴ Ibid., p. 31.

¹²⁵ 『バルザック論』は、クルティウスの仕事とヴァールブルク学派の接点と言えるだろう。Vgl. Dieter Wuttke, *Kosmopolis der Wissenschaft: E.R. Curtius und das Warburg Institute*, Baden-Baden, Valentin Koerner, 1989.

¹²⁶ KEEL, S. 190-198.

¹²⁷ この批評はプルーストから読まれ、彼は感謝されている (Luzius Keller, « Ernst Robert Curtius », in: Annick Bouillaguet et Brian G. Rogers (éds.), *Dictionnaire Marcel Proust*, Paris, Honoré Champion, 2004, pp. 278-279.)。

このブルースト論では、批評家バンジャマン・クレミュー Benjamin Crémieux が『失われた時を求めて』 *À la recherche du temps perdu* に関して、主人公が幼年時代を過ごしたコンブレがこの長編小説の中心地であると言ったことを紹介した後に¹²⁸、コンブレの田園をブルーストがどのように描写したのかに関して分析されている。クルティウスはブルーストの植物描写を語る際に、植物描写をめぐる文学的伝統を以下のように記している。

Sie ist die Inspirationsquelle einer Literatur, die in den verschiedensten Mischungsverhältnissen Poetisches und Praktisches, Lob und Lehre, Lyrik und Gärtnerregeln verbindet; einer Literatur, die in Virgil ihren Ursprung zugleich und ihre höchste Vollendung hat, ...¹²⁹

フランスの肥えた土地は、様々に混じり合った状態において、詩的なものと実的なものを、賛美と教訓を、抒情詩と造園術を結び付ける文学の靈感の泉である。このような文学は、ウェルギリウスにおいて、その起源と同時にその最高度の完成を持っており、…。

彼は、ブルーストの自然描写から、ウェルギリウス Vergilius の楽園描写を想起している。主著ではウェルギリウスは頻繁に言及され¹³⁰、第 10 章「理想的風景」の第 3 節では『牧歌』 *Bucolica* の意義が語られることになる¹³¹。従って、この引用部分には、ブルーストという現代文学を論じた彼の批評と文献学が交わっていることを我々は確認することが出来る。

ところで、『失われた時を求めて』の中心主題の一つは、貴族階級とブルジョワ階級の相克である。この点に関して、クルティウスはこう書いている。

Ein besonderer Reiz, eine der vielen Doppelperspektiven von Prousts Roman beruht nun freilich gerade darin, daß dieses Milieu der großen Bourgeoisie sich mit dem des exklusivsten Hochadels schneidet; daß dem „côté de chez Swann“ ein „côté de chez Guermantes“ entspricht. Aber diese Kreuzung zweier Welten ist eben deswegen so anziehend, so pikant, so fruchtbar im Psychologischen, weil sie sich gegen jene scharfe Differenzierung der Klassen durchsetzt. Sie setzt sich durch kraft des Rechts der Intelligenz...¹³²

もちろん、ブルースト小説の格別の魅力である、多くの二重のパースペクティブの一つは、まさに、大ブルジョワジーの社会階層が、極めて排他的な高位の貴族階層と交わっている点や、『スワン家の方へ』に『ゲルマントの方』が呼応している点に基づいているものである。だが、あの厳しい階級間の差別に抗して、二つの世界の交差が貫徹されているからこそ、この交差は、あんなに魅力的であんなにぴりっとしていて、心理学的にもあんなに創造性豊かであるのだ。この二つの世界の交差は、知性の正義の力によって行われる…。

¹²⁸ FGE, S. 106.

¹²⁹ Ebd., S. 332.

¹³⁰ Cf. Andrée Thill, « L'image de Virgile chez Curtius », in: Bem et Guyaux (éds.), op. cit., pp. 47-56.

¹³¹ ELLMA, S. 197.

¹³² FGE, S. 98.

彼は、貴族階級とブルジョワ階級の交差する様子が描写される点が、『失われた時を求めて』の醍醐味であり、この交差の源が知性の力であると述べている。プルーストが最終巻『見出された時』*Le Temps retrouvé*の中で“精神の階級は、出身を考慮しない。”*« Les classes d'esprit n'ont pas égard à la naissance. »*¹³³と書いたように、この小説では知性や独創性のある者はブルジョワ階級であっても貴族社会でも受け入れられていることを、クルティウスは記述しているのだ。プルーストが長編小説で具体化した、“精神の階級は、出身を考慮しない。”という考え方に関して、クルティウスは『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第9章「英雄と支配者」„Helden und Herrscher“の後半部分で再び記述することになる¹³⁴。

雑誌『知と生』*Wissen und Leben*に発表された「現代フランス文学におけるヨーロッパ精神について」(1924)は、序論の第6節で触れたように、スタール夫人の“ヨーロッパ精神”と関連する。この批評は、近世のフランス文学は全ヨーロッパに対し規範的な役割を持っていたが、現代のフランス文学の作家には外国文学の受容に熱心なヨーロッパ人とも呼ぶべき作家が何人も出現していることを、つまり、ヨーロッパのフランス化からフランスのヨーロッパ化への推移を語っている。そうした作家の代表として、ロマン・ロラン、ラルボー、ジッドが挙げられ、『新フランス評論』の外国文学受容の熱心さが指摘され、外国人を主人公とする作品をロランやラルボーが書いたことの意義が論じられている¹³⁵。

『新フランス評論』の作家達を中心とした知的エリート達は、夏にブルゴーニュ地方のポンティニー修道院で、文学、哲学、宗教を、外国の知識人達と議論をする会合を行っていた。会合の主催者は、エコール・ノルマル時代にベルクソンやジャン・ジョレス Jean Jaurès の同級生であったデジャルダンである。クルティウスはこの集いに1922年と1924年に二回参加し、報告レポートを『新メルクーア』と『フランクフルト新聞』に寄稿した。

この二つの報告は、クルティウスのヨーロッパのアイデンティティへの関心を考察する際に重要なものである。1924年の報告レポート¹³⁶では、国際的な出会いの場としてのポンティニーを綴っている¹³⁷。彼と並列されることの多いアウエルバッハやシュピッツァーは、このような会合に出席することはなかった。しかし、クルティウスはこのポンティニーなどで批評の対象とした作家達と交流し、書簡の遣り取りをした。この知的共同体から彼がどのような刺激を受けたかについては、本論文の第3章第2節などで扱うことにする。

『新メルクーア』、『ノイエ・ルントシャウ』、『フランクフルト新聞』といった媒体では、主に同時代のフランスの作家達についての批評を発表していたのに対し、1922年秋から1925年秋まで執筆された『ルクセンブルク新聞』¹³⁸での批評では、同時代のドイツ語圏の

¹³³ Proust, *À la recherche du temps perdu*, Bibliothèque de la Pléiade, tome IV, Paris, Gallimard, 1989, p. 311.

¹³⁴ *ELLMA*, S. 188-189.

¹³⁵ *FGE*, S. 295-305.

¹³⁶ この記事を書いた頃、クルティウスは既にマールブルク大学からハイデルベルク時代に移っている。

¹³⁷ *FGE*, S. 341.

¹³⁸ この新聞は二ヶ国語の新聞であった。また、ルクセンブルクがドイツとフランスの中間に位置しているためか、クルティウスの文章では、ドイツ人やオーストリア人を論じる場合でも独仏の比較がしばしば挿入されている。特に、ブライ、パール、ホフマンスタールに関する文章において、その傾向が強い。

文学者達についての文章やイタリアをめぐる紀行文¹³⁹を書いた。この新聞で彼が批評の対象としたのは、マックス・シェーラーMax Scheler、フランツ・ブライ Franz Blei、トーマス・マン、リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギーRichard Coudenhove-Kalergi、グンドルフ、パール、ホフマンスタール、ヨーゼフ・ナードラーJosef Nadler、フリードリヒ・ヘルダーリン Friedrich Hölderlin、ヴィルヘルム二世 Wilhelm II.といった人々である。

この新聞の1923年12月15・16日号に掲載されたナードラー論で、クルティウスはドイツ文化を、以下のように歴史的に論じている。

Jene Lebenseinheit zwischen Südwestgermanen und Römertum war aber nicht nur eine räumliche und zeitliche, sondern auch eine geistige. Durch die Klosterschulen wurden alle Ausdrucksformen der römisch-griechischen Spätantike dem deutschen Mittelalter überliefert und einverleibt. In Hymnen, Sequenzen, Musik, Philologie, Mimus vollzog sich diese Kulturmitteilung. Diese Lebenseinheit wurde trotz des Anschwellens der höfischen und mystischen deutschen Literatur während des ganzen Mittelalters als lebendig empfunden¹⁴⁰.

だが、南西部のゲルマン人と古代ローマ文化の生の統一は、空間的な統一や時間的な統一だけでなく精神的な統一にも及んでいた。修道院学校を通じて、ローマ＝ギリシアの後期古代に見られた全ての表現形式はドイツ中世に伝わり組み入れられた。讃歌、続誦、音楽、文献学、演技において、この文化の伝播が起こった。この生の統一はドイツの宮廷文学や神秘主義文学が興隆しても、中世においてずっと生き生きとしたものと感じられていた。

彼は、ナードラーの『ベルリンのロマン主義』*Die Berliner Romantik* (1921) をルクセンブルクの読者に紹介している。ドイツ南西部が古代ローマ文化から大きな影響を受けていたという指摘への着目は、クルティウスの故郷がドイツ南西部であることと関わる¹⁴¹。また、ナードラーを通して、中世のドイツにおけるローマの讃歌、続誦、音楽、文献学、演技の受容をクルティウスが記しているのは、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第3章「文学と教育制度」„Literatur und Bildungswesen“と内容的に重なるものである。

この新聞のために、彼は1923年の夏、グンドルフの『ゲーテ』*Goethe* (1916) を論じた批評を執筆した。この批評の導入部分では、グンドルフの過去の仕事が紹介されている。

Sein Shakespeare in deutscher Sprache (1908 bis 1918) bedeutet für unsere Zeit dasselbe, was A. W. Schlegels Shakespeare für die Romantik und die Folgezeit gewesen ist. Shakespeare und der deutsche Geist ist dann das Thema von Gundorfs erster großer darstellerischer Leistung gewesen¹⁴²; 彼の『ドイツ語におけるシェイクスピア』(1908-1918)は、A・W・シュレーゲルのシェイ

¹³⁹ 紀行文では、彼が現代のイタリアよりも、近世までのイタリアに興味があることが告白されている。

¹⁴⁰ LZ, S. 83.

¹⁴¹ Cf. Jacquemard-de Gemeaux, Ernst Robert Curtius (1886-1956): *Origines et cheminements d'un esprit européen*, op. cit., pp. 188-191.

¹⁴² LZ, S. 48.

クスピアがロマン主義とそれに続く時代にそうであったのと同じように、我々の時代にとって重要である。その後に、『シェイクスピアとドイツ精神』は、グンドルフの最初の偉大なる著述家としての業績になった。

クルティウスは、グンドルフのシェイクスピア論が当時のドイツを代表するものだと言っている。主著でシェイクスピアはよく言及されており、第 17 章「ダンテ」„Dante“ では、ゲオルゲ・クライスから影響で、ダンテ、シェイクスピア、ゲーテがドイツにおいて古典文学と見做されるようになったと述べられることになる¹⁴³。従って、若い頃のクルティウスは、グンドルフからシェイクスピアとゲーテに関して多くを学んだと推測される。

この論考では『ゲーテ』がアカデミックなものではなく、創造的な批評であると述べられている¹⁴⁴。過去の人物を対象とする場合でも、冷たいアカデミズムに陥ることを避けたグンドルフの方法論は、クルティウスの仕事全体に影響を及ぼしたのかもしれない。

第 3 節 ハイデルベルク時代¹⁴⁵の批評

次に、ハイデルベルク大学で教えていた 1920 年代後半のクルティウスの批評について触れる。この頃の彼は、書物としては、『新しいヨーロッパにおけるフランス精神』(1925)、『ジェイムズ・ジョイスと彼のユリシーズ』*James Joyce und sein Ulysses* (1929) を世に問い、『フランス文化論』(1930) の準備をしていた。ジャーナリズムでは、『新メルクーア』、『ノイエ・ルントシャウ』、『リテラトゥーア』*Die Literatur*、『ヨーロッパ評論』*Europäische Revue*、『文学世界』*Die Literarische Welt*¹⁴⁶、彼の友人マックス・リヒナー Max Rychner が編集長を務める『新チューリヒ新聞』*Neue Züricher Zeitung*、『ラ・ルヴュ・ヌーヴェル』*La Revue Nouvelle*、『ノイエ・シュヴァイツァー・ルントシャウ』*Neue Schweizer Rundschau* などの媒体に寄稿した。1920 年代前半において彼の批評は圧倒的にフランス文学を論じたものが多かったが、ハイデルベルク時代では、スペイン文学や英文学も彼の批評対象になった。

『新しいヨーロッパにおけるフランス精神』(1925) は全八章からなり、前述のブルースト論、「現代フランス文学におけるヨーロッパ精神について」、ポンティニー論も含まれている。残りの五章は、ポール・ヴァレリー論、ヴァレリー・ラルボー論、ベルクソン論、「文明とゲルマン主義」„Zivilisation und Germanismus“、「文芸論戦」„Literarische Fehden“ である。

¹⁴³ ELLMA, S. 353.

¹⁴⁴ LZ, S. 48.

¹⁴⁵ この大学での同僚には、グンドルフ、社会学者アルフレート・ヴェーバー Alfred Weber、哲学者のカール・ヤスパース Karl Jaspers やハインリヒ・リッケルト Heinrich Rickert、考古学者ルートヴィヒ・クルティウス Ludwig Curtius、インド学者ハインリヒ・ツィンマー Heinrich Zimmer がいた (Evans, “Ernst Robert Curtius”, op. cit., pp. 94-95.)。ホフマンスタールの長女クリスティアーネ Christiane はクルティウスの学生であり、ツィンマーと結婚した。ホフマンスタールが 1928 年 2 月に、エミール・マイリッシュのハイデルベルク大名誉教授就任を祝うパーティーに出席したのは、彼の義理の息子がツィンマーであるからであろう。

¹⁴⁶ Cf. Claude Foucart, « Curtius et *Die Literarische Welt* », in: Bem et Guyaux (éds.), op. cit., pp. 217-229.

ヴァレリー論は、詩人ヴァレリーを主題としている。クルティウスは、彼の詩の哲学的側面や厳密さの追求を、彼が興味を持っていた建築のジャンルとの関連にも触れながら語る。この論考で指摘されたヴァレリーの韻律形式への強いこだわり¹⁴⁷は、主著の第 18 章エピローグの第 3 節「精神と形式」„Geist und Form“ においても言及されることになる¹⁴⁸。

ラルボーは「現代フランス文学におけるヨーロッパ精神について」において、ジッドらと共に“ヨーロッパ精神”の持ち主として語られていた。このラルボー論でも、彼は“フランス文学の代表的なヨーロッパ人”„der repräsentative Europäer der französischen Literatur“ と評されている¹⁴⁹。この論考では、まず、裕福な育ちやそれゆえの豊富な外国旅行体験が語られる。そして、彼の青春小説が分析され、卓越した女性描写が指摘される。クルティウスはウォルト・ホイットマン Walt Whitman、ジョイス、ジュール・ラフォールグ Jules Laforgue、17 世紀フランス文学、ウェルギリウスなどの彼の教養を語り、そのヨーロッパ主義を説明している。このラルボーの際立ったコスモポリタニズムは、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第 14 章「古典主義」„Klassik“ でも、再び触れられていることになる¹⁵⁰。また、クルティウスは戦間期においてラルボーとは友人関係を保ち、相互に影響し合った¹⁵¹。

批評「文明とゲルマニズム」は、最初に 1925 年初頭に『新メルクーア』に発表されたもので、1926 年の秋にはフランス語訳が雑誌『ルヴュ・ド・ジュネーヴ』*Revue de Genève*¹⁵²に掲載されている。この表題における文明はフランス人が自国の文化を国外に広めようとすることを指しており、ゲルマニズムはフランスにおけるドイツに対する脅威を指しており、この批評はフランスとドイツの関係を主題としている。フランス人とドイツ人がお互いの文化を理解し合うためには何が必要なのかを、クルティウスは論じている。

彼は、まず、ピエール・ラセール Pierre Lasserre やエドモン・ベルメイユ Edmond Vermeil といったゲルマニストの著作を通して、フランス人がドイツ文化を誤って理解していることを指摘する。ラセールがドイツ哲学をヨーロッパの知的共同体から切り離して論じ、ベルメイユがドイツ人の野蛮さを語るからである。こうしたフランス人の誤ったドイツ理解の原因が、フランス特有の自国中心な文明概念にあると彼は考えている。結論では、新たな世界大戦を防ぐためには、フランスとドイツの相互理解が不可欠としている。

批評「文芸論戦」は『新フランス評論』を擁護した文章であり、論争を挑むアンリ・マシス Henri Massis やアンリ・バルビュス Henri Barbusse をクルティウスは批判している。

『新しいヨーロッパにおけるフランス精神』は、同時代のフランスの作家には“ヨーロッパ精神”を有するヨーロッパ人がいることを語った書物であった。ハイデルベルク時代の批評の多くは“ヨーロッパ精神”との関わるものである。オルテガ論は本論文の第 5 章で詳述するので、ここでは彼のウナムーノ論に触れることにする。

¹⁴⁷ FGE, S. 155.

¹⁴⁸ ELLMA, S. 394.

¹⁴⁹ FGE, S. 215.

¹⁵⁰ ELLMA, S. 276.

¹⁵¹ Vgl. DFG, S. 341-376.

¹⁵² Cf. Charrier, op. cit.

20 世紀初頭のスペインは、危機を迎える。米西戦争後に植民地や国際的地位を失った後、近代化に遅れた後進性を改善しようとする知識人のグループがいた。彼らは 1898 年世代と呼ばれており¹⁵³、ミゲル・デ・ウナムーノ Miguel de Unamuno はその代表的存在であり学識ある人物である¹⁵⁴。クルティウスはスペインの再生を論じようとして、ウナムーノ論を発表した。この論考から外国文化受容に関する部分を引用する。

Der geistige Protektionismus führt zu Erstarrung und Tod. Sich dem Fremden öffnen, heißt dagegen die eigene Substanz befruchten. Stammesbewußtsein und Weltgefühl, Regionalismus und Europäismus sind keine Gegensätze, sondern zwei sich bedingende und gegenseitig verstärkende Lebensregungen eines kraftvollen Patriotismus¹⁵⁵.

精神の保護主義は硬直や死へと導く。これに対し、外国へと開くことは自分自身の実質に有効な刺激を与える。種族意識と世界感情、そして、地方主義とヨーロッパ主義は対立するものではない。力強い愛国主義の二つの前提となる相互に補い合う生の運動であるのだ。

“精神の保護主義”は、どこの国にも見られる。ドイツにおける“精神の保護主義”を強く実感していたから、彼は外国文学の紹介に努めたのであろう。引用部分で彼はスペインを近代化しようとするウナムーノの強い意志を説明している。地方主義とヨーロッパ主義のつながりに関する指摘は、独特なものである。クルティウスは次のように論を進める。

Die wahre Europäisierung Spaniens dürfe nur darin bestehen, daß Spanien seine Wesenssubstanz innerhalb der europäischen Gemeinschaft durchsetze. Es soll nicht nur empfangen, sondern auch geben. Es muß versuchen, Europa zu hispanisieren (*españolizar a Europa*)¹⁵⁶.

スペインの本当のヨーロッパ化は、スペインが自分の本質的実質をヨーロッパの共同体の内部で押し通すことでしか成立しないだろう。スペインは受け取るだけでなく、差し出すこともすべきである。この国はヨーロッパをスペイン化することを試みなくてはならない。

後期のウナムーノはスペインの“本質的実質”が神秘主義にあると考えた。そして、この神秘主義はクルティウスの主著で丁寧に扱われることになる。クルティウスが“ヨーロッパのスペイン化”に触れているのは、ウナムーノが、近代化だけでは不十分でスペイン人は自国に誇りを持つべきだと考えたからである。外国文化と自国文化の両立を主張するウナムーノの姿勢はドイツ人であるクルティウスにも影響を与えたと考えられる。

ハイデルベルク時代の批評には、他に、1925 年 11 月に『文学世界』に発表されたルイ・アラゴン Louis Aragon をめぐる批評、1927 年に『ノイエ・シュヴァイツァー・レントシャ

¹⁵³ Véase Luis S. Granjel, *Panorama de la generación del 98*, Madrid, Guadarrama, 1959; Colette y Jean-Claude Rebaté, *Miguel de Unamuno*, Madrid, Taurus, 2009, pp. 117-197.

¹⁵⁴ Pedro Laín Entralgo, *La generación del noventa y ocho*, Buenos Aires, Espasa-Calpe, 1948, pp. 105-124.

¹⁵⁵ KEEL, S. 206.

¹⁵⁶ Ebd.

ウ』にエリオットやジャン・コクトーJean Cocteau を論じたものが発表されている。

1927 年に、クルティウスは『荒地』(1922) をドイツ語に翻訳しエリオット論を発表した。これは、『荒地』を中心に論じたものであるが、エリオットの批評にも触れている。批評家エリオットに目を向け、クルティウスは批評とはどのようなものなのか持論を展開する。

Kritik bleibt ja immer ein Wagnis. Wertung ist unergründbar. Der Grund ist wohl da, aber nur als Intuition. Sie kann überspringen als Funke. Mittelbar ist sie nicht, nur vermittelbar. Das ist das Schöne an der Kritik¹⁵⁷.

そう、批評は常に冒険であり続ける。批評における評価は謎めいている。評価の根拠は確かにあるが、直観として存在するだけである。直観はひらめきとして飛び越えることが出来る。直観は間接的なものではなく、仲介が出来るだけである。批評の美はここにある。

彼は批評行為と直観の繋がりを指摘する。序論の第 3 節で触れたように、ウェレックはこの繋がりをディルタイやシュライアマハーからの影響と見ているが¹⁵⁸、ベルクソン哲学における直観と関わるものであると考えることも出来るだろう。批評における評価の根拠が直観としてしか存在しないのなら、批評はアカデミックなものにはならないはずである。

また、この論考で彼は、20 世紀の文学者には批評家を兼ねていることが多く¹⁵⁹、ブライやボルヒャルトの仕事のように批評には創造的なものもあることを言っている¹⁶⁰。批評家でもあったエリオットに彼はヨーロッパ文学の探求をする期待をしていたのだった¹⁶¹。

1929 年 1 月にボン大学に移ってからは、『ノイエ・シュヴァイツァー・ルントシャウ』の 1929 年 8 月号と『ノイエ・ルントシャウ』の同年 11 月号に、ホフマンスタールを追悼する文章を寄稿した。この二つの論考は、本論文の第 4 章で扱われることになるだろう。

1929 年に刊行されたジョイス論は、ドイツ語圏の読者に『ユリシーズ』*Ulysses* (1922) がどのようなものかを説明することを目的としている。まず、クルティウスは『ユリシーズ』に先行する『若き芸術家の肖像』*A Portrait of the Artist* (1916)、『ダブリン市民』*Dubliners* (1914)、『亡命者たち』*Exiles* (1918) の概要を述べ、アイルランドのカトリック文化やこれらの作品が、『ユリシーズ』の成立においていかに重要かを述べる¹⁶²。次に、彼はこの長編小説における地獄描写などのカトリック文化の要素を指摘している。

Es ist ein neues *Inferno* und eine neue *Comédie Humaine*. [...] Das Ganze ist kompositorisch auf die *Odyssee* bezogen, – aber läßt zugleich an Rabelais und an die Elisabethaner denken. Symbolismus

¹⁵⁷ Ebd., S. 316-317.

¹⁵⁸ Wellek, op. cit., p. 37.

¹⁵⁹ クルティウスは、ジッド、ブルースト、ラルボー、ジョイス、オルテガらの名を挙げている。

¹⁶⁰ KEEL, S. 317.

¹⁶¹ J. H. Copley, “The Politics of Friendship”, in: Elisabeth Däumer and Shyamal Bagchee (eds.), *The International Reception of T. S. Eliot*, London, Continuum, 2007, p. 243.

¹⁶² KEEL, S. 290-293.

und Scholastik nähern es dem Mittelalter an¹⁶³.

『ユリシーズ』は新たな『地獄篇』であり、新たな『人間喜劇』だ。[...] 全体は構成の点においては『オデュッセイア』と関係があるが同時にラブレーやエリザベス朝の作品を思わせるものになっている。シンボリズムとスコラ哲学が『ユリシーズ』を中世に近付ける。

クルティウスは、ジョイスが愛読していたダンテからの影響を『ユリシーズ』に見出そうとしている。彼が大学での授業でダンテを扱うようになるのは、1930 年以降である¹⁶⁴。つまり、ジョイス論を発表した直後なのである。この事実は、彼においてジョイス受容とダンテ受容が緊密に結び付いていた可能性を示す。また、『ユリシーズ』と中世の思想と関わりは、この論考の各所で触れられている。彼がこの論考以後の 1930 年代に中世研究に力を入れたことを考えると、ジョイスは、中世への関心を強める存在であったであろう。

また、内容的な面だけでなく、クルティウスはジョイス文学の形式的側面にも着目している。この長編小説における言葉遊び¹⁶⁵は、批評ではこう記されている。

Worte und Namen werden assoziativ verknüpft, entstellt, umgebogen, verstümmelt. *Bloom* wird verkürzt zu *Bloo*, zerdehnt zu *Blooboom* und *Boolooboom*. Durch Kontamination mit *who*, *whose*, *whom* ergibt sich die Deklination *Bloowho*, *Bloowhose*, *Bloohimwhom*. Über *greasy* und *sea* geht es zu *Greaseabloom* und *greaseaseabloom*. *Bloom* – *Blume* – *flower* führen zu *Blumenduft* und *Don Poldo de la Flora*¹⁶⁶.

言葉と名前は、連想で、組み合わせられ歪められ折り曲げられ切断される。ブルームは、ブルーに縮められたり、ブルーブームやブルーブームに伸ばされたりする。Who、whose、whom との混交によって、ブルーフー、ブルーフーズ、ブルーヒムフームが生じるのだ。ブルームにグリーシーとシーが合わさって、グリーシーブルームやグリーシーシーブルームになる。ブルーム、ブルーメ（花）、フラワー（花）は、ブルーメンドゥフトとドン・プラド・デ・ラ・フローラへと導く。

ジョイスは新たな言語表現を追求した。彼の言語表現は、主著の第 15 章「マニエリスム」„Manierismus“ のグラシアン論でも言及され¹⁶⁷、新たな形式を追及するモダニズム文学が、“黄金世紀” のスペイン文学の言語表現に近かったという認識が示されることになる。

¹⁶³ Ebd., S. 314.

¹⁶⁴ ボン大学でのダンテに関する授業は、1950 年まで続けられた (Santini, op. cit., p. 37.).

¹⁶⁵ サルヴァトーレ・パッパラルド Salvatore Pappalardo は、ジョイス文学における言葉遊びのルーツを彼のトリエステ滞在にあると考え、彼をハプスブルク帝国の作家と見做すことを提案している (Salvatore Pappalardo, *The United States of Europe*, New Brunswick, Umi Dissertation Publishing, 2012, pp. 199-285.).

¹⁶⁶ KEEL, S. 313-314.

¹⁶⁷ ELLMA, S. 304.

第4節 1930年代前半の批評

1930年代になってもクルティウスは、批評の執筆を続けた。だが、1934年以降はほとんど批評を書かなくなり、彼の執筆活動は学術雑誌への古典文学に関する論文の投稿が中心になる。これは、時局的に外国の新しい文学をドイツで論じることが難しくなったからである。第二次世界大戦後に、彼は同時代の文学を論じる批評活動を再開することになる。

ボン時代の彼は、『フランス文化論』(1930)、『危機に立つドイツ精神』(1932)、『ヨーロッパ文学とラテン中世』、全26頁の『ドイツの文芸批評』*Literarische Kritik in Deutschland* (1950)、『ヨーロッパ文学をめぐる批評エッセイ』(1950)を、退官後も、『20世紀におけるフランス精神』*Französischer Geist im zwanzigsten Jahrhundert* (1952)を刊行した。死後には、『読書日記』*Büchertagebuch* (1960)と『ロマンス語文献学論集』(1960)が出版された。

ジャーナリズムでは、『ノイエ・ルントシャウ』、『リテラトゥーア』、『ヨーロッパ評論』、『文学世界』、『ノイエ・シュヴァイツァー・ルントシャウ』、『新フランス評論』、『メルクアー』*Merkur*、『パリ評論』*Revue de Paris*、『西欧評論』*Revista de Occidente*、『ベルリン日報』*Berliner Tageblatt*、『イル・コンヴェーニョ』*Il Convegno*などにクルティウスは寄稿した。

『フランス文化論』は、ドイツ人にフランス文化を説明するために書かれた¹⁶⁸。これはフランス研究の締めくくりであり、以後、フランス文学論をほとんど書かなくなるという意味で転機となった仕事である。フランスの文化概念、自然、歴史、文学、宗教、教育、パリに関する簡潔な説明を我々は読むことが出来る。冒頭にはこう書かれている。

Wenn Deutsche und Franzosen sich bemühen, die psychologische Eigenart der anderen Nation zu verstehen, ergeben sich oft Mißverständnisse grundlegender Art, weil jeder der beiden Partner das – latente oder bewußte – Wertsystem seiner Nationalkultur als Maßstab an die Fremdkultur heranträgt¹⁶⁹.

ドイツ人とフランス人が相手の国の心理的特徴を理解しようと努める時、しばしば根本的な誤解が生じるのは、両国とも、無意識的にしろ意識的にしろ、自国文化の価値体系の基準を外国文化にも持ってこようとするからである。

この引用文から、“自国文化の体系”のヨーロッパにおける相対化を、クルティウスが取り組んでいることは明らかである。彼は『フランス文化論』で、あらゆる角度からドイツとフランスを比較する¹⁷⁰。例えば、フランスの人文主義に関しては、こう記述されている。

¹⁶⁸ この本は1930年代のうちに、フランス語、スウェーデン語、英語、トルコ語に翻訳された。

¹⁶⁹ FK, S. 1.

¹⁷⁰ この本における比較には、柔軟なフランスと厳格なドイツ、社交性のフランスと個人尊重のドイツ、保存重視のフランス文化と創造重視のドイツ文化、自給自足のフランスと外国熱の強いドイツ、中央集権のフランスと地方独立のドイツ、心理学のフランス文学と形而上学のドイツ文学、といったものがある。

Vergil gehört in Frankreich nicht weniger als in Italien zu den unabsetzbaren Mächten der Bildung. Der französische Humanismus geht von Paris über Rom nach Athen, während der unsere Rom meist überspringt¹⁷¹.

フランスにおいてイタリアと同じように、ウェルギリウスは、教養の絶対的な力の一部である。我々ドイツの人文主義が大抵ローマを飛び越えてアテネに向かうのに対し、フランスの人文主義は、パリからローマに、ローマを経由してアテネに行くのだ。

この一節は、フランスにおけるラテン文学の、そして、ドイツにおけるギリシア文学の尊重という彼の見方を示す。この本以降、クルティウスはフランス研究に消極的になる。だが、フランスがローマ寄りの国であるとするなら、主著で展開されている彼のローマ研究を、それまでのフランス研究と継続したものであると考えることも可能だろう。

『ノイエ・シュヴァイツァー・ルントシャウ』の1930年10月号で発表されたウェルギリウス論は、この詩人の生誕二千年を記念して執筆された。クルティウスは現代人が過去を失ったことを嘆く¹⁷²。彼は、ウェルギリウスを受容するためには意識改革が必要と言う。

Man muß, um das zu würdigen, mit allen modernen Maßstäben brechen und sich darauf einüben, mit langen Zeiträumen zu rechnen. Es ist für uns ein ungewohnter Weg. Sollte es nicht vielleicht deshalb heilsam und notwendig sein? Was zweitausend Jahre bestanden hat, wird auch weitere Jahrtausende bestehen. Das wenigstens können wir genau wissen – und sollten wir uns weigern, aus diesem Wissen heraus unsere Perspektive zu berichtigen?¹⁷³

ウェルギリウスの偉大さを正当に評価するためには、人はあらゆる近代の尺度との関係を断って、その後で長い時間を計算することを練習して身につけなければならない。それは、我々にとって慣れていない方法である。おそらく、そのために有益で必要不可欠ではないだろうか。二千年もの間生き残ったものはまた、これから先の数千年も生き残るであろう。少なくとも、我々はそのことを正に知ることができる。そうすれば、我々はこの自覚によって我々の遠近法を修正することを拒むべきだろうか。

クルティウスは、現代人がウェルギリウスの作品に親しむには、近現代だけに限定された精神ではなく、遙かな時代を見渡せる視野の広さが不可欠と言っている。彼の場合は現代文学に関する批評を書いている、古典文学を無視していたわけではない。しかし、主著で展開されている古い時代の文化への目配りは、この主張を自ら実践したものであることは明白である。また、この視野の広さと共に内容面でもこの論考と主著は関連性を持っている。というのは、この論考で指摘されているダンテのウェルギリウス受容やウェルギリウスとアウグストゥスの個人的な接触がより詳細に主著で分析されているからである。

¹⁷¹ FK, S. 86.

¹⁷² KEEL, S. 11.

¹⁷³ Ebd., S. 12.

1932年に雑誌 *Zeitschrift für französischen und englischen Unterricht* に発表された批評「フリードリヒ・シュレーゲルとフランス」 „Friedrich Schlegel und Frankreich“ は、シュレーゲルのフランス受容を主題とする。彼はシュレーゲルが雑誌『ヨーロッパ』 *Europa* で、フランス文化を紹介していたことに触れ、シュレーゲルにとってのヨーロッパをこう語る。

Das eigentliche Europa muß erst noch entstehen, schreibt Friedrich Schlegel. Wir sind heute noch nicht weiter gekommen¹⁷⁴.

「真のヨーロッパは、まだこれから現れなければならない。」とフリードリヒ・シュレーゲルは記している。我々は今日なお、それ以上先には辿り着いていない。

現代フランス文学の紹介を行っていたクルティウスは、シュレーゲルに自分を重ねている¹⁷⁵。シュレーゲルはフランス文化の紹介だけではヨーロッパにはならないと認識していた。“真のヨーロッパ”への探求は、これ以後のクルティウスにとっての課題となる。

『危機に立つドイツ精神』(1932) は、彼の本で初めてドイツを真正面から扱っている¹⁷⁶。この本は、現代のドイツにおける文化状況の悪化を主題とし、全五章から成っている。

第1章「教養の解体と文化憎悪」 „Bildungsabbau und Kulturhaß“ は、現代ドイツにおける教養について論じたものである。彼は近年の社会階層の変動が伝統的な教養理想を揺るがし、政治における支配層においても教養解体が進行していることを述べている¹⁷⁷。

第2章「国民か革命か」 „Nation oder Revolution?“ は、ドイツのナショナリズムに関するものである。彼は、ドイツの政治家がフランスやイタリアの政治家とは異なり精神文化を論じようとしないうことを指摘し、ドイツにも文化的ナショナリズムが必要と言う。また、現代のフランス文学がもう魅力的ではなくなったことを語り、古代ローマや中世やルネサンスの文化を再検討することを提案し、パリからローマへの方向転換を宣言する¹⁷⁸。

第3章「大学の危機」 „Krisis der Universität“ は、第1章で触れた教養解体が大学解体を招くことに対する危機感を語ったものである。この章で触れている12世紀ルネサンス以降のヨーロッパにおける大学の歴史¹⁷⁹は、主著でも論じられることになる。

第4章「社会学か革命か」 „Soziologie oder Revolution“ では、社会学者マンハイムの仕事が高齢になっていく。クルティウスは、マンハイムの理論が静的思考に対し動的志向を弁護している点が、1910年頃に流行した生の哲学に近いと考える¹⁸⁰。

第5章「イニシエーションとしての人文主義」 „Humanismus als Initiative“¹⁸¹ は、主著を予

¹⁷⁴ Ebd., S. 91.

¹⁷⁵ Cfr. Bosco, op. cit., p. 119.

¹⁷⁶ 国内にいたクルティウスは、隠遁したヘッセや亡命したトーマス・マンに批判的だった (Jacquemard-de Gemeaux, Ernst Robert Curtius (1886-1956): *Origines et cheminements d'un esprit européen*, op. cit., pp. 115-117.)。

¹⁷⁷ DGG, S. 15-18.

¹⁷⁸ Ebd., S. 48.

¹⁷⁹ Ebd., S. 62-65.

¹⁸⁰ Ebd., S. 92-93.

¹⁸¹ この章は、『ベルリン日報』で発表された1932年のうちに、スペイン語やフランス語にも翻訳された。

告するような内容となっている。彼は、現代において人文主義という言葉はアカデミックになってしまったが、15 世紀では光輝ある運動であったと語る¹⁸²。そして、中世から近代までの人文主義の歴史的変遷を素描する。彼は、人文主義と学校には距離があり、人文主義は必ずしも古典文献学などの学問とは完全に一致するものではないと考える。

Der volle Humanismus findet sein Bild im *Gastmahl* Platons, wo Wein und Schönheit, Eros und Flötenspiel, gedanklicher Tiefsinn und priesterliche Weihe in eins gebunden sind. [...] Humanismus ist nichts, wenn er nicht Enthusiasmus der Liebe ist. Er kann Zeiten, Völker, Menschen nur prägen, wenn er aus dem Überschwang der Fülle und Freude kommt. Er ist rauschhafte Entdeckung eines geliebten Urbildes¹⁸³.

完全な人文主義は、ワインと美、エロスと笛の演奏、抽象的な思索と聖職者の聖別式といったものが一つに結合するプラトン『饗宴』にそのイメージを見出す。[...] 人文主義は、もし愛の感激でないのなら無に等しい。人文主義は、満ち溢れる歓喜から生じる時にだけ、時代、民族、人間を刻印することが出来る。それは、愛する原像の陶酔した発見である。

クルティウスは、知識人が酒を飲みながら対話するプラトン Πλάτων の『饗宴』Συμπόσιον にこそ人文主義が存在すると考える。『饗宴』で描かれる愉快的情景は、ポンティニーの旬日会やコルパハのサロンに近いものである。また、この引用部分が含まれる第 5 章が「イニシエーションとしての人文主義」という表題であるのは、彼が宗教的な人文主義を提案しようとしているからである。彼が、人文主義と感性的な宗教的信仰を結び付けた実例として挙げるヒエロニムス Hieronymus やアウグスティヌス Augustinus が、『ヨーロッパ文学とラテン中世』で詳しく論じられるのは、こうした事情による。

『危機に立つドイツ精神』の刊行後、ナチスから攻撃を受け、クルティウスの著作は店頭から姿を消し、在庫品まで処分されてしまうことになる¹⁸⁴。1930 年代後半の彼は、批評活動を休止する。古代ローマを軸とし修辞学の伝統を論じた『ヨーロッパ文学とラテン中世』は、1930 年代後半から第二次世界大戦直後までの主たる研究成果である。

第 5 節 第二次世界大戦後における批評活動の再開

クルティウスは、戦後、ジャーナリズムでの批評活動を再開する。『メルクーア』に発表されたヘルマン・ヘッセ論 (1947 年)、ゲーテ論 (1948 年)、アーノルド・トインビー論 (1948 年)、オルテガ論 (1949 年)、T・S・エリオット論 (1949 年) や書き下ろしのゲオルゲ論やバルザック論などは『ヨーロッパ文学をめぐる批評的エッセイ』(1950) に収められた。ま

¹⁸² DGG, S. 103.

¹⁸³ Ebd., S. 106-107.

¹⁸⁴ 今井「E. R. クルティウスとフランス」、17 頁。

た、この本の第二版（1954 年）には、『ノイエ・ルントシャウ』で発表されたゲーテ論（1951 年）、シャルル・デュ・ボス論（1952 年）や 1951 年 10 月に BBC（英国放送協会）で放送されたボルヒャルト論や書き下ろしのホルヘ・ギーエン論¹⁸⁵も含まれている。

ヘッセは、『新しいフランスの文学開拓者達』を評価した。このヘッセ論は、ヘッセが、『新しいフランスの文学開拓者達』刊行後の 1922 年に友人の T・S・エリオットに対し、雑誌『クライテリオン』にクルティウスの文章を掲載することを提案したというエピソードから始まる¹⁸⁶。だが、ヘッセはクルティウスがその一員であった 1920 年代のヨーロッパの知識人達の知的共同体には所属しようとしなかったことが指摘される¹⁸⁷。

また、クルティウスはヘッセとヨーロッパの関係を、スイスとの関連でこう説明する。

„Wirkliche Heimatgefühle habe ich, außer für meine Vaterstadt im Schwarzwald, mein Leben lang eigentlich nur für die Gegend um Locarno gehabt.“ Es gibt glücklicherweise zwischen Schwarzwald und Locarno eine Schwarz – eine der freundlichen Gaben dauerhafter Art, mit der Geschichte unsern gequälten kleinen Erdteil bedacht hat. Ein Land und Volk, fest in sich ruhend; klein genug, um vor den Wirren der großen Anlieger geschützt zu sein; groß und mannigfaltig genug, um Europa in sich zu spiegeln¹⁸⁸.

「私は真の郷土感を、黒い森にある故郷の町を除くと、生涯においてロカルノ近辺の地域だけにしか持っていない。」幸いにも、黒い森とロカルノの間にはスイスがある。スイスは、歴史が苦難に満ちた我々の小さな大陸に贈った、恒久的な性質の好意的な贈り物である。スイスは、しっかりと自分自身の中で休んでいる国家であり民族である。そして、スイスは、周囲の大国の騒動から身を守るだけに十分小さく、ヨーロッパを自分の中に映すには十分に大きくしかも多様性を持っているのだ。

引用の冒頭はヘッセの『ニュルンベルク紀行』*Die Nürnberger Reise* (1927) からの文章である。ロカルノは、ヘッセが 1919 年以降、移り住んだスイスのティチーノ州の町である。クルティウスは、黒い森とロカルノを結ぶエリアがヘッセ作品の源流としている。

ベルンの近くに、クルティウスの母方の祖母は住んでいた。また、彼は『ノイエ・シュヴァイツァー・ルントシャウ』、『ルヴュ・ド・ジュネーヴ』、『新チューリヒ新聞』といったスイスのジャーナリズムに寄稿しており、主著などもベルンの出版社フランケから出ている。さらに、アルザスのヴォージュ山脈と似たような山岳や草原を有するスイスは、彼が苦悩の時期に休息を取る場所であった¹⁸⁹。これに加え、スイスの学者であるカール・グ

¹⁸⁵ Cf. Antonio Garcia Berrio, « Une clairvoyante vision européenne de Jorge Guillén », in: Compagnon (éd.), *La République des Lettres dans la Tourmente (1919-1939)*, Paris, Alain Baudry, 2011, pp. 23-29.

¹⁸⁶ KEEL, S. 153.

¹⁸⁷ Ebd.

¹⁸⁸ Ebd., S. 164.

¹⁸⁹ クルティウスがスイスに求めたのは、精神的かつ政治的な安定性と調和であった (Jacquemard-de Gemeaux, *Ernst Robert Curtius (1886-1956): origines et cheminements d'un esprit européen*, op. cit., p. 32, 38, 41.)。

スタフ・ユング Carl Gustav Jung の原型論は、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の方法論に影響を与えた¹⁹⁰。従って、彼とスイスとの関わりは深い。また、彼のヨーロッパ人としてのアイデンティティの形成においてスイスも意味を持っていた¹⁹¹。この点は、第4章第2節で触れるホフマンスタールの講演がなされた場所がスイスであったこととも関連する。

1951年2月に、クルティウスと長い間文通を続けたジッドが死ぬ。『新フランス評論』に寄稿した追悼文で、彼は、ウェルギリウス、ダンテ、シェイクスピア、ゲーテを熱心に受容し、戦争の際も敵国ドイツを尊重したジッドを偉大なヨーロッパ人であるとした¹⁹²。

ジッドが死んだ翌年にデュ・ボス論が発表されたのは、ジッドが既に死んだからかもしれない。この論考で、クルティウスは、同性愛をめぐって展開されたジッドとデュ・ボスの諍いに触れているからである¹⁹³。この論考においてクルティウスは、英国やイタリアやドイツの文化を積極的に吸収したデュ・ボスの幅広い教養について回顧的に論じている。

以上、『新しいフランスの文学開拓者達』から晩年まで、クルティウスの批評を概観した。我々は、アカデミズムでの孤立を招いたジャーナリズムでの執筆活動を通して、彼の空間的な“ヨーロッパ精神”の形成過程の大まかな流れを可視化することが可能になった。

ドイツ語圏における現代フランス文学の紹介者として出発したクルティウスは、英文学やスペイン文学も批評の対象とし、次第に古い時代の作品に関心に移していく。また、文芸批評を執筆するだけでなく、彼は作家達と個人的に交流しながら、“ヨーロッパ精神”を育てていった。フランスの作家達との交流は継続しつつも、彼が1930年前後に現代フランス文学の紹介を止めたのも見落とせないことである。

次章以降では、クルティウスにとって特権的な位置を占めており、“ヨーロッパ精神”を備えていた四人の同時代人であるロマン・ロラン、ジッド、ホフマンスタール、オルテガとのクルティウスの関係を検討していくことにする。

¹⁹⁰ クルティウスのユング受容については、Ibid., pp. 273-278.を参照。

¹⁹¹ Ibid., pp. 32, 38-44.

¹⁹² Curtius, « Amitié de Gide », in: *Hommage à André Gide, La Nouvelle Revue Française*, Paris, novembre 1951, pp. 13-15.

¹⁹³ KEEL, S. 239-241.

第2章 ロマン・ロラン論

第1節 ロマン・ロラン評価と先行研究

本章では、『新しいフランスの文学開拓者達』のロマン・ロラン論を中心に論じる。

1916年にノーベル文学賞を受賞したロマン・ロランの知名度については、説明するまでもない。だが、『新フランス評論』の編集長を務めたジャン・ポーラン Jean Paulhan は、ロランをルイ＝フェルディナン・セリーヌ Louis-Ferdinand Céline と比較して、こう語る。

« ... Obtenir de publier Céline qui est un grand auteur, et ne pas publier Rolland qui est certes un brave homme, mais un esprit fumeux et un médiocre écrivain. »¹⁹⁴

「…大作家であるからセリーヌの本は出版する。そして、ロマン・ロランの本は出版しない。確かにロランは実直な男だが、はっきりしない精神の持ち主であり、凡庸な作家だ。」

ポーランは、文学者の評価は倫理的・政治的考慮から離れてなされるべきであるという立場であった¹⁹⁵。こうした立場から、ロランは凡庸な作家であると判断されている。

ロランに関して、このように高い評価をしない文学研究者や文学愛好家は多くいることは事実である。なぜなら、手法上の前衛性を欠き、過度の分かりやすさを備えているためである。モダニズム文学・芸術の美学においては内容よりも形式が重視された¹⁹⁶。ロランの作品は人間的という意味で、20世紀的作品というより19世紀の写実主義に近い。

しかし、別の見方もある。彼と、トーマス・マンやヴァージニア・ウルフ Virginia Woolf の書いたモダニズム小説との類縁性を指摘する論考『『ジャン・クリストフ』の驚くべき現代性』« L'étonnante modernité de Jean-Christophe » から引用することにする。

Avec le flot comme métaphore de la vie et la musique comme expression suprême de l'activité artistique, il n'est guère difficile de rapprocher l'esthétique de *Jean-Christophe* de celle de *La Montagne magique* de Thomas Mann (1924) : pour embrasser la totalité du vivant, l'œuvre doit se fondre en un roman symphonique. Mais surtout, bien plus en profondeur, sa tentative pour explorer la vie intérieure de son personnage en suivant ses plus imperceptibles mouvements de conscience hisse le travail de Rolland au niveau d'une recherche telle qu'on la retrouvera, amplifiée, chez Virginia Woolf de *Mrs Dalloway* (1925) jusqu'aux *Vagues* (1931)¹⁹⁷.

生のメタファーとしての波と芸術的営みの至高の表現としての音楽があるから、『ジャン・

¹⁹⁴ Michel Winock, *Le siècle des intellectuels*, Paris, Éditions du Seuil, 1997; repr. 1999, p. 589.

¹⁹⁵ Ibid., p. 588.

¹⁹⁶ オルテガの『芸術の非人間化』*Deshumanización del arte* (1925)によると、19世紀の芸術作品は人間的で理解し易かったが、20世紀の芸術は新しい形式を追求するようになり、難解なものになったのである (Ortega, *Obras Completas*, t. 3, Madrid, Revista de Occidente, 1957, pp. 353-386.)。

¹⁹⁷ Dethurens, « L'étonnante modernité de Jean-Christophe », *Europe*, n° 942, Paris, 2007, p. 18.

クリストフ』の美学と『魔の山』(1924年)の美学を近付けることはそれほど困難なことではない。生身の人間の全体を把握するためには、作品は交響曲のような小説にまとまらなければならない。とはいえ、特に、何にもまして根本的なのは、知覚することがとても困難な意識の動きを辿って、登場人物の内的生活を探求する彼の試みは、ロマン・ロランの仕事をヴァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』(1925年)から『波』(1931年)に至るまでの作品で敷衍され、人々が再び出会うような探求のレベルに引き上げている。

『ジャン・クリストフ』の交響曲のような構成は『魔の山』*Der Zauberberg*と比べられるだろうし、ロランによる内的生活の探求はウルフの試みに近いかもしれない。一見すると前衛性を欠いている彼の作品を、このようにモダニズム文学に引きつける解釈はある。

これまでの研究においては、クルティウスにおけるロランの意味は十分に検討されていない。なぜだろうか。ウェレックは、『新しいフランスの文学開拓者達』において批評の対象となった五人のフランスの作家について、以下のように論評している。

Their choice was at that time a critical act, not only in Germany. Gide, Claudel, and Péguy were the leading writers of the new France. One may have one's doubts about Romain Rolland and André Suarès. But one can understand Curtius's enthusiasm for Roland: he saw *Jean Christophe* as a revelation for its sympathy with Germany and German music and its feeling for a culture of the emotions. Curtius sees Rolland as the incarnation of a "moral solidarity between Germany and France", but he is by no means unaware of the objections against Rolland's *romain-fleuve*, its lack of form, the crowding of details, and the didacticism. The admiration for Suarès seems less explicable¹⁹⁸.

この五人を選んだのは、当時、危険を伴うような批評的行為だった。これはドイツ以外でもそうである。ジッド、クローデル、ペギーは当時の新しいフランスにおいて、指導的な役割を担った作家達だった。だが、クルティウスがロマン・ロランやスュアレスを取り上げたことに疑問を持つ人もいるかもしれない。しかし、彼のロランに対する熱狂の理由を、人は理解出来るだろう、なぜならクルティウスは、『ジャン・クリストフ』を、ドイツやドイツ音楽に対する共感の暴露、そして、感情的な文化に対する愛情と見ているからである。また、彼は、ロランを“ドイツとフランスの間の倫理的連帯”の化身と考えている。ところが、彼は、形式的なもの物足りなさ、詰め込みすぎの細部、その教訓主義といったロランの“大河小説”に対する反対の理由を気がついていないというわけでは決していないのだ。クルティウスのスュアレスに対する称賛は、あまり説明可能なこととは思えない。

ウェレックは『新しいフランスの文学開拓者達』が意義深い仕事と見做している。同時に、彼は、クルティウスほどの人がロランやスュアレスを評価しすぎたと考える。ウェレック

¹⁹⁸ Wellek, op. cit., p. 31.

にはヨーロッパ主義への興味はなかったのだろうか。彼は、形式的なもの物足りなさ、詰め込みすぎの細部、教訓主義をロランの欠点とする。ただ、この長編小説におけるドイツ音楽や独仏の団結の描写があるために、クルティウスはロランに共感したと彼は推測する。

ウェレックによるロマン・ロラン論へのネガティブな判断は、後の研究にも影響を与えたのかもしれない。クルティウスの批評活動を扱っているミュラーの研究書でも、ロランは、名前を挙げられる程度の扱いである。独仏関係を中心主題としたこの本が、独仏の対話を描く『ジャン・クリストフ』を書いたロランを軽視しているのは奇妙である。

本章では、まず、ロマンの『ジャン・クリストフ』の空間的なヨーロッパ性を説明する。次に、クルティウスのロマン・ロラン論を検討する。さらに、このロラン論で重視された国境を流れるライン河について触れたい。最後に、『ジャン・クリストフ』以後のクルティウスとロマン・ロランの関係を考えることにしたい。

第2節 ヨーロッパを描くロマン・ロラン

デュシャトウレは1912年の、ローマのヴィラ・ドーリアでのロマン・ロランとクルティウスの出会いについて、以下のように結論付けている。

Un jeune homme timide l'aborde ; Allemand de Strasbourg, jeune docteur ès lettres, il se prépare à professer dans une université : Ernst Robert Curtius. [...] Cette rencontre renforce Rolland dans son idée de roman européen, qui vise à rapprocher les nations divisées¹⁹⁹.

ストラスブールから来ている遠慮がちな若いドイツ人が、話しかけてきた。それは文学博士であり、大学教員になる準備をしていたエルンスト・ロベルト・クルティウスだった。[...] このクルティウスとの出会いが、分裂した民族の親善を目指すロランのヨーロッパ小説の着想を補強することになるのだ。

このように作家と出会った後に書かれた批評がクルティウスの場合が多い。『ジャン・クリストフ』が完成する直前に二人は、知り合ったのである。ロラン論が含まれる『新しいフランスの文学開拓者達』の元になるボン大学での講義はこの出会いから2年後の1914年であり、出版はその5年後である。デュシャトウレは、この出会いの時点でクルティウスの側にヨーロッパのヴィジョンがあり、ロランに影響を与えたと考えている。

デュシャトウレが書いているように、『ジャン・クリストフ』はヨーロッパ小説 *roman européen*²⁰⁰である²⁰¹。本節では、クルティウスが共鳴した²⁰²『ジャン・クリストフ』のヨー

¹⁹⁹ Duchatelet, *Romain Rolland tel qu'en lui-même*, Paris, Albin Michel, 2002, p. 152.

²⁰⁰ Vgl. Stefan Zweig, *Die Welt von Gestern*, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1942; repr. 1970, S. 233.

²⁰¹ Cf. Duchatelet, « Jean-Christophe, cathédrale de l'art européen », *Europe*, n° 942, Paris, 2007, pp. 56-65.

²⁰² *LZ*, S. 33-34.

ロッパ性を具体的に示すことにする。ただ、次節で触れるクルティウスの『ジャン・クリストフ』論でもこの作品は詳しく触れられるので、この節では簡略な記述に止めたい。

この主人公はライン河畔の地方都市に生まれる。少年クリストフが第一級の音楽家になることを夢見て音楽の修業を続ける描写により、この作品は始まる。また、ピアノを親友とする孤独な少年のユートピアとして、ライン河の描写が繰り返される。そして、『ニーベルングの指輪』*Der Ring des Nibelungen* を聴いたクリストフは、ワーグナーに陶醉しドイツ民族特有の純粋さを自覚する。その後、彼は、ユダヤ人の銀行家を父に持つマンハイムの友人の影響でパリの文化への羨望を抱き始め、田舎者としての自意識に苦しむ²⁰³。

青年期を過ごしたこの地方都市で起こる見落とせない出来事に、旅回りの南仏の女優コリンヌとの出会いがある²⁰⁴。コリンヌとの交歓はドイツで展開される場面に挿入されており、若いクリストフにはドイツ的な生真面目さがあるだけに、明朗な南フランスの要素が引き立っている。つまり、プロテスタントの文化とカトリックの文化の対話が表象されているのだ。さらに、旅回りの女優の移動性も、主人公クリストフがパリに留まることなく、スイスやイタリアに移っていくことと対応しているように思われる。

地方の凡庸さに耐えられなくなったクリストフはベルリンを訪問し、自作の楽譜を認めてくれた老人シュルツと面会しゲーテの開かれた精神を教わることになる。

Il avait une prédilection pour ceux de son pays, surtout pour Goethe; mais il aimait aussi ceux des autres pays. Il était instruit et lisait plusieurs langues. Il était, d'esprit, un contemporain de Herder et des grands *Weltbürger* — des « citoyens du monde », de la fin du dix-huitième siècle²⁰⁵.

シュルツは自分の国の詩人達を偏愛していた、特にゲーテを。だが、外国の詩人も好きだった。彼は教養人であり数カ国語が読めた。精神の上では、18世紀末のヘルダーや偉大なる“世界市民”と同時代人なのだった。

この引用部分が、ゲーテが到達した世界文学の理念²⁰⁶と関わることは言うまでもない。彼の外国文学への大変な開かれ方に関しては第4章や第6章で再び触れることになるだろう。

『ジャン・クリストフ』において多くの頁が割かれている舞台はパリであり、パリ時代のクリストフを通して独仏の対話をロランは描く。クリストフは疎外感を味わいながら、成功した同郷人コーンを見つけ故郷を流れるライン河を懐かしんだりする²⁰⁷。19世紀前半以降、ライン河はドイツ人から“父なるライン”と呼ばれ、ドイツのナショナリズムに利用されてきた。クリストフのライン河へのノスタルジーは、ドイツ人としての彼の愛国心

²⁰³ Rolland, *Jean-Christophe*, Paris, Albin Michel, 1931; repri. 2007, p. 439.

²⁰⁴ Ibid., p. 462.

²⁰⁵ Ibid., p. 528.

²⁰⁶ ゲーテの世界文学という理念に関しては、ダムロッシュの前掲書と Jérôme David, *Spectres de Goethe. Les métamorphoses de la « littérature mondiale »*, Paris, Les Prairies ordinaires, 2011. を参照。

²⁰⁷ Rolland, op.cit., p. 624.

を示す。パリのセーヌ河を見ると、たちまち、ライン河への愛情が蘇るのである²⁰⁸。セーヌ河とライン河の比較によって、ロマン・ロランは、独仏の文化を比較している。

フランス語を使えるようになったクリストフは、パリの文化人達の集まりに顔を出すようになる。ロランは、文化人達のフランス中華思想的な面を描く²⁰⁹。彼は、文化人達が同時代のドイツ語圏の優れた文化に対して知識欲を持っていないことへのドイツ人のクリストフの苛立ちを書いているのである。また、ロランは、文化人達の外国人に対する無関心について、どんな外国語も身につけていないことに触れている²¹⁰。フランス人の外国文化への無関心や外国語能力は、ゲーテ的精神を持つ老人シュルツとは対照的である。

『ジャン・クリストフ』のパリの場面で展開される、クリストフとその親友オリヴィエの対話は、ドイツとフランスの対話の典型例となっている。

パリから逃亡しスイスで生活を始めるクリストフ²¹¹は、ロシア人の無秩序な友愛の美しさに接するとともに、スイスの小市民の窮屈さを含んだ勤勉性にも気付く。

その後、ローマで暮らすようになったクリストフは、地中海の明るい光を浴びながら、イタリア・ルネサンス文化を知る。このように、『ジャン・クリストフ』では独仏の対話だけでなく、文化的中心としてのローマや初期近代のイタリアも描かれている。このことは、『ヨーロッパ文学とラテン中世』における歴史的な広がりを持ったヨーロッパに対し、ロランが影響を与えた部分がある可能性があることを示すものである。

以上、『ジャン・クリストフ』におけるヨーロッパ性を説明した。次節では、クルティウスのロマン・ロラン論がどのようなものであるか確認していくことにする。

第3節 『新しいフランスの文学開拓者達』におけるロマン・ロラン論

『新しいフランスの文学開拓者達』におけるロマン・ロラン論は、ジッドとの比較により始まる。ジッドが少数者のための作家であるのに対し、大衆的なロランには、ジッドには欠けている、大変な光と影のコントラストにおいて見られた揺るぎない世界、道徳的意志の激情的動揺、信仰の力があると言うのである²¹²。だからこそ、彼はこうしたロランの性格がフランス的でないと考える。彼は、ドイツのロマニストのオットー・グラウトフ Otto Grautoff がロマン・ロランについて語った言葉を引用している。

Wir glauben nicht, dass Gesundheit, Kraft, seelisches Gleichgewicht, klare helle Schönheit auch auf der andern Seite des Rheines zu Hause sein können und immer lauter fragen wir, wer ist dieser

²⁰⁸ Ibid., p. 773.

²⁰⁹ Ibid., pp. 637-638.

²¹⁰ Ibid., p. 690.

²¹¹ 自国の愛国主義から距離を置くロランは、スイスによく滞在した。Cf. Anne-Marie Saint-Gille, *Les idées politiques d'Annette Kolb (1870-1967). La France, l'Allemagne et l'Europe*, Berne, Peter Lang, 1993, pp. 103-108.

²¹² WB, S. 79.

fremde Dichter?²¹³

我々ドイツ人には、健康、力、精神的なバランス、澄み切った明るい美といったものが、ライン河のもう一つの側で存在することが出来るのが信じられないであり、大きな声でこの外国の作家は誰だろうか、と我々は問うのである。

このグラウトフの言葉に、“ライン河のもう一つの側で” „auf der andern Seite des Rheines“ というライン河に関連する表現が含まれている。このことに目を留めておきたい。

続いて、クルティウスは、ポール・セペル Paul Seippel の『ロマン・ロラン 人と作品』 *Romain Rolland, l'homme et l'œuvre* (1913) に依拠しながら、ロランの生い立ちを綴っている。ロランに関する情報をドイツ語圏の読者に提供しているのだ。この記述では、クルティウスが教授資格論文で扱ったブリュヌティエールがロランのエコール・ノルマル時代の師の一人であったことが書かれている²¹⁴。クルティウスはロランが青年時代に歴史研究を行ったことを語り、二年間の彼のローマ遊学について以下のように論じている。

1889 kam Rolland nach Rom an die *École française*. Rom wurde seine große Liebe und ist es geblieben. In einem Brief vom 14. April 1912 schreibt er aus Rom: „Diese Stadt hat auf mich eine entscheidende Wirkung gehabt. [...] Der Geist und das Licht Roms sind nicht ohne Beziehung zum Entwurf und der Ausführung des *Jean-Christophe*. [...]“²¹⁵

1889年にロランは、ローマのエコール・フランセーズにやって来た。ローマは、彼にとって、大いなる愛情の対象になった。このことは、現在も持続していることだ。1912年4月14日の手紙の中で彼は書いている、「この町は私に決定的な作用を及ぼした。[...]」ローマの精神と光は、『ジャン・クリストフ』の設計や遂行とは無関係ではない。[...]」。

彼はロランのローマ体験に目を向けている。この部分の直後では、ロランが西洋を展望する場所としてのローマから諸民族の和解を説いていることを紹介する。また、この一節は、クルティウス自身のローマに対する好感も示す。ジャックマール＝ド・ジュモーの言うように²¹⁶、彼のローマへの愛着²¹⁷は若い頃から老年期まで持続していたものであった。

『ジャン・クリストフ』を発表する前段階のロマン・ロランに関しては、戯曲や芸術家の伝記の書き手であった頃を、幅広く文化的教養を身につけ、そして、理想と教養との詩的な総合を念頭に浮かべている一人の若い音楽家と綴る²¹⁸。

続いて、彼は、ロランの戯曲『狼群』 *Les Loups* (1898) がドイツ語に翻訳され、1914年の

²¹³ Ebd., S. 79-80.

²¹⁴ Ebd., S. 81.

²¹⁵ Ebd., S. 82.

²¹⁶ Jacquemard-de Gemeaux, *Ernst Robert Curtius (1886-1956): origines et cheminements d'un esprit européen*, op. cit., p. 375.)

²¹⁷ マンチーニは、クルティウスの人文主義はギリシアを中心とするものではなく、キリスト教的ローマであることを指摘している (Mancini, “Il giardino dei topoi”, in: Paccagnella e Gregori (a cura di), p. 13.).

²¹⁸ WB, S. 84.

ミュンヘンの上演で大成功を収め、1916年にはウィーンの劇場でも演じられたことを書いている。ロランの幅広い教養やその国際的評価により、ヨーロッパ人であることを示そうとしているのである。劇作家としてのロランについては、クルティウスは、ロランが民衆のための芸術を志向していたことや、世紀転換期に書かれた、フランス革命や信仰を主題としたロランの戯曲の背景にはドレフュス事件があったことを述べている²¹⁹。

ロランが書いた芸術家の伝記群に関しては、まず、民衆性において戯曲との連続性があることが説明される。次に、クルティウスは、1903年にペギーの雑誌『半月手帖』に掲載されたロランの『ベートーヴェンの生涯』*Vie de Beethoven*に関して、ペギーがこの雑誌の文学的成功の発端であったと考えていることを紹介する。続いて、このベートーヴェン伝の序文を引用しながら、この伝記で繰り返し描かれるベートーヴェン *Beethoven* の孤独な苦しい闘争が、ロランの倫理的そして芸術的信条であることを指摘している²²⁰。

クルティウスは、1907年に出版された『ミケランジェロの生涯』*Vie de Michel-Ange* や1911年に出た『トルストイの生涯』*La Vie de Tolstoï* に関して、これらの本から引用しつつ、前者に関してはミケランジェロ *Michelangelo* の苦悩をキリスト教的信仰心との関わりで説明している。後者に関しては、ロランのトルストイ *Толстой* への感謝や愛情に触れている。

最後に、クルティウスは、これらの芸術家の伝記群が、『ジャン・クリストフ』を導く位置にあると書いている²²¹。この長編小説が雑誌『半月手帖』連載されたのは、これらの伝記群の発表時期と重なる1904年から1912年であるためである。

次に、クルティウスによる『ジャン・クリストフ』の要約の冒頭部分を引用する。

Jean-Christophe, der in zehn Bänden von 1904 bis 1912 erschien, ist ein Bildungsroman, der sich zum Zeitroman und zur Kulturkritik erweitert. Ein von allen geistigen Kräften des europäischen Festlands genährter Franzose hat hier seinen Lebensglauben und seine Humanitätsanschauung in das Epos eines deutschen Musikerlebens gelegt. Johann-Christoph Krafft's Heimat ist eine kleine Stadt am Mittellauf des Rheins, in die der Großvater als junger Mensch eingewandert ist²²².

1904年から1912年にかけて10巻本として登場した、『ジャン・クリストフ』は時代小説や文化批評へと拡張された教養小説である。ヨーロッパ大陸の全ての精神的な力を栄養にした、一人のフランス人が彼の信念や人間観を一人のドイツ人音楽家の生の叙事詩の中に表現しているのだ。ジャン＝クリストフ・クラフトの故郷は、ライン河中流に位置する小さな町であり、彼の祖父はこの町に若い頃に移住したのだった。

『ジャン・クリストフ』が教養小説であることは、この作品のドイツ性を示す。また、時代小説の側面があるとクルティウスが指摘するのは、普仏戦争、パリ・コミューン、国家

²¹⁹ Ebd., S. 85-87.

²²⁰ Ebd., S. 87-89.

²²¹ Ebd., S. 91.

²²² Ebd., S. 91-92.

独占資本主義の進行、ナショナリズムの興隆を、この作品が描いているからである。引用文中にある“ヨーロッパ大陸の全ての精神的な力”というのは、作品中で随所に挿入されるギリシア・ローマの古典文学作品やイタリア・英国・ドイツ・フランスの文学作品からの原文での引用などによって示されているものであろう。引用末尾にクリストフの故郷がライン河中流であるとはっきり書いてあるのは、見落とせないことである。

彼は、引用部分以降、作品のあらすじを紹介している。クルティウスは少年時代のクリストフの不幸な生活を語る。作品の舞台がパリに移ると、この大都会に住む人々へのクリストフの批判に触れている。しかし、同時に、彼はパリの多面性を指摘する。

Nur ist das Paris, das er schildert, nicht das ganze Paris. Neben dem durch Geld, Sensationsgier und Lüge demoralisierten Paris gibt es ein stilles, ernstes, schaffendes, idealisches Paris. Und davon ahnt Christophs nichts. [...] Und in dem jungen Dichter Olivier Jeannin lernt Christoph einen Vertreter der geistigen Elite Frankreichs kennen²²³.

ただし、この巻が描いているパリは、パリ全体ではない。富、センセーショナルなことに對する異常な熱望、まやかしといったものにより墮落してしまったパリ以外にも、静かで真剣で創造的で理想主義のパリというものが存在するのである。そして、後者のパリについては、クリストフは気付いていないのだ。[...] そして、若い作家のオリヴィエ・ジャンンの中に、フランスの精神的エリートを代表する人物を知るようになるのだ。

クルティウスは学生時代に中世フランス文学の研究のために、パリに滞在したことがあり、パリの知的エリートの精神生活を知っていた。また、『新フランス評論』の作家達はこうした精神的エリート達であった。彼は、クリストフは生活力と創造性に溢れた闘士の性質であり、オリヴィエは繊細な沈思の人であるという二人の対称性を示すと共に、オリヴィエがクリストフに真のフランスとはどのようなものかを教えたことを指摘している²²⁴。

『ジャン・クリストフ』は、物語の舞台が移動する。パリから離れスイスに生活の場を移し、その後ローマに移動するクリストフを、クルティウスは以下のように語っている。

Christoph flieht über die Grenze. Halb wahnsinnig vor Schmerz über Oliviers Tod kommt er in eine schweizerische Stadt, in der Basel leicht zu erkennen ist, und findet Aufnahme im Hause eines Jugendfreundes. [...] Rom wird für Christoph die letzte Erziehung. Er lernt hier die klassische lateinische Schönheit, die Schönheit der klaren leuchtenden Formen, verstehen²²⁵.

クリストフは国境を越えて、逃げる。オリヴィエの死を悲しみ、気が狂うばかりの彼は、バーゼルであると容易に認識出来るスイスの町にやって来て、若い頃の友人の家に受け入れてもらう。[...] ローマは、クリストフにとって最後の教育となる。彼はここで、古典的

²²³ Ebd., S. 95.

²²⁴ Ebd., S. 95-96.

²²⁵ Ebd., S. 97.

でラテン的な美を、明晰で輝いている形式の美を理解するに到る。

引用部分の冒頭で彼は、クリストフのフランスからの逃亡に触れている。このようにヨーロッパ各地を移動する主人公は、EUが進める人の移動の自由²²⁶を先取りしているようなところがある。小説の主人公が国の異なる多くの町を移動していく作品は、それまでの文学の歴史においては、あまり見当たらないものだ。引用部分後半は、ロマン・ロランやクルティウスが、ローマの古典性やラテン性の良さを理解していることを示している。

筋の紹介を終え、クルティウスは、この作品におけるライン河の存在の大きさを力説している。ライン河は、地中海と北海を結ぶ大航路であり、文化交流に一役買ってきた大河である。ライン河の意義を、通奏低音のような永遠の流動として、彼は解説する。

Symbolisch für die Einheitlichkeit des Werkes ist die Rolle, die der Rhein darin spielt. Der erste Schrei des Kindes wird begleitet von dem Rauschen des Stromes, und in seiner letzten Fieberphantasie sieht der Sterbende die Schauplätze seiner Kindheit wieder. Er hört das dumpfe Brausen des Rheins, er beugt sich über die Flut, und sein Leben fließt mit den Wellen an ihm vorüber, dem Ozean zu. Der Rhein hat noch eine tiefere Bedeutung im Jean-Christophe: in ihm ist der Urantrieb und der tiefste Gehalt des ganzen Werkes versinnbildlicht: die Empfindung des Lebens als eines ewigen Fließens²²⁷.

この作品の纏まりを象徴するものとして、ライン河の担っている役割がある。子供の最初の叫び声は、大河のざわめきの音を伴奏としているのだ。そして、死のうとする人間は熱に浮かされ、人生最後の幻影のなかに再び少年時代の情景を垣間見るのだが、彼はラインのおぼろげな轟きを耳にして水の流れに身を屈める。そして、彼の生は波と一緒に彼のそばを通り過ぎて大洋へと流れていく。ラインは『ジャン・クリストフ』においては、更に奥深い意義を持っている。ラインの中に、作品全体の原動力や中身の濃い内容が象徴化されている。すなわち、永遠の流動として生を感じさせることである。

クリストフの故郷がライン河であることが分かる文章である。このように、クルティウスは、クリストフとライン河の親密な関係や“父なるライン”の中に存在する力強さや永遠の流動としての生を指摘する。だが、国境を流れる存在としてのライン河に関しては何も書いていない。それでも、彼はライン河に“作品全体の原動力”や“象徴化”を見出している。ライン河とクルティウスの関係については、次節で再び取り上げることにする。

続いて、彼は旧約聖書『ヨブ記』אֵיבֹהּ סֵפֶר を引き合いに出しながら、『ジャン・クリスト

²²⁶ 多言語の運用よりも、移動の自由の方が、ヨーロッパ人としてのアイデンティティを持つことに作用しているという調査結果がある（高橋秀彰「欧州の統一と多言語主義 拡大と多様化の中で」、杉谷眞佐子・高田博行・浜崎桂子・森貴史編『ドイツ語が織りなす社会と文化』、関西大学出版部、2005年、41頁）。

²²⁷ WB, S. 98-99.

フ』で描かれた苦痛や闘争の激しさを指摘している²²⁸。そして、ロマン・ロランの倫理においては、平和よりも闘争が重視されていると主張する。

また、ロランが価値を置く芸術が、小説の前半部でクリストフが共感した民衆的な芸術ではなく、エリートによるものであると述べられている²²⁹。その根拠として、ロランの世界観においては、社会主義思想よりも個人主義が重視されていることを挙げている。

次に、クルティウスは、『ジャン・クリストフ』の宗教性を、クリストフの孤独生活の伴侶として神がいるのであり、クリストフの神信仰を汎神論と人格神論の混合であると考えている²³⁰。作品論はここで終わり、作品の受容に話題は移る。

『ジャン・クリストフ』は、フランスでは、どのように受容されたのだろうか。まず彼は、作家・政治家のガストン・リウーGaston Riou が、1913年に強い共感を込めて、ロマン・ロランは我々の自己であり我々の詩人である、と述べたことを紹介する²³¹。

続いて、このことと第一次世界大戦との関わりについて、以下のように書いている。

Dieses Zeugnis für Rollands repräsentative Stellung in der geistigen Bewegung des jungen Frankreich hat durch den Weltkrieg den Wert eines zeitgeschichtlichen Dokuments bekommen. Wie anders klingen die Stimmen jetzt! Wollte man die Äußerungen der geknebelten französischen Öffentlichkeit für die Sprache des wahren Frankreich, des ganzen Frankreich nehmen, so müßte man sagen: die Nation ist von ihrem Dichter abgefallen und hat ihn geächtet. Es konnte nicht anders sein. Denn auch im Weltkrieg hat Rolland den Glauben festgehalten, der durch sein ganzes Werk geht: den Glauben an die Idee Europa: und das heißt an die moralische Solidarität von Deutschland und Frankreich. Wenn er einen Deutschen zu seinem Helden erwählt hatte und ihn das wahre Frankreich entdecken ließ, war es, weil er Deutschland und Frankreich zusammenführen wollte, wie Christoph und Olivier sich im Freundesbund zusammenschlossen²³².

若きフランスの精神的運動におけるロランの代表的な位置に関するこの証明書は、世界大戦によって、現代史的記録文書の価値を獲得した。現在では、何と異なっている声が鳴り響いていることか。もしも人が、さるぐつわを嵌められたフランスの一般の人々の発言を、真のフランスの言葉とか、フランス全体の言葉と見なすのならば、フランスの国民は、彼らの詩人に背いて、村八分にしたと言わざるを得ないだろう。それ以外ではあり得なかったのだ。実際に、世界大戦においてもロランは、彼の全作品に一貫している信念に、すなわちヨーロッパの理念に固執した。これは、詳しく言えば、ドイツとフランスの倫理上の連帯のことである。彼がドイツ人を主人公として選び、この主人公に真のフランスを発見させたのは、それは彼が、まるでクリストフとオリヴィエが友情による結び付きで繋ぎ合わされているように、ドイツとフランスを引き合わせたいと思ったからであった。

²²⁸ Ebd., S. 100-101.

²²⁹ Ebd., S. 103-106.

²³⁰ Ebd., S. 110-112.

²³¹ Ebd., S. 112-113.

²³² Ebd., S. 113-114.

フランスのナショナリズムが興隆した第一次世界大戦の時さえ、ロマン・ロランの個人主義は崩れることなく、独仏の対話によるヨーロッパという信念を貫いたことを、クルティウスは主張している。同時に、『ジャン・クリストフ』に共感したフランス人達が、戦争の時に愛国心に従わないロランをフランスから追放したことにも触れている。アルザスに育ったクルティウスは参戦し重傷を負った。彼自身、この参戦は激しい葛藤を伴うものであったであろう。このロラン論が含まれている『新しいフランスの文学開拓者達』は、第一次世界大戦直後の 1919 年に出版されている。従って、クルティウスがこの戦争の後に、ロランにおけるヨーロッパの理念を語っているのは無視出来ないことである。

続いてクルティウスは、ロランが戦争中に国際赤十字社の事業に関わるために、ジュネーヴに滞在し、パシフィストとしてヨーロッパの平和を呼びかけ、フランスの知的世界の中で唯一自己の独立を守ったことを語っている²³³。

このロマン・ロラン論の中心主題である『ジャン・クリストフ』論を終えると、最後に、クルティウスは、ロランの最新刊である小説『コラ・ブルーニョン』*Colas Breugnon* (1919) と人形劇『リリュリ』*Liluli* (1919) をドイツ語圏の読者に紹介している²³⁴。

以上、『新しいフランスの文学開拓者達』におけるロマン・ロラン論を検討した。次節では、このロラン論で特に重視されているライン河と独仏の国境地帯に生まれたクルティウスのアイデンティティとの関係に、目を向けることにする。

第4節 クルティウスのヨーロッパ理念の軸としてのライン河

『ジャン・クリストフ』の中心主題はライン河である、と言っても過言ではない。なぜなら、この河は独仏の国境を流れており、作品中でもこう記述されているからである。

Entre les coteaux de France et la plaine allemande, le fleuve s'était frayé passage, débordant sur les prés, rongant la base des collines, ramassant, absorbant les eaux des deux pays. Ainsi, il coulait entre eux, non pour les séparer, mais afin de les unir ; ils se mariaient en lui²³⁵.

フランスの丘とドイツの平野の間を河は自ら切り開いて進み、草原の上に溢れ出たり、色んな丘を浸食したりしながら、二つの国の水をかき集め触れ合わせている。こんな感じで、この河はフランスとドイツの間を進んでいくのだが、両国を分けてしまうためでなく、結び付けようとしているのだ。二つの国は、この河において結婚した。

ロランは、ライン河がフランスとドイツに対して中立的な立場を取り、この二つの国の間

²³³ Ebd., S. 114.

²³⁴ Ebd., S. 115-125.

²³⁵ Rolland, op. cit., p. 1010.

の紛争を鎮めるものとして描いている。この描写は、『ジャン・クリストフ』において、ライン河が、クリストフの故郷でありドイツ人の愛国主義を鼓舞するだけでなく、国境地帯を表象する役割も担わされていることも示す。

本節では、フランスとドイツの国境を流れるライン河の歴史を考察する。歴史を遡るのは、クルティウスの主著において古代や中世の持つ意味が大きいからである。

古代では、ローマ帝国軍がライン河流域まで領土を拡張する。兩岸の諸都市を建設したのもローマ帝国軍である。ユリウス・カエサル *Julius Cæsar* はこの河を帝国の境界とした²³⁶。

中世では、カール大帝 *Charlemagne* の時代にフランク王国がヨーロッパを統一するが、彼の孫の代には三つに分裂する。中間部分のロタリングアにライン地方やアルザス地方が含まれ、この河はロタリングアと東フランクの境界線となる。中世から近世にかけて、ライン河流域のコンスタンツ、ストラスブール、マインツなどは、交通の要衝 *Verkehrsknotenpunkt* であった。東フランクはドイツの、西フランクはフランスの母体になる。

独仏の敵対関係は、17 世紀のルイ王朝の頃から始まった。ドイツ農民戦争後のドイツ人は、三十年戦争以後長くフランス人に対する文化的劣等感に苛まれることになる。

しかし、19 世紀に入るとフランス側もドイツに興味を持つ者が増える。そうしたフランス人の一人であるスタール夫人について、クルティウスは批評「現代フランス文学におけるヨーロッパ精神について」において、『ドイツ論』の画期性が、フランス語を使用言語とした“抽象的なコスモポリタニズム”を軸としたヨーロッパではなく、諸民族の文化的特徴を尊重する“ヨーロッパ精神”にあると述べた²³⁷。彼とジッドやデュ・ボスとの書簡では、ドイツ語も使用されていたことは、1920 年代の彼らのヨーロッパ性が、“18 世紀の抽象的なコスモポリタニズム”ではなく、スタール夫人が主張した諸民族の“平均化でなく統合”に近いものであったと言える。

1870 年の普仏戦争では、ビスマルク *Bismarck* 主導のもと強力化したプロイセンがナポレオン三世 *Napoléon III* 率いるフランスに勝利する。フランスにとってこの敗戦は屈辱であり、ドイツへの復讐を旗印にナショナリズムが興隆する。中本真生子は、敗戦後のフランスを「第三共和政期のフランスが、“フランス国民”統合のために建国神話や共和国の女神、国歌、国旗（三色旗）等のシンボルを多用したことはよく知られている²³⁸。」と説明する。中本の語るフランスのナショナリズムの興隆において、失地回復の象徴となったアルザス・ロレーヌは、こうしたシンボルが多く作られる対象となった。クルティウスがモノグラフを書いたロレーヌ出身のバレスの作品にもこうした側面は見られる。

『ジャン・クリストフ』の主人公は、普仏戦争より 10 年くらい前、ライン河畔に生まれている。一方、クルティウスは、アルザスがドイツ領である 1886 年に生まれた。

普仏戦争後に、重工業の盛んなアルザス＝ロレーヌ地方がドイツに割譲される。この国境線の推移に関して、『ジャン・クリストフ』においても親友同士であるドイツ人であるク

²³⁶ *FK*, S. 33-34.

²³⁷ *FGE*, S. 291-292.

²³⁸ 中本真生子『アルザスと国民国家』（晃洋書房、2008 年、6 頁）。

リストフとフランス人であるオリヴィエの間でさえ、問題にされている。

Les raisons historiques qu'Olivier alléguait des droits de la France à revendiquer l'Alsace comme une terre latine, ne firent aucune impression sur Christophe ; il en existait d'aussi fortes pour prouver le contraire...²³⁹

オリヴィエが申し立てる、ラテン文化の土地としてのアルザスを要求するフランスの権利についての歴史的な理由は、クリストフには説得力のあるものではなかった。まったく逆のことを証明する強い根拠も同様にあったからである…。

こうした歴史的条件を作品化するために、ロランは 1905 年にアルザスに滞在し、現地取材を敢行している。新たにドイツ領となり、ドイツの学術・文化の象徴として特に力を注がれることになったストラスブールに関して、ロランは現地で理解を深めたのである²⁴⁰。

『ジャン・クリストフ』には、クリストフの友人として、ドイツの地方都市で学校教師を務めるアルザス出身のアンゲリカ・ラインハルトが登場する。

Parmi les nombreuses choses saugrenues, qu'il ne fallait pas dire, et que par conséquent elle disait, revenait à tout propos une comparaison déplacée de ce qui se faisait en Allemagne et de ce qui se faisait en France. Allemande elle-même, —(nulle ne l'était plus qu'elle)— mais élevée en Alsace, et en rapports d'amitié avec des Alsaciens français, elle avait subi cette attraction de la civilisation latine, à laquelle ne résistaient pas, dans les pays annexés, tant d'Allemands, et de ceux qui semblaient les moins faits pour la sentir²⁴¹.

言うべきことではないのに彼女が口に出してしまう多くの突拍子もないことの中に、ドイツで生じていることとフランスで起こっていることを何かにつけ場所柄もわきまえずに比較するというのがあった。彼女自身はドイツ人だったが、(彼女ほど生粋のドイツ人はなかった)、アルザスで育ったせいかなフランス系のアルザス人達と交友関係を持っていたので彼女はラテン文化の魅力に惹かれていた。合併されているこの地域のかかなり多くのドイツ人が、しかもそれには最も感じそうもないような人々がラテン文化の魅力に惹かれていた。

ラインハルトの文化的背景はクルティウスに近く、彼は独仏の比較という方法を駆使して、1930 年に『フランス文化論』を発表することになる。一方、『新フランス評論』に関わった作家ジャン・シュランベルジェ Jean Schlumberger²⁴²は、“フランス系のアルザス人”である。

スイスのベルンの貴族出身の厳格な母親と敬虔なプロテスタントの牧師である父親との間に、クルティウスは、アルザスの小都市タンで生まれている。彼が、ギムナジウムや大

²³⁹ Rolland, op. cit., p. 997.

²⁴⁰ 二宮宏之『マルク・ブロックを読む』(岩波書店、2005 年、30 頁)。

²⁴¹ Rolland, op. cit., pp. 497-498.

²⁴² Cf. Gilbert-Lucien Salmon (éd.), *Jean Schlumberger et la Nouvelle Revue Française*, Paris, L'Harmattan, 2004.

学に通っていた頃には、ストラスブールはドイツ領だったが、クルティウスが第一次世界大戦後に、ドイツの大学で教員になる時期には、彼の故郷はフランス領である。その後、ナチス・ドイツの侵略戦争によってドイツ領に戻る。

このように属する国を何度も変えるアルザスの特徴を中本は、「視点を国境に、地方に置いてみると、これまでの“国民”観がいかにか中央にとってのあるべき国民の姿であったか、そして程度の差こそあれ、アルザスと似たような経験を多くの地方が、そして、国境が被ってきたのかということが見えてくるであろう²⁴³。」と書いている。他の多くの国境の町のように²⁴⁴、ストラスブールは多言語性を持たざるを得ず、帰属問題を抱えてきた。さらに、フランスのような中央集権国家では、ストラスブールのような国境の町は、辺境の町でしかなかったのである。そうしたアマルガムというアイデンティティを持つ国境の町は、欧州統合の深化とともに、首都への劣等感を克服することになる。

以上、クルティウスの故郷である、ライン河の流れる国境地帯アルザスについて歴史的に概観した。彼の育ったこの環境が“ヨーロッパ精神”の基盤になったことは確かである。

アルザスと隣接するロレーヌも、この歴史的条件と関連する。普仏戦争の直前にフランスとの国境近くで生まれたゲオルゲが若い頃にフランス文化に対する愛着を持っていたことを、クルティウスは1950年の批評「語らいの中でのシュテファン・ゲオルゲ」„Stefan George im Gespräch“の中で語っている²⁴⁵。また、このゲオルゲ論では、ゲオルゲとロタリンギアの関係も触れられている。これは、この論考の二年前に出版された彼の主著において文学史の流れをライン河の流れと重ね合わせていることの残響のように思われる。

Aber für die landläufige Literaturgeschichte beginnt das moderne Europa erst um 1500. Das ist ebenso sinnvoll, wie wenn man eine Beschreibung des Rheins verspräche, aber nur das Stück von Mainz bis Köln lieferte. Freilich gibt es auch eine « mittelalterliche » Literaturgeschichte. Sie fängt um 1000 an, also, um im Bilde zu bleiben, schon in Straßburg. Aber wo bleibt die Zeit von 400 bis 1000? Da müßte man schon in Basel anfangen...[...] Der letzte große Dichter rheinfränkischen Stammes, Stefan George, fühlte sich durch geheime Wahlverwandschaft dem römischen Germanien und dem fränkischen Mittelreich Lotharingen zugehörig, aus dem sein Geschlecht stammte²⁴⁶.

²⁴³ 中本、前掲書、107頁。

²⁴⁴ 例えば、アドリア海に面する町トリエステ。アンジェロ・アーラ Angelo Ara とクラウディオ・マグリス Claudio Magris は、トリエステとアルザス＝ロレーヌ地方を等価に位置付ける (Angelo Ara e Claudio Magris, *Trieste. Un'identità di frontiera*, Torino, Einaudi, 1982; repr. 2007, p. 66.)。Cfr. Angelo Ara ed Eberhard Kolb (a cura di), *Regioni di frontiera nell'epoca dei nazionalismi. Alsazia e Lorena/Trento e Trieste*, Bologna, Il Mulino, 1995。

²⁴⁵ クルティウスによると、20歳の頃のゲオルゲは、ドイツにいと窒息すると感じていた (KEEL, S. 101.)。この詩人は、フランスに愛着を持っていたのである。クルティウスは自分を重ね合わせながら、独仏の間で引き裂かれたゲオルゲを語っているように思われる。このゲオルゲ論では、クルティウスが18歳の時に行った中部ラインへの旅が回想され、ビンゲンでの船旅が記述されている。ビンゲンはゲオルゲが活動していた町である。『ジャン・クリストフ』の主人公の故郷やこの主人公のモデルであるベートーヴェンの生誕の地ボンンは、ビンゲンから近い。また、ゲオルゲは、彼の詩『ポルタ・ニグラ』*Porta Nigra* (1907) などが示すように、ライン河とローマ帝国の関係にも意識的であった。

²⁴⁶ ELLMA, S. 19-20。

しかしながら、一般的な文学史にとって、近代ヨーロッパ世界は、1500 年によく始まる。このことは、ライン河を記述すると予想させているのに、実際は、マインツからケルンにかけての部分しか書かないのと、同じような意味合いなのである。確かに、“中世”文学史のようなものは、ある。それは、1000 年頃に始まるが、要するに、続けてライン河のイメージに固執するなら、既にもう、ストラスブールに辿りついたことになる。だが、400 年から 1000 年までの時は、どこに残っているのか。それならば、バーゼルの地点から、書き始めないといけないだろう。[...]ライン＝フランク系の最後の偉大な詩人シュテファン・ゲオルゲは、秘められた親和性によって、自分がローマ風のゲルマニアと、ロタリンギアと呼ばれる、彼の家系が由来する中部フランクに帰属するのを感じた。

ゲオルゲのライン河及びローマ風のゲルマニアへの帰属を示す文章である。南西ドイツの人文主義的な伝統に親近感を抱くクルティウスは、似た背景を持つゲオルゲに、文学史の流れをライン河の流れと重ね合わせながら語る際に特権的な位置を与えたのだ。アルザスで育ったクルティウスは、ライン河と関わる作品を書いたロマン・ロランやゲオルゲの仕事に共鳴し、この大河へのこだわりをこうした形で形象化することになったのである。

第 5 節 結論

本章の第 1 節では、作品の通俗性ゆえにロマン・ロランの作品が、文学研究者や文学愛好者の多くから低い評価を受けているために、クルティウスのロマン・ロラン論も十分に研究されてこなかったことを指摘した。

第 2 節では、ドイツとフランスの対話を主題とする『ジャン・クリストフ』のヨーロッパ性を具体的に示した。このヨーロッパ性は空間的なものだが、イタリアの文化的遺産を描写することにより歴史的なヨーロッパ性も含まれていることにも着目した。

第 3 節では、『新しいフランスの文学開拓者達』で一章を割かれているロマン・ロラン論を扱った。クルティウスがロランの作品のドイツ性、『ジャン・クリストフ』におけるローマやライン河の役割を説明していることに触れた。

第 4 節では、ライン河が流れるアルザスで育ったクルティウスのアイデンティティに関して、『ジャン・クリストフ』の中のアルザスと関連させながら、考察した。

これらの探求により、クルティウスとロマン・ロランは、ヨーロッパのヴィジョンを始めとして、共感し合うような思想を持っていたように考えられる。例えば、クルティウスが第一次世界大戦で負傷した時には、ロランは体の具合を心配している²⁴⁷。また、ロランはクルティウスの『新しいフランスの文学開拓者達』を激賞し彼の知性や気品を称える手

²⁴⁷ Duchatelet, « La correspondance Curtius – Romain Roland », Bem et Guyaux (éds.), op.cit., p. 152.

紙を書いている²⁴⁸。さらに、ルール紛争に対してクルティウスがフランスとドイツの和解を呼びかけて書いた 1922 年の論考「フランス人とドイツ人は理解し合えることは出来るか」« Français et Allemands peuvent-ils se comprendre? »²⁴⁹にも目を通し友情を深めていった²⁵⁰。

だが、ロランはクルティウスから次第に距離を置くようになる。彼が雑誌『新フランス評論』の作家達と親しく付き合うようになるからである²⁵¹。ロランにとって『新フランス評論』の作家達は、大ブルジョワの審美派のように映っていた²⁵²

また、クルティウスとロランの考え方は異なるものとなっていた。なぜなら、ロランはソヴィエトの共産主義を強く肯定したためである。彼はソ連を除外した汎ヨーロッパは無意味なものだと考えるようになる²⁵³。その結果、ロランは 1930 年 1 月 28 日にソ連を受け入れないクーデンホーフ・カレルギーの汎ヨーロッパ運動を批判する声明を発表する²⁵⁴。ロマニストであるクルティウスが、ソヴィエトやスラヴ文化に対して持っていた違和感に関しては、第 4 章や第 5 章でも触れることになるだろう。

クルティウスも、自分の考えるヨーロッパにソ連を含めようとしなかった。1920 年代後半において彼はロランから離れていき、書簡のやり取りは 1930 年に終わる。しかし、『ジャン・クリストフ』で描かれた独仏の国境を流れるライン河はクルティウスの考えるヨーロッパの軸であり続ける。また、彼は、ロランの作品の価値を一貫して肯定した。その証拠に、主著が公刊される直前の 1947 年に『メルクーア』に発表されたヘッセ論で、彼はロランを 1870 年前後に生まれた偉大な文学者達の輪に含めている²⁵⁵。

ロマン・ロランは、多面的で複雑な作家である。彼は、ローマに遊学した諸芸術に明るいエリートであるのに、民衆への理解を示し、ソヴィエトの共産主義を支持した。ただ、ロランが生涯において一貫しているのは、ヨーロッパというものを追求し続けたことである。第一次世界大戦の頃、彼がスイスから平和を呼びかけたのは、その証拠である。

クルティウスの空間的な“ヨーロッパ精神”の形成過程において、ロマン・ロランの持つ意味は小さくない。ドイツ人音楽家を主人公とする長編小説『ジャン・クリストフ』を書いたロランは同時代のフランスの作家達の中で最もドイツ的であった。アルザス生まれ、フランス文化に親近感を持つクルティウスが、親ドイツのロランに共感し友人関係を結んだのは、自然なことであった。

²⁴⁸ Ibid., p. 156.

²⁴⁹ Charrier, op.cit., pp. 156-162.

²⁵⁰ Duchatelet, « La correspondance Curtius – Romain Roland », op. cit., p. 160.

²⁵¹ Ibid., pp. 162-163.

²⁵² Duchatelet, *Romain Rolland tel qu'en lui-même*, op. cit., p. 292. Cf. Duchatelet, *Romain Rolland et la NRF. Correspondances avec Jacques Copeau, Gaston Gallimard, André Gide, André Malraux, Roger Martin du Gard, Jean Paulhan, Jean Schlumberger et fragments du Journal*, Paris, Albin Michel, 1989.

²⁵³ Duchatelet, *Romain Rolland tel qu'en lui-même*, op. cit., p. 292.

²⁵⁴ 牧野、前掲書、177 頁。

²⁵⁵ KEEL, S. 163.

第3章 クルティウスとジッド、ポンティニー、コルパハ

第1節 『新しいフランスの文学開拓者達』におけるジッド論

本章では、ジッド、ポンティニーの旬日会、コルパハのサロンとの関係を中心に、クルティウスとジッドなどの『新フランス評論』の作家達との影響関係を論じることとする。

ジッドは20世紀フランス文学を代表する作家の一人である。彼は小説を書くだけでなく、外国文学をフランス語に翻訳した知識人であった。ヨーロッパ的教養を備えた知識人作家としてのジッドを考える場合、ポンティニー修道院での旬日会やルクセンブルクの城館で営まれていたサロンは大きな意味を持っていた。クルティウスが彼と知り合い友情を深めていった²⁵⁶のは、こうした場所であった。また、約30年間続けられた彼らの往復書簡は、クルティウスの“ヨーロッパ精神”の形成過程を考察する上で重要なものである。

まず、『新しいフランスの文学開拓者達』のジッド論において、ジッドの外国文学受容をどのように論じているのかに注目することにしたい。

冒頭で、クルティウスはフランスに脈々と流れる古典主義の伝統に触れ、ジッドがこの伝統の継承者であることを語っている²⁵⁷。クルティウスによれば、ロラン、クローデル、スュアレス、ペギーと比べれば、彼は革新の度合いは小さいという。

ジッドに関して、彼は、批評家と作家を兼ねていると言う²⁵⁸。本章第4節で扱う二人の書簡は、このフランスの作家が批評文も多く書いた知的な人物であったことと関連する。

クルティウスはジッドの特徴である古典主義を、明晰さ *die Klarheit* (*die très grande clarté*) への愛着から説明している²⁵⁹。さらに彼は、同時代の古典主義者達とは区別する。

Sie hat sich vollzogen im Ringen mit dem menschlichen und künstlerischen Gehalt der Gegenwart. Dem literarischen Nationalismus und chauvinistischen Neuklassizismus der Kreise um Barrès und Maurras hat Gide nie ein Zugeständnis gemacht. Kein moderner Franzose ist offener gewesen für die künstlerischen Zuströme der germanischen und der slawischen Welt. Goethe, Novalis, Nietzsche; Dickens, Meredith, Wilde; Dostojewskij und Tolstoj - Gide hat mit ihnen gelebt und von ihnen gelernt²⁶⁰.

ジッドにおける伝統への賛同は、現代の人間的及び芸術的内容との格闘によって生まれた。彼は、バレスやモーラス周辺の文学的なナショナリズムや極端な国粹主義による新古典主義に決して譲歩をしなかった。ゲルマン世界やスラヴ世界の芸術的流入に対して彼ほど開かれている近代のフランス人はいなかった。ゲーテ、ノヴァーリス、ニーチェ、ディケン

²⁵⁶ 二人は1921年から1950年までに、計9回、実際に顔を合わせた (Jacquemard-de Gemeaux, *Ernst Robert Curtius (1886-1956): Origines et cheminements d'un esprit européen*, op. cit., p. 91.)。

²⁵⁷ WB, S. 43.

²⁵⁸ Ebd., S. 44.

²⁵⁹ Ebd.

²⁶⁰ Ebd., S. 45.

ズ、メレディス、ワイルド、ドストエフスキー、トルストイと彼は生き、彼らから学んだ。

この引用部分では、ジッドにおけるフランス的な古典主義の尊重が、バレスやシャルル・モーラス Charles Maurras といったアクション・フランセーズ²⁶¹の文学者達とは異なり、現代の外国文学を受容した上でなされていたことが示されている。

ジッドのような古典主義と外国文学受容の大変な熱心さの両立は、作家が批評家を兼ねる側面と共に、彼が関わった雑誌『新フランス評論』の作家達の多くに当てはまることであった。文学的伝統と現代文学の両方に明るい彼を、クルティウスは、“旧と新の仲介人” „der Vermittler zwischen dem Alten und Neuen“と形容している²⁶²。

次に、クルティウスは、彼の文学作品を分析する。初期の作品を、自己分析の芸術と評し、象徴主義の流れから出発したことに触れ、『ナルシス論』*Le Traité du Narcisse* (1891)、『ユリアンの旅』*Le Voyage d'Urien* (1893)、『愛の試み』*La Tentative amoureuse* (1893) を論じている。ジッドがこうした象徴主義の影響の下での内的対話を止め、生を描くようになったきっかけが『パリュード』*Paludes* (1895) であると彼は考える²⁶³。

続く、『地の糧』*Les Nourritures terrestres* (1897) や『背徳者』*L'Immoraliste* (1902) では、書物に寄りかかる思索ではなく、屋外で生を謳歌することを書いていることをクルティウスは指摘する²⁶⁴。また、彼は、戯曲『カンドール王』*Le Roi Candaule* (1901) における、形態に固執する芸術的人間の表象は、トーマス・マンを想起させると書いている。

1909年の『狭き門』*La Porte étroite* に関しては、クルティウスはこの小説の主題を禁欲であると断定する²⁶⁵。そして、この作品における精神性や言語の古典性を、ブレーズ・パスカル Blaise Pascal やピエール・コルネイユ Pierre Corneille といったフランス文学の伝統の中で位置付ける。また、『狭き門』のフランスでの受容を紹介している。

Die Porte Étroite brachte Gide den marktgängigen Ruhm mit all seinen Mißverständnisseen. Kritik und Publikum stellten erleichtert fest: endlich ein wirklicher Roman mit Provinzmilieu und gehöriger Handlung. Der Autor wurde eingeordnet. Man wollte ein Einschwenken zum Glauben, eine Bekehrung zum Klassizismus, eine Absage an die tastenden Versuche einer ganzen Jugend sehen²⁶⁶.

『狭き門』は、ジッドに商売的な名声を、この名声に伴うあらゆる誤解と共に、もたらしめた。批評家達や公衆は、こう断言して安心した、地方の環境が描写された、ふさわしい筋を持った真の小説が遂に出たと。著者は、こんな風に整理された。人は、信仰への方向転

²⁶¹ アクション・フランセーズに関しては、福田和也『奇妙な廃墟』（国書刊行会、1989年）とジャック・プレヴォタ『アクション・フランセーズ』（斎藤かぐみ訳、白水社、2009年）を参照。

²⁶² WB, S. 46.

²⁶³ Ebd., S. 52-53.

²⁶⁴ Ebd., S. 53-68.

²⁶⁵ Ebd., S. 68.

²⁶⁶ Ebd., S. 70-71.

換、古典主義への転向、青年期全体の手探りの試みへの決別といったものを見ようとした。

クルティウスはドイツの読者に対し情報を与えようとしている。こうした一般的受容に対し、彼は、『狭き門』がそれまでの仕事の総合であるという意見を主張する²⁶⁷。

次の1911年の小説『イザベル』*Isabelle* に関しては、クルティウスは抽象的なものではなく、具象的な細部の描写に力を入れた作品であると評している²⁶⁸。

1914年の作品『法王庁の抜け穴』*Les Caves du Vatican* を論じるに際し、クルティウスは、『新フランス評論』の編集長ジャック・リヴィエール Jacques Rivière が1913年に発表した文学論に触れ、翻訳し引用する²⁶⁹。この文学論は、新しいフランスの小説は、フランス文学が得意としてきた美しい直線的構図や調和ではなく、チャールズ・ディケンズ Charles Dickens やエミリー・ブロンテ Emily Brontë の作品のように、作者が一つの大きな世界を作り出したような小説になるはずであると主張したものである。このリヴィエールの考えを實現したものとして、彼は『法王庁の抜け穴』を位置付ける。

Wenn Gide sein Buch so mit den satirischen Narrenspielen des 15. Jahrhunderts verknüpft, drückt er damit aus, daß er über die höfische Kunst der Renaissance und des Klassizismus hinweg die ältere bodenständige und volkshafte Tradition seiner Rasse wieder aufgreift. Aber noch stärker haben ausländische Anregungen an den *Caves du Vatican* mitgeschaffen. Den spanischen Schelmenroman und den großen englischen Roman vermeint man durchzuschmecken: Meredith, aber vor allem die alten Meister Sterne, Smollet, Fielding²⁷⁰.

ジッドが彼の本を15世紀の風刺的道化芝居とこう結び付ける時、それにより、彼はルネサンス期や古典主義時代の宮廷芸術を超えて彼の種族のより古い土着の民族の伝統を再び取り上げることが表明している。しかし、外国からの刺激こそ『法王庁の抜け穴』により強く作用した。人はスペインの悪漢小説や偉大な英国の小説、例えば、メレディス、さらに、特に、スターンやスモレットやフィールディングといった昔日の巨匠の味がすると思う。

クルティウスは、『法王庁の抜け穴』がこのジッド論の冒頭で触れられている彼の熱心な外国文学受容が存分に生かされた作品であることを指摘している。また、この小説が彼の特徴である古典主義を逸脱し、ルネサンス期以前のフランス文学やスペインの悪漢小説などに近いという意見は、彼の主著の文学的ヴィジョンとも関わることである。

続いて、クルティウスは、ジッドが第一次世界大戦中に沈黙していたことに触れている²⁷¹。これは、ロマン・ロランの反戦運動と比べると対照的である。

戦後に発表された小説『田園交響楽』*La Symphonie pastorale* (1919) に関して、時代的事

²⁶⁷ Ebd., S. 71.

²⁶⁸ Ebd., S. 72.

²⁶⁹ Ebd., S. 74-75.

²⁷⁰ Ebd., S. 75-76.

²⁷¹ Ebd., S. 77.

象から離れて成立した点で、テオフィル・ゴーティエ Théophile Gautier の詩集『七宝螺鈿集』*Émaux et Camées* (1852) に近いと評す²⁷²。クルティウスは、プロテスタントの牧師と盲目の少女が登場するという筋をドイツ語圏の読者に向けて紹介し、ジッド論を終えている²⁷³。

本論文の第1章第1節でも触れたように、このジッド論は、『新フランス評論』の作家達からも読まれるようになる。次節以降は、クルティウスとジッドの交流を分析することにする。具体的に言えば、彼らの友情を育む機会であったポンティニーの旬日会、ルクセンブルクのサロン、クルティウスとジッドの書簡を対象にすることにしたい。

第2節 1922年と1924年のポンティニー論

アカデミズムで孤立したクルティウスにとって、『新フランス評論』の作家達との友情は、重大な意味を持っていた。ポンティニーとコルパハは、この友情を育む機会であった。

本節では、彼が執筆した1922年と1924年のポンティニー論を再考したい。なぜなら、この会合の“ヨーロッパ精神”や反アカデミズム的傾向は主著で展開される方法論と関連するし、フランスの社交的伝統の礼賛はこの頃のフランス寄りの姿勢を示すからである。

雑誌『新メルクーア』の11月号に掲載されたクルティウスによる1922年のポンティニー論は、ブルゴーニュ地方の片田舎の風光明媚な景色の描写によって始まる。

Pontigny ist ein kleines Dorf in Burgund. Es liegt an dem umbuschten, murmelnden Serein in einer Landschaft, die mit ihren Wiesen, hohen Baumgruppen und Waldstücken manchmal an bukolische Dekors von Poussin erinnert²⁷⁴.

ポンティニーはブルゴーニュ地方の小さな村であり、周りに灌木の茂っている、さらさら音を立てるスラン川のそばにある。この村の風景に見える草原や背の高い木々の群や小さな森は時に時にブッサンの描く牧歌的背景を思い出させるものである。

ポンティニーの旬日会が開催される場所が、大都市ではなく小さな村であることを真っ先にクルティウスは語っている。ポンティニーの景色を説明する際に、画家ニコラ・ブッサン Nicolas Poussin の名前を出しているのは、ポンティニーの旬日会の主催者であるデジャルダンが、1904年にこの画家に関するモノグラフを出版しているからであろう。

続いて、彼は、ポンティニー修道院の建物が、厳格で純粋なシトー会のゴシック式の見事な文化遺産であり、大きな修道院聖堂が損傷されていない状態で残っており、畑の間に立派な身廊が聳え立っているのが訪問者の目に入ることを記述する²⁷⁵。

²⁷² Ebd.

²⁷³ Ebd., S. 77-78.

²⁷⁴ FGE, S. 327.

²⁷⁵ Ebd.

中世においてこの修道院は、どのような役割であったのだろうか。彼はこう書いている。

Die Blütezeit von Pontigny fiel ins dreizehnte Jahrhundert. Das Kloster wurde durch Stiftungen bereichert und von den Großen begünstigt. Der heilige Ludwig hat gern dort gewohnt. Vor allem war Pontigny ein Zufluchtsort. Das war seine Tradition: Pons exulis, hortus, asylum, sagt ein Wahlspruch von 1250²⁷⁶.

ポンティニーの最盛期は、13 世紀であった。修道院は、寄付によって金銭的に豊かになり、諸侯貴紳から支援されていた。聖ルイは、好んでここに滞在した。何よりもまず、ポンティニーは避難所であった。このことは、ポンティニーの伝統なのだった。“亡命者のための橋、庭、避難所”というのは、1250 年頃の標語が言っていることだ。

彼は、ポンティニーの由緒ある歴史を説明している。中世におけるポンティニーのアジール性を強調しているのは、旬日会がアジールの性格を帯びていたからであろう。彼が紹介している標語“亡命者のための橋、庭、避難所”の中に橋が含まれているのは、ポンティニー Pontigny という名前が、橋 pont というフランス語に由来するためである。

ポンティニーが近世においても巡礼地として名高い場所であり続け、多くの王侯貴族の訪問を受けたことに、クルティウスは語る²⁷⁷。そして、ポンティニーの旬日会の主催者である哲学者デジャルダンとこの修道院の関係を紹介している。

Endlich wurde es 1906 auf Grund des Trennungsgesetzes versteigert. Es ging in den Besitz von Professor Paul Desjardins aus Paris über. [...] Sein Gedanke war der, den Rahmen, den die Cisterzienser des zwölften Jahrhunderts geschaffen hatten, einer geistigen Lebensgemeinschaft unserer Zeit dienstbar zu machen. [...] Die alten Mönche würden freilich staunen, wenn sie ihr Haus wieder beträten, und würden es äußerlich verändert finden. Nicht meditierende Patres erfüllen es mehr, sondern Künstler, Schriftsteller, Philosophen, Politiker. Helle Frauenstimmen ertönen und jugendliches Lachen. Und dennoch! Der Grundton von Pontigny mit seiner vornehmen Spiritualität wahrt die Würde der Tradition²⁷⁸.

結局、1906 年にポンティニー修道院は、政教分離法令を根拠に競売にかけられた。この修道院は、パリのポール・デジャルダン教授に、所有権が移った。[...] デジャルダンのアイデアは、12 世紀のシトー会員が作り出した枠組みを、現代の知的な生の共同体に利用するというものであった。[...] かつての修道僧達がもしこの家屋に再び立ち入るのなら、もちろん彼らは驚嘆するだろうし、外面的に変わったことを見出すだろう。この家屋をいっばいにしているのは、もはや瞑想する修道司祭ではなく、芸術家、作家、哲学者、政治家である。甲高い女性の声が響き渡り、若者らしい笑い声も聞こえる。だが、それにもかかわ

²⁷⁶ Ebd., S. 328-329.

²⁷⁷ Ebd., S. 329.

²⁷⁸ Ebd., S. 329-330.

らず、気高い精神性を具えたポンティニーの基調は、修道院の伝統の品位を保っている。

この修道院がデジャルダンの手に渡り、聖職者の集まる場所から、文化人の集まる場所へと変化していった様子をクルティウスは叙述している。彼が、女性の声に触れているのは、修道院が女人禁制の場所であったからであろう。デジャルダンが 1910 年に、この修道院で知的な生の共同体を新たに創出出来たのは、1892 年にプロテスタントの牧師のシャルル・ヴァグネル Charles Wagner と共に道徳的行動のための同盟 Union pour l'action morale²⁷⁹を結成し、哲学や宗教や社会に関して集団で議論することを継続していたからであった。

夏期に地方で開催されるポンティニーの旬日会の理念は、どのようなものだったのだろうか。クルティウスは、この会の理念は英米の大学が夏に開催する学術的集いから刺激を受けたものであると言う²⁸⁰。さらに、この会の特徴を国際性という観点から説明する。

Wie die wissenschaftlichen Kongresse wollen die „Entretiens d'Été“ einen internationalen Treffpunkt schaffen, der Kennenlernen und Fühlungnahme für die Angehörigen verschiedener Nationen gestattet. Aber Organisation, Technik und Geist von Pontigny sind doch wieder ganz anders und sind etwas Eigentümliches. Nicht Fachmenschen treffen sich (seien es Gelehrte, Politiker oder Soziologen), sondern Menschen schlecht hin. Die Lebensgemeinschaft, die Spaziergänge, die Einzelgespräche, die gemeinsamen Abendstunden, fern aller Großstadt-Unruhe, unmerklich durchwirkt von dem Eindruck großer Geschichte und friedvoll schöner Landschaft – das macht die Atmosphäre von Pontigny aus. Hier gibt es keine organisierte Belehrung, keine Kurse oder Vorträge, kein Schema und keine Statuten. Ein geistiger Kosmopolitismus und eine freie und kritische Spiritualität bestimmen die Haltung der Teilnehmer. Es ist ein Austausch lebendiger Menschen, eine Freundschaft²⁸¹.

国際学会のように、“夏期懇話会”は様々な国に所属する人々が知り合い接触することを可能にする国際的な出会いの場を作り出すことを意図している。だが、他方ではポンティニーの組織や仕組みや精神は、国際学会とはやはり完全に異なっているものであり、独特なものだ。(学者にしろ、政治家にしろ、社会学者にしろ、) 専門家がお互いに会うのではなく、人間が会うのである。大都会の騒音から離れ、大いなる歴史と穏やかで美しい風景がかすかに織り込まれた、生の共同体、散歩、個々の会話、一緒に過ごす夜の時間が、ポンティニーの雰囲気成す。ここでは講習や講演といった組織された教育的催しはなく枠組みや規約も存在しない。知的なコスモポリタニズムと自由で批評的な精神性が参加者の態度を決定している。これは、生気に溢れた人間達の交流であり友好関係である。

クルティウスは、旬日会が様々な国籍の学者達が集う国際学会と共通する部分があること

²⁷⁹ この同盟は 1905 年に真理のための同盟 Union pour la vérité と名を変えた。

²⁸⁰ FGE, S. 330-331.

²⁸¹ Ebd., S. 331.

を言っている。しかし、彼が主張したいのは、ポンティニーの旬日会がアカデミックな学会とは違うという点である。なぜなら、ポンティニーは、専門家が集う会合ではないし、学会の規約とも無縁であり、また、ポンティニーは、学会のような集団的な研究の場ではなく、堅苦しくない自由で知的な生の共同体であるからである。アカデミズムとは距離を置いている点は、彼の批評活動や主著の書き方を想起させるものである。

ポンティニーの旬日会の進行の様子について、彼は、午前中は参加者の自由時間であり、午後に皆が集まり議論が行われることを語る²⁸²。そして、参加者の顔触れについて述べている。まず、彼は、ジッドを筆頭に、雑誌『新フランス評論』周辺のフランスの作家達²⁸³の名を挙げる。続いて、ポンティニーの国際性を示すために、英国、アメリカ、イタリア、スイスの参加者がいたことを記す。さらに、スイスから参加したロベール・ド・トラ Robert de Traz が彼の雑誌『ルヴェ・ド・ジュネーヴ』に寄稿したポンティニー論をフランス語原文で引用して、デジャルダンの司会の上手さや博識ぶりを紹介している。

ポンティニーの旬日会は、年に三つの会合で構成されていた。クルティウスが参加した1922年の旬日会の第二部は、『気高さが反映された芸術と文学 フィクションによる誇りの文化』« Art et Lettres: Le Miroir de noblesse; culture de la fierté par la fiction » であった²⁸⁴。

彼は、何が話題になったのかを報告している。騎士道精神が議論の出発点となり、キリスト教と名誉の関係、マルティン・ルター Martin Luther やフリードリヒ・ニーチェ Friedrich Nietzsche の理想、ゲオルゲの気高い詩が論じられ、フランスが社交人を名誉としてきたのに対し、ドイツ文学は孤独で高貴な自意識の獲得を描くことが結論づけられたと言う²⁸⁵。

この時の旬日会の議論のやり方に関しては、意見交換がイデオロギー的な論争ならず、その背景にはフランスの社交的な文化があることを指摘している²⁸⁶。このようにフランスの文化的伝統を積極的に称えようという姿勢は、クルティウスの二つのポンティニー論の基調となっている。例えば、この1922年のポンティニー論の締めくくりでも、他の国々よりもフランスの価値を力説しているのだ。

In Universitäten und Schulen wollen sich manche Kreise auf den angelsächsischen und den iberoamerikanischen Kulturkreis „umstellen“. Man wirft mit Handelsbilanzen und Sprachstatistiken um sich, man weist auf deutsch-spanische oder deutsch-italienische Wahlverwandtschaften hin. Sie sollen liebevoll gepflegt werden, gut! [...] Noch immer hat Frankreich in Europa, in Amerika, auch im Osten sein Prestige als führende und vorbildlich formende Kulturpotenz. Noch immer übt es seine Anziehung aus. Es wird umworben und geliebt, seine Anerkennung wird begehrt. Sein

²⁸² FGE, S. 332.

²⁸³ Cf. Du Bos, *Journal 1920-1925*, Paris, Buche/Chastel, 2003, pp. 248-268.

²⁸⁴ クルティウスは、この旬日会の表題を、「La fiction et l'honneur」（『フィクションと名誉』）と誤って記していた（Ebd., S. 333.）。旬日会『気高さが反映された芸術と文学 フィクションによる誇りの文化』については、Pierre Masson et Jean-Pierre Prévost, *L'esprit de Pontigny*, Paris, Orizons, 2014, pp. 69-75.を参照。

²⁸⁵ FGE, S. 333-334.

²⁸⁶ Ebd., S. 335-336.

Klassizismus (im weitesten Sinn), seine reiche Tradition haben weltgültigen Kurs. Wer sich mit Frankreich messen, wer das eigene Wesen gleichgeordnet neben dem französischen vertreten und als weltgültig ausweisen will, der darf vor der französischen Kultur nicht die Augen schließen²⁸⁷.

ドイツの諸大学やその他の学校では、いくつかのところで、アングロサクソンや南米の文化圏に“切り替え”ようとしている。貿易収支や言語統計を周りに投げかけたり、ドイツースペイン間あるいはドイツーイタリア間の親和性を指し示したりするのだ。確かに、これらの親和性も大事に育てなければならない。[...] 依然としてフランスは、ヨーロッパでもアメリカでも、また東洋でも、指導的で模範的に形成された文化力として、その威信を有している。今なおフランスは、その魅力を放っている。この国は、好まれ、愛情の対象である。フランスをめぐる称賛は、強く求められているのだ。(最も広い意味での) フランスの古典主義やその豊かな伝統は、人気があり世界的に通用している。フランスと優劣を競う者、つまり、自分の本質をフランスと同列に並んで主張し世界に通用することを示そうとする者は、フランス文化に対して目を閉じてはならない。

冒頭で、彼は、ドイツの大学がフランスから別の文化へのシフトする現状を嘆いている。特筆すべきなのは、この段階では、アングロサクソンやスペインやイタリアの文化に関心を示していないことである。というのは、1920年代後半のクルティウスはスペインや英国の文学も研究対象にするからである。1922年の時点ではフランス文化に対して盲目的な熱心さを彼が持っていたことは明らかだ。引用部分の後半でフランスの古典主義に彼は高い評価を与えている。しかし、彼の主著は近代以前の文学を論じているにもかかわらず、フランスの古典主義をそれほど重視していない²⁸⁸。これは、彼の知的関心の変容を示す。

1922年のポンティニー論を要約すると、社交的な文化のあるフランスでこそ、汎ヨーロッパ的な知識人の自由な対話が成り立つという見解が述べられたということである。

クルティウスは1923年の旬日会には参加しなかった。クラウス・グロッセ・クラハト Klaus Große Kracht は、欠席の理由がルール紛争にあると考えている²⁸⁹。これは、クルティウスが1922年のポンティニー論でフランス軍のライン進駐を批判しているからであろう²⁹⁰。

『フランクフルト新聞』に発表された1924年のポンティニー論は、旬日会の概要を説明することなく、彼が参加した詩と神秘主義をめぐる会合の報告から始まっている。クルティウスが参加したのは、8月8日から18日まで開催された、この年の旬日会の第一部の『ミューズとグレース (詩的靈感と宗教的靈感)』« La Muse et la Grâce »であった。

In diesem Sommer hieß das Thema der ersten Dekade „La Muse et la Grâce“: die Beziehungen

²⁸⁷ Ebd., S. 338-339.

²⁸⁸ ELLMA, S. 269-276.

²⁸⁹ Klaus Große Kracht, « Les intellectuels allemands à Pontigny », in: François Chaubet, Édith Heurgon et Claire Paulhan (sous la direction de), *SIECLE Colloque de Cerisy: 100 ans de rencontres intellectuelles de Pontigny à Cerisy*, Paris, Institut Mémoires de l'édition contemporaine, 2005, pp. 110-111.

²⁹⁰ FGE, S. 337.

zwischen Poesie und Mystik sollten erörtert werden. Was trennt, was verbindet die dichterische und religiöse Eingebung? Haben künstlerisch Inspiration und theopathische Erleuchtung eine gemeinsame Wurzel? Welche Rolle spielt das Wort in der Mystik? Was ist die Eigenart einer mystischen Dichtung, wie wir sie bei Johann vom Kreuz kennen? Plotin und Eckhart, Augustin und Bernhard von Clairvaux, platonisch-christliche Geistesmystik und orphisch-dionysische Vitalmystik wurde uns erläutert und nahegebracht. Wir hörten die Stimmen der Völker in der mystischen und symbolischen Dichtung Italiens und Spaniens, Rußlands und Englands, Deutschlands und Frankreichs. Fernstes in Zeit und Raum trat verwandt zusammen und fügte sich in die unverrückbare Architektur des ideellen Kosmos²⁹¹.

今年の夏の最初の旬日会の主題は『ミューズとグラス』であり、詩と神秘主義の関係が討議されることになっていた。何が、詩的靈感と宗教的靈感を区別し、また、結び付けるのか。芸術的インスピレーションと神の啓示は、共通の根を持っているのだろうか。神秘主義において言葉はどのような役割を演じているだろうか。我々が十字架のヨハネにおいて知っているような神秘主義の詩作品は、どのような個性であるだろうか。プロティノスとエックハルト、アウグスティヌスとクレルヴォーのベルナルドゥス、プラトンの＝キリスト教的な精神の神秘主義とオルフェウスの＝ディオニュソスのな生命の神秘主義、これらのことが我々に近づけられ、注釈を施された。我々は、イタリアやスペインやロシアや英国やドイツやフランスにおける神秘主義の詩作品や象徴的な詩作品において表現されている諸民族の声を聞いた。時間的にも空間的にも極めて離れている諸作品が類似したものとして一緒に登場し、精神的な宇宙の動くことのない建築物にはめ込まれたのだ。

ジャックマール＝ド・ジュモーの考えでは、クルティウスは、特にヴァチスラフ・イヴァーノフ Вячеслав Ив́анов の影響で、1930 年代にキリスト教神秘主義に傾倒した²⁹²。しかし、彼から影響を受ける前にも、この旬日会は、彼に神秘主義に関する知的関心を植え付ける機会であったように思われる²⁹³。修道院という空間は、宗教的な議論に最適であったはずである。また、この引用部分では、クルティウスは、話題になったのが様々な国の詩作品であることを指摘している。さらに、言及される作品群が空間的な広がりだけでなく、時間的にも広い範囲に及んでいたことが触れられている。この時間的かつ空間的なヨーロッパにおける諸作品の類似というのは、クルティウスの主著の性質と対応する。

この論考では、シェーラーやベルンハルト・グレットウイゼン Bernhard Groethuysen といったドイツの知識人の活躍する様子を、彼はドイツの読者に報告している²⁹⁴。

²⁹¹ FGE, S. 339-340.

²⁹² Jacquemard-de Gemeaux, *Ernst Robert Curtius (1886-1956): origines et cheminements d'un esprit européen* op. cit., pp. 360-367.

²⁹³ この旬日会には、デュ・ボスにスペインの神秘主義を教えていた宗教学者ジャン・バリュジ Jean Baruzi も参加していた (FGE, S. 341.). Cf. Jean Baruzi, *L'intelligence mystique*, Paris, Editeurs Berg International, 1985.

²⁹⁴ FGE, S. 340-341.

また、このポンティニー論でも、参加者の顔触れがヨーロッパ各国の人々であることが述べられている。彼は、多種多様な参加者との国際的交流の意義を力説し、ポンティニーが“ヨーロッパの小宇宙” „ein europäischer Mikrokosmos“ であると形容する²⁹⁵。彼におけるヨーロッパの理念が、読書によるだけでなく、実際に沢山の外国の知識人と知り合うことで育まれていったのは明白である。彼が綴っているこの会合における友情の存在感²⁹⁶は、会合に多く参加した雑誌『新フランス評論』のグループの特徴であった²⁹⁷。

彼は、1922 年のポンティニー論と同じく、フランスにおける社交生活を礼賛する。クルティウスはドイツとの比較によって、このフランスの伝統を描き出しているのだ。

Die Menschen leben hier aufeinander zu, sie wollen sich verbinden, sie betonen das Gemeinsame. Man sucht den anderen zu bejahen, und man findet sicher etwas Bejahenswertes. Bei uns in Deutschland hat das Individuum viel eher die Tendenz, sich abzugrenzen und sich in der Autarkie der fensterlosen Monade zu erhalten. Wir neigen dazu, vor allem unseren „Standpunkt“ zu wahren. Der Wahrheitssinn wird auf diese Weise oft zu einer Rechthaberei. Der Franzose ist geschmeidiger. [...] Auch wenn man verschiedener Meinung ist, wird man sich doch bemühen, einen formalen Ausgleich zu suchen. Ich empfinde darin eine tiefe Lebensweisheit und eine psychologische Wohltat²⁹⁸.

この国では人々が互いに寄り合い結び付こうとし、共通している部分を強調する。人は他人を肯定しようと努め、間違いなく肯定するに値する点を見つけるのだ。我が国ドイツでは、むしろ個人が境界を設定して窓のない単一体による自主独立を維持するという傾向が強い。さらに我々ドイツ人は何よりもまず、自分の“立場”を保とうとする。真理に対する好みも、このようにして、しばしば独りよがりになってしまう。フランス人はドイツ人より柔軟である。[...] たとえ意見が異なる場合でも、形式的な調整を探す努力をするだろう。私はこの点を深みのある处世訓であると感じ、また心理的な親切であると感じている。

彼は、サロン文化²⁹⁹の伝統があるフランスでは他人を尊重するのに対し、個人や真理を重視するドイツでは自主独立の維持のために人々の結び付きが弱いことを語っている。社交重視と個人重視の違いは『新フランス評論』の作家達とロマン・ロランの違いでもあった。彼は、寄り合うような習慣があつてこそ文化的なヨーロッパが成り立つと考えている。

だが、クルティウスは 1925 年以降、ポンティニーの旬日会に参加していない。これは、フランス文化に対する熱狂が 1920 年代半ばに冷めつつあることを示すものであろう。

²⁹⁵ Ebd.

²⁹⁶ Chaubet, « Pontigny à Royaumont », in: Chaubet, Heurgon et Paulhan (sous la direction de), op. cit., p. 156.

²⁹⁷ Nicole Racine, « Portrait d'Anne Heurgon-Desjardins », in ibid., p. 172.

²⁹⁸ FGE, S. 342-343.

²⁹⁹ フランスのサロン文化と関わりのある英国のブルームズベリー・グループのメンバーも、リットン・ストレイチャー Lytton Strachey を始めとして、ポンティニーの旬日会の常連であった。Cf. David Steel, « Pontigny, présences britanniques », in: Chaubet, Heurgon et Paulhan (sous la direction de), op. cit., pp. 117-132.

第3節 ルクセンブルク市郊外のコルパハのサロン

本節では、クルティウスとジッドが1921年6月に初めて面会をした場所であるルクセンブルク市郊外に位置するコルパハの城館³⁰⁰で営まれていたサロンを論じることにする。

1936年春に彼からジッドに宛てた手紙では、コルパハの城館のことを“隠れ家”であると形容している³⁰¹。そして、この手紙への返事で、ジッドの方は、コルパハのことを“精神と心が浄化され、リラックスするオアシス”と書いている³⁰²。前節で触れたように、1922年のポンティニー論でクルティウスは、ポンティニー修道院を避難所であると指摘したのだから、ポンティニーの旬日会とコルパハのサロンは共通した側面を持っていた。

クルティウスとジッドは、ルクセンブルク人のアリーヌ・マイリッシュが主宰するこのサロンの常連客であった。このサロンは、ルクセンブルク人にとっては有名なものである³⁰³。だが、サロン研究の基本文献であるヴェレーナ・フォン・ハイデン＝リンシュ Verena von der Heyden-Rynsch の『ヨーロッパのサロン 沈没した女性文化の頂点』*Europäische Salons: Höhepunkte einer versunkenen weiblichen Kultur* (1992) では無視されている。クルティウスの批評活動を扱ったミュラーの研究書も、このサロンに関してはきちんと論じていない³⁰⁴。しかし、彼の批評活動を考える上で、このサロンは看過出来ないものである。さらに、アリーの夫であるエミールの存在は、クルティウスにおける“ヨーロッパ精神”が、政治や経済の側面における欧州統合の動きと接点を持っていたことを示す。

まず、1920年の夏からコルパハの城館でサロンを主宰するようになるまでのアリーヌ・マイリッシュの経歴を簡略に触れる。彼女は、1874年に森林業者クサビエ・ドゥ・サン＝ユベール Xavier de Saint-Hubert の娘として生まれた。彼女は裕福な家庭に育ったが³⁰⁵、知識階級出身者ではない。1894年20歳になったアリーヌは、技師のエミール・マイリッシュと結婚する。彼は、1898年に35歳の時には製鉄会社社長に就任する。1911年から、マイリッシュ夫妻は、ルクセンブルク南部の町デュドラランジュの邸宅に住み、多くの客を迎えていた。第一次世界大戦の勃発をきっかけに、マイリッシュ夫妻はルクセンブルク赤十字社を創設し、終戦後も赤十字の活動を精力的に続けた。そして、1917年にマイリッシュ夫妻は、1920年代と1930年代に文化的なサロンを開く³⁰⁶場所となるコルパハの城館を買い取る。

³⁰⁰ 城館の建設は18世紀であり、1870年代以降はパリで活躍するハンガリーの画家ミハリー・ムンカツィ Mihály Munkácsy が避暑や療養のため、この城館に滞在し、フランツ・リスト Franz Liszt も訪れている。

³⁰¹ DFG, S. 134.

³⁰² Ebd., S. 135.

³⁰³ マイリッシュ家はルクセンブルクにおいて王家に次ぐ知名度を持つ家である (Gaby Sonabend, « Aline Mayrisch et Andrée Viénot: deux Luxembourgeoises à Pontigny », in: Anne-Marie Duranton-Crabol, Nicole Racine et Rémy Rieffel (éds.), *Pontigny, Royaume, Cerisy: au miroir du genre*, Paris, Éditions Le Manuscrit, 2008, p. 83.)。

³⁰⁴ Müller, a.a.O., S. 357-359.

³⁰⁵ Gilbert Trausch (éd.), *Le maître de forges Émile Mayrisch et son épouse Aline*, Luxembourg, Banque de Luxembourg, 1998, p. 8.

³⁰⁶ 1940年3月以降、アリーヌは南仏カブリの別荘に滞在し（この別荘の設計はドイツの建築家オットー・

1898年から、アリーヌはブリュッセルの雑誌『近代芸術』*L'Art Moderne* (1881-1914) への寄稿を始めていた。この雑誌に載ったアリーヌのフランス語の論考は、ドイツ語圏の美術や芸術論³⁰⁷、近現代のフランス文学³⁰⁸などに関するものである。1902年にジッドの小説『背徳者』の批評を書いたことをきっかけに、アリーヌとジッドは、パリにあるベルギーの画家テオ・ファン・レイセルベルヘ *Théo van Rysselberghe* の家で知り合うことになる。以後、二人は、長く友情を保った。裕福なアリーヌは、ジッドが深く関わっている雑誌『新フランス評論』に金銭的な援助をした³⁰⁹。彼女は、『新フランス評論』にもドイツ文学に関するものを中心に記事を執筆するようになり、ライナー・マリア・リルケ *Rainer Maria Rilke* の『マルテの手記』*Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge* (1910) やクルティウスの『新しいフランスの文学開拓者達』をフランス語圏で初めて紹介している。

マイリッシュ夫妻がルクセンブルク市郊外のコルパハに移ったのは1920年の夏³¹⁰からである。この城館の環境はどのようなものだったのだろうか。クルティウスは、アリーヌの訃報に接した際、「コルパハは桃源郷[le fairy-land]でした³¹¹。」と書いている。彼がコルパハを桃源郷 *le fairy-land* と形容していることは見逃せないことである。筆者が現地に赴いたところ、コルパハの邸宅は非常に敷地が広く、自然が溢れるものだった。そのため、コルパハの文化的サロンの環境は、ベルリンやパリのサロンよりも、クルティウスの主著で論じられている人文主義者達が集った初期近代におけるメディチ家の別荘や近現代のヨーロッパ各地に点在した芸術家コロニーに近かったのではないかと想像したのである。

また、城館には立派な庭園が備わり、庭師も雇われていた。『ヨーロッパ文学とラテン中世』の牧歌文学に関する部分を、ジャックマール＝ド・ジュモーは、クルティウスのボンの邸宅の庭園や庭いじりの趣味と関連させている³¹²。しかし、ボンの庭園だけでなくコルパハの庭園も主著の牧歌論に影響を与えたと考えるべきである。

アリーヌ・マイリッシュは『新フランス評論』の関係者であったのだから、ポンティニーの会合にも参加したし、デジャルダンやアンヌ・ウルゴン＝デジャルダン³¹³とは活発に

パートニング *Otto Bartning*)、『新フランス評論』の関係者達やドイツの亡命作家達を受け入れた。

³⁰⁷ 雑誌『近代芸術』に発表されたアリーヌ・マイリッシュの美術や芸術論に関する文章は、ベックリン論 (1898)、フランツ・フォン・シュトゥック論 (1898)、フランツ・フォン・レンバッハ論 (1899)、ハンス・トーマ論 (1899)、マックス・クリンガー論 (1899)、エドゥアルト・フォン・ゲーブハルト論 (1900)、ミュンヘン分離派の展覧会評 (1900)、ヴィルヘルム二世と芸術との関わり (1902) である。

³⁰⁸ アリーヌは、1910年、『近代芸術』にペギー論を発表した。さらに、第二次世界大戦中は、中世ドイツの神秘主義者エックハルト *Eckhart* をフランス語に翻訳している (Cf. *Maître Eckhart, Telle était Sœur Katrei... Traité et Sermons*, traduit par Aline Mayrisch-Saint Hubert, Paris, Cahiers du Sud, 1954.)。従って、アリーヌとクルティウスは、キリスト教的神秘主義への知的関心を共有していたと推測される。

³⁰⁹ 芸術作品の価値を判断出来たアリーヌは、自分が価値を認めたものに対してしか援助をしていない。

³¹⁰ 1920年初頭、ジッドはポール・ヴァレリーに、マイリッシュ夫妻が新居にヴァレリーを招待したがっていることを伝えている (*André Gide et Paul Valéry, Correspondance 1890-1942*, Paris, Gallimard, 1955, p. 477.)。

³¹¹ *DFG*, S. 147.

³¹² *Jacquemard-de Gemeaux, Ernst Robert Curtius (1886-1956). Origines et cheminements d'un esprit européen*, op. cit., pp. 382-393.

³¹³ ポンティニーの旬日会は第二次世界大戦中にはアメリカで、戦後直後はロワイヨモン修道院で継続され、1952年以降はノルマンディー地方の古城スリジー＝ラ＝サルで開催される学際的な国際学会に引き継がれた。アンヌ・ウルゴン＝デジャルダンは、スリジー＝ラ＝サル国際文化センターの創設者である。

交流している。それゆえ、ポンティニーとコルパハのサロンの出席者は重なっていた。

ポンティニーとコルパハの比較³¹⁴については、吉井亮雄とギャビー・ゾンアーベント Gaby Sonnabend の論文において触れられている³¹⁵。コルパハがポンティニーと比べ、日程や議論の主題が決まっているのではなく、コルパハの方がより親密な集まりであったことを両者ともに指摘している。前節ではポンティニーの会合の非アカデミック性に触れたが、コルパハのサロンはその傾向が強かったということである。一方、吉井がポンティニーやコルパハの目指したものがポリフォニックなヨーロッパ³¹⁶と考えているのに対し、ゾンアーベントは独仏協調の達成がポンティニーやコルパハの目的としている³¹⁷点がやや異なる。

ポンティニーの理想は、吉井の言うようにヨーロッパであった。しかし、フランス語だけを使用言語とするポンティニーの旬日会が、ポリフォニックなものであるかは不明である。一方、コルパハの場合はポンティニーとは異なり、ヨーロッパ全体から来るというよりは、大部分は、ドイツ、フランス、ベルギー、ルクセンブルクからの来客に集中していた。ポンティニーには参加したイタリアの雑誌『ヴォーチェ』 *Voce* 周辺の人々³¹⁸やブルームズベリー・グループのメンバー達はコルパハの城館には招かれなかったのである。

先行研究では、コルパハの打ち解けた雰囲気というポンティニーとの差異が指摘されている。本稿では、言語的な差異に関して記述する。複数の外国語を使用することはアイデンティティとしてルクセンブルク人の言語意識を高めている³¹⁹。この言語意識が、コルパハでの文化的なサロンにも生かされていてもおかしくない。コルパハに比べ、ポンティニーはより多くの国からの参加者を集めていたことは先ほど述べた。しかしながら、ポンティニーでの使用言語は基本的にはフランス語だけの一言語だった。20 世紀前半には様々なグループが存在したが、グループというものは一つの言語しか使わないものである。

だが、非常に興味深いことに何度もコルパハを訪問し、コルパハ・クライスの核を形成したのは、フランス語とドイツ語の両方を理解出来た人物ばかりなのである³²⁰。建部和仁は、ルクセンブルクでは「会話の途中で一つの言葉から別の言葉へとなめらかに切り替わる」³²¹と書いている。コルパハにおいても、こうした切り替えが頻繁になされていたはず

³¹⁴ 充実した蔵書という点でも、ポンティニー、コルパハ、スリジー＝ラ＝サルは共通している。

³¹⁵ 吉井亮雄「1922 年のポンティニー旬日懇話会：ジッドのポール・デジャルダン宛未刊書簡」（九州大学フランス語フランス文学研究会『ステラ』、第 19 号、2000 年、127-140 頁）、Sonnabend, op.cit., p. 69.

³¹⁶ 吉井、前掲論文、136 頁。

³¹⁷ Sonnabend, op.cit., p. 69.

³¹⁸ アリーヌはイタリア語が苦手だったと推測される。というのは、ルクセンブルク国立文書館が所蔵する第二次世界大戦中の彼女の日記には初歩的なイタリア語を勉強している形跡が見られるからである。

³¹⁹ 木戸「EU が掲げる言語理念とルクセンブルクにおけるその実践 アイデンティティのグローバル化とローカル化」（『京都ドイツ語学研究会』(8)、2009 年、66 頁）。

³²⁰ まず、シュランベルジュ、クルティウス、グレットウイゼンなど独仏国境地帯で育った人々。また、マリー・デルクール Marie Delcourt やジュール・ブルセン Jules Prussen のようなベネルクスの知識人も客人であった。もちろん、フランツ・クレマン Frantz Clément やバティ・ヴェーバー Batty Weber などのルクセンブルクの作家達も出入りしていた。また、フランス人の母親とドイツ人の父親を持つバイリンガルであった作家アネット・コルプ Annette Kolb もこれに当てはまる。さらに、ドイツ語を身に着けたフランス人である、ジッド、リヴィエール、アリーヌの娘婿ピエール・ヴィエノ Pierre Viénot も常連客であった。

³²¹ 建部和仁『小さな大国ルクセンブルク』（かまくら春秋社、2010 年、44 頁）。

であり、あのサロンにおいては使用言語がドイツ語とフランス語両方だったのだ。実際、マイリッシュ夫妻は、ドイツ語とフランス語の両方を流暢に話していた³²²。従って、使用言語はフランス語だけであったポンティニーと比べ、コルパハはドイツ色が強い。

独仏国境地帯で育ったクルティウスにとっても、自分の故郷の環境に近いのはルクセンブルクのコルパハの方であった³²³。彼は、ポンティニーに関しては、1922 年と 1924 年の二回しか訪問していないのに対し、このルクセンブルクの城館は、1920 年代初めから 1930 年代後半まで断続的に通った。このポンティニーとコルパハへの態度の違いは、彼が 1920 年代前半はフランス現代文学の受容に没頭していたが、1930 年前後には、フランス現代文学とは距離を置くようになることに対応することである。

続いて、アリーヌ・マイリッシュの夫である実業家エミール・マイリッシュのことに触れることにする。欧州統合史は、二度の世界大戦という悲劇を繰り返さないために、まず石炭と鉄鋼の共同市場を目的とした、1951 年の欧州石炭鉄鋼共同体が設立されたという風に語られる。この石炭と鉄鋼の共同市場の創設にエミールの業績は深く関わっている。

1870 年代にルクセンブルクの南部で鉄鉱石の豊かな鉱脈が発見されて以来、以後百年間はルクセンブルクの近代工業は製鉄業を軸として発展した。エミール・マイリッシュは 1862 年に生まれている。彼はアーヘン工科大学などで鉱業に関する勉強をした後、製鉄会社の社員となる。彼は 1911 年には外国の重工業に対抗するためにルクセンブルクの製鉄会社の企業合同を行い、新たに国際的巨大大企業である製鉄会社アルベットの誕生させ、初代会長に就任する。また、ジルベール・トラウシュ Gilbert Trausch によると、1923 年のフランスとベルギーによるルール占領を和解させる仲介者の役割を果たしたのがエミールであり、独仏の和解を目指す彼の運動は 1925 年以降のロカルノ体制に引き継がれた³²⁴。彼はこの運動のメディア戦略のために 1922 年に『ルクセンブルク新聞』を買収し、彼の妻アリーヌはコルパハの常連客であったクルティウスなどの知識人に記事の執筆を依頼した。このように、マイリッシュ夫妻の活動には結び付いていた部分があるのである³²⁵。

欧州を統合しようとするエミールの運動は、クーデンホーフ＝カレルギーの汎ヨーロッパ運動と結び付きながら³²⁶、1926 年には二つの成果を上げることになる。一つは、独、仏、ベルギー、ザール、ルクセンブルクの鉄鋼業の間での国際的カルテルの成立であり、もう一つは独仏協調に関連した国際会議や講演をオーガナイズするマイリッシュ委員会の設立である。つまり、本論文第 5 章で扱うオルテガが『大衆の反逆』で主張した欧州統合をエミールは実行したのだ。クルティウスやシュランベルジェなどの文学者達もマイリッシュ委員会に協力した。マイリッシュ委員会の関係者の多くがロベール・シューマン Robert

³²² Dröge, „Ernst Robert Curtius und Colpach“, in: *Galerie*, numéro 1, Luxembourg, 1988, S. 27.

³²³ Dröge, « Avec Goethe, contre Berlin », op. cit., pp. 203-204.

³²⁴ ジルベール・トラウシュ『ルクセンブルクの歴史』（岩崎允彦訳、刀水書房、1999 年、131-133 頁）。

³²⁵ Vgl. Léa Scholl, *Aline und Émile Mayrisch-de St. Hubert und der Europadiskurs in der Zwischenkriegszeit*, Albert-Ludwigs-Universität Freiburg i. Br., 2010.

³²⁶ Saint-Gille, *La Paneurope*, Paris, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, 2003, p. 144.

Schuman やジャン・モネ Jean Monnet の下で働いていた³²⁷という事実は、クルティウスの主著によるヨーロッパの追求が、社会科学の側面での欧州統合の動きと連動していた可能性を感じさせるものである。1951 年には、シューマンらが中心となり、ライン河流域の国々を中心に欧州石炭鉄鋼共同体が設立されるが、ドメニチェリによってこの経済統合の成立とこのクルティウスの主著の出版がほぼ同じ時期であることが指摘されている³²⁸。

本節では、前節で扱ったポンティニーの旬日会と関連しているルクセンブルクのサロンについて論じた。1920 年代の文学や芸術は、モダニズムの発展との関連で、大都市の文化を中心に語られるのが常である。しかし、戦間期において、ポンティニーやコルパハといった豊かな森林のある地方において、社会科学の側面での欧州統合と結び付けることが出来るような知識人達による文化的運動があったのであり、クルティウスやジッドはこの運動の関係者であった。次節では、ポンティニーの旬日会やコルパハのサロンが何度も話題になるクルティウスとジッドの書簡に注目することにしたい。

第 4 節 クルティウスとジッドの往復書簡

本節では、クルティウスの“ヨーロッパ精神”の形成過程を、クルティウスとジッドの間の往復書簡を通して検討していくことにする。1920 年の夏から 1950 年の秋まで交わされたクルティウスとジッドの往復書簡の分量は多く、『ヨーロッパ文学とラテン中世』のことも言及されており、書簡を通じて、独仏間の政治的緊張関係やクルティウスの知的関心の変化や“ヨーロッパ精神”の形成過程を我々は容易に確認することが出来る。

この主題に関する先行研究であるライムント・タイス Raimund Theis の『最良のフランスを探し求めて クルティウスのジッドやデュ・ボスとの書簡をめぐる』*Auf der Suche nach dem besten Frankreich. Zum Briefwechsel von Ernst Robert Curtius mit André Gide und Charles du Bos* (1984) の第 1 章³²⁹では、『新しいフランスの文学開拓者達』が執筆された頃の政治的状況や 1920 年代初頭の書簡は詳しく論じられているが、1920 年代後半以降の書簡や『ヨーロッパ文学とラテン中世』については全く触れられていない。

クルティウスは、『新しいフランスの文学開拓者達』で一章をジッド論に捧げた。ジッドがこの本の存在を知ったのは 1919 年 10 月である。彼はアリーヌ・マイリッシュへの手紙でこの本について話題にしている³³⁰。クルティウスとジッドの書簡は、『田園交響楽』がクルティウスに献本されたことをきっかけに、1920 年 8 月 11 日に始まった³³¹。ジッドの計ら

³²⁷ Carlo Hemmer, « Actualité d'Émile Mayrisch », in: Robert Stumper (éd.), *Colpach*, Luxembourg, Amis de Colpach, 1957; repr. 1978, p. 46.

³²⁸ Domenichelli, “Le macerie d'Europa, The Waste Land, Das wüste Land”, in: Paccagnella e Gregori (a cura di), op. cit., p. 156.

³²⁹ Raimond Theis, *Auf der Suche nach dem besten Frankreich. Zum Briefwechsel von Ernst Robert Curtius mit André Gide und Charles du Bos*, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1984, S. 9-50.

³³⁰ André Gide et Aline Mayrisch, *Correspondance 1903-1946*, Paris, Gallimard, 2003, p. 160.

³³¹ DFG, S. 19.

いで、クルティウスは『新フランス評論』関係の様々な出版物を受け取るようになる。

1921年5月12日のジッドからクルティウスの手紙では、アリーヌ・マイリッシュが自分の住むルクセンブルクの城館に招待していることをこのように知らせている。

Me permettez-vous de vous transmettre l'aimable proposition que me font des amis du Grand-Duché de Luxembourg. Madame M. de S. H. dont peut-être vous aurez lu quelques articles sur l'Allemagne, dans *La Nouvelle Revue Française*, sous la signature d'Alain Desportes et en particulier un article sur votre livre – sachant le vif plaisir que j'aurais à vous rencontrer – me propose de vous inviter, ou plus exactement: me prie de vous inviter de sa part – de vous demander s'il vous serait possible et agréable de venir passer un ou deux jours dans sa propriété du Grand-Duché – où vous me retrouveriez³³².

ルクセンブルク大公国の友人達による親切な提案をお伝えさせてください。多分あなたも『新フランス評論』にアラン・デポルトというペンネームで執筆されたドイツに関するいくつかの論考を、特にあなたの著書に関するものをお読みになったと思いますが、あれらを書いたアリーヌ・マイリッシュが、あなたにお会いできた場合の私の激しい喜びを分かちあなを招待することを私に提案しています、というかより正確に言えば、彼女の方からあなたを招待することを私に頼んでいます、つまり、可能でありお気に召すのならルクセンブルク大公国の城館で一日か二日過ごして私と会うことを頼んでいるのです。

この手紙は、アリーヌのおかげで、そして、ルクセンブルクで、クルティウスとジッドが個人的な接触を初めて持つことが出来たことを示す。本論文第1章第1節などでも触れたように『新しいフランスの文学開拓者達』をフランス語圏で紹介したのも彼女であった。

マイリッシュ夫妻の住む城館のあるルクセンブルクのコルパハでの1921年6月の出会い³³³について、翌月の7月21日にクルティウスはジッドにこのような手紙を送っている。

Auch ohne daß ich es ausdrücklich sage, werden Sie empfunden haben, wie ungemein bedeutungsvoll und beglückend mir das Zusammentreffen mit Ihnen in dem gastlichen Colpach gewesen ist. [...] Es war mir seltsam und erschütternd, wie aus Ihren gesprochenen und geschriebenen Worten die Lebensfrage auftauchte, die auch bei uns in so vielen Herzen brennt: die Auseinandersetzung zwischen Griechischem und Christlichem. Und dazu die Konvergenz – ich darf sagen, das Einverständnis – in der Betrachtung der geistigen Beziehungen zwischen unsern Völkern³³⁴.

はっきりと言わなくても手厚くもてなされたコルパハで、あなたとお会いしたことが私にとって、どれだけ大変に意義があり喜ばしいことなのか、お感じになることでしょう。[...]

³³² Ebd., S. 28.

³³³ Cf. Gide, *Journal I 1887-1925*, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1996, p. 1130.

³³⁴ DFG, S. 30.

あなたが口に出され手で書かれる言葉から我が国でも多くの人の心において燃えている生
の問題、つまり、ギリシア的なものとキリスト教的なものとの間の対決が浮かび上がって
いく様子は、私には不思議で深く感動的でした。また、それに加えて、我々二つの民族の
間においての知的な関係の考察における収斂のことで、合意と言っていいかもしれません。

このようにクルティウスからの手紙は、当初、ドイツ語を使用して執筆されていた。ジッ
ドと実際に会えたことが、彼にとって忘れ難い体験であったことが語られている。この手
紙は、二人がマイリッシュ邸で交わした会話には、伝統的な文化に関するものが含まれて
いたことを示す。また、引用部分末尾では、ドイツの知識人が、フランスの作家と友好的
関係を築こうとしている姿勢を、我々は読み取ることが出来る。

1921 年 6 月に個人的に知り合った二人は、書簡の遣り取りを通じて、お互いの著作やお
互いの国の作家達への理解を深めていく。この年の 10 月 22 日にジッドはクルティウスに
宛てた手紙で、ポンティニーの旬日会に参加することを提案する³³⁵。さらに、1922 年 3 月
28 日の手紙では、ジッドはポンティニーのプログラムを具体的に伝えている。

Je vous envoie une petite brochure. Elle a trait aux Entretiens de Pontigny, dont il me semble bien
vous avoir parlé à Colpach. Nous sommes plusieurs à souhaiter vivement votre présence (et celle de
Rilke) et je ne puis croire que vous-même n'auriez pas grand intérêt et plaisir à vous trouver parmi
nous, assuré de la parfaite cordialité de tous – et de rencontrer là diverses personnalités anglaises
(sans doute Wells, Galsworthy, Bennett et Lytton Strachey), suisses, russes, etc – italiennes et
scandinaves. Nous estimons que cette réunion ne prendra sa parfaite signification et ne sera vraiment
intéressante que si l'Allemagne est elle aussi représentée³³⁶.

小さな冊子をお送りします。これはポンティニーの懇話会に関するもので既にコルパハで
お話したように思います。我々は、あなたやリルケに参加していただきたいと強く願っ
ています。そして私の方は、あなたご自身が我々と会うことに大きな関心や楽しみを持たれ
ないとは思えません。あなたは我々みんなから本当に歓待され、ポンティニーでは、おそ
らくウェルズ、ゴールズワージー、ベネット、リットン・ストレイチーといった英国人、
スイス人、ロシア人、イタリア人、スカンディナヴィア人の色々な人物達にも会うことは
確実です。我々は、ドイツの代表者も出席しないのなら、この会合は完全なる意義を持た
ないでしょうし真に興味深いものにならないと、思っています。

二人が初めて会った時にポンティニーの旬日会は話題になっていたのである。この手紙は
ジッドの外国の文化人達への強い好奇心を物語ると共に、ポンティニーの旬日会の関係者
達がドイツからの参加者を集めるのに苦労していたことを伝えている。参加を呼びかけて

³³⁵ Ebd., S. 41.

³³⁶ Ebd., S. 55.

いる人物達には、リルケ、ハーバート・ジョージ・ウェルズ Herbert George Wells、ジョン・ゴールズワージー John Galsworthy、アーノルド・ベネット Arnold Bennett のように実際には参加することがなかった者も含まれているのは、この会合が党派性とは無縁ではなくポンティニーのような知的共同体は簡単に理想的な顔触れにはなれなかったことを示す。

これに対しクルティウスが出した返事には、プログラムの冊子の中身でドイツ人への敬意が欠けていることを述べ、これを改めるのなら参加してもいいと書き送っている³³⁷。ドイツ人への敬意が欠けていることは、ポンティニーとコルパハの差異の一つであった。ジッドや主催者のデジャルダン是要望に応え³³⁸、クルティウスは参加することになる。

1922 年の旬日会が終了して約三ヶ月後、クルティウスは感謝の手紙を送った。

Vous pouvez difficilement vous rendre compte de tout ce que le séjour de Pontigny a signifié pour moi. C'était une reprise de contact avec la France – chose vitale pour moi. Quel souvenir harmonieux et serein! J'ai puisé là du courage et des forces nouvelles. Je me suis senti comblé de bienveillance et de délicatesse. Je vous remercie de tout cœur de m'avoir convié aux Entretiens. J'espère rester en relations avec vos amis que j'ai connus à Pontigny. Monsieur Desjardins m'a écrit une charmante lettre. J'espère aussi avoir des nouvelles de Schlumberger et de Du Bos auxquels j'ai écrit. [...] Le jeune Heurgon m'a écrit une gentille lettre³³⁹.

ポンティニー滞在が私にとって意味したことの全てを理解するのは、あなたには難しいでしょう。あれはフランスとの接触の再開であり私には重大なことでした。何という調和的で澄み切った思い出でしょう。あそこで勇気と新たな力を汲み取りました。好意と繊細さに満たされていると感じました。心から懇話会に招いてくれたことを感謝します。ポンティニーで知り合ったあなたの友人達と今後も付き合いたいと思っています。デジャルダン氏から魅力的な手紙を受け取りました。私が手紙を書いたシュランベルジェやデュ・ボスの近況も知りたいと思います。[...] 若いウルゴンを感じのいい手紙を送ってくれました。

クルティウスは『新しいフランスの文学開拓者達』を発表した後、ロマン・ロランやジッドを除き、フランスの作家達と個人的な付き合いをしていたわけではなかった。しかし、この手紙は、ポンティニーの旬日会をきっかけに『新フランス評論』の作家達の仲間に加わったことを示す。引用部分末尾に触れられているウルゴンというのは、デジャルダンの婿となる、古典文学を専門とする研究者ジャック・ウルゴン Jacques Heurgon のことである。ウルゴンとの交友は、主著に結実するクルティウスの古典研究を促したと推測される。

第 2 節でも触れたように、1923 年に開催されたポンティニーの旬日会をクルティウスは欠席した。ジッドは、ポンティニーから彼の不在を残念がる手紙を 9 月 1 日に書き送って

³³⁷ Ebd., S. 56-58.

³³⁸ Gide, *Correspondance avec Paul Desjardins, Jacques Heurgon & Anne Heurgon-Desjardins*, Paris, Éditions des Cendres, 2011, pp. 37-40.

³³⁹ DFG, S. 62.

いる³⁴⁰。これに対し、以下のような返事の手紙をクルティウスは出している。

En 1924 je compte fermement venir à Pontigny, au mépris des scrupules qui m'ont retenu cette année-ci. Il faut s'affranchir de certaines vertus, fussent-elles patriotiques. Qu'il faut de temps pour former les Européens vraiment libres!³⁴¹

1924 年には、今年は思い留まらせた色々な懸念を無視して、私は断固としてポンティニーに行くつもりです。たとえ愛国的なものであるとしても、ある種の美德から自由にならなくてははいけません。本当に自由なヨーロッパ人を作り上げるには、時間がかかります。

この手紙には独仏が政治的に対立する中、ポンティニーの旬日会への参加を見送ったクルティウスの葛藤が表れている。また、これは、彼が最初からヨーロッパ人であったのではなく、徐々に“ヨーロッパ精神”を身につけていったことを感じさせる手紙である。

1924 年のポンティニーにクルティウスは出席するが、ジッドは小説の執筆のために欠席する³⁴²。彼は、旬日会の終了直後の 9 月 17 日にジッドにこう書き送っている。

Ce n'est pas sans quelque peine que je me suis réadapté au milieu allemand. Je continuais les premiers jours de vivre en France, et je ne veux pas cesser d'y vivre³⁴³.

ドイツの環境に再び適応したのは、容易なことではありません。最初の数日、フランスにいる時の生活を続けました。私は、フランスにいる時の生活を止めたくないのです。

彼はフランス的な生活への愛着を語っている。これは、1924 年のポンティニー論で、フランスの社交的生活の伝統を称えていることと対応することである。

クルティウスは 1924 年を最後にポンティニーの旬日会には参加しなくなるが、二人の文通は続く。彼らの書簡では、旅行体験、読書、時事的な動きなどが、話題になる。一方、1927 年 4 月 17 日の手紙で、クルティウスは自分の宗教観を打ち明けている。

J'apprends que vous me croiriez »converti«, c'est-à-dire catholique. C'est un bruit qui reprend régulièrement, mais c'est une erreur. Je suis chrétien, et les mystiques n'ont jamais cessé de m'attirer. Mais je ne pourrai jamais me rallier à l'Eglise romaine³⁴⁴.

あなたは私が改宗した、つまり、カトリックであると思っているかもしれないことを知っています。これは、定期的に再び起こる噂ですが、間違いなのです。私はキリスト教徒です。そして、神秘的なものは私を惹きつけることを決して止めません。しかし、私がローマ教会に加盟することは決して出来ないでしょう。

³⁴⁰ Ebd., S. 69-70.

³⁴¹ Ebd., S. 70.

³⁴² Ebd., S. 74-75.

³⁴³ Ebd., S. 79.

³⁴⁴ Ebd., S. 86.

クルティウスは、神秘的なものに対する興味は認めつつもカトリック教徒ではないことを述べている。この一節は、ジッドがプロテスタントであることを配慮して書いたものであろう。『ヨーロッパ文学とラテン中世』では宗教的な作品も多く論じられているが、この引用部分では彼はローマ教会への所属を否定している。

1927 年春にジッドはハイデルベルクに住むクルティウスを訪問する。この時、彼は現地で記した 5 月 12 日の日記で、クルティウスの肖像を描いている。

Conversations « infinies », avec Ernst Robert Curtius. Je me sens souvent plus près de lui que peut-être d'aucun autre; et non seulement je ne suis pas gêné par notre diversité d'origine, mais ma pensée trouve un encouragement dans cette diversité même. Elle me semble plus authentique, plus valable, lorsqu'au contact de la sienne je me persuade qu'il n'était pas besoin de telle culture particulière pour la produire et que, partis tous deux de lieux si différents, nous nous retrouvons sur tant de points. Enfin je trouve en lui, dans son regard, dans le ton de sa voix, dans ses gestes, une douceur, une aménité, une bonté comme évangéliques à quoi répond de plus en plus ma confiance³⁴⁵.

クルティウスとの“いつ果てるとも知れぬ”会話。しばしば私は、多分、自分が他の誰よりも彼のそばにいて感じている。単に出身国の違いで窮屈であるということがないだけでなく、むしろ私の思考は、まさに、この出身国が違うことの中に鼓舞するものを見出す。彼の思考に接すると自分の思考が生まれるために何も特別な文化を必要としなかったことを納得し、あれほど異なる場所から出発した二人が多くの点で自分達を再び見出す時、私には自分の思考が一層正しく一層もっともであるように思われる。結局、私はクルティウスの中に、彼の視線の中に、彼の声の調子の中に、彼の仕草の中に、まるで福音にかなった穏やかさ、柔和さ、優しさを見つけて、それに対して、ますます信頼を覚える。

クルティウスに対する全幅の信頼が表現されている。二人の交流はドイツ人とフランス人の国籍の違いが、コンフリクトではなく創造的なものを生み出している稀有な例と言える。

この滞在の充実を踏まえ、1928 年 11 月 26 日にローマから送られたクルティウスからの手紙では、ハイデルベルク大学での講演に関する提案がなされる³⁴⁶。結局のところ、ジッドは健康状態を理由にこの講演を断るが³⁴⁷、1930 年代に入ってもこのフランスの作家とドイツのロマニストの書簡を通じた対話は継続されることになる。

1930 年 5 月 5 日にジッドからの手紙では、クルティウスのゲーテ論に関して、好意的な意見が述べられる³⁴⁸。また、翌月の手紙でもジッドはゲーテをこう語っている。

³⁴⁵ Gide, *Journal II 1926-1950*, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1997, p. 36.

³⁴⁶ DFG, S. 87-88.

³⁴⁷ Ebd., S. 90.

³⁴⁸ Ebd., S. 102.

Goethe est, décidément, l'esprit avec lequel je me sens le plus d'affinités, de parenté, auquel je m'abandonne le plus volontiers, et près duquel je viens puiser l'encouragement le plus cordial et salubre³⁴⁹.

全くゲーテは私が最も近親性や血族関係を感じる精神で、私は大変喜んで身を委ねますし、本当に心からの有益な激励を汲み取りに近づくのです。

ゲーテは、クルティウスの主著で頻繁に言及される存在である。ジッドのゲーテへの賛辞は、以後、繰り返されることになる。それゆえ、クルティウスのゲーテ研究は、ジッドによって促された部分があったであろう。例えば、1930年7月の手紙でジッドがゲーテの『詩と真実』*Dichtung und Wahrheit*における言語表現の美しさを話題にすると、クルティウスはこの作品の新鮮さや豊饒さを再発見すると共に、若者の古典文学離れを嘆くのである³⁵⁰。

ゲーテも含めた古い時代の作家達の作品に関する記述が1930年代の二人の書簡では増えていく。ジッドがミシェル・ド・モンテーニュ Michel de Montaigne における人間の内部への観察眼を評価していたことはよく知られている³⁵¹。1931年6月のジッドへの手紙でクルティウスは、このモラリストについて書いている。

Je pense beaucoup à vous ces derniers temps car j'explique Montaigne à mes élèves. Je ne l'avais jamais bien lu, et maintenant c'est une véritable découverte. Quel admirable et subtil bonhomme et comme l'on se prend à regretter que les Malherbe, les Descartes, les Corneille aient barré la route royale ouverte par Montaigne et qui aurait pu conduire à tant de belles choses, non moins spécifiquement françaises certes que le classicisme maigre et hargneux des héros pour manuels³⁵².

私は近頃しきりにあなたのことを考えています、というのは学生達にモンテーニュを解説しているからです。これまで私は彼の本を全然よく読んでいませんでした。そして目下のところ本当に発見しています。何という見事で鋭敏な男でしょう。かの有名なマレルブ、デカルト、コルネイユといった人々がモンテーニュによって切り開かれた王道を塞いだのです。モンテーニュならマニュアルに向いた主人公達のつまらなくて邪険な古典主義よりも、疑いなく特定のフランス風の多くの素晴らしいものに導くことが出来たでしょう。

彼はモンテーニュを称え、フランスの古典主義を否定的に語る。カリンが指摘するように³⁵³、彼は主著ではフランスの古典主義に高い評価を与えていない。このクルティウスの告白は、このような文学観を1931年の時点で彼が持っていたことを示す。

³⁴⁹ Ebd., S. 103

³⁵⁰ Ebd., S. 109.

³⁵¹ Cf. Frank Lestringant, « Michel de Montaigne (1533-1592) », in: Pierre Masson et Jean-Michel Wittmann (sous la direction de), *Dictionnaire Gide*, Paris, Classiques Garnier, 2011, pp. 262-265.

³⁵² DFG, S. 115.

³⁵³ Calin, op. cit., p. 142.

この手紙から約二ヶ月後の8月20日にジッドに送られた手紙の末尾で、彼は数週間スペイン研究に没頭していたことを伝えており³⁵⁴、これは、フランスの古典主義への低い評価と連結していることかもしれない。また、1932年3月15日の手紙では、クルティウスのスペインへの講演旅行のことが記されており³⁵⁵、二人の書簡においても、高まりつつあるクルティウスのスペイン研究の情熱を読み取ることが出来る。

1930年代前半の書簡では、ジッドの戯曲『オイディプス』*Œdipe* (1931) やクルティウスの『危機に立つドイツ精神』(1932) が話題になる。二人は、1934年の年末にローマで会う。その直後のクルティウスの手紙では、次のような文章で終わられている。

Je vous écris ces quelques mots dans un sentiment de gratitude et dans l'espoir de pouvoir renouveler avec vous un dialogue que Rome favorise plus que Pontigny³⁵⁶.

私は、感謝の気持ちとポンティニーよりもローマが促した対話をあなたと継続することが出来ることを期待して、この手紙を書いています。

フランス的なポンティニーにジッドと参加するよりも、ローマで会うことを優先したい気持ちを語っている。約二年後の手紙でも、ジッドにローマで面会することを提案する³⁵⁷。

第二次世界大戦中は検閲されることもあり、二人は手紙の遣り取りをしていない。

戦後の1946年9月21日の手紙で、クルティウスは、主著を準備していることに触れている³⁵⁸。この本の執筆のための読書を、彼は戦争中に行っていたのだ。

コルパハのサロンを主宰していたアリーヌ・マイリッシュが1947年1月20日に亡くなった直後の2月6日に、彼女を追悼する手紙をクルティウスは、書き送っている。

C'est là que je vous ai rencontré, c'est de là j'ai gagné Pontigny. C'est elle qui m'a fait prendre contact avec la France réelle... [...] Mais je me trouve dépaycé dans les Revues françaises que je vois ici. Je ne me fais aucune idée de la France actuelle... [...] Mes »amitiés françaises« se sont éteintes: par la maladie, la mort, la prison ou tout simplement le silence. Il ne reste que vous – et Jacques Heurgon. [...] Je travaille – source inépuisable de bien-être intellectuel. Mais c'est sur Dante, sur le moyen âge où je me suis cantonné depuis dix ans. Je n'éprouve plus le besoin de suivre l'actualité littéraire³⁵⁹.

私があなたと会ったのはコルパハです。ポンティニーに辿り着いたのは、あそこからでした。私に現実のフランスと接触させたのは、アリーヌ・マイリッシュなのです。[...] しかし、ここで私が見ているフランスの雑誌群に違和感を覚えています。私は現代のフランス

³⁵⁴ DFG, S. 117.

³⁵⁵ Ebd., S. 129.

³⁵⁶ Ebd., S. 134.

³⁵⁷ Ebd., S. 136.

³⁵⁸ Ebd., S. 145.

³⁵⁹ Ebd., S. 147-148.

について何も心に描いていません…。[…] 私の“フランス人達との友情”は、消えたのです、それは病気、死、懲役によるものか、単に沈黙によるものです。あなたとジャック・ウルゴンとの友情しか残っていないのです。[…] 私は研究をしており無尽蔵の知的な満足感に浸っています。正にそれは、10 年前から私が閉じこもって続けている、ダンテに関する研究であり、中世に関する研究です。もう文学の現況を追う必要を感じていません。

引用部分の冒頭で彼は、ジッドを含めた“現実のフランス”との接触が、アリーヌ・マイリッシュの存在なしに考えられないことを記している。ジッドと知り合った 1920 年代初頭のクルティウスは、“現代のフランス”の文学を食欲に読んでいた。だが、ここでは、もう彼がフランスの雑誌に掲載される現代文学には無関心になり、フランスの同時代人達との絆がなくなりかけていることが語られている。また、中世文学の研究を“閉じこもって”進めたことを彼は綴っている。この“閉じこもり”は、戦争中の内的亡命を物語る。

この手紙に対しジッドは、ダンテやウェルギリウスを再読していると書き送る³⁶⁰。これを受け、クルティウスは、ウェルギリウスに関して意見を述べている。

Et vous avez relu Virgile! Vous avez dû le pratiquer jadis. Tityre, Ménalque, Corydon etc. en font foi. Je souhaite ardemment que vous nous donniez quelques pages sur Virgile, ce serait une »revaluation« personnelle. Vous avez certainement des vers préférés qui serviraient de point de départ. J'estime que ramener des lectures à Virgile serait rendre un service à la culture bien supérieur aux recherches métaphysiques où semblent se complaire certains contemporains. Mais il faut le retirer aux professeurs³⁶¹.

そして、ウェルギリウスを再読されましたね。あなたは、かつて彼の作品に親しまれたに違いありません。ティティル、メナルク、コリドンなどの登場人物が証明しています。あなたがウェルギリウスに関して数頁の文章をお書きになることを熱望します。それは、独自の“再評価”になるでしょう。あなたは彼の作品に出発点の役目を果たすようなお気に入りの詩句を間違いなく持っておられます。読者をウェルギリウスに連れ戻すことが、現代のいくらかの人々が満足を覚えているように思われる形而上学的な探求に必ず勝る文化への貢献になるでしょうと思います。正に、彼を教授達から取り戻さなくてはなりません。

ティティルは『パリュード』の主人公であり、メナルクは『背徳者』の主人公の友人である。クルティウスは、ジッド作品にウェルギリウスからの影響を指摘する。さらに、古典文学から離れた現代人にこの桂冠詩人への興味を持ってもらうために、実作者であるジッドにウェルギリウス論を執筆することを頼んでいる。引用末尾には、ウェルギリウスを語る教授達が批判されている。これは、本論文の序論の第 2 節で引用した、主著の英語版の

³⁶⁰ Ebd., S. 149.

³⁶¹ Ebd., S. 150.

序文において、学者よりも一般人に向けて書いていると宣言していることと関連する。

ウェルギリウスなどの古典文学にジッドが精通していたからこそ、クルティウスは『ヨーロッパ文学とラテン中世』の執筆状況を 1947 年 10 月 6 日の手紙で報告している。

J'ai trouvé en Suisse un éditeur qui consent à imprimer le gros bouquin auquel je suis attelé depuis dix ans. L'impression (un vol. de 600 à 700 pages) doit commencer ce mois-ci. Mais il manque encore quelques chapitres de la fin. Je suis en train de les écrire, ce qui me force à économiser strictement mon temps et mes forces de travail... Après, d'autres travaux m'attendent, réclamés par des revues depuis longtemps³⁶².

私はスイスで、この 10 年の間私が取り組んでいる分厚い本を出版することを承諾している出版社と会いました。600 頁から 700 頁くらいになるこの本の印刷は、今月始まるはずですが、しかし、まだ最後の数章が欠けています。私は現在それらを執筆している最中で、これは私の時間と仕事の気力を厳しく節約することを強いています…。その次には、その他の仕事私を待っており、長らく前から雑誌の編集者達から求められているのです。

この引用部分により我々は、クルティウスが主著が出版される直前まで手直ししていたことを知ることが出来る。主著が完成していない段階で、様々な雑誌の文芸批評の執筆を依頼されていたことは、彼における文献学と文芸批評の連続性を示すものかもしれない。

1948 年に刊行された『ヨーロッパ文学とラテン中世』を受け取ると、ジッドは 1949 年の春に、感想を著者に書き送っている。

..., je n'ai pu résister à l'appel du gros volume et j'ai déjà grignoté de-ci, de-là, maintes bribes très savoureuses et instructives. De vous seul on était en droit d'attendre un tel livre: il y fallait votre prodigieuse érudition; jamais abstraite et sèche, elle réchauffe le cœur et »porte à la tête« comme un vin généreux. Ah! Comme vous parlez bien de Virgile! Quels rapprochements inattendus (qui m'enchantent) avec Montesquieu...³⁶³

…あなたの大著からの誘いに抵抗することが出来ませんでした。そして既に、この本の大変趣があり為になる多くの断片のここかしこを少しずつ味わいました。人は、あなた一人だけから、こうした本を期待する権利がありました。そこにはあなたの驚異的な学識が必要でした。あなたの学識は決して具体性を欠いたものでも面白味のないものでもなく、心を温め上質なワインのように“酩酊させる”のです。ああ、何と上手にウェルギリウスについて語っているのでしょうか。モンテスキューとの思いがけぬ比較は私を魅惑します…。

このようにクルティウスの主著はジッドから高い評価を受けた。実作者であるジッドがク

³⁶² Ebd., S. 156.

³⁶³ Ebd., S. 172.

ルティウスの学識が上質なワインのようなものであると言っているのだから、彼は『ヨーロッパ文学とラテン中世』を、研究書というよりは作品であると見做しているのだ。

第5節 結論

クルティウスは、処女作『新しいフランスの文学開拓者達』で一章をジッド論のために割り、ジッド文学の特徴をフランスの伝統である古典主義であるとした。アリーヌ・マイリッシュが、このジッド論が含まれている『新しいフランスの文学開拓者達』を『新フランス評論』で紹介したことをきっかけにクルティウスとジッドの友情は始まった。

長い期間に及んだ二人の書簡には、当時のドイツとフランスの政治的緊張関係、クルティウスの現代フランス文学や古典文学に対する知的関心の変化が反映されている。ジッドが文芸批評や翻訳も発表するような知識人作家であったからこそ、彼がクルティウスの数々の著書を理解し、相互に影響を与えるような対話を続けることが出来た。

本論文の主題であるクルティウスにおける“ヨーロッパ精神”の形成過程において、20世紀前半のフランス文学の代表的作家であるジッドは大きな意味を持っている。二人は、国際的な集いであったポンティニーの旬日会やコルパハのサロンの出席者であった。

二つのポンティニー論においては、フランス語を使用言語とするコスモポリタニズムによるヨーロッパが称えられた。だが、こうした18世紀的なヨーロッパに距離を置くようになったために、クルティウスは1925年以降、ポンティニーの旬日会に参加していないのである。

一方、アリーヌ・マイリッシュが主宰したサロンは、ポンティニーと同じようにヨーロッパ的であり、クルティウスやジッドのようなドイツ、フランス、ベルギーの知識人や作家にとって隠れ家やオアシスの役割を持っていた。1920年代後半にはポンティニーとは距離を置いたクルティウスが、このサロンには1930年代も断続的に通ったことは、このサロンがポンティニーと比べドイツ的であったことと関連することである。

実業家エミール・マイリッシュは経済や政治の側面で、クーデンホーフ＝カレルギーなどと共に、1920年代における欧州統合に貢献した。従って、クルティウスの批評活動をマイリッシュ夫妻に近づけてみると、彼における空間的な“ヨーロッパ精神”の形成をロカルノ体制という文脈の中で位置付けることが可能になる。

第4章 フーゴー・フォン・ホフマンスタール論

第1節 文学的伝統の継承者ホフマンスタール

クルティウスにとって、同時代の文学者であるホフマンスタールは、どのような存在だったのだろうか。この点を理解するために、雑誌『タート』に1949年に発表された批評「ゲーテ その世界の根本的特徴」„Goethe – Grundzüge seiner Welt“の一節を引用する。

Originalität auf dem festen Grunde der Überlieferung: sie bezeugt sich in Dante, in Shakespeare, in Racine, in Goethe selbst. In unsern Tagen in Hofmannsthal. Sie reift wie eine Frucht dem Dichter und dem Weisen. Nur ihnen. Wer der Überlieferung anhängt, wer die Tradition verteidigt, ist immer unpopulär. Ich brauche nur an die grotesken Fehlurteile über Hofmannsthal zu erinnern, die seit zwanzig Jahren im Schwange sind³⁶⁴.

伝承の確固たる基礎の上にある独創性。これは、ダンテ、シェイクスピア、ラシーヌにおいて、ゲーテ自身において証明されている。我々の時代においてはホフマンスタールにおいてそうだ。この独創性は、詩人や賢人においては一つの世界を实らせることになる。ただ彼らだけに。伝承を信奉する者や伝統を擁護する者は、常に大衆受けしない。20年来広まっているホフマンスタールに関する奇怪な誤った判断を私は思い出さねばいい。

ゲーテにおける独創性と伝統の繋がりが触れられている。引用文中の“ゲーテ自身”という形容がなされているのは、そのためである。この論考において、クルティウスは、ダンテらと同じく伝承の確固たる基礎の上にある独創性を持っていた彼の同時代人として、ホフマンスタールの名を唯一挙げる。第3章第4節で、ジッドがクルティウスのゲーテ受容に影響を与えたことに触れた。しかし、このゲーテ論でホフマンスタールの名を挙げているのは、ホフマンスタールの方がジッドよりも伝統を生かした創作を行ったと彼が考えているからであろう。従って、この引用部分は、文学的伝統を継承したホフマンスタールにクルティウスが高い評価を与えたことを示している。この論考で彼が文学的伝統を語るのは、この文章が主著を完成させた直後に書かれた事実と関連することである。

クルティウスは、教養人ホフマンスタールの作品における過去の文学への言及を理解できた数少ない読者だった。彼が、世界文学の探求を熱心に行っていたからである。細かいホフマンスタール研究が進んでも、彼を凌駕するような外国語能力と学識を持った文学研究者は、今後も多くはないだろう。そこに彼のホフマンスタール論の存在意義がある。

本論文で、クルティウスとホフマンスタールの関係に光を当てるのは、ホフマンスタールが“偉大なる精神のコスモポリタン”であったからである³⁶⁵。ドゥテュランスは、ホフ

³⁶⁴ KEEL, S. 78.

³⁶⁵ Ebd., S. 120.

マンスタールがヨーロッパの理念に関する総括を思い切って試みた最初期の文学者であることを指摘している³⁶⁶。この総括というのは、本章第2節で扱う講演のことである。

彼におけるヨーロッパのヴィジョンはどのようなものだったのだろうか。彼のヨーロッパ観を捉えるために、まず、第2節では、1917年に行われたホフマンスタールの講演「ヨーロッパの理念」„Die Idee Europa“の内容を検討することにする。第3節では、1923年に『ルクセンブルク新聞』に掲載された、クルティウスによるホフマンスタール編『ドイツ読本』*Deutsches Lesebuch* (1922)の書評に触れたい。第4節では、1929年に『ノイエ・シュヴァイツァー・ルントシャウ』と『ノイエ・ルントシャウ』に発表されたクルティウスによる二つの追悼文を扱うことにする。第5節では、1934年に書かれ、1947年に雑誌『変貌』*Die Wandlung*に発表された批評「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」„George, Hofmannsthal und Calderón“を論じる。最後に、第6節では、ホフマンスタールがクルティウスに対して、具体的にどのような影響を与えたのか考えることにする。

第2節 ホフマンスタールの講演「ヨーロッパの理念」

ホフマンスタールがなぜヨーロッパ人であるのか。まず、少年時代から晩年までヨーロッパの様々な国の文学を熱心に原語で読んでいたからである。これについては本章の第4節や第5節で触れたい。これに加え、成人後ヨーロッパ各地に頻繁に旅行をしていたことも、彼のヨーロッパ人としてのアイデンティティの形成において重要なことであった。

しかし、彼がヨーロッパについて何を考えていたのかを見る際に、1917年3月31日にスイスのベルンで行われ、1930年7月に雑誌『ヨーロッパ評論』で発表された講演「ヨーロッパの理念」は見落とせないものである。これは講演原稿の文章であり、意味が不明瞭な部分が含まれている。しかし、本節では、この講演の内容を検討することを目的としたい。

ジャック・ル・リデ Jacques Le Riderによると、彼は第一次世界大戦中にヨーロッパについて真剣に考えていたのであり³⁶⁷、この講演は、戦争中の思索の成果である³⁶⁸。このため、「ヨーロッパの理念」では、戦争が与えた危機意識が所々で触れられている。

この講演は、彼が古代から近現代までヨーロッパという概念がどのように変容したのかを考察したものである。まず、彼はこの概念が強固なものではないことを指摘する。

Kritik des Begriffes: seine Unbedingtheit von jeher höchst prekär. a) Einheit Europas keine geographische (wie etwas Australien) [...] b) Einheit auch keine rassenmäßige ethnische. [...] Sein

³⁶⁶ Dethurens, *De l'Europe en littérature. Création littéraire et culture européenne au temps de la crise de l'esprit (1918-1939)*, Genève, Droz, 2002, p. 108.

³⁶⁷ ドゥテュランスはこの思索におけるシュペングラー受容の重要性を論じている (Ibid., p. 110.).

³⁶⁸ Jacques Le Rider, « L'Europe selon Hugo von Hofmannsthal de la première guerre mondiale à 1929 », in: Compagnon (éd.), op. cit., p. 61.

Wesen ideologisch und spirituelle: transzendent, ...³⁶⁹

このヨーロッパという概念の批判。その絶対性は以前からずっと極度に困難なものである。

a) ヨーロッパの一体性は、(例えばオーストラリアのもののような)地理的なものではない。

[...] b) ヨーロッパの一体性は、民族的人種的な一体性でもない。[...] この概念の本質は、イデオロギー的であり精神的である、つまり、超越的であるということである…。

このようにホフマンスタールは、ヨーロッパという概念が地理的なものでなく民族的なものでもないために、その絶対性の困難さを主張する。この概念の本質が超越的であるという指摘は、クルティウスの考える“ヨーロッパ精神”と関連する。

ホフマンスタールは、ヨーロッパという概念の変遷を三つに分けて説明している。第一段階として、中世の十字軍によるキリスト教的なまとまりが述べられ、第二段階として、ルネサンス期の知識人によるラテン文学の共同体が語られる。

Zweite Form des Begriffes: die der Renaissance. Gemeinbürgschaft aller an der *Latinität* der höheren geistigen Existenz beteiligten für Erweckung und Bewahrung dieses grundlegenden Erbes. [...] Zur civitas die tritt die res publicae litteraria. Organ dieser Gemeinbürgschaft: international europäischer Briefwechsel³⁷⁰.

ヨーロッパという概念の第二の形式であるルネサンスという形式。より高度な精神的存在の“ラテン性”に関わる全ての人のこの基本的な遺産を喚起し保管するための共同保証。[...] 神の国に文芸共和国が加わる。この共同保証の機関、国際的なヨーロッパ的な文通。

彼はルネサンス期のラテン語の共同体に触れている。この共同体は、クルティウスの主著で扱われているものである。当時の知識人達がラテン語の書簡により文芸共和国を形成していたのに対し、近現代の知識人は母国語や外国語を使用した書簡を外国の友人に送りヨーロッパ的な共同体を模索した。この第二段階の次の第三段階の19世紀以降のヨーロッパという概念の特徴として、ホフマンスタールは人間的な理解や忍耐を挙げている。

最後に、ホフマンスタールは新たなヨーロッパを呼びかける。彼は、この新たなヨーロッパがスイスやオーストリアをモデルとするべきという見解を述べるのだ。

Wo könnte eine Hoffnung dieser Art laut werden, wenn nicht auf schweizerischen Boden, auf dieser hochgespannten Brücke zwischen Nord und Süd und West und Ost, in diesem alten Bollwerk der Freiheit, dieser alten Kampfstätte der Geister? [...] Wer sagt, „Österreich“, der sagt ja: tausendjähriges Ringen um Europa, tausendjährige Sendung durch Europa, tausendjähriger Glaube an Europa. Für uns, auf dem Boden zweier römischen Imperien hausend, Deutsche und Slawen und

³⁶⁹ Hofmannsthal, *Gesammelte Werke, Prosa*, III, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1952, S. 370.

³⁷⁰ Ebd., S. 371.

Lateiner, ein gemeinsames Geschick und Erbe zu tragen auserlesen, - für uns wahrhaft ist Europa die Grundfarbe des Planeten, ...³⁷¹

この種の希望は、もし、北と南の間、西と東の間で、極度に緊迫した架け橋となっているこのスイスの土地、つまり、この自由の古い砦であり、この様々な精神の古い戦場であるこの場所でないのであれば、どこで公になるものだろうか。[...] “オーストリア” と言う人、その人は、それによって、ヨーロッパを求めた千年の連合体、ヨーロッパによる千年の使命、ヨーロッパへの千年の信仰を言っているのだ。二つのローマ帝国の土壤に住み共同の運命に耐えるべく、そして、共同の遺産を身につけるべく選ばれたドイツ人、スラヴ人、ラテン人である我々にとって、ヨーロッパは、本当に、惑星の原色となっている、[...]。

彼がスイスに言及するのは、聴衆への配慮によるものだけでなく、緊迫した架け橋であるスイスこそ、ヨーロッパと密接に関わると考えていたからであろう。スイスに存在する多民族性がオーストリアにもある。オーストリアでは、ドイツ人、スラヴ人、ラテン人が共存する。この引用部分は、ローマ帝国と神聖ローマ帝国という二つのローマ帝国の土壤で生まれたオーストリアに帰属しているという彼の意識を示すと同時に、母国オーストリアこそが、彼が提起する新たなヨーロッパの源泉であるべきだという立場を物語っている。また、二つのローマ帝国への意識は彼の古代や中世への関心を垣間見せる。

ホフマンスタールとクルティウスでは、彼らにおけるヨーロッパに関して共通項も差異も存在する。これについて考えるために、次節以降、クルティウスのホフマンスタール論を通して、クルティウスのヨーロッパとホフマンスタールとの関係を探ることにする。

第3節 クルティウスによる『ドイツ読本』の書評

クルティウスの批評活動において、ホフマンスタールは初期の頃から関心の的であった。『新しいフランスの文学開拓者達』(1919) のジッド論では、ジッドの小説『ユリアンの旅』(1893) の象徴主義的散文が分析される部分で、同時代のオーストリアで似たような試みがなされていたことを彼が主張する箇所、ホフマンスタールの韻文劇『痴人と死』*Der Tor und der Tod* (1893) の一節が引用されている³⁷²。

本論文の第1章第2節で述べたようにクルティウスの『バルザック論』(1923) は、バルザックの神秘主義的な部分を解明した画期的な書物であった。この本の末尾において、ホフマンスタールがバルザックの本質を理解した文学者の一人として触れられている。

Hofmannsthals *Balzac* sagt in der Kunstform der dichterisch beseelten, deutenden Prosa dasselbe

³⁷¹ Ebd., S. 383.

³⁷² WB, S. 52.

wie Marmor des Rodin. [...] Nur von denen wurde er ganz verstanden, die sich seiner Magie hingaben. Nur die Dichter – ein Browning, ein Baudelaire, ein Hugo, ein Wilde, ein Hofmannsthal – erfaßten ihn aus dem Kern seines Wesens³⁷³.

ホフマンスタールの「バルザック」は、詩的魂のこもった暗示的散文という芸術形式でロダンの大理石像と同一の内容を伝えている。[...] 彼の魔術に夢中になった人々からしか彼は十分に理解されなかった。ただ、ブラウニング、ボードレール、ユゴー、ワイルド、ホフマンスタールのような詩人達だけが、彼の本質の核心から、彼を理解したのだった。

ホフマンスタールの「バルザック」„Balzac“ は、1908年に発表された彼の文芸批評であり、クルティウスの『バルザック論』で詳細に論じられるスウェーデンボルグ受容などの神秘主義との関わりも触れられている³⁷⁴。従って、この批評「バルザック」は、クルティウスに本を書かせるきっかけの一つであったであろう。第4節で触れる1929年11月の追悼文では、この本の出版時に、ホフマンスタールと手紙の遣り取りをしたことが語られている³⁷⁵。

彼が初めて書いたホフマンスタール論は、『ルクセンブルク新聞』の1923年8月25日号に掲載された「ドイツ文芸通信」„Deutscher Literaturbrief“である。これはホフマンスタールが編集に関わった書物『ドイツ読本』(1922)をめぐって執筆された書評である。

この書評は、書き出しでドイツ表現主義の破綻が語られ、表現主義の詩人達の作品を読むくらいならヘルダーリンを読み直すべきであるというクルティウスの提案が記されている。そして、ヘルダーリンのような優れた文学作品がドイツ文学には数多くあり、この『ドイツ読本』は、そうしたドイツの古典作品を再発見するのに良い機会であると述べられる。クルティウスは、ホフマンスタールが1750年から1850年にかけてはドイツ文学にとって偉大な時代であったことを指摘していることに、注意を促す。そして、この時期に生きたゲーテの壮年期を称えるホフマンスタールの序文を引用する。また、この書評においては、1750年から1850年にかけてのドイツと現代のドイツとの乖離が指摘されている³⁷⁶。

ヘルダーリンの頃のドイツ文学に対する結び付きを、現代においては少数者しか持っていないという認識をクルティウスは抱いていた。彼は、1929年の論考「ホフマンスタールのドイツ的使命」„Hofmannstahls deutsche Sendung“で、この認識を発展させることになる。

第4節 1929年に発表された二つの追悼文

ホフマンスタールの死は1929年7月15日である。クルティウスが書いた追悼文には、雑誌『ノイエ・シュヴァイツァー・レントシャウ』の8月号に掲載された「ホフマンスタ

³⁷³ Balzac, S. 412-413.

³⁷⁴ Hofmannsthal, *Gesammelte Werke, Prosa*, II, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1959, S. 328-345.

³⁷⁵ KEEL, S. 126.

³⁷⁶ LZ, S. 79.

ールのドイツ的使命」と雑誌『ノイエ・ルントschau』の11月号に載った「ホフマンスタールとロマンス語文化」„Hofmannsthal und die Romanität“がある³⁷⁷。

本節では、二つの追悼文でどのような見解が披露されているのか、クルティウスとホフマンスタールにおける“ヨーロッパ精神”との関連も意識しながら検討することにする。

「ホフマンスタールのドイツ的使命」は、導入部分で、現代の若者文化とホフマンスタールの世代が若かった頃の若者文化が、いかに違ったものになったのか語られている。

In einem *best-seller* der Saison 1929 wird der Gegensatz zwischen heutiger deutscher Jugend und der um 1880 geborenen Generation daran verdeutlicht, daß diese Hofmannsthal las, jene ihn nicht mehr liest, nicht mehr lesen will. Die Jugend von 1905 wollte ästhetisch, die von 1925 will politisch sein³⁷⁸.

1929年シーズンの“ベストセラー”においては、現代のドイツの若者と1880年頃に生まれた世代との対立が、明確にされている。つまり、後者はホフマンスタールの文章を読んだのだが、前者はもはや読まないし、読もうともしないのだ。1905年の若者は唯美的でありたいと思っていたが、1925年の若者は政治的であろうと考える。

クルティウスは、ホフマンスタールの文学的出発点が唯美主義であったことを説明するために、世代間による文化的違いに触れているのである。彼は、その違いに関して、若者の関心が、美的なものから政治的なものに移ったと指摘している。

続いて、彼は、ホフマンスタールが唯美主義から変化したことを述べる。追悼文の表題が「ホフマンスタールのドイツ的使命」であるのは、単なる詩人でなく、精神的な指導者に彼はなろうとしたことを中心的な主題にしているからである。精神的な指導者としてのホフマンスタールを示すために、総長であったロマニストのカール・フォスラー-Karl Vosslerから頼まれて、1927年にミュンヘン大学で彼が行った講演「国民の精神的空間としての著作」„Das Schrifttum als geistiger Raum der Nation“に関して、クルティウスはこう論じている。

« Der Prozeß, von dem ich rede – so schloß Hofmannsthal am 10. Januar 1927 einen Vortrag in der Münchener Universität -, ist nichts anders als eine konservative Revolution von einem Umfange, die europäische Geschichte ihn nicht kennt. Ihr Ziel ist Form, eine neue deutsche Wirklichkeit, an der die ganze Nation teilnehmen könne ». Sind das Worte eines Dichters? Redet so ein Poet? Ist es nicht die in Deutschland so selten vernommene Stimme einer geistigen Autorität, die das Dichterische, die Sprache, das Schrifttum, die Bestände und Kräfte unserer Bildung, aber auch unseres Volkes und Staates verwaltet?³⁷⁹

³⁷⁷ 『ヨーロッパ文学をめぐる批評的エッセイ』(1950)では、この二つの追悼文が「ホフマンスタールを偲んで」„Zu Hofmannsthal Gedächtnis“という表題で纏められている。

³⁷⁸ KEEL, S. 117.

³⁷⁹ Ebd., S. 119.

ホフマンスタールは、1927年1月10日、ミュンヘン大学での講演をこのように締めくくったのだ、「私がお話している過程は、ヨーロッパ史が経験していないような規模の保守革命以外の何物でもありません。この革命の目標は形式であって、国民全体が関与しうるような一つの新しいドイツの現実なのです。」。これは、詩人が言うような言葉だろうか。詩人がこんな風に講演をするだろうか。それは、ドイツにおいては滅多に耳にしない精神的権威の声ではないだろうか、この声は、我々の教養の、いやそれどころか我々の民族と国家の、貯えであり力である詩情、言語、著作を司る声である。

この講演は、文化的危機を憂いたホフマンスタールが、若者達に向けてドイツ文化の特質を語ったものである。この引用部分でクルティウスは、ホフマンスタールが精神的権威として保守革命 *eine konservative Revolution* を主張していることに注目し、精神的な指導者として彼を捉えることの重要性を語る³⁸⁰。保守革命に関してクルティウスは、1790年から1830年に登場した復古精神 *die Restauration* のことであると述べ、ロマン主義と区別している³⁸¹。

また、南ドイツやオーストリアには保守革命の思想が育つような条件が存在し、エリオットやフランス³⁸²のモーラスとホフマンスタールは近いというのが、クルティウスの見解である。この点を、マーク・アンダーソン Mark Anderson はこう説明している。

Au 18ème siècle, dit-il, les meilleurs esprits étaient pour la démocratie, mais depuis la Révolution les littératures les plus intelligentes – Burke, Sainte-Beuve, Nietzsche, Sorel – ont été du côté de l’opposition. Maurras avait raison de prétendre que « l’avenir de l’intelligence » se trouvait dans les forces contre-révolutionnaires, et Hofmannsthal – avec l’idée d’une « konservative Revolution » dans son discours à Munich de 1927 – donne le signal pour l’avenir de l’Allemagne comme « espace spirituel »³⁸³.

クルティウスは言う、18世紀において最良の精神の持ち主は民主主義を支持したが、フランス革命以来、バーク、サント＝ブーヴ、ニーチェ、ソレルといった最も知的な文学は民主主義とは反対の側だったと。モーラスが“知性の未来”が反革命の勢力の中にあると主張するのは正しかったし、ホフマンスタールは1927年にミュンヘンで行った演説で“保守革命”という概念により“精神的空間”としてのドイツの未来の信号を与えるのである。

アンダーソンは、エドモンド・バーク Edmund Burke などが民主主義に反対したことと、ホ

³⁸⁰ ドナは、ホフマンスタールの死後、クルティウスがドイツ語圏の精神的な指導者になろうとしたと考えている (Donà, “Lo spirito tedesco e la crisi della mezza età. *Deutscher Geist in Gefahr* (1932)”, in: Paccagnella e Gregori (a cura di), op. cit. p. 41.)。

³⁸¹ KEEL, S. 120-122.

³⁸² 保守革命は、塚本昌則の言う“後衛”« l’arrière-garde » に意味が近いように思われる、「後衛は20世紀の産物である。[...] 最も重要なのは、この言葉が“芸術は進化する”という近代固有のイデオロギーの退潮と密接に関係しているという事実だろう。」(塚本昌則「序 後衛とは何か」、塚本・鈴木雅雄編『前衛とは何か 後衛とは何か 文学史の虚構と近代性の時間』、平凡社、2010年、9頁)。

³⁸³ Mark Anderson, « La restauration de la décadence », in: Bem et Guyaux (éds.), op.cit., pp. 172-173.

フマンスタールの保守革命の主張を同じ位相にあると指摘する。クルティウスの著作は、『危機に立つドイツ精神』をきっかけにナチスによって書店から消えたが、彼はフランスやイタリアのファシズム³⁸⁴とは関連する保守革命は支持していたのである。

この追悼文で、クルティウスは、ホフマンスタールの歴史的にも空間的にも限定されないような教養を、“この偉大なる精神のコスモポリタン”と呼ぶ³⁸⁵。彼の教養が具体的様相に関しては、別の追悼文「ホフマンスタールとロマンス語文化」で分析されることになる。

「ホフマンスタールとロマンス語文化」では、ホフマンスタールの文学作品が、オーストリアの王権やアンシャン・レジームの貴族文化を軸としながら、彼がロマンス語文学にいかに通じていたのかが説明されている。冒頭では、ホフマンスタールにとって王権は特異的な位置にあったことが以下のように述べられる。

Das Königtum war die innerste Gestalt von Hofmannsthals Weltverhältnis. Sein Dichtertum war nur eine der Formen, in denen jenes sich manifestierte³⁸⁶.

王権が、ホフマンスタールの世界関係の最も内部にある姿であった。彼の詩人としての在り方は、王権がはっきり現れる諸形式の一つにすぎなかった。

『ザルツブルク世界大劇場』*Das Salzburger große Welttheater* (1922) などの寓意的作品の根底には、ハプスブルク帝国の王権が存在しているとクルティウスは思っているのである。

次に、この帝国への帰属意識からホフマンスタールがドイツ人とは異なり、ロマンス語の世界に対して親近感を持っていることを、クルティウスはこう語る。

Wir Deutsche nahen uns dem romanischen Wesen als Bedürftige; er, Österreicher, schaltete damit als Besitzender³⁸⁷.

我々ドイツ人は必要に迫られて、ロマンス語の本質に近づく。オーストリア人であるホフマンスタールは、この本質の所有者として振る舞った。

彼は、オーストリアとドイツの文化的差異³⁸⁸から、ホフマンスタールが意識的に勉強することなくロマンス語の世界に親しんでいたことを述べている。クルティウスは、ロマンス語の文化を憧憬してきたドイツ人として、アルブレヒト・デューラーAlbrecht Dürer、ゲーテ、ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンJohann Joachim Winckelmann、ゲオルゲの四人を挙げ、彼らとホフマンスタールの文化的境遇の違いを強調している。

また、ホフマンスタールの近世のフランス文学受容に関して³⁸⁹、こう説明する。

³⁸⁴ イタリアの状況に関しては、鯖江秀樹『イタリア・ファシズムの芸術政治』（水声社、2011年）を参照。

³⁸⁵ KEEL, S. 120.

³⁸⁶ Ebd., S. 122-123.

³⁸⁷ Ebd., S. 124.

³⁸⁸ クルティウスはバール論で、美、静謐さ、朗らかさ、貴族性をオーストリア人の特徴とした（LZ, S. 67.）。

³⁸⁹ ブライについても、クルティウスは彼のアンシャン・レジーム的な教養を指摘している（Ebd., S.30.）。

Er hatte früh das ihm Verwandte und Zubestimmte ergriffen; sich zum Zeitgenossen der adligen, der königlichen Jahrhunderte gemacht. Als Gymnasiast, im Winter 1891, schreibt er : « Ich habe MM. de la Rochefoucauld, de la Bruyère, de St-Simon, de Montaigne, de Montesquieu, de Buffon sowie die Herren Chamfort, Courier, Chateaubriand, Voltaire, La Mettrie, Louvet, Jean-Jacque, Diderot, Prévost, Gresset, Mably, und (*hélas*) Volney auch gelesen ». Ist es Nötigung seines Lebensgefühls, ist es Bewußtsein, daß der Knabe schon in dieser Aufzählung Adel und Roture scheidet? Er nahm die Klassiker der französischen (und englischen) Königszeiten auf als Repräsentanten signorilen Lebensgefühls, nicht als abgelöste geistige Gestalten der Bildungswelt. Ein Aristokratismus des Blutes und der Instinkte zog ihn in die Jahrhunderte des Philip Chandos, des Marschalls von Bassompierre³⁹⁰.

ホフマンスタールは、血縁関係にあるものや自分に定められているものを早くから把握していた。彼は自分自身を貴族や王の世紀の同時代人としていた。ギムナジウム時代の 1891 年の冬に綴っている、「僕は、ラ・ロシュフーコー、ラ・ブリュイエール、サン＝シモン、モンテーニュ、モンテスキュー、ビュフォン、といった方々、さらには、シャンフォール、クーリエ、シャトブリアン、ヴォルテール、ラ・メトリ、ルーヴェ、ジャン＝ジャック、ディドロ、プレヴォー、グレッセ、マブリー、そして、(ああ) ヴォルネーも読んだ。」。彼の生の感覚が強要しているからだろうか、故意によるものだろうか、ホフマンスタール少年が、既に、この列举において貴族と平民を区別しているのは。彼は、フランスの（そして、英国の）、王政時代の古典作家達を典雅な生の感覚の代表として吸収していたのであり、その感覚は教養世界の精神像から離れていないものである。血統と本能に基づく貴族主義が、彼を、フィリップ・チャンドスや騎士バツソンピエールの世紀へと引っ張ったのだ。

ホフマンスタールのフランス的な貴族主義は、講演「国民の精神的空間としての著作」で主張された保守革命と関連する。この貴族主義はクルティウス自身にもあり、サン＝シモン Saint-Simon を引き合いに出しながら論じたブルースト論にも表れている³⁹¹。引用部分末尾では、ホフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』*Brief des Lord Chandos an Francis Bacon* (1902) が触れられている。この小説は、モダニズム文学の先駆的な作品として扱われることが多い³⁹²。これまでのホフマンスタール研究は、『チャンドス卿の手紙』の言語表現の側面での新しさにばかり注目し、貴族主義的な側面を軽視してきたのではないだろうか。

近世のフランス文学だけでなく、ロマンス語圏の文学をホフマンスタールは幅広く読んでいた。ただ、彼をゲルマニストが扱う場合、ドイツ語以外の要素が軽視される傾向がある³⁹³。しかし、ホフマンスタールは 10 代半ばでラテン語を得意とし³⁹⁴、家庭教師のおかげ

³⁹⁰ KEEL, S. 124.

³⁹¹ FGE, S. 98-105.

³⁹² 例えば、塚越敏『創造の瞬間』（みすず書房、2000 年、10-23 頁）。

³⁹³ ホフマンスタールの短編小説『ルツィドール』*Lucidor* (1910) に登場する人物 Lucile は、高橋英夫訳で

でフランス語を身に着けていた³⁹⁵。さらに、1895年から1901年にかけてウィーン大学でロマンス語文献学を勉強している。クルティウスは若いホフマンスタールのヴィクトール・ユゴーVictor Hugoをめぐる教授資格論文についてこのように書いている。

Halten wir es wenigstens für die Erinnerung fest, daß ein souveräner Genius, Dichter und Forscher, Kritiker und Kenner in einer Person, sich an einer Wende seiner Jugend getrieben fand, die Erkenntnis der Romanität als Ziel zu wählen³⁹⁶.

少なくとも、私達は、しっかり記憶に留めよう、詩人と学者を、批評家と専門家を、兼ね備えた超然とした天才が、青春時代の転換期に、ロマンス語文化の知識を目標に選ぶ気持ちに追い立てられていたことを。

批評の執筆も行うロマンス語文献学者クルティウスの共感が現れた文章である。引用部分で指摘されている詩人と学者を、批評家と専門家を、兼ね備えた側面というのは、ゲオルゲ周辺の若い知識人の集まりであるゲオルゲ・クライスにも当てはまることであった。

ホフマンスタールは1927年に発表されたミラノの文学者アレッサンドロ・マンゾーニAlessandro Manzoniの『いいなずけ』*I promessi sposi*に関するエッセイで、控え目にイタリアへの親近感を示した³⁹⁷。彼にはイタリア人の血がいくらか流れているからである³⁹⁸。

クルティウスが、ホフマンスタールにおけるイタリアという主題において強調するのはヴェネツィアとの関係である。これを語った部分を引用することにする。

Venedig – wie oft hat es Hofmannsthal Intuitionen von Grundgeheimnissen der Kunst und des Lebens geschenkt. [...] ; die nach einem Jahrtausend unvergleichbarer Staatskunst dem Korsen zur Beute fiel, bis die Restauration sie der habsburgischen Monarchie einfügte – diese Stadt, beladen mit ganz vergessener Völker Müdigkeiten, alle Tribute von Morgen- und Abendland dem Dom ihrer Seele einfügend wie in den inkrustierten Mauern von San Marco ; diese Stadt scheint mir einziges Symbol für Hofmannsthals Verhältnis zur Romanität und für all das in ihm,...³⁹⁹

ヴェネツィアは、なんと頻繁に、ホフマンスタールへ芸術と生の根本的な神秘の直観を与えたのだろう。[...] 1000年に及ぶ卓越した経国策の後に、ヴェネツィアは、あのコルシカ人に略奪された。しかし、王政復古の頃には、ハプスブルク王家に組み入られた——この都市は、完全に忘れ去られていた諸民族の疲労を背負わされ、ちょうどサン＝マルコ寺院の化粧張りを施した壁と同じように、その精神である大聖堂にも、東洋と西洋の貢ぎ物を

も檜山哲彦訳でも、“ルツィーレ”と記されているが、フランス風に、“リュシル”と表記すべきである。

³⁹⁴ Werner Volke, *Hugo von Hofmannsthal*, traduit par Jean-Yves Masson, Nîmes, Jacqueline Chambon, 1995, p. 19.

³⁹⁵ Ibid., p. 54.

³⁹⁶ KEEL, S. 125.

³⁹⁷ Hofmannsthal, *Gesammelte Werke, Prosa*, IV, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1955, S. 415-416.

³⁹⁸ Cf. Le Rider, *Les juifs viennois à la Belle Époque*, Paris, Albin Michel, 2013, pp. 171-177.

³⁹⁹ KEEL, S.127.

嵌め込んでいるのだ。ヴェネツィアこそ、ホフマンスタールとロマンス語文化との間柄や彼の内部にある一切のただ一つの象徴のように、私には思われる。

この追悼文は王権や貴族を軸に展開されており、結論でヴェネツィアとの関係に触れるのは、理に適う。彼のヴェネツィアへの執着を説明するには、ハプスブルク帝国の歴史も振り返る必要がある。ヴェネツィアがオーストリアの支配下にある時期があったのだ。ウィーン、プラハ、ブダペスト、トリエステと比べ、ヴェネツィアがハプスブルク帝国との関わりで語られることは少ない。そのため、クルティウスの眼力は優れていると言える。

第5節 批評「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」

クルティウスの批評「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」は、1947年に雑誌『変貌』に発表されたものである。これは『ヨーロッパ文学をめぐる批評的エッセイ』(1950)に収録され、これには1934年に執筆されたと記されている。おそらく、1934年に一度書かれたが様々な事情により第二次世界大戦中は、未発表のままになっていたであろう。

「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」は、表題が示すように、ドイツ、オーストリア、スペインのこの三人の文学者を扱っているものである。この批評では、冒頭で、ゲオルゲとホフマンスタールの共通した部分に光が当てられる。

Aber man kann zugleich feststellen, daß der deutsche Geist, so oft die Berührung mit der Romanität in ihm geschichtlich produktiv wird, sowohl nach Frankreich wie nach Italien wie endlich auch nach dem iberischen Südwesten ausgreift. So war es im Mittelalter, so bei Goethe, so bei der Romantik. Und der Vorgang wiederholte sich um 1890, als Stefan George und Hugo von Hofmannsthal ihren Flug begannen⁴⁰⁰.

しかし同時に、ロマンス語文化との接触がドイツ精神において歴史的に生産的になるたびごとに、ドイツ精神はフランスへもイタリアへも、最後に南西に位置するイベリアにも足を踏み出すことを人は気付くことが出来る。中世においてもそうだったし、ゲーテにおいてもそうだったし、ロマン主義においてもそうだった。そして、この出来事が、ゲオルゲとホフマンスタールが飛翔し始めた1890年頃に繰り返された。

彼は、フランス、イタリア、スペインの文化を吸収し続けたドイツ語圏の伝統を受け継いだ存在として、同時代人であるゲオルゲとホフマンスタールは共通した要素があるとする。この引用部分以降は、この二人のロマンス語文化受容が比較され、この批評の後半部分では、ゲオルゲには欠けていたカルデロンへのホフマンスタールの知的関心が論じられる。

⁴⁰⁰ Ebd., S. 128.

まず、彼はステファヌ・マラルメ Stéphane Mallarmé やポール・ヴェルレーヌ Paul Verlaine からゲオルゲは神秘的な音楽体験を受け取ったと語る。次に、フランス文学への関心が色褪せるにつれ、この詩人が南欧的な明るさを求めるようになったことが説明される。クルティウスは、彼のスペイン滞在やベルリン大学でのロマンス語文献学の講義聴講に触れ、ロマンス語を技術的に支配することが彼の詩作に芸術的実質を与えたとしている。

一方、ホフマンスタールに関しては、「ホフマンスタールとロマンス語文化」と同じく、彼のロマンス語文化受容を祖国オーストリアと結び付けて説明する。クルティウスは、若いホフマンスタールの、古典から現代作品に至るフランス文学の受容をこう語っている。

Hofmannsthals Haltung war universal wie vor ihm nur die Goethes. Welthaltig in jedem Sinne vom Religiösen bis zum Weltmännischen hätte er von sich sagen dürfen wie der große Leibniz: *je ne méprise presque rien*. George dagegen war ein großer Verächter⁴⁰¹.

ホフマンスタールの態度は、彼以前ではゲーテだけにしか見られないような、全般的なものであった。宗教的な作品から社会的な作品に至るまであらゆる意味で世界的であったホフマンスタールは、彼自身について、偉大なライプニッツと同じ台詞を言えるだろう、「私はほとんど何も軽蔑していない。」これとは逆に、ゲオルゲは大変な軽蔑者であった。

ホフマンスタールの博識が語られている。彼の教養に比肩するのが世界文学を唱えたゲーテくらいしかいないとクルティウスは考える。これに対し、ゲオルゲはあらゆる文学を受容するのではないことが示されている。ホフマンスタールがあらゆるジャンルの創作に関わったが、ゲオルゲは詩人でしかなかったことも彼は語っている。スペインの劇作家カルデロンにゲオルゲが興味を持たなかったのも当然であった。

1929 年の二つの追悼文においては、小さな扱いしかされていなかったカルデロン作品の持つカトリック的な神秘主義が、1934 年の「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」や 1948 年の『ヨーロッパ文学とラテン中世』においては丁寧に細かく論じられることになるのは、彼の関心の変化を示す。これは、オルテガの編集する『西欧評論』の影響で 1930 年以降の彼の関心がスペインの伝統文化の方へ向いて行った事実とも対応する⁴⁰²。

ホフマンスタールは自国の過去の文学への関心が強かった。エッセイ「文学に反映したオーストリア」„Österreich im Spiegel seiner Dichtung“ (1916) で彼は、自国の文学史を総括しフランツ・グリルパルツァー Franz Grillparzer を、一番高く評価している⁴⁰³。クルティウスは、ホフマンスタールやグリルパルツァーの、スペインとの関わりをこう語っている。

Dem Österreicher Hofmannsthal mußten die großen Bilder spanischer Blütezeit von jeher nahe sein. Wie Grillparzer empfand er, daß Spanien « in gewissem Sinne zur österreichischen Geschichte

⁴⁰¹ Ebd., S. 131-132.

⁴⁰² KEEL, S. 440.

⁴⁰³ Hofmannsthal, *Prosa*, III, a. a. O., S. 333-349.

dazugehört »⁴⁰⁴.

オーストリア人であるホフマンスタールにとってみれば、スペイン全盛期の偉大なる諸観念は、以前から身近なものに違いなかった。グリルパルツァーと同じく、彼もスペインが“ある意味では、オーストリア史に必要である”と感じていた。

グリルパルツァーやホフマンスタールの研究には、スペインへの眼差しが不可欠である⁴⁰⁵。最盛期のスペインが、ハプスブルク家との融合により大きな勢力であったからである。それゆえ、クルティウスは、カール5世の頃から17世紀末までマドリッドとウィーンを中心とするハプスブルク家の文化が全ヨーロッパの文化の様式を決定していたのであり、ヴェルサイユ宮殿はフランス流のエスコリアル宮殿だと考える⁴⁰⁶。

ホフマンスタールの『ザルツブルク世界大劇場』がカルデロンの『世界大劇場』*El gran teatro del mundo* を、『塔』*Der Turm* (1925) がカルデロンの『人生は夢』*La vida es sueño* を下敷きにしており、『人生は夢』はグリルパルツァーの『人の世は夢』*Der Traum, ein Leben* (1834) の源泉でもあったことは知られている⁴⁰⁷。だが、英国の15世紀の教訓劇を源泉とし神と天使と悪魔が登場する『イエーダーマン』*Jedermann* (1911) をホフマンスタールがカルデロンの形而上劇に傾倒する転機とする解釈は、クルティウスに独自のものではないだろうか⁴⁰⁸。

クルティウスによるカルデロン受容をめぐる分析では、ホフマンスタールがカルデロンを吸収するための必然性がカトリックの中世劇という観点から説明される。

Auch Hofmannsthal mußte anknüpfen an die fast verschüttete oder doch vergessene Form der mittelalterlichen Mysterienspiele, der Moralitäten, des geistlich-weltlichen Dramas, das sich vom ausgehenden Mittelalter auf das Barocktheater vererbt hatte und in den volkstümlichen Spielen des bayrisch-österreichischen Stammes bis in die Gegenwart hineinreicht⁴⁰⁹.

ホフマンスタールもほとんど埋没していた、あるいは、忘却されていた中世の神秘劇、道徳劇、宗教的でありながらも世俗的な劇の形式に結び付かざるをえなかった。それは、中世末期からバロック劇へと相続された。そして、バイエルン＝オーストリア系統の大衆演劇として、現代まで受け継がれているものである。

クルティウスが言う中世劇とバロック劇の共通性は、中世劇やバロック劇の劇場は垂直的であるため、キリスト教的な神秘主義、つまり、超越的な宇宙を表象出来るからである⁴¹⁰。

⁴⁰⁴ KEEL, S. 136.

⁴⁰⁵ 日本では、ホフマンスタールのスペイン文学受容ではなく、ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』*Ursprung des deutschen Trauerspiels* (1925) とホフマンスタールの関連性にばかり注目してきたように思える。

⁴⁰⁶ KEEL, S. 136-137.

⁴⁰⁷ Vgl. Egon Schwarz, *Hofmannsthal und Calderón*, Hague, Mouton & Co, 1962; Benjamin Bennett, *Hugo von Hofmannsthal. The Theater of Consciousness*, Cambridge, Cambridge University Press, 1988, pp. 303-341.

⁴⁰⁸ KEEL, S.135-137; ELLMA, S.152-154.

⁴⁰⁹ KEEL, S. 135.

⁴¹⁰ シェイクスピア劇の上演が平面的であるのに対し、中世劇やバロック劇の劇場は垂直的である（リヒャ

また、アリストテレス Ἀριστοτέλης の『詩学』 *Περὶ Ποιητικῆς* の延長線上にある人間中心の悲劇とはカルデロンはかけ離れている、と彼は説く。さらに、民衆を芝居の喜びに戻し、呪術的あるいは遊戯的なものに導くためにホフマンスタールはカルデロンに傾倒していったのであり、こうした演劇では物真似・儀式・舞踏・音楽が融合するのだと語る⁴¹¹。

そして、クルティウスは、ギリシアやローマを模範とするヨーロッパの古典主義の影響下でない、祭壇の秘蹟を中心とするカルデロンの悲劇を生み出したスペイン独特の歴史的條件を、この国がヨーロッパの共通の運命を共有してこなかったことに求めている。

An den großen Bewegungen der beginnenden Neuzeit: an Reformation, Renaissance, Humanismus und klassischer Kunstgesinnung nimmt Spanien wenig oder gar nicht teil⁴¹².

宗教改革、ルネサンス、人文主義、古典主義的な芸術観といったヨーロッパ初期近代の大きな運動には、スペインはほとんど、または全然参加しないのだ。

彼によると、スペインでは中世におけるキリスト教の存在感が時代は下っても薄まることなく理性主義や機械的自然観や啓蒙主義が浸透しなかったからこそ、カルデロン劇のような神を中心とする宇宙的かつ宗教的な文学が可能であったのだ。彼は、そこでは神の恩寵と人間の神秘的な絡み合いが繰り広げられるのだと主張する。

「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」の結論では、ダンテとカルデロンが比較されている。これは、ゲオルゲが終生探求した詩人がダンテであり、ホフマンスタールがカルデロン劇の翻案に取り組んだことと対応している。クルティウスは、精密に構成されたダンテ作品に秩序への意志や遠慮のない裁判官を感じ取る。一方、始めと終わりが不明確なカルデロン作品には世界を彩り豊かに描き出す象徴の存在を指摘している。

第6節 結論

本章の第1節では、クルティウスが1949年のゲーテ論で、ダンテ、シェイクスピア、ラシーヌ、ゲーテと同じように、伝統を自分のものとした者だけが到達する独創性を持っていた彼の同時代人として、ホフマンスタールの名を唯一挙げていることに着目した。

第2節では、ホフマンスタールの講演「ヨーロッパの理念」を対象として、彼のヨーロッパが地理的なものでも民族的なものでもなく、キリスト教的なヨーロッパ、文芸共和国のヨーロッパ、そして、オーストリアを背景とするヨーロッパであることを確認した。

第3節では、神秘主義的な側面を扱ったクルティウスのバルザック論にホフマンスタールが影響を与えたことや、クルティウスやホフマンスタールが、ヘルダーリンやゲーテの

ルト・アレヴィン、カール・ゼルツレ『大世界劇場』、円子修平訳、法政大学出版局、1985年、74-79頁）。

⁴¹¹ KEEL, S. 134-136.

⁴¹² Ebd., S. 142.

頃のドイツ文学との関係を、現代人は失いかけていると感じていたことに触れた。

第4節では、二つのホフマンスタールを追悼する論考を扱い、彼が持っていた保守革命の思想がエリオットやモーラスと共通し、“偉大なる精神のコスモポリタン”である彼の教養の基盤がロマンス語文献学であるとクルティウスが考えていることを論じた。

第5節では、クルティウスが批評「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」(1934)で、ハプスブルク家によるオーストリアとスペインの繋がりから、ギリシアやローマを模範とする古典主義の影響下になくスペイン独特の歴史的條件を考察していることに注目した。

第2節で触れた「ヨーロッパの理念」において、ホフマンスタールは、ハプスブルク帝国を、ドイツ系、ラテン系、スラヴ系の民族からなるものと考えているのであり、それが彼のヨーロッパの元になっている。エゴン・シュヴァルツ Egon Schwarz が言うように、ホフマンスタールは、ロマンス語やドイツ語以外のヨーロッパ文学も受容していたのだ⁴¹³。

だが、クルティウスのホフマンスタール論では、スラヴ世界との関係が無視された⁴¹⁴。第2章で触れたように、クルティウスのヨーロッパにおいてライン河は重要である。一方、ホフマンスタールはドナウ河流域の文化的遺産を重視した。これは彼が帰属意識を持つハプスブルク帝国がドナウ君主国とも呼ばれていたことと関連する⁴¹⁵。また、ホフマンスタールは、近代世界から失われた“非合理性”をロシア文学に見出そうとしていた⁴¹⁶。

しかし、追悼文の一つ「ホフマンスタールとロマンス語文化」や批評「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」は、ロマニストであったクルティウスが、ホフマンスタールのロマンス語文学の教養に共感と敬意を持っていることをはっきりと示すものである。ロマンス諸語で書かれた文学に関して明るかったホフマンスタールは、クルティウスにとって自分の文学的ヴィジョンを励ましてくれるような存在であったに違いない。

クルティウスとホフマンスタールとは友人関係を持つには至らなかったが、本論文の主題であるクルティウスの“ヨーロッパ精神”の形成過程において、“偉大なる精神のコスモポリタン”であったホフマンスタールは決定的な存在であった。なぜなら、クルティウスの同時代の作家達の中で、伝統を自分のものとした者だけが到達出来る独創性を持っているという意味で、ホフマンスタールが突出していたからである。従って、ホフマンスタールの文学的教養は、クルティウスの“ヨーロッパ精神”の広がりをも促すものであったのだ。

また、ホフマンスタールがスペイン文学の受容に力を入れていたことは、クルティウスの“ヨーロッパ精神”の形成に刺激を与えたことであった。スペインを重視したことがクルティウスの特徴の一つであるからである⁴¹⁷。ただ、スラヴ語圏の文化に対する眼差しという点で、二人の考えるヨーロッパには少し違いが見られるものであった。

⁴¹³ Schwarz, “Hugo von Hofmannsthal as a Critic”, in: Evans (ed.), op. cit., pp. 12-13.

⁴¹⁴ Cfr. Krömer, “Un’identità dimezzata? Aspetti dell’Europa e della sua cultura negletti da Ernst Robert Curtius”, Paccagnella e Gregori (a cura di), op. cit., pp. 189-198.

⁴¹⁵ ホフマンスタールはドナウ河流域が文化的に豊かであるとする (Hofmannsthal, *Prosa*, III, a. a. O., S. 341.)。

⁴¹⁶ 川島隆『カフカの＜中国＞と同時代言説 黄禍・ユダヤ人・男性同盟』(彩流社、2010年、184-185頁)。

⁴¹⁷ クルティウスは主著の中で、守備範囲の広い文学研究者・批評家であるブラーツには、スペイン文学の教養が不足していることを指摘した (ELLMA, S. 351.)。これは、彼のスペイン研究の自負の表れである。

第5章 ホセ・オルテガ・イ・ガセット論

第1節 オルテガによる二つのヨーロッパ論

本章では、クルティウスとオルテガの関係を扱う。まず、二人の共通点は、該博な知識を有していたことである⁴¹⁸。また、オルテガが『大衆の反逆』で欧州統合を主張したのに対し、クルティウスの主著は、欧州石炭鉄鋼共同体が設立された時期に出版された。

クルティウスは、1924年と1949年の二回にわたってオルテガ論を発表すると共に、書簡などを通じてオルテガと長い期間に渡り個人的に接触した。二人の友情に関して、ドナテッラ・ピーニ Donatella Pini は、論考「クルティウスとオルテガの間で交わされた書簡」“La corrispondenza fra Curtius e Ortega y Gasset”において、以下のように述べている。

Il tema dell'Europa è fondante nella relazione fra Curtius e Ortega, anche se la visione della cultura europea è nel tedesco permeata di cristianesimo mentre nello spagnolo è più indipendente dalla religione; esso costituisce la base del loro sodalizio, e poi lo sfondo di tutte – o quasi – le loro osservazioni⁴¹⁹.

たとえ、クルティウスのヨーロッパ文化をめぐるヴィジョンにおいて、キリスト教の色合いが強く、オルテガのヨーロッパのヴィジョンでは、宗教があまり重要でなくとも、ヨーロッパという主題は二人の関係において重要である。この主題が、彼らの友情の土台や彼らのほとんど全ての考察の背景になっているのだ。

ヨーロッパの追求こそが、友情の土台であった。だが、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の著者のヨーロッパの追及は当然であるとしても、『大衆の反逆』は大衆を批判した文明論として受容され、この本の主張の一つの欧州統合はそれほど注目されてこなかった。

オルテガの文章には、ヨーロッパ Europa という言葉は頻出する。だが、まとまったヨーロッパ論は、『大衆の反逆』と『ヨーロッパに関する考察』“*Meditación de Europa*”に限られる。本節では、この二冊を通じて、彼における“ヨーロッパ精神”を検討することにする。彼は『大衆の反逆』で、西欧の文化的退廃⁴²⁰の原因は大衆であるとし、こう書いている。

La historia del Imperio Romano es también la historia de la subversión, del imperio de las masas, que absorben y anulan las minorías dirigentes y se colocan en su lugar. Entonces se produce también el fenómeno de la aglomeración, del lleno. Por eso, como ha observado muy bien Spengler, hubo

⁴¹⁸ Cf. Charles Cascalès, *L'humanisme d'Ortega y Gasset*, Paris, Presses Universitaires de France, 1957.

⁴¹⁹ Donatella Pini, “La corrispondenza fra Curtius e Ortega y Gasset”, in: Paccagnella e Gregori (a cura di), op.cit., pp. 178-179.

⁴²⁰ オルテガは、オスヴァルト・シュペングラー Oswald Spengler の『西洋の没落』(*Der Untergang des Abendlandes*, 1918-1922) のスペイン語訳に関わった。

que construir, al modo que ahora, enormes edificios⁴²¹.

ローマ帝国史も、指導的少数者を吸収し無力にし、その位置を奪った大衆による破壊と支配の歴史である。当時も密集と充満の現象が生じた。それだからシュペングラーが上手く観察したように、現在と同じように巨大な建造物を建てなければならなかったのである。

彼は当時のファシズムの台頭とローマ帝国の大衆現象をアナロジーで考えているのである。

この引用文でも示されているように、オルテガは指導的少数者の意見を尊重することを説いた。彼は、ヨーロッパの人々こそが指導的少数者であったことを説明している。

Por tanto, desde aquel siglo puede decirse que manda en el mundo ejerce, en efecto, su influjo autoritario sobre todo él. Tal ha sido el papel del grupo homogéneo formado por los pueblos europeos durante tres siglos. Europa mandaba, y bajo su unidad de mando, el mundo vivía con un estilo unitario, o al menos progresivamente unificado⁴²².

従って、16 世紀以後、事実、世界を統治するものは、世界全てに権威ある影響を与えたと言える。ヨーロッパの諸民族により作られる同質的な集団が 3 世紀の間に果たした役割は、そうしたものだ。ヨーロッパは、支配者だった。そして、その一方的な支配の元に、世界は、一元的な様式あるいは少なくとも次第に一元化されていく様式で生きていた。

彼は、大航海時代以降、ヨーロッパは支配者として世界に影響を与えていたと語る。この本が大衆を批判しているだけでなく欧州統合の思想が主張されているのは、近代におけるヨーロッパと世界の一方的な支配関係が第一次世界大戦後に変化しようとしていることに、オルテガが敏感であるからである。彼は、世界における指導的少数者であったヨーロッパの人々が大衆化し、指導的役割を終えてしまうかもしれないことを憂いている。

さらに、アメリカやソ連の存在感を実感し⁴²³、これらに対抗するために欧州統合を呼びかける。彼は、現代の知識人の中には、ヨーロッパ人が出現し始めていること語る。

Todo buen intelectual de Alemania, Inglaterra o Francia se siente hoy ahogado en los límites de su nación, siente su nacionalidad como una limitación absoluta. El profesor alemán se da ya clara cuenta de que es absurdo el estilo de producción a que le obliga su público inmediato de profesores alemanes, y echa de menos la superior libertad de expresión que gozan el escritor francés o el ensayista británico. Viceversa, el hombre de letras parisiense empieza a comprender que está agotada la tradición de mandarínismo literario, de verbal formalismo, a que le condena su oriundez francesa y preferiría, conservando las mejores calidades de esa tradición, integrarla con algunas

⁴²¹ Ortega, *Obras Completas*, t. 4, Madrid, Revista de Occidente, 1957, p. 149.

⁴²² *Ibíd.*, pp. 232.

⁴²³ *Ibíd.*, pp. 238-242.

virtudes del profesor alemán⁴²⁴.

独英仏のあらゆる優れた現代の知識人は、所属する国の国境の中で息が詰まる思いをしており、自分の国籍を絶対的な限界と感じている。ドイツの大学教授は、自分の周囲の社会が義務づける業績発表の形式が馬鹿げたものであることに既にはっきり気付いており、フランスの作家や英国のエッセイストが享受しているより高度な表現の自由がないのを寂しく思う。反対に、パリに住む物書きは、フランスに出自を持つことが強いる文学的尊大さや言語上の形式主義の伝統が古くなってしまったことを理解し始め、この伝統の最良の部分を維持しつつ、ドイツの大学教授の持ついくつかの長所と一体化させたいと望んでいる。

ヨーロッパ人であったオルテガも“自分の国籍を絶対的な限界と感じて”いたであろう。この引用文中のドイツの大学教授 *el profesor alemán* をクルティウスと仮定して考えることも出来る。なぜなら、国民文学は、彼が唱えるヨーロッパ文学の妨げであり⁴²⁵、1920年代は学術論文の執筆を行わず、文芸批評や翻訳を発表していたからである⁴²⁶。

次に、オルテガはこのように国家の純血性を否定している。

Originariamente, el Estado consiste en la mezcla de sangres y lenguas. Es superación de toda sociedad natural. Es mestizo y plurilingüe⁴²⁷.

元来、国家は様々な血や様々な言語が混合して出来るものだ。それは、あらゆる自然社会を乗り越えたものであるもので、混血的で多言語的だ。

国家の混血性や多言語性の指摘はオルテガがスペイン人であることを考えると納得が行く。ここで彼は、近代の一国家では一言語である、というイデオロギーを批判している。

最後に、彼は、以下のような結論に達している。

Ahora llega para los europeos la sazón en que Europa puede convertirse en idea nacional⁴²⁸.

今や、ヨーロッパ人にとって、ヨーロッパが国家観念に変化しうる時期が来た。

ロマン・ロランの場合はファシズムと戦うために共産主義への傾斜を深めたが、オルテガはファシズムや共産主義に対抗するために欧州統合の必要性を説いた。共産主義への考えの違いでロランから離れたクルティウスの立場は、オルテガに近いものだったと言える。

第3章第3節で触れたように、1920年代後半には欧州統合の動きがあったが、ファシズム政権によって潰された。しかし、第二次世界大戦直後に欧州統合の動きは再燃する。

1949年9月7日にベルリンで行われた講演を元にした『ヨーロッパに関する考察』では、

⁴²⁴ Ibid, pp. 246-247.

⁴²⁵ Ceserani, “Un’idea diversa dell’Europa”, in: Paccagnella e Gregori (a cura di), op.cit., p. 148.

⁴²⁶ クルティウスは1924年のオルテガ論で、引用箇所に対応するような一節を書いていた(KEEL, S. 258.)。

⁴²⁷ Ortega, *Obras Completas*, t. 4, op. cit., p. 252.

⁴²⁸ Ibid, p. 270.

政治や社会が分析の対象である。西洋史において国家、都市国家、ナショナリズム、ヨーロッパ意識がギリシア時代から現代まで、どのように変化していったのかが語られている。まず、オルテガはヨーロッパ社会とは何かを説明する。

...que el hombre europeo ha vivido siempre, a la vez, en dos espacios históricos, en dos sociedades, una menos densa, pero más amplia, Europa; otra más densa, pero territorialmente más reducida, el área de cada nación o de las angostas comarcas y regiones que precedieron, como formas peculiares de sociedad, a las actuales grandes naciones⁴²⁹.

ヨーロッパの人は、いつも同時に、二つの歴史的空間で、つまり、二つの社会で、生きてきました。一つは密度では劣るがより広々としたヨーロッパであり、もう一つは、密度は高いがより狭い領域つまり各国民の領土、あるいは現在の大きな国が生まれる以前から特殊な社会形態として存在した狭い地域であります。

彼は、西欧人がヨーロッパと国家の母体となる地域の両方に所属していることに触れている。彼の場合もヨーロッパとスペインのどちらか一方だけを選ぼうとしなかった⁴³⁰。彼によると、ヨーロッパに共通した慣習を作ったのはローマ帝国であり、外部から来たゴート人はこの慣習を取り入れるのには時間がかかったのである⁴³¹。ローマ帝国は、クルティウスの主著において彼のヨーロッパ観の根幹を成しているものであった。

次に、オルテガは、時代によりこの帰属の様相は異なっていたと語る⁴³²。彼は、ヨーロッパ的なものが支配的であった時代の典型例としてカール大帝の頃と18世紀を挙げる。カール大帝はアーヘンにフランク王国の首都を置いたが、ライン河を重視するクルティウスは『ヨーロッパ文学とラテン中世』でもフランク王国を詳しく論じている。

続いて、彼は国家とギリシアの都市国家を比較する⁴³³。彼によると、都市国家の構成員は可視的であるのに対し国家の構成員は潜在的で隠されている。また、アテネ人は自分をアテネ人でありギリシア人と感じていたように、ドイツ人は自分をドイツ人でありヨーロッパ人と感じている。この二重の帰属という点では共通点を見出すことが出来るという。

そして、オルテガは世論や公権力を手掛かりにヨーロッパ国家の存在を肯定する⁴³⁴。彼の考えでは、世論のないところに公権力もなく国家もあり得ないものである。

Ahora bien, es incuestionable que todos los pueblos de Occidente han vivido siempre sumergidos en un ámbito –Europa– donde existió siempre una opinión europea. Y si esta existía no podía menos de

⁴²⁹ Ortega, *Obras Completas*, t. 9, Madrid, Revista de Occidente, 1965, p. 258.

⁴³⁰ Harold C. Raley, *José Ortega y Gasset: Philosopher of European Unity*, Alabama, University of Alabama Press, 1971, p. 191.

⁴³¹ Ortega, *Obras Completas*, t. 9, op. cit., pp. 258-260.

⁴³² *Ibid.*, pp. 260-264.

⁴³³ *Ibid.*, pp. 269-286.

⁴³⁴ *Ibid.*, pp. 293-297.

existir también un poder público europeo que sin cesar ha ejercitado su presión sobre cada pueblo. En este sentido, que es el auténtico y riguroso, una cierta forma de Estado europeo ha existido siempre...⁴³⁵

ところで、西欧の全民族が常にヨーロッパ的な世論の存在するヨーロッパという一つの範囲に浸されつつ生きたことは明白です。そして、そうした世論が存在していたから各民族に絶えず圧力を行使するヨーロッパ的公権力も存在していたはずで、この意味で、つまり正真正銘で厳密な意味で常に何らかの形のヨーロッパ国家が常に存在していたのです…。

ヨーロッパ的公権力やヨーロッパ国家の存在が肯定されている。オルテガによると、ヨーロッパは、それぞれの国が作り出す複数性の存在に立脚した均衡である。

最後にオルテガは現代において世界規模での公共生活が始まっているのに、現在のヨーロッパには共存の原則が欠けており西欧の諸国民は遠ざかってしまったことを嘆いている。

『大衆の反逆』は、時事的な性格を持つ本である。これに対し、戦後の『ヨーロッパに関する考察』は歴史的色合いが強い。このことは、オルテガが、若い頃はジャーナリズムで外国文化の紹介に努めたが、後期の仕事は古い時代を中心に論じたことに対応する。

次節以降は、クルティウスによる二つのオルテガ論を検討することにする。

第2節 1924年のオルテガ論の概要

1924年のオルテガ論は、「スペインの展望（遠近法）」„Spanische Perspektiven“ という表題で『ノイエ・ルントschau』に掲載されたものである。遠近法主義 *el perspectivismo* は、オルテガの用いる方法論であったので、こうした表題になったのであろう。

この論考では、まず、オルテガが雑誌『西欧評論』の創始者であり、この雑誌の持つ活気や質の高さにクルティウスは触れる⁴³⁶。次に、オルテガの批評の特徴を説明している。

Die Originalität dieser Kritik liegt in der so seltenen Verbindung von sprühender Vitalität und organisatorischer Denkkraft. Zwischen ionischer Naturphilosophie und kubistischer Malerei scheint es nichts zu geben, was diesen Kritiker nicht leidenschaftlich interessierte⁴³⁷.

この批評の独創性は、溢れる生命力と組織的な思考力の稀有な結合だ。イオニアの自然哲学とキュビズム絵画の間で、この批評家が情熱的な関心を持たなかったものはないようだ。

彼はオルテガのキャパシティの広さと知的強靱さを語る。古代哲学と現代絵画に明るいことは、彼の視野は古代から現代まで、そして、哲学と美術の両方に及んでいることを示す。

⁴³⁵ Ibid., p. 294.

⁴³⁶ KEEL, S. 249.

⁴³⁷ Ebd.

オルテガの批評に関して、彼は、フランスの批評家であるレミ・ド・グールモン Remy de Gourmont とチボーデと比較している。グールモンと比べ、オルテガの知的好奇心が大きなものであり、グールモンのような無秩序な印象主義ではなく哲学的な構築が目指されていることを指摘している⁴³⁸。また、チボーデとの比較では、チボーデの批評もオルテガと同じように哲学的な部分はあるが、趣味的なものにすぎず、オルテガの場合は秩序や構成への意志がある点で哲学的であると言う。一方、クルティウスの批評は直観に基づくエッセイであったので、構築的なオルテガよりも印象主義のグールモンに近かったと言える。

続いて、彼はオルテガの独創性を、ドイツ文化とフランス文化の両方を自分のものにしており、二つを上手く結び付ける能力であるとする。つまり、クルティウスはドイツとフランスの良い部分を身につけた存在、それがオルテガであると考えているのだ。

Ein weiterer Zug seiner Originalität liegt in der Art, wie er deutsche und französische Kultur verarbeitet und zusammenführt. Ich wüßte keinen Kritiker in Europa, der mit derselben Sympathie und demselben Verständnis über Madame de Noailles und Simmel, über Marcel Proust und Max Scheler zu schreiben vermöchte⁴³⁹.

彼の独創性のもう一つの特徴は、独仏の文化を消化し引き合わせるその方法にある。私はヨーロッパの批評家で、ノアイユ夫人とジンメルに関して、また、ブルーストとマックス・シェラーに関して、同じ程度の共感と同じ程度の理解度で執筆出来る者を知らない。

パリでサロンを営んだ詩人アンナ・ド・ノアイユ Anna de Noailles と社会学者ジンメル⁴⁴⁰、そして、ブルーストとシェラーというフランス人とドイツ人の組み合わせを二組挙げている。これは、彼がフランス文学とドイツの精神科学の教養が備わっていることを語るためであろう。四人の固有名にはクルティウスも通じていたため、自己言及となっている⁴⁴¹。

近代においてスペインは周縁的な国であった⁴⁴²。しかし、本論文の第4章第5節でホフマンスタールのカルデロン受容について触れたように、スペインを重視したことがクルティウスのヨーロッパ観の独自性である⁴⁴³。彼は、この論考で『背骨のないスペイン』*España invertebrada* (1921) や『現代の課題』*El tema de nuestro tiempo* (1923) といったオルテガの著作を論じることを通して、スペインの特殊性を分かりやすく説明しようとしている。

『背骨のないスペイン』は、カタルーニャ地方やバスク地方で激化していた分離独立運動が現代のスペインで起こる理由を、スペイン史を参照しながら述べたものである。

⁴³⁸ Ebd.

⁴³⁹ Ebd. S. 250.

⁴⁴⁰ オルテガは『西欧評論』の創刊号でアンナ・ド・ノアイユの詩とジンメルのモード論を翻訳紹介した。

⁴⁴¹ クルティウスはアンナ・ド・ノアイユと親しかったバレスやブルーストについて批評を書き、ベルリンではジンメルの講義に通い個人的にも接触した。シェラーは、クルティウスとオルテガの接点の一つであり、クルティウスにオルテガの主宰する『西欧評論』の存在を教えたのはシェラーだった。

⁴⁴² Ramón Menéndez Pidal, *Los Españoles en la Historia*, Buenos Aires, Espasa-Calpe, 1959, pp. 159-229.

⁴⁴³ Calin, op.cit., p. 37; Veronica Orazi, "Letteratura europea e medio evo latino: la prospettiva ispanica", in: Paccagnella e Gregori (a cura di), op.cit., pp. 353-362.

オルテガはスペイン史を参照する前にローマ帝国を参照する。なぜなら、近世において広大な領土を誇ったスペインの栄枯盛衰を考える際にローマ帝国は補助線になるからである。国家の形成と衰退を論じるために古代まで遡るオルテガを、クルティウスはこう語る。

So führt der Weg Roms vom Septimontium zum lateinischen Bund, zur italischen Einheit, zum Kolonial-Imperium. Aber die Gescheite einer Nation umfaßt nicht nur Bildung und Aufstieg, sondern auch Zerfall und Abstieg⁴⁴⁴.

そのようにローマの道は七つの丘からラテン同盟へ、イタリアの統一へ、植民帝国へと導くのだ。だが、一つの国家の歴史は、たんに形成と発展だけでなく解体と衰退を含む。

『背骨のないスペイン』における古代ローマ帝国の記述は、僅かである。これに注目することは、クルティウスが1924年の時点でローマへの関心が強かったことを示す。

オルテガは、『背骨のないスペイン』で、カタルーニャ地方やバスク地方の分離独立運動を近年に突然始まったものではなく、スペインの分裂は歴史的に進行していたことを主張しており、この主張をなぞるかのようにクルティウスはこう書いている。

Zunächst fallen die Niederland ab und Mailand geht verloren, und das setzt sich dann fort, bis um 1900 der spanische Körper zu seiner Halbinselgestalt zurückgekehrt ist. In diesem Augenblick beginnt ein neuer Zersetzungsprozeß innerhalb der Halbinsel...⁴⁴⁵

まずオランダが離反し、次にミラノが失われる。そして、この分離は1900年頃スペインの胴体が半島の形に戻るまで続く。この瞬間に半島内部で新たな解体のプロセスが始まる…。

スペインの国土が次第に小さくなる過程が記述されている。米西戦争後に植民地や国際的地位を失ったスペインでは、後進性を改善しようと立ち上がった1898年世代と呼ばれる知識人のグループがいた。オルテガは、彼らから大きな影響を受けていた。

このように外国の作品をドイツに紹介する文章が1920年代のクルティウスには多い。この論考の前半は『背骨のないスペイン』の要約であり、分析する姿勢はあまり見られない。

『背骨のないスペイン』の後半で、オルテガはスペインの病の原因としてエリートの不在を指摘した。これは、『大衆の反逆』の主題でもある。この主題は、1920年代初めから彼が取り組んでいた問題であった。クルティウスは、この論考でエリートを説明している。

…die spanische Krankheit ist Aristophobie. Spanien und Rußland gleichen sich darin, daß beide an einem offenkundigen und andauernden Mangel hervorragender Individuen leiden. In Spanien hat immer das Volk alles gemacht, und was das Volk nicht machen konnte, ist nicht gemacht worden.

⁴⁴⁴ KEEL, S. 250

⁴⁴⁵ Ebd., S. 251.

[...] Die überlegene Persönlichkeit wirkt exemplarisch und erweckt in uns anderen den Wunsch, uns nach ihr zu formen. In der Seinsweise eines Menschen wird ein höherer Lebensstypus empfunden; sie vermittelt die Anschauung von Werten, die wir bisher übersahen. Nach diesem Typus vollzieht sich die Gliederung und Organisation einer Gesellschaft und die Ausbildung einer Hierarchie. Jede echte Aristokratie ist gegründet auf die Wirkungen einer solchen seelischen Anziehungskraft⁴⁴⁶.

…スペインの病気は貴族嫌いだ。スペインとロシアは同じように卓越した個人が明らかに、そして持続的に不足している点で互いに似る。スペインでは常に民衆が全てを行ってきたし民衆に出来ないことは実行されなかった。[...] 優れた人物は手本として作用し、我々他の者の中に彼に倣って人格を形成しようという望みを呼び起こす。一人の人間の存在様式の中により高度な生の典型が感じられる。そして、この存在様式は我々が今まで見落としてきた様々な価値の見解を仲介する。この典型に従い、社会の構成と組織、そして序列の形成が実行される。あらゆる本物の貴族は、こうした精神的な魅力の作用に基づいている。

スペイン人の貴族嫌いを指摘するクルティウスは『大衆の反逆』を先取りしているように見えるが、オルテガのエリート主義は初期から存在した。クルティウスはロシアに批判的である。これは、彼のロシア革命への距離感を示す。また、この引用部分はクルティウス自身の貴族主義も伺える一節である。ホフマンスタールや雑誌『新フランス評論』の作家達にも、こうした貴族主義は当てはまることであった。

オルテガは『背骨のないスペイン』の結論において、近代の中心であったフランス、英国、ドイツに見られた合理論、民主主義、産業主義、資本主義の役割が終わるのなら、スペインは復活するかもしれないと主張している。クルティウスもこう書いている。

Aber wenn die Fruchtbarkeit dieser Tendenzen erschöpft sein sollte, würde die sich für die kleinen Nationen, die bisher im Hintergrunde standen oder zurückgeblieben waren, eine neue historische Chance bieten⁴⁴⁷.

しかし、これらの傾向の有益さが使い果たされたのなら、今まで表舞台に立っていなかったり、遅れをとっていたりしたような小国にとって新たな歴史的チャンスが現れるだろう。

こうしたスペインの後進性は、第4章第5節で扱った批評「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」の一節において触れられていた、宗教改革、ルネサンス、人文主義、古典主義的な芸術観といった運動とスペインとの関係の希薄さと関わるものである。

1924年の論考の後半でクルティウスは、マドリッド大学で行った講義を元にしたオルテガの『現代の課題』を対象としている。『現代の課題』の中心主題は、近代 *la edad moderna* ではなく現代 *nuestro tiempo* である。また、『背骨のないスペイン』はスペインを扱ってい

⁴⁴⁶ KEEL, S. 254.

⁴⁴⁷ Ebd., S. 257.

るのに対し、オルテガは、『現代の課題』ではヨーロッパの諸文化を論じている。

この本で、彼は、現代ヨーロッパにおける生物学、物理学、社会学、先史学、哲学の担い手達の感性が方向転換しているが、これに気付いている者が少数であることを指摘している⁴⁴⁸。この方向転換に関して、哲学の分野では、近代ヨーロッパの根源にあるデカルト哲学には相対主義と理性主義という両極があるが、現代においては、この相対主義と理性主義の対立を乗り越えるような生の理性という哲学が有効であるとオルテガは主張している。この主張を説明しているクルティウスの文章を引用することにする。

Relativismus ist Skepsis, und Skepsis als endgültige Haltung ist Selbstmord des Geistes. Der Relativismus ist wertvoll nur als Versuch, der Mannigfaltigkeit und dem steten Fleiß des Lebendigen gerecht zu werden; aber es ist ein mißlungener Versuch, denn er opfert dem Leben die Wahrheit. Der Rationalismus andererseits, der maßgebende europäische Denkstil seit der Renaissance, entsagt dem Leben, um die Wahrheit zu retten. Er ist unfähig, in den bunten Gestaltungen der Geschichte einen Sinn zu sehen⁴⁴⁹.

相対主義は懐疑であり、そして、最終的な立場としての懐疑は精神の自殺である。相対主義は、生命のあるものの多様性と不断の熱意を満たす試みとしてだけ、価値の高いものである。だが、相対主義は失敗に終わった試みである、というのは、生のために真理を犠牲にするからである。一方、理性主義は、ルネサンス期以来のヨーロッパの標準的な思考様式であるが、真理を守るために生を断念する。理性主義は、歴史の変化に富んだ形姿の中に意味を認めることが出来ないのだ。

オルテガから影響されたのか、クルティウスも相対主義と理性主義の両立を求める。それが現代の文化的危機を脱するために必要なことであると、彼は考えているようである。

次に、クルティウスは、オルテガの『芸術の非人間化』と同じように、現代ヨーロッパの生の感情の変化についてモダニズム芸術を対象にして考察する。

Als Lebensbasis, als Schwerpunkt der Existenz erscheint die Kunst der heutigen Generation unmöglich. Für das neue Lebensgefühl besitzt die Kunst nur dann ihre Grazie und ihren Zauber, wenn sie Spiel und nur Spiel ist⁴⁵⁰.

今日の世代が生や存在の核心になるような芸術を作り出すことは不可能であるように思われる。新しい生の感覚にとって、芸術は遊びである時、いや、遊びである時でのみ、その優雅さと魅力を持つのである。

今日の世代の芸術とは、キュビズム絵画などを指すのであろう。引用部分ではモダニズム

⁴⁴⁸ Ortega, *Obras Completas*, t. 3, op. cit., p. 156.

⁴⁴⁹ KEEL, S. 259.

⁴⁵⁰ Ebd., S. 262.

芸術を論じているが、“遊びとしての芸術”はブルーストやジョイスといったモダニズム文学においても生じた。リチャーズの本の表題『モダニズム・中世主義・人文主義 エルンスト・ロベルト・クルティウスの受容に関する書誌研究』が示すように、彼の仕事にはモダニズムに関する批評も含まれる。オルテガはヨーロッパの最先端を追及したということもあり、引用部分に、我々はクルティウスの前衛文化への眼差しを見出すことが出来る。

相対主義と理性主義の対立を論じた『現代の課題』の結論部分で、オルテガは遠近法主義と呼ばれる彼独自の認識論について書いた。この認識論は、『ドン＝キホーテに関する省察』*Meditaciones del Quijote* (1914) において、初めて展開されたものである。彼は、前景から背景まで見る人の視点によって異なる景色になるような遠近法主義こそ、相対主義の偏狭さと理性主義の偏狭さを乗り越えることが可能であると主張する。この遠近法主義に関して、クルティウスは以下のように語る。

Falsch ist nur die Perspektive, die sich für die einzige hält. Wenn jeder Standpunkt Wahrheit gibt, so heißt das, daß jede Wahrheit an einen Ort gebunden ist, von dem aus sie verstanden wird. Jede Wahrheit ist also gebunden an eine Stelle im Raum oder in der Zeit. [...] Die Kunst eines Proust, die Philosophie eines Keyserling, die Weltanschauungs- und Typenforschung im Sinne Schelers – so disparat diese Dinge scheinen, sie haben in der gewußten oder ungewußten Richtung auf den Perspektivismus eine gemeinsame Orientierung⁴⁵¹.

自分がただ一つのものであるとする遠近法だけが間違っている。もし、あらゆる観点も真理を与えるのであれば、あらゆる真理も一つの場所に結び付けられており、その場所から真理が理解されることを意味する。だから、あらゆる真理は空間か時間の中における一つの位置に結び付けられている。[...] ブルーストの芸術、カイザーリングの哲学、シェーラーの考える世界観と類型の研究、これらのものはとても異質なものに見えるが、意識しているにせよ、意識していないにせよ、遠近法主義へ向かうという共通の方向を持っている。

クルティウスは、相対主義と理性主義の対立を乗り越えた実例として、ブルーストなどを挙げている。ここで、このオルテガ論と同じ時期に執筆されたブルースト論において、クルティウスが遠近法主義を援用して分析している文章を引用することにしたい。

Bei Proust selbst kann man eine ähnliche geheimnisvolle Beziehung zwischen Geistigem und Räumlichem finden. Seine Art, die seelische Welt zu beschreiben, ist gebunden an ein perspektivisches Sehen im Raume. Schilderungen von optischen Perspektiven sind an verschiedenen Stellen seiner Bücher mit einer solchen Eindringlichkeit und einer solchen Anspannung des Geistes gegeben, daß man sofort spürt, sie besitzen für ihn eine besondere seelische Bedeutung. Schon in dem Erlebnis mit den drei Türmen von Martinville liegt das wesentliche Moment der sich bis zur

⁴⁵¹ Ebd., S. 263-264.

Inspiration erhöhenden Stimmung darin, daß die Türme, entsprechend der Bewegung der Fahrenden und den Windungen des Weges, in Bewegung geraten⁴⁵².

ブルースト自身にあっても、精神的なものと空間的なものとの間に類似した神秘的な関係を人は見つけることが出来る。精神的世界を描写する彼のやり方は、空間における遠近法的な視覚と結び付けられている。視覚的な遠近法の描写は、ブルーストの著作における様々な場所において、とても強い調子で、そして、大変な精神の集中によって行われているので、人はこうした描写が特別な精神的意義を備えていることをすぐに感知する。すでにマルタンヴィルの三つの鐘塔における体験でも、靈感にまで高められる雰囲気の本質的瞬间は、車上の人の運動と道の曲がりくねりに従って鐘塔が動き出すという点にある。

クルティウスは、ブルースト文学における精神的なものと特定の場所の結び付きを語っている。マルタンヴィルの鐘塔は、『失われた時を求めて』の中で、語り手の少年時代において芸術創造をめぐる啓示が語られる決定的場面で登場する建築である。さらに、この引用文の直後にクルティウスは相対主義 *der Relativismus* について議論を展開している⁴⁵³。従って、彼のブルースト論のこの部分は、ミュラーも指摘するように⁴⁵⁴、オルテガの遠近法主義から影響されて執筆されたように思われる。

この論考の結論部分で、彼はこの遠近法主義がスペイン的なものだと言語。そして、スペインが、ヨーロッパにおいて自己中心主義に陥ることのない周縁的な位置にあるために、ヨーロッパを考察するには絶好の位置であると、クルティウスは主張するのである。

第3節 1949年のオルテガ論の概要

松浦が述べたように、クルティウスの批評は、1920年代は記述的・分析的な紹介を交えていたのに対し、第二次世界大戦後は、価値判断を正面に押し出したものになった⁴⁵⁵。この変化は、二つのオルテガ論にも当てはまる。つまり、1949年に『メルクーア』で発表されたオルテガ論は、彼の著作を総括することを重視している。

1949年のオルテガ論は、戦後ドイツが文化的に野蛮状態にあるという指摘から始まる。

Die Verwüstung unserer Kultur hat nicht erst mit dem zweiten Weltkrieg eingesetzt, sondern 1933. Die Folge davon ist, daß die Generation der heute Dreißigjährigen schon gar nicht mehr weiß, wie ein normal funktionierendes Kulturleben aussieht⁴⁵⁶.

我々の文化の荒廃は、第二次世界大戦によってようやく起こったのではなく、1933年に始

⁴⁵² *FGE*, S. 118.

⁴⁵³ *Ebd.*, S. 123-130.

⁴⁵⁴ Müller, a. a. O., S. 215.

⁴⁵⁵ 松浦、前掲論文、412頁。

⁴⁵⁶ *KEEL*, S. 266.

まっていた。その結果、今日の 30 才の世代の人々は、正常に機能している文化的生活がどのような様子をしているのかを、もはや全然知らないのである。

1930 年前半のドイツにおける教養崩壊や大学の大衆化などの文化的危機については、クルティウスは『危機に立つドイツ精神』で詳しく論じた。1949 年のオルテガ論の冒頭に、文化的な野蛮状態が触れられるのは、文明批評家でもあったオルテガが執筆活動で、古代から現代まで、それぞれの時代の危機について、頻繁に語ったからかもしれない。彼は危機の背景、危機の頂点、危機の構造といったものを多面的に分析した。『危機に立つドイツ精神』には、オルテガから喚起されて執筆された部分はあるだろう⁴⁵⁷。

次に、オルテガのジャーナリズム活動を擁護している文章を引用する。

Die Philosophie berührte sich bei diesem Denker mit der Wirklichkeit unseres Daseins⁴⁵⁸.

哲学がこの思想家の場合は私達の存在の現実と触れ合っていたのだ。

オルテガが講壇哲学者とは異なり、現実に向き合ってきたことを彼は説明する。批評家であるためにアカデミズムからいくらか孤立したクルティウスは、ドイツの大学から名誉博士号を贈られていない⁴⁵⁹。それゆえ、オルテガのジャーナリズム活動に対する擁護は、彼が自分自身の存在を賭けて行っているのだ。

続いて、彼は、オルテガが哲学者であったという事実に着目して論を展開していく。

Wie hoffnungsvoll gingen wir in unsere erste philosophische Vorlesung! Und wie enttäuscht kamen wir wieder heraus! Das muß so sein, wenn die Philosophie zum Lehrgegenstand und zum Examensfach wird. Sie war es aber nicht immer. Als Sokrates sich auf den Plätzen Athens mit jungen Menschen unterhielt und ihnen mit freundschaftlicher Ironie verhängliche Fragen stellte, war Philosophie etwas ganz anderes. Sie war Leben⁴⁶⁰.

どれだけ期待に満ちて、我々は最初の哲学の講義を受けに言ったことだろう。そして何とがっかりして、我々は講義から再び外に出たことだろう。哲学が教える対象になり試験科目になれば、そのようにならざるを得ないのである。だが、哲学は常にこのようであったわけではないのだ。ソクラテスがアテネの広場で若者達と談笑をし、友好的な皮肉によって厄介な質問をしていた時には、哲学はかなり別のものだった。哲学は生であったのだ。

哲学がアカデミズム化されると退屈になってしまうことを、彼は書いている。また、ソクラテスの哲学は生であったことが語られている。生涯に渡り、オルテガの哲学的課題は生

⁴⁵⁷ Vgl. DGG, S. 119-120.

⁴⁵⁸ KEEL, S. 268.

⁴⁵⁹ Norman F. Cantor, *Inventing the Middle Ages*, New York, William Morrow and Company, 1991, p. 194.

⁴⁶⁰ KEEL, S. 269.

であった。従って、クルティウスが彼を現代のソクラテスと見做していたことが伺える。
次に、彼は、オルテガの生きた 20 世紀前半のスペインを次のように振り返る。

Erst um 1900 begann in Spanien ein geistiges Erwachen. Der Erneuerer der heutigen Malerei ist der Spanier Picasso. Er ist 1881 geboren, Ortega 1883⁴⁶¹.

1900 年頃になってやっと、スペインにおいて精神的な覚醒が始まった。現代絵画の革新者はスペイン人のピカソである。彼が生まれたのは 1881 年であり、オルテガは 1883 年だ。

スペインは近世が最盛期だった。停滞が終わったのが 1900 年頃と彼は考える。精神的に覚醒した例として芸術と哲学における最先端を追及したピカソとオルテガを並列させている。また、ドイツの新しい思想を吸収した若きオルテガのドイツ留学については、こう語る。

Die Begegnung der Mittelmeersonne und des nordisch-deutschen Gedankenklimas-und die fruchtbare Spannung dieser Begegnung-, das ist eine der biologischen Voraussetzungen für das geistige Werk Ortegas⁴⁶².

地中海の太陽と北方ドイツの思想風土との出会い、そして、この出会いが促す実り多い緊張が、オルテガの知的作品を生んだ生物学上の前提条件の一つである。

オルテガは哲学の勉強のために、ベルリンやマールブルクに留学した。しかし、クルティウスは、彼がドイツ哲学の紹介者に終わらなかったと語る。なぜなら、彼は、ドイツ哲学の模倣でなく、スペイン人のアイデンティティを強く意識しながら思索を深めていったからである。こういった彼の特徴は、若い頃は外国文化の紹介に努めるが、後半生ではヨーロッパのスペイン化を主張したウナムーノと共通する。1924 年の論考ではクルティウスはオルテガにおけるドイツとフランスの出会いを論じていたが、この引用部分では地中海文化とドイツ文化の出会いを指摘している。このことは、1920 年代のクルティウスにおいては現代フランス文学への関心が顕著であったのに対し、1948 年の論考と同じ頃に出版された主著において、地中海文化が重視されているのが反映しているからであろう。

オルテガは、クルティウスと同じようにジャーナリズムに寄稿する批評家であった。ここで、クルティウスが彼の散文の性質について述べた文章を引用することにする。

Ob er von Andalusien spricht oder von der argentinischen Frau, vom Madrider Golfplatz oder von einem Restaurant in Biarritz – seine Sätze schnellen ab wie Pfeile und treffen mitten ins Ziel. Wir haben das Gefühl, alle Dinge zum erstenmal zu sehen, und zugleich das andere, sie in ihrer wahren Gestalt zu sehen. Die schwingenden Sätze Ortegas legen klare Profile fest⁴⁶³.

⁴⁶¹ Ebd., S. 270.

⁴⁶² Ebd., S. 271.

⁴⁶³ Ebd., S. 272.

オルテガはアンダルシアについて、あるいはアルゼンチンの女性について語ろうと、また、マドリッドのゴルフ場について、あるいはビアリッツのレストランについて語ろうと、彼の文章は矢のごとく飛んで、標的の真ん中に命中する。我々は、全てのものを初めて見るかのような気持ちになり、そして、同時に全てのものを真の姿で見ているという気持ちになる。彼の弾むような文章は、明快な特徴を決定する。

オルテガの批評が“真ん中に命中する”ことが指摘されている。対象の本質を正確に描こうとする批評であり、オルテガは不特定多数の読者に向けて対象を忠実に論じたのだ。この忠実さは、デュ・ボスがクルティウスの批評に関して指摘していたことである⁴⁶⁴。

批評も書いたオルテガの哲学は、どのようなものだったのだろうか。クルティウスは、彼の哲学の中心が生と理性が交わり分岐する地点であるとする。彼は生と理性を対立させずに相互に浸透させようとするからである。クルティウスは生の哲学との関係をこう語る。

Mit diesen Lebensphilosophien hat die Philosophie Ortegás nichts zu tun⁴⁶⁵.

オルテガ哲学は、これらの生の哲学とは関係がないものである。

オルテガは理性を重んじるから、直観を重視するベルクソン哲学には相容れない。クルティウスは『新しいフランスの文学開拓者』でベルクソンに何度も触れ、『新しいフランスにおけるヨーロッパ精神』ではベルクソニズムを論じたから、明らかにベルクソン哲学に関心を寄せていた。1927年のエリオット論でも、直観こそが批評の美であると記し⁴⁶⁶、彼は理性を重視して批評を書いていたわけではない。それゆえ、オルテガと生の哲学の関係を語るクルティウスは、自分とオルテガの立場の違いを意識していたと思われる。

続いて、クルティウスは、『危機の図式』*Esquema de las crisis* (1933)、『体系としての歴史』*Historia como sistema* (1935) を発表したオルテガの歴史論について論じている。彼は、オルテガが1929年以降にディルタイの著作からの影響で歴史論を始めたと考える。彼は、オルテガの歴史観を明確化するために、シュペングラー、アーノルド・J・トインビーArnold Joseph Toynbee、フリードリヒ・ヘーゲルFriedrich Hegelの歴史観を並列させている。

Es ist Zufall, daß ein Napoleon geboren wird. Und es ist Zufall, daß Korsika 1768 von den Genuesen an Frankreich verkauft wird, so daß Napoleon als Franzose geboren wird. [...] Spengler und – mit verbesserter Methode – Toynbee haben dann die Kulturen als Subjekte des historischen Geschehens aufgezeigt. Die Geschichtslehre von Toynbee ist die jüngste und eindrucksvollste Synthese, die wir besitzen. Auf solchem Wege kann der historische Stoff bewältigt werden, kann der Zufall des Geschehens begriffen werden. Was aber nie gelingen kann, ist der Nachweis, daß der

⁴⁶⁴ Du Bos, « Ernst Robert Curtius », op. cit., pp. 1044-1046.

⁴⁶⁵ KEEL, S. 275.

⁴⁶⁶ Ebd., S. 316-317.

Geschichtsverlauf eine logische Notwendigkeit besitzt. Hegel hat das allerdings tiefsinnig versucht⁴⁶⁷.

ナポレオンが生まれるのは、偶然である。そして、コルシカ島が 1768 年にジェノヴァ人によってフランスに売られ、その結果ナポレオンがフランス人として生まれるのは、偶然である。[...] シュペングラーそして改善された方法によってトインビーは、様々な文明を歴史的な出来事の主体としてはっきり示した。トインビーの歴史学は我々が持っている最も新しく最も印象的な総合である。あのようなやり方によって歴史的な題材は片づけられうるし出来事の偶然は理解されうるのだ。しかし、決して成功しないのは、歴史的推移が論理的な必然性を持っているという証明である。もちろん、ヘーゲルはそれを深遠に試みた。

クルティウスが重視するのは、歴史における偶然である。トインビーは、偶然を論理的に説明しようとはしない。ここが、ヘーゲルとの差異である。クルティウスは、オルテガがヘーゲルを歴史に論理の体系をこじつけたという理由で非難しているのに、『体系としての歴史』で歴史を理性的に捉え、ヘーゲルの試みを反復したことを指摘する⁴⁶⁸。これは、先述したクルティウスとオルテガのベルクソンに対する意見の違いと関連する。

クルティウスは、このオルテガ論の前年にあたる 1948 年に雑誌『メルクーア』で発表された批評「トインビーの歴史学」„Toynbees Geschichtslehre“ でこう書いていた。

« Alle Akte sozialer Schöpfung sind das Werk entweder individueller Schöpfer oder schöpferischer Minderheiten ». Dieser Satz faßt ein Hauptstück von Toynbees Lehre zusammen. Es berührt sich eng mit der Philosophie Bergsons⁴⁶⁹.

「社会的な創造の全ての行為は、個人的な創造者か創造的な少数派の行動である。」このトインビーの文章は、彼の学問の主要な部分を要約している。それは、ベルクソンの哲学と密接に触れ合っている。

社会的な創造が全て個人によるものであると考えるからこそ、トインビーは歴史における偶然的出来事に論理性を求めないのである。こうした歴史観にクルティウスは共感し、トインビーの『歴史の研究』*A Study of History* (1934-61) を高く評価している。一方、オルテガは 1948 年に彼が設立した人文研究所の連続講演『世界史の一解釈 トインビーをめぐって』*Una interpretación de la historia universal. En torno a Toynbee* において、トインビーを批判した。この批判は、彼のベルクソンへの距離とも関わるものであろう。

この論考の末尾では、生と理性の対立から出発したオルテガが、理性的な歴史の追求という過程を経てヘーゲル的な観念論に行ったと、彼は結論付けている。

⁴⁶⁷ Ebd., S. 276-277.

⁴⁶⁸ Ebd., S. 277.

⁴⁶⁹ Ebd., S. 359.

第4節 クルティウスとオルテガの往復書簡

本節では、共にジャーナリズムでの執筆活動に熱心であった、クルティウスとオルテガの間に交わされた往復書簡から、彼らの知的交流に注目する。

二人の書簡の使用言語は、ドイツ語であった。雑誌『メルクーア』の1964年の18号に、彼らの書簡は部分的に原語で掲載されている。一方、オルテガの雑誌『西欧評論』の1963年の9月号と10月号では、紛失されていない書簡は全てスペイン語訳で掲載されており、『メルクーア』には収録されていない書簡をいくつも読むことが出来る。

彼らの晩年である1954年まで続けられた書簡は、1923年12月10日に始まった。クルティウスはマールブルクから、スペインにいるオルテガへ、こう書き送っている。

Durch meinem verehrten Freund Max Scheler, den ich kürzlich in Köln besuchte, hatte ich Gelegenheit, die *Revista de Occidente* kennen lernen, die mich sehr interessiert. Ich verfasse für den *Neuen Merkur* (von dem ich Ihnen ein Heft zusenden lasse) eine Chronik der französischen Zeitschriften, und würde nun gerne, ebenfalls im *Neuen Merkur* etwas über Ihre Zeitschrift sagen. Ich wäre Ihnen deshalb sehr verbunden, wenn Sie mir die *Revista* zusenden lassen könnten. Durch Ihren Beitrag zur Proustnummer der *NRF* kenne ich Sie schon seit bald einem Jahr. Da ich meinerseits in Deutschland als erster (und bisher einziger) über Proust geschrieben habe, darf ich Sie im Zeichen dieses Namens begrüßen⁴⁷⁰.

私が先日ケルンに会いに行った尊敬する友人のシェーラーのおかげで、大変興味深い『西欧評論』を知る機会が持てました。私は『新メルクーア』のために（この雑誌を、一号、あなたに送るようにします）、フランスの雑誌についての年代記を書いています、同じように『新メルクーア』で、今度は、あなたの『西欧評論』について、喜んで何か書くことにします。それゆえ、あなたが『西欧評論』を私に送っていただけるのなら、私は大変感謝するでしょう。『新フランス評論』のプルースト特集号で私があなたのことを知ってから、まもなく一年になります。ドイツにおいて私は最初に、また現在まで私だけが、プルーストについて執筆した人間なので、この名前を印にあなたに挨拶することをお許してください。

この手紙によって、『新フランス評論』の1923年初頭のプルースト特集号が、クルティウスがオルテガの名前を覚えるきっかけであったことがわかる。クルティウスがドイツにおけるこのフランスの作家の紹介者であることを自負しており、プルーストを友情の印にしようと提案している。本章第2節で触れた、1924年のオルテガ論でクルティウスがプルーストやシェーラーに言及しているのは、こうした背景があるからである。

二人の書簡の特徴として、クルティウスが二つのオルテガ論が準備していた時期に書簡

⁴⁷⁰ BO, S. 903-904.

が集中していることが挙げられる⁴⁷¹。この二つの時期に、クルティウスは自分の著書を送る代わりに、オルテガの雑誌『西欧評論』や彼の著書をドイツに送ることを頼んでいる。

ハイデルベルク時代のクルティウスが、現代フランス文学だけでなく英文学やスペイン文学も積極的に自分の批評対象とするようになることは、既に第 1 章第 3 節で触れた。ハイデルベルクに移る直前の 1924 年 3 月 12 日にクルティウスがオルテガに送った手紙は、彼のスペイン研究の決意表明であるかのようである。

Deutschland ist seit Krieg und Revolution immer mehr östlichen (russischen und asiatischen) Einflüssen verfallen. Nach meiner Überzeugung ist es notwendig, diesen Tendenzen wieder die klare Gestalt lateinisch-mittelmeerischer Kultur entgegenzustellen. Und dabei will es mir scheinen, als ob Spanien in dieser Beziehung gegenwärtig wichtiger sei als Italien, dessen Geist mir allzu egozentrisch erscheint⁴⁷².

戦争とロシア革命以来、ドイツはロシアやアジアといった東にある文化からますます影響を受ける傾向になっています。私の確信するところでは、ラテン的あるいは地中海的な文化の持つ明瞭な形態によって、このような傾向に再び立ち向かうことが必要です。そして、同時に、この点において、スペインというのは、現代においてイタリアよりもずっと重要であるように思われます、イタリアの精神はあまりにも自己中心的と、私には見えます。

引用部分の冒頭で、彼は現代のドイツがスラヴ文化やアジア文化に靡いてしまっていることを憂いている。このような文章は、彼がヨーロッパ中心主義的であるという印象を我々に与えるものである。それゆえ、引用部分の末尾でイタリアの自己中心性を批判しているのだが、彼自身がそうしたイタリア人とそれほど変わらない位相にいるという感じもするのである。自己中心的なイタリアに対し、長い間ヨーロッパの辺境としての立場に甘んじていたスペインの重要性を彼は力説している。この手紙においては、マドリッドやバルセロナで文学や芸術の中心的存在であった作家、知識人、画家などが言及されており、この頃のクルティウスが現代のスペイン文化に関して本気で勉強していたことが伺える。

そして、クルティウスは、オルテガと『新フランス評論』の作家達の仲介役を務めようとした。1924 年の夏にオルテガから送られた手紙には、本論文の第 3 章第 2 節で触れたポンティニーの旬日会の参加への招待を断る記述が含まれている⁴⁷³。

スペインに興味を持ってくれているこのドイツ人の批評家に対し、今度は、オルテガが招待を試みる。1925 年 3 月 9 日にオルテガからクルティウスに送られた手紙を引用する。

Es bereitet mir lebhaftere Freude und ich finde es hochinteressant, daß Sie Ihre Aufmerksamkeit in

⁴⁷¹ José Lasaga Medina, “Introducción a Curtius y Ortega: una línea transversal del Rhin al Manzanares”, Madrid, *Revista de Estudios Orteguianos*, 5, 2002, pp. 185-190.

⁴⁷² *BO*, S. 904.

⁴⁷³ *Ebd.*, S. 905-906.

diesem Jahr unserem Spanien zuwenden. Ich möchte es gern so einrichten, daß Sie im kommenden Jahr – Herbst oder Frühjahr hierher kommen und ein paar Vorträge über irgendein geeignetes Thema halten. Ich sage Ihnen das, damit Sie die Sache in Erwägung ziehen⁴⁷⁴.

今年あなたが我々のいるスペインで何かをすることに関心を向けていただけたら、私は喜ぶとともに、大変興味深く思うでしょう。私は進んで、あなたに来年の秋か春にここに来ていただいて何か適当な主題に関する二三の講演をしていただくようになるように調整しようと思っています。この事をあなたにご検討いただきたいと思いますとお伝えします。

オルテガは講演の招待をしている。これは、彼がクルティウスの批評を評価していることを示す。この招待は、書簡を通じてヨーロッパ中に友人がいた人文主義者デジデリウス・エラスムス Desiderius Erasmus⁴⁷⁵の名に因んで始められた、EU内で教員や学生の交流を図るエラスムス・ムンドゥス・プログラムを想起させる。3月24日に送られた、この手紙の返事でクルティウスは、スペインを訪問することに前向きな姿勢を見せている⁴⁷⁶。

1925年春の手紙の次に現存しているものは、1929年11月22日にオルテガから送られたもの⁴⁷⁷である。ちょうど『大衆の反逆』が刊行される時期である。彼は、手紙の冒頭で南米に滞在してスペインを留守にしていたがクルティウスと会いたいと述べている。続いて、共通の友人のシェーラーの死を悼み、現代のヨーロッパの政治的状況が悪化していると言う。そして、クルティウスに対し『大衆の反逆』などを郵送すると語る。手紙の末尾で彼が準備中のアリストテレス論の構想を綴っており、これは彼の関心が古い時代の文化に移りつつあることを示している。『ヨーロッパ文学とラテン中世』で頻繁に言及されるアリストテレスに関して、クルティウスはオルテガの仕事から多くを学んだと思われる。

次に、1930年春にボンのクルティウスから送られた手紙の一部を引用することにする。

En cambio, no he recibido los libros sobre *La rebelión de las masas* y la *Reorganización de España*. Naturalmente, me gustaría mucho leer los dos. Desgraciadamente, también aquí « la rebelión de las masas » es asunto de actualidad, del que podría contarle muchos ejemplos. Periodistas y literatos han formado la nueva palabra « lo colectivo », y tratan de intimidar con ella al individuo. Pero espero que la presión de las masas dé nuevo apasionamiento y nuevo empuje al individualismo y a la actuación de pequeños grupos selectos⁴⁷⁸.

一方、私は『大衆の反逆』や『スペインの再編成』といった本を、まだ受け取っていません。もちろん、私はこの二つの本をすごく読みたいと思っています。残念なことに、『大衆の反逆』はまた、私もあなたに多くの例をお話することが出来るような、現代に関する主題の本です。新聞記者達や著述家達は“集団”という新たな言葉を作り、この言葉で個人

⁴⁷⁴ Ebd., S. 907.

⁴⁷⁵ Cf. Marc Fumaroli, « Introduction », in: Compagnon (éd.), op.cit., p. 12.

⁴⁷⁶ BO, S. 908.

⁴⁷⁷ EOC, pp. 335-336.

⁴⁷⁸ Ibid, p. 337.

を威嚇しようとしています。しかし私は、大衆の圧力が、個人主義や少数の選ばれた人々の行動に、新たな情熱や新たな活力を与えることを願っています。

『危機に立つドイツ精神』は、大衆化した現代社会を嘆いている点で、『大衆の反逆』と共通している。本章第3節でも指摘したように、『危機に立つドイツ精神』には『大衆の反逆』から影響された部分はあるようである。引用部分は、この影響関係を物語るものだろう。クルティウスの言うように大衆の圧力が少数のエリートに情熱や活力を本当に与えたのなら、彼の主著における人文主義は、大衆に抵抗するために実践されたと言える。

続いて、1934年2月22日にボンのクルティウスから送られた手紙を引用する。

Como Vd. sabe, estuve tan impresionado por mi estancia en España y por la amistad española (somos afectuosos, dijo Vd. una vez), que edificué sobre ello un nuevo plan de vida. Me había animado Vd. a ocuparme más intensivamente de mis estudios españoles. La meta me parecía grande y tentadora: era un nuevo « programa vital de acción ». Y ahora tengo la impresión de que todo ha sido como un bello sueño calderoniano. Pero sigo estando agradecido a esta belleza, aunque la realidad haya sido otra⁴⁷⁹.

ご存知かと思いますが、この前のスペイン滞在とスペイン人の友情に深い感銘を受けたので（我々は親愛なる友人であると、あなたは一度おっしゃいました）、私はスペインとの接触のことで、新しい人生計画を立てました。あなたは私がスペイン研究に従事することに対し、強烈に励ましました。その目標は、私には大きくて魅力のあるものだと思われます。これは、新しい“活発な行動計画”なのでした。そして今となっては、全てがカルデロンの美しい夢のようであったという気がします。しかし、現実とは別のものでしたが、私はこの美しい夢に感謝し続けています。

1932年春に、オルテガから招かれた彼はスペインに長く滞在し各地で講演を行った。この手紙は、この滞在について語っている。これが、彼の人生で初めてのスペイン旅行であった。この国の文化遺産等は、1920年代半ばに始められた彼のスペイン研究にとって極めて有益であったに違いない。我々が彼の主著においてスペイン文学に多くの頁が割かれていることを考える時に、この時の滞在は決定的であったと言える。彼は手紙の中で、この滞在はカルデロンの夢と形容している。従って、本論文第4章第5節で詳しく扱った1934年の批評「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」は、この手紙と近い時期に書かれており、クルティウスがオルテガとの友情を背景に執筆したように思われる。

1936年7月に内戦が勃発すると、オルテガは9年にも及ぶ亡命生活を始める。1937年12月3日のオルテガの手紙は、亡命先のパリから書かれた。冒頭で、彼はご無沙汰を詫言っている。そして、亡命中の苦勞を切々と語る。一方、手紙の後半は歴史的考察に関する記述

⁴⁷⁹ Ibid, p. 338.

である。彼は、スペインの現象がヨーロッパ史のよく知られたカテゴリーを用いて十分に考えることは出来ず、スペインにあるような特殊性があるためにヨーロッパの歴史を一纏めにして語るのは困難であると指摘している⁴⁸⁰。クルティウスの主著におけるスペインの特別な扱い方は、このオルテガの見解が反映されていると推測される。

この手紙へのクルティウスの返事は現存していない。だが、彼は中世文学研究について語ったであろう。というのは、オルテガは、手紙でこう書いているからである。

Espero con enorme apetito su nuevo artículo, cuyo título me es una promesa de voluptuosidades. No piense Vd. ni un momento que las *philologica* carecen de interés para mí. La verdad es todo lo contrario. Es incalculable el número de cosas filosóficas que durante toda mi vida he aprendido en el trabajo de detalle filológico. [...] En cambio, produce en mí un movimiento de sorpresa, de extrañeza que no puedo reprimir, verle a usted separar tan enérgicamente lo que es filosófico de lo que es filológico. Yo no puedo ver entre estos dos orbes sino perfecta continuidad. [...] Dice usted que el planteamiento de la cuestión ¿qué es lo que el poeta – en general y particularmente en cada época – cree hacer?, pertenece a la filosofía. No me atrevería sin más, a esa afirmación. Porque ¿cómo podría el filósofo contestar a esa pregunta, aun en su parte más general, si no es sumergiéndose en los fenómenos concretos, históricamente precios, de la poesía?⁴⁸¹

私は大いに、その表題が逸楽の見込みを与える、あなたの新しい論文を読みたく思います。文献学が私にとって興味がないもだと、少しでもお考えにならないでいただきたい。本当のことは、全く逆です。私の人生で、文献学的な問題の研究から学んだ哲学的な事象の数は、数え切れないほど多いです。[...] 一方、私の中に突然驚くべきことに、何が哲学であるのかと何が文献学であるのかを、あなたは断固として区別しているように見えるという押えきれない感情が生まれています。私は、哲学と文献学という二つの世界に完璧な連続性しか見ることが出来ないでいます。[...] あなたは、一般的に、そして、特にそれぞれの時代において詩人がしていると思っているものは何であるかという問題提起が、哲学に属するものとおっしゃいます。私が、理由もなく、思い切ってこれを肯定することはないでしょう。というのは、たとえ、一般的な部分であっても、もし、詩の具体的な現象や歴史的な価値について没頭しないのなら、どうやって哲学者は、この問題に回答することが出来るでしょうか、と思うからです。

クルティウスは 1938 年以降、中世文学に関する学術論文を書くようになった。この引用部分の冒頭のようなオルテガの反応は、主著で総合化される戦争中の彼の文学研究を後押しするものであったであろう。また、この手紙でオルテガは哲学 *filosofía* (Philosophie) と文献

⁴⁸⁰ BO, S. 910-911.

⁴⁸¹ EOC, pp. 1-2.

学 *filología* (Philologie)⁴⁸² の関係に連続性を主張し、この二つを区別するクルティウスと対話しようとしている。ただ、引用部分の後半のようにオルテガは哲学者には必ずしも詩人のすることが見えているわけではないと言っており、単純に哲学と文献学を結び付けようとはしていないのは確かである。とはいえ、このようにオルテガが哲学と文献学の繋がりを積極的に議論していることは、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第 11 章「詩と哲学」„Poesie und Philosophie“ などに影響を与えたかもしれない。

オルテガは第二次世界大戦中、ポルトガルにいた。戦後にマドリッドでの生活を再開した彼に対し、1948 年冬にクルティウスから送られた手紙では、翌年に発表されるオルテガ論のことが報告され、出版されたばかりの主著をオルテガに送ることが記されている⁴⁸³。

これ以後の書簡では、このオルテガ論や、二人が共に参加したアメリカのコロラド州で開催されたゲーテ生誕 200 年の記念イベントのことが主に話題になった。

第 5 節 結論

本章の第 1 節では、オルテガの二つのヨーロッパ論である『大衆の反逆』と『ヨーロッパに関する考察』を検討した。彼が『大衆の反逆』において主張したことは、エリート主義だけでない。アメリカやソ連の台頭という背景の下で彼は、欧州統合の必要性も説いた。『大衆の反逆』でオルテガは現代の知識人にはヨーロッパ人が出現し始めていることを書いているが、彼はクルティウスをそうした知識人の一人と考えていたように思われる。

一方、『ヨーロッパに関する考察』は、歴史的な展望の元にヨーロッパ論が展開されている。この本では、ヨーロッパと国家の関わりの変遷が語られる。『ヨーロッパに関する考察』で、オルテガがヨーロッパの典型例とするローマ帝国やフランク王国は、クルティウスの『ヨーロッパ文学とラテン中世』で核心を成している。それゆえ、このスペインとドイツの知識人の歴史的教養の共通性を、我々は実感出来るのである。

第 2 節では、1924 年のクルティウスのオルテガ論を扱った。この批評の前半はオルテガのジャーナリズム活動を、後半は『背骨のないスペイン』(1921) や『現代の課題』(1923) といったオルテガの著作を紹介したものである。まずクルティウスは、スペインの知的な雑誌『西欧評論』をオルテガが主宰していることをドイツ語圏の読者に語りかけている。彼は、批評家オルテガの知的胃袋の大きさや彼の秩序や構成への意志を指摘する。これに加え、彼はオルテガのフランス文化とドイツ文化の結び付け方を称賛している。

クルティウスにおけるヨーロッパの特殊性はスペインを重視したものであった。『背骨のないスペイン』を解説しながら、彼は合理論、民主主義、機械論などの近代的な諸概念が見られないからこそ、スペインに新たな可能性があると言う。この指摘は、中世の文化が

⁴⁸² この手紙でオルテガは、文献学という言葉を古典文学研究の意味で使用したと思われる。

⁴⁸³ EOC, p. 12.

多く残るスペインがクルティウスの主著で丁寧に論じられることと関連する。

一方、『現代の課題』について彼は、相対主義と理性主義の対立を乗り越えるような生の理性、そして、遠近法主義というオルテガの独自の概念を説明している。この遠近法主義という概念はスペインの周縁性の結果であるというのがクルティウスの見方である。

第3節では1949年のオルテガ論を主題とした。1924年の論考は紹介を目的としたものであったが、この批評ではクルティウスはオルテガの仕事を総括した。オルテガは哲学者だが講壇哲学者ではないと言い、クルティウスはジャーナリズム活動を擁護している。

続いて、オルテガの知的遍歴が分析されている。彼のドイツ留学を、クルティウスは地中海の太陽と北方ドイツの思想風土との出会いであったとする。独仏の結び付きを語った1924年の論考と異なるのは、主著において地中海文化が重視されているからだろう。

クルティウスはベルクソン哲学から影響を受け、直観による判断を批評原理とした。これに対し、オルテガは生の哲学とは距離を置いていたとクルティウスは考えており、歴史家トインビーに対する二人の評価の違いも、このことと関連するように思われる。

第4節では、1923年から1954年まで続けられたクルティウスとオルテガの書簡に注目した。書簡の量は多くはないが、知的関心の変化を考察する上では貴重なものである。

初期の手紙では、共通の友人であるシェーラーやブルーストのことが話題になった。クルティウスが1924年春に送った手紙は、高まりゆくスペイン研究への情熱を表している。1925年春にオルテガが送った手紙は、彼のポンティニーの旬日会への欠席が記されており、この会合の運営にクルティウスが関わっていたことを示すものとなっている。

二人の往復書簡ではお互いに自分の勤務する大学での講演を依頼しており、これはEUのエラスムス・ムンドゥス・プログラムを想起させる。1934年2月22日にクルティウスから送られた手紙では1932年春にオルテガからの招待で実現したスペイン滞在の充実ぶりが記されており、主著でよく言及されるカルデロンなどをクルティウスがどう受容したのかを考える時に、この時のスペイン滞在の持つ意味は大きいだろう。

オルテガが亡命によりスペインを離れても書簡の遣り取りは続けられた。1938年3月4日にパリのオルテガから送られた手紙は文献学と哲学の関係を話題にしたものであり、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第11章「詩と哲学」などに影響を与えたであろう。オルテガは、クルティウスにとって、文献学と哲学の融合を促す存在であったのだ。

本論文の主題であるクルティウスの“ヨーロッパ精神”の形成過程において、オルテガは大変な刺激を与えた。彼は、哲学、社会学、民族学、歴史学、芸術学といった精神科学、さらに政治学や物理学にも通じていた博識である。彼の汎ヨーロッパ的な知識は、クルティウスに様々な分野の勉強を迫るものであったであろう。また、スペインの後進性を強く意識していたオルテガのスペイン史に関する考察は、二人のキリスト教的な神秘主義に対する距離は異なっていたとしても、クルティウスのスペインに関する理解を助け、“ヨーロッパ精神”を育むことを促進させたのである。

第6章 クルティウスにおける批評と主著の関係

第1節 『ヨーロッパ文学とラテン中世』の概要

戦間期において批評家クルティウスのヨーロッパは、空間的に大きく広がった。しかし、彼が論じたのは、バルザック論などを除くと、現代文学である。そのため、1920年代における彼の“ヨーロッパ精神”は、歴史的な広がりを持っていたわけではない。

1929年にボン大学に移ってからの彼は、古典文学を研究することに力を入れた。『危機に立つドイツ精神』(1932)では、過去の文化的遺産を維持していくことの重要性が説かれている。1930年代及び第二次世界大戦中にクルティウスは文献学者としての仕事を続け、一般の読書人にも読めるような形で公刊した。それが、『ヨーロッパ文学とラテン中世』である。この大著には、歴史的な広がりを持つヨーロッパの文学的伝統が叙述されている。

この本は、全18章から成る。以下、この大著の概要を記述することにする。

冒頭の指導原理 *Leitsätze* の一つに衰亡と没落の時代での執筆を語るヤーコプ・ブルクハルト Jacob Burckhardt の言葉を引用した⁴⁸⁴のは、文化的荒廃を実感していたからであろう。

第1章の「ヨーロッパ文学」„Europäische Literatur“ と第2章の「ラテン中世」„Lateinisches Mittelalter“ は、序論のようなものである。彼は、この二つの言語表現を説明している。

第1章では、ヨーロッパを歴史的な表現として考えることが提起されている⁴⁸⁵。これは、この大著で目指されているのが、空間的なヨーロッパではなく、歴史的なヨーロッパであることを示す。このため、主著では、ヨーロッパ人が次のように定義されている。

Die europäische Literatur als Ganzes zu sehen, ist nur möglich, wenn man sich ein Bürgerrecht in allen ihren Epochen von Homer bis Goethe erworben hat. Man kann das aus keinem Lehrbuch gewinnen, selbst wenn es ein solches gäbe. Man erwirbt das Bürgerrecht im Reiche der europäischen Literatur nur, wenn man viele Jahre in jeder seiner Provinzen gewohnt hat und viele Male die eine mit der anderen vertauscht hat. Man ist Europäer, wenn man *civis Romanus* geworden ist⁴⁸⁶.

ヨーロッパ文学を全体として見ることは、ホメロスからゲーテまでの全ての時期における市民権を獲得する時にだけ、可能である。この市民権は教科書から獲得出来るものではない、たとえそうした教科書があるとしても。人は、何年もどの属州にも滞在し、何度も一つの属州から別の属州に引っ越す場合にだけ、ヨーロッパ文学という帝国の市民権を獲得するのだ。人は、“ローマ市民”になって初めて、ヨーロッパ人になる。

このように、主著におけるヨーロッパ文学というのは、歴史的なものである。ヨーロッパ人になるためには、ホメロスの時代からゲーテの時代までの時期の市民権の獲得が必要で、

⁴⁸⁴ *ELLMA*, S. 7.

⁴⁸⁵ *Ebd.*, S. 16-20.

⁴⁸⁶ *Ebd.*, S. 22.

この約 26 世紀の間の文学はローマ帝国の文学と深い関わりを持っていると彼は言う。

ヨーロッパ文学を全体として見ることをクルティウスが行ったのは、1930 年代に野蛮化したドイツで修辞学の伝統が消えていったからであると考えられる。また、これまでの研究では、中世のラテン文学が未開拓であるので探求することも述べられている⁴⁸⁷。

第 2 章は、『神曲』のダンテとウェルギリウスの道行の描写から始まる⁴⁸⁸。主著で最も頻繁に言及されるこの二人を彼は最初に配置したように思われる。ラテン文学のウェルギリウスと中世文学のダンテによって、ラテン中世を読者に理解させようとしている。

この章で、クルティウスは中世やラテン中世がどのようなものかを語る。彼によると、中世という概念は初期近代のイタリアで生まれた⁴⁸⁹。彼は、4 世紀後半から 9 世紀前半の時期は、ヒエロニムスやアウグスティヌスなどを輩出したから、暗黒時代ではないと考える。ラテン中世とは、弁論家、法律家、詩人がラテン語で意志疎通した中世を指す。彼は、俗語文学が盛んになっても学者達の使うラテン語は後退せず、フランチェスコ・ペトラルカ Francesco Petrarca などにはラテン中世の遺産が生きていることを主張している。

第 3 章の「文学と教育制度」と第 4 章の「修辞学」„Rhetorik“ では、『ヨーロッパ文学とラテン中世』で扱われる文学作品と学校での修辞学の教育との関わりが語られる。前 6 世紀以来ホメロスは教科書であり、ウェルギリウスはラテン語教育の柱であった⁴⁹⁰。

彼は、第 3 章では、中世における文学の教育の変遷を述べる。中世のリベラル・アーツにおいて、文法、修辞学、弁論術は優先順位が高かった⁴⁹¹。また、クルティウスは、カリキュラムや順序だった学位を持つ大学という教育制度は中世に出来たことに触れている。

第 4 章では、中世における修辞学の発展過程が綴られている。クルティウスによると、3 世紀頃のローマ帝国は文化的危機に直面したが、元老院貴族が修辞学などの伝統を保護したのであった⁴⁹²。彼は、この章では、ヒエロニムスやアウグスティヌスなどの卓越した学者達の仕事を通じて、修辞学の展開を具体的に記述しようとしている。

第 5 章の「トポス論」、第 6 章の「女神である自然」、第 7 章の「隠喩法」„Metaphorik“、第 8 章の「詩と修辞学」„Poesie und Rhetorik“、第 9 章の「英雄と支配者」、第 10 章の「理想的風景」では、古代や中世の修辞学がより細分化され説明されている。

第 5 章は、文学的な定型句を意味するトポスに関する記述である。この章の冒頭でクルティウスは、トポスがヨーロッパ文学の地下室 *die Kellerräume* であると形容する⁴⁹³。トポスの伝統を語ることによって、彼はヨーロッパ文学の歴史的な（時間的な）広がりを示そうとしているのである。彼は、古代から近世までの著作家には要求された、導入と結尾の定句、装われた謙遜や逆立ちした世界などのトポスの具体例を引用している。

⁴⁸⁷ *ELLMA*, S. 22-23.

⁴⁸⁸ *Ebd.*, S. 27-29.

⁴⁸⁹ *Ebd.*, S. 30.

⁴⁹⁰ *Ebd.*, S. 46.

⁴⁹¹ *Ebd.*, S. 47.

⁴⁹² *Ebd.*, S. 81-82.

⁴⁹³ *Ebd.*, S. 89.

彼は、第6章で、古代から中世にかけての修辞学が、どのように自然を描写したのかを語る。4世紀後半のクラウディアヌス **Claudianus** にとって、万物の母である自然は威力ある女神であった⁴⁹⁴。こうした古代の自然神を12世紀に導入し、自然を賛美したベルナルドゥス・シルヴェストリス **Bernardus Silvestris** である。クルティウスによると、このベルナルドゥスの自然観はアラヌス **Alanus** によってキリスト教化され、ジャン・ド・マン **Jean de Meung** による『薔薇物語』*Le Roman de la Rose* の庭園描写に影響を与えることになる。

第7章では、古代から中世の修辞学において使われた五つの隠喩が主題である。まず、ローマの詩人達が詩作を舟航に喩えたことや古代末期から“精神の小舟”が常套句であったことを紹介する⁴⁹⁵。また、クルティウスは、擬人の隠喩、食物の隠喩、身体 of 隠喩、演劇の隠喩が使われた作品を引用し、古代から近代の縦の線を繋ごうとしている。

第8章は、ダンテがラテン語で発表した *De Vulgari Eloquentia* の表題に注目し、雄弁術や修辞学と詩の関係を考察している。クルティウスは、古代から中世にかけて、学校で教えられた雄弁術や修辞学が詩作品に多大なる影響を及ぼしたことを主張する。

第9章では、『アエネイス』が後世の文学作品にとって模範であったかを示すために、英雄と支配者に関する古代以来の修辞学的伝統を、彼は語っている。英雄叙事詩の起源がホメロスにあることは言うまでもない。ホメロスに追随したウェルギリウスの『アエネイス』に、彼は、アウグストゥス治下の泰平の世の雰囲気やアエネイスの高い倫理性を感じ取る⁴⁹⁶。この哲人としての英雄は、ウェルギリウス以来のものである。これを、中世のアングロサクソンや中高ドイツ語による英雄叙事詩は継承したのだ。また、クルティウスは、ミゲル・デ・セルバンテス **Miguel de Cervantes** やカルデロンの名を挙げ、武芸と学問の両立という意味で、スペイン黄金世紀ほど見事に実現した例はないことを述べている。

第10章で彼は、古代以来の修辞学が表現した理想的風景を語る。ホメロスは、樹々、泉、柔らかな草地があり、ニンフ達のいる優美な自然を好んだ⁴⁹⁷。クルティウスによると、牧人文学が西洋文学の伝統になったのは、ウェルギリウスが理想郷アルカディアを描写したからである。それくらい、『牧歌』*Bucolica* は後世に多大なる影響を及ぼした。例えば、『牧歌』における緑野の描写は、キリスト教の詩人により天国の描写に応用されたのである。

第11章の「詩と哲学」と第12章の「詩と神学」は、古代以来の詩と哲学や神学の関係を主題としており、内容的に『神曲』と深く関連している。

第11章で彼は、古代では、哲学者と詩人が言い争った時、優勢になるのは哲学者であり、両者の調和はホメロスを寓意的に解釈することだったことを指摘する⁴⁹⁸。彼によると、『アエネイス』や『神曲』のような寓意と博学の性質を帯びた作品は、哲学に接近するのだ。

第12章の冒頭ではダンテとジョヴァンニ・デル・ヴィルジリオ **Giovanni del Virgilio** の交流に着目し、ダンテが俗語の詩よりも学識豊かな詩に優位を与えたことが触れられている

⁴⁹⁴ Ebd., S. 116.

⁴⁹⁵ Ebd., S. 138-141.

⁴⁹⁶ Ebd., S. 181-182.

⁴⁹⁷ Ebd., S. 193-194.

⁴⁹⁸ Ebd., S. 211.

⁴⁹⁹。また、クルティウスは、アルベルトゥス・マグヌス *Albertus Magnus* などのスコラ哲学がダンテの作品との関係を分析している。彼は、スコラ哲学は修辞学とは接点を持っているが、詩に対する弁護をしていないから、安易に結び付けない方がいいと考える。

第13章の「詩神ムーサイ」„*Die Musen*“では、ゼウスとムネモシュネの娘達にあたり、詩文、哲学、音楽の庇護者であった詩神ムーサイの役割の歴史的変遷が語られる。ホメロスがムーサイを必要としたのは、ムーサイが事実を悉く知っているからであった⁵⁰⁰。ギリシアの頃は、より高次の精神教養は全てムーサイを中心としており、これはキケロ *Cicero* やウェルギリウスに受け継がれる。ムーサイは以後、基本的には後退していったので、この章はあまりヨーロッパの修辞学の歴史的な連続性を語るものにはなっていない。

第14章の「古典主義」と第15章の「マニエリスム」は、古典主義やマニエリスムといった概念を、古代から18世紀までの文学作品に探っているものである。

第14章の冒頭では、古典文学作品が生まれた背景が説明される。彼によると、古い文学作品の分類を始めたのは、文法学校での授業を担当するアレクサンドリアの文献学者達である⁵⁰¹。しかし、古代には時代区分に繋がるような歴史意識はなかった。クルティウスは教会において、中世において、そして、近世において、カノンとは何を指したのか語る。

第15章は、形式を論じた章である。クルティウスは、最高の意味での古典主義は短い盛期にしか栄えないから、全ての時代に古典主義の墮落した形式であるマニエリスムが出てくると考える⁵⁰²。この章では、古代から18世紀までの技巧的・作為的な文学作品の変遷が修辞学と結び付けられて語られ、ヨーロッパの歴史的な広がりが見事に表現されている。

第16章の「象徴としての書物」„*Das Buch als Symbol*“では、書物に関する比喻表現を、哲学者、聖職者、劇作家、詩人が、どのように表現したのか語られる。古代において、書物の価値が高まったのは、世界市民的教養という特質を帯びたヘレニズム時代であると彼は言っている⁵⁰³。この章では、中世が詳細に記述されている。彼によると、書物に対して最高の聖化を施したのは、キリスト教である。キリスト教は、福音書、使徒書簡、黙示録、殉教録、聖人伝、典礼書といった聖なる書物を生み出したし、夥しい書物の隠喩が旧約聖書には含まれていたからだ。また、クルティウスは、ラテン中世に由来する隠喩である、被造物という書物が、禁欲主義と神秘主義において愛好されたことも指摘している。

第17章の「ダンテ」では、ダンテが様々な角度から論じられている。『ヨーロッパ文学とラテン中世』において、一章全てが一人の文学者に割かれているのはダンテだけである。まず、クルティウスはダンテの受容史を整理し、彼が古典作家になったのが19世紀に過ぎないと述べている⁵⁰⁴。次に、彼は、『神曲』冒頭の *nostra vita* が俗語のイタリア語であると同時にラテン語でもあることから、俗語とラテン語の緊張が『神曲』では顕著であるので、

⁴⁹⁹ Ebd., S. 221-222. アウエルバッハがダンテの俗語使用を重視したことは、クルティウスとは対照的だ。

⁵⁰⁰ Ebd., S. 236.

⁵⁰¹ Ebd., S. 255.

⁵⁰² Ebd., S. 277.

⁵⁰³ Ebd., S. 309-310.

⁵⁰⁴ Ebd., S. 353-355.

この作品でラテン中世が中核を成していると言う。これは、ダンテのウェルギリウス受容との関連において、こう言い換えられている。

Die Erweckung Virgils durch Dante ist ein Flammenbogen, der von einer großen Seele zu einer anderen überspringt. Die Tradition des europäischen Geistes kennt keine Situation von so ergreifender Höhe, Zartheit, Fruchtbarkeit. Es ist die Begegnung der zwei größten Lateiner. Historisch: die Besiegelung des Bundes, die das lateinische Mittelalter zwischen Antike und moderner Welt gestiftet hat⁵⁰⁵.

ダンテによるウェルギリウス復活は、一つの偉大な魂からもう一つの偉大な魂に燃え移っている炎のアーチである。ヨーロッパ精神の伝統は、これほど感動的な高さ、柔らかさ、豊饒さを持つような状況を知らない。それは、二人の非常に偉大なラテン語の書き手の出会いである。歴史的には、ラテン中世が古代と近代世界の間に創設した同盟の確定である。

クルティウスは、古代と中世の連続性、つまり、歴史的な（時間的な）広がりのあるヨーロッパを、ダンテとウェルギリウスの強い結び付きによって語っている。彼は、“ヨーロッパ精神の伝統” „Tradition des europäischen Geistes“ でも、この二人のような出会いが稀であったことにも触れている。彼が、ここで、“ヨーロッパ精神の伝統” という表現で歴史的な“ヨーロッパ精神”に触れているのは注目すべきことである。

第18章の「エピローグ」 „Epilog“ は、この大著の結論である。冒頭でクルティウスは、この本で展開しようとしたヨーロッパ文学は、古代・中世・近代の連続した、理解可能な意味統一体であることを述べる⁵⁰⁶。彼によると、『ヨーロッパ文学とラテン中世』では修辞学の連続性を主張するために、頻りに形式的要素を論じたのである。さらに、第二次世界大戦中に焚書により、数百万の書物が灰になってしまったことに触れ、文学的伝統を持つ“ヨーロッパ精神”の保護⁵⁰⁷がこの本の執筆の目的であったと語る。

第2節 クルティウスにおける批評と主著の関係

ドゥテランズの『文学におけるヨーロッパをめぐって 1918年から1939年という精神の危機の時代における文学創造とヨーロッパ文化』やコンパニオン編の『1919年から1939年という動乱の時代における文芸共和国』で論じられているように、戦間期においては、ヨーロッパのアイデンティティへの関心が高かった作家や知識人が活躍した。本論文の第2章から第5章までは、クルティウスがこうしたヨーロッパ人達に関する批評をジャーナリズムで発表していることに注目し、彼の批評や交友に関する分析を行った。

⁵⁰⁵ Ebd., S. 363.

⁵⁰⁶ Ebd., S. 387.

⁵⁰⁷ Ebd. S. 398.

彼が論じたヨーロッパ人達の“ヨーロッパ精神”は、第一に、空間的な意味でのヨーロッパであった。しかし、彼らの中には、ヨーロッパの古典文学作品や修辞学の伝統に興味を持つ者も含まれていた。

本節では、まず、本論文で詳しく扱っているヨーロッパ人達及び彼らを論じたクルティウスの批評と主著の関係を考察する。批評だけでなく、書簡と主著との関係にも触れることにしたい。次に、それ以外のクルティウスの批評と主著の関係を扱うことにする。

本論文第2章で扱ったロマン・ロランによる、独仏の対話を描いた『ジャン・クリストフ』は、舞台となる都市が移動することが示すように、空間的なヨーロッパを表象している。しかし、ロランが若い頃にローマに遊学しイタリア芸術に明るかったこともあり、この作品にはヨーロッパの文化的伝統が描かれている部分がある。また、クルティウスが指摘しているように、ローマの精神と光はこの長編小説の源泉のうちの一つである⁵⁰⁸。彼が批評活動で論じた現代文学の中でも、『ジャン・クリストフ』でローマが描かれる部分は印象的なものである⁵⁰⁹。主人公がこの古都に滞在する場面を、引用することにする。

Et Christophe, la tête bourdonnante de soleil (et quelquefois aussi de vin de *Castelli*), près du marbre brisé, assis sur le sol noir, souriant, somnolent et baigné par l'oubli, buvait la force calme et violente de Rome. Juaqu'à la nuit tombante. Alors, le cœur étreint d'angoisse, il fuyait la solitude funèbre où la lumière tragique s'engloutissait... O terre, terre ardente, terre passionnée et muette! Sous ta paix fiévreuse, j'entends sonner encore les trompettes des légions. Quelles fureurs de vie grondent dans ta poitrine! Quel désir du réveil! Christophe trouva des âmes où brûlaient les tisons du feu séculaire. Sous la poussière des morts, ils s'étaient conservés⁵¹⁰.

そして、クリストフは太陽にうなされた頭で（そして時には、“カステッリ”という名前のワインにも酩酊して）、打ち砕かれた大理石のそばで黒い地面の上に座って、微笑しながらまどろみ、忘却に浸って、ローマの静かで強烈な力を飲んでいて。黄昏時まで、そうしていた。その時、心は激しい不安に胸を締めつけられて、彼は悲痛な光が呑み込まれる陰鬱な寂れた場所を避けた。おお、大地、燃えるように熱い大地、情熱的で、それでいて、黙っている大地。熱のあるお前の安らぎの中に、私は古代ローマの軍隊のラッパが吹かれるのを依然として聞く。お前の胸の中で、何という生の激しさが轟いていることか。何という復活の欲望であることか。クリストフは数百年を経た火の燃えさしが燃えているいくつもの靈魂を見つけた。死者達の遺骸の下で、これらの燃えさしは保存されていたのである。

滞在するまではローマに興味を持っていなかったクリストフが、この永遠の都の持っている抗えない力を感じ取っている場面である。ローマの古代遺跡が、クリストフに歴史的な思索を促したのだ。このように、この作品には、クルティウスの主著とも響き合うような

⁵⁰⁸ WB, S. 82.

⁵⁰⁹ ジッド、ペギー、ラルボー、オルテガの作品にも、ローマが描かれるものはある。

⁵¹⁰ Rolland, op. cit., p. 1351.

部分が含まれている。だから、主著には一度も言及されていないとしても、ロマン・ロランは間接的にクルティウスの主著に影響を与えている可能性はあるかもしれない。

一方、ロランとクルティウスの差異から見えてくるものもある。ロランがソヴィエトの共産主義に共感したのに、クルティウスは冷淡であった。主著においてスラヴ圏の国々が軽視されていることは、ロランとは異なる政治的立場から説明出来るのである。

本論文第3章では、クルティウスのジッド論やポンティニー論、コルパハのサロン、クルティウスとジッドの書簡を検討した。ジッドが“ヨーロッパ精神”を持っていたのは、外国文学への関心が人一倍高かったからである⁵¹¹。彼は、主著で二度言及されている。

主著の第1章では、ヨーロッパ文学とは修辞学の伝統を踏まえた文学であると説明される。彼は、ギリシア以来のヨーロッパ文学が描いてきた英雄達について述べている。

Es gibt endlich die Fülle der einmal von der Dichtung geformten Gestalten, die in immer neue Leiber eingehen können: Achill, Ödipus, Semiramis, Faust, Don Juan. Das letzte und reifste Werk von André Gide ist ein « Theseus » (1946)⁵¹².

最後に、アキレウス、オイディプス、セミラミス、ファウスト、ドン・ジュアンといった、いったん文学作品によって形作られ、絶えず新たな肉体に受け入れられうる人物達が存在する。アンドレ・ジッドの最も円熟している最新作は、1946年発表の『テゼ』である。

この部分では、ヨーロッパ文学の歴史において、何度も書き換えられてきた英雄達の名前が列挙され、その次に、ギリシアの英雄テーセウスを主人公とする、ジッドの小説『テゼ』*Thésée* (1946) が言及されている。このようにして、彼は、ギリシアの頃から20世紀前半のジッドまでの歴史的なヨーロッパの広がりを示す。ただ、名前の挙げられている英雄達の中に含まれるオイディプスに関する戯曲をジッドが1931年に発表したのに⁵¹³、主著では、これについてクルティウスが全く触れないのは不思議である⁵¹⁴。

ジッドは、ギリシア神話の知識を備えた教養人であった。しかし、彼の文学作品の特徴は、内容面よりも整った文体である。クルティウスはジッド論で彼の明晰な古典主義を指摘した⁵¹⁵。『ヨーロッパ文学とラテン中世』においても、第14章の「古典主義」でジッドは言及されている。彼によると、近世のイタリア、フランス、英国、ドイツ、スペインで、組織的な体系のある古典主義が存在したのは、フランスだけである⁵¹⁶。

⁵¹¹ WB, S. 45; FGE, S. 301-305.

⁵¹² ELLMA, S. 25.

⁵¹³ Cf. Jean Bollack, « Philoctète et *Edipe roi* de Sophocle relus par André Gide », in: Clara Debord, Pierre Masson et Jean-Michel Wittmann (sous la direction de), *André Gide & la réécriture*, Lyon, Presses universitaires de Lyon, 2013, pp. 15-25.

⁵¹⁴ クルティウスとジッドの書簡では、この戯曲は1931年頃、数回に渡り話題になった (DFG, S. 109-127.).

⁵¹⁵ WB, S. 43-44.

⁵¹⁶ ELLMA, S. 270-271.

Frankreich hat seiner Klassik vieles zu verdanken, aber es hat einen teuren Preis dafür bezahlt: Bindung an Bewußtseinsformen, die für den europäischen Geist zu eng geworden sind. Gide ist die sublimen Ausnahme⁵¹⁷.

フランスは、その古典主義に多くを負っている。だが、そのために、フランスは高い代償を払った。その代償とは、ヨーロッパ精神にとっては狭隘なものになった意識形態に拘束されてしまうということである。アンドレ・ジッドは、洗練された例外である。

フランスの古典主義は組織的な規則を特徴とし、ヨーロッパに対するフランスの優位を前提としていた。しかし、規則のためにロマン主義の陣営から批判され、中華思想のためにヨーロッパの諸民族による“ポリフォニックな和音”の一部にはなりえなかった。だが、ジッドの場合は、この古典主義と“ヨーロッパ精神”が両立していると言うのである。

本論文第3章第2節ではポンティニーの旬日会に触れた。旬日会に参加していた『新フランス評論』の作家達には、古典文学をよく読んでいる教養人が何人もいた。これは、主催者のデジャルダン、その娘婿である古典学者ウルゴンにも当てはまることである。また、この雑誌の作家達は、キリスト教や神秘主義に大変な興味を示していた。従って、ポンティニー修道院での会合で達成されたヨーロッパは、空間的な広がりのあるヨーロッパであると同時に、主著の主題である歴史的な広がりもあるヨーロッパでもあった。

そして、1922年のポンティニー論でクルティウスが指摘したアカデミズムからは距離を置いている点は⁵¹⁸、主著の非体系的な書き方と共通すると言っている。

さらに、1924年のポンティニー論も主著と関連する。本論文第3章第2節で触れたように、この論考で彼は『ミューズとグラス』に関する討論の様子を紹介した⁵¹⁹。『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第13章「詩神ムーサイ」で、彼は、古代から芸術家に靈感を与えてきたムーサイの役割の変遷を語る。1924年の論考では詩的靈感と宗教的靈感の関係はあまり語られてなかったが、この第13章では、この関係が具体的に記述されている。

第3章第3節では、ルクセンブルク市郊外に位置するコルパハの城館での文化的なサロンや、所有者であるマイリッシュ夫妻の活動について触れた。クルティウスは、ポンティニーの旬日会には1920年代前半しか参加していない。これに対しコルパハの城館には、古典文学の研究を続けた1930年代も滞在した。城館のサロンの常連客には、ルクセンブルク人のように、ドイツ語とフランス語の両方を高度に使いこなす人物が何人もいた。その意味ではコルパハが達成したヨーロッパというのは、空間的なヨーロッパであった。

それでは、この城館は、主著の歴史的な広がりを持つヨーロッパに何か影響を与えたのだろうか。ポンティニーの旬日会の参加者達と同じように、城館の訪問者には古典文学に通じた教養人が何人もいた。『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第18章「エピローグ」で古典文学の受容が危機に瀕していることを語った部分で、彼はこう書いている。

⁵¹⁷ Ebd., S. 271.

⁵¹⁸ Vgl. *FGE*, S. 331.

⁵¹⁹ Ebd., S. 339-341.

Corneille ist bedroht, und Jean Schlumberger mußte 1936 eine Anweisung geben, wie man an ihm Gefallen finden könne⁵²⁰.

コルネイユも危機に晒されている。それで、ジャン・シュランベルジェは 1936 年にどのようにコルネイユ作品に喜びを見出せるのか説明書を著さねばならなかった。

彼は、シュランベルジェの『コルネイユの喜び』*Plaisir à Corneille* (1936) に触れている。普仏戦争後のアルザスに生まれたシュランベルジェは、コルパハの常連客であった。公刊されているアリーヌ・マイリッシュの四冊の書簡集のうち最も頁数の多いものはシュランベルジェとの書簡集であり⁵²¹、彼がコルパハのサロンの中心的人物であったことを物語る。

このシュランベルジェに関するモノグラフを 1945 年に発表した古典学者マリー・デルクールも常連客であった。彼女は、ギリシアの劇作家達の作品をフランス語に翻訳し⁵²²、初期近代の人文主義者達についての著書も出版した。デルクールとクルティウスはこの城館で会っていた⁵²³。また、コルパハの常連客では、もう一人、哲学者グレットウイゼン⁵²⁴を挙げたい。彼は、古代から現代までの哲学や文学について、大変な知識を持っていた⁵²⁵。

以上のように、コルパハの城館には、デルクール、グレットウイゼン、シュランベルジェといった古典文学に明るい知識人達が訪問していた。1930 年代に彼らとコルパハで交わした会話は、主著を構想中のクルティウスに刺激を与えたであろう。

第 3 章第 4 節ではクルティウスとジッドの書簡を検討した。クルティウスがボン大学に移った頃から、二人の書簡では古典文学に関する記述が増える。知的好奇心の強い作家ジッドは、古典文学作品を原文で読んでいた。それゆえ、クルティウスの主著をジッドは楽しめたのである。1950 年秋に、ジッドから送られた最後の手紙には、こう書かれている。

Je vivais avec vous, depuis 3 jours: votre Kapitel 15 (Rhetorik und Manierismus) est d'un intérêt prodigieux; et vous seul, avec l'abondance des exemples admirablement choisis et des références, pouviez l'écrire⁵²⁶.

私は三日前から、あなたと一緒に生活しています。あなたの本の第 15 章の第 2 節「修辞学とマニエリスム」には、並外れた興味があります。そして、あなただけが、見事に選ばれた沢山の文例と豊富な出典により、この節を執筆することが出来たのです。

⁵²⁰ ELLMA, S. 399.

⁵²¹ Aline Mayrisch et Jean Schlumberger, *Correspondance 1907-1946*, Luxembourg, Publications Nationales, 2000.

⁵²² Cf. Catherine Gravet (éd.), *Traductrices et traducteurs belges*, Mons, Université de Mons, 2013, pp. 91-147

⁵²³ デルクールとアリーヌの書簡集にはクルティウスがよく言及された。Cf. Aline Mayrisch-de Saint-Hubert et Marie Delcourt-Curvers, *Correspondance 1923-1946*, Luxembourg, Cercle des amis de Colpach, 2009.

⁵²⁴ Vgl. Große Kracht, *Zwischen Berlin und Paris: Bernhard Groethuysen 1880-1946*, Tübingen, Niemeyer, 2002.

⁵²⁵ グレットウイゼンは、アウグスティヌス、エラスムス、モンテーニュ、百科全書派について明るかった。

⁵²⁶ DFG, S. 180.

『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第15章第2節では形式的側面に光が当てられている。文体へのこだわりが強かったジッドがこの章を面白く読むのは、自然なことである。

ジッドは、クルティウスに新鮮味のある古典文学論を述べていた。クルティウスは専門家達による古典文学研究から距離を置いたのだから、彼はクルティウスの古典文学受容に影響を与えたであろう。彼の死後にクルティウスの書いた追悼文では、こう記されている。

Il était devenu le grand Européen français, pratiquant Goethe comme Shakespeare et Dante. Vers la fin de sa vie, il s'était remis à Virgile. Il avait commencé en 1944, en Algérie, du temps qu'il écrivait *Thésée*, comme un écolier studieux, à raison de quatre ou cinq heures par jour. Il relisait inlassablement l'*Enéide*, d'un bout à l'autre; et il continuait depuis à la lire quotidiennement à doses moins massives. Quand il vint me voir à Bonn, en juillet 1947, il me demanda un Virgile pour me faire admirer quelques vers du douzième chant⁵²⁷.

シェイクスピアやダンテと同等にゲーテも愛読しながら、ジッドはフランスの偉大なヨーロッパ人になった。彼は晩年には、ウェルギリウスを読み直していた。『テゼ』をアルジェリアで執筆していた1944年に、彼は勤勉な学生のごとく一日に四時間や五時間くらいの割合でウェルギリウスの読書を始めていた。彼は、飽きもせずに『アエネイス』の端から端まで再読していたのだ。以来、一日ごとの量は減ったとはいえ彼は日常的にこの叙事詩の読書を続けた。1947年7月に私に会いにボンにやって来た際に、彼はウェルギリウスの本を一冊求めて、私に『アエネイス』第12歌のいくつかの詩句を賞賛させたのだった。

引用部分に、主著に頻繁に登場する古典作家達との対話によってジッドがヨーロッパ人になった、とクルティウスが考えていることを我々は確認することが出来る。この追悼文は主著の後に書かれたものであるので、歴史的な広がりを感じさせる批評となっている。

本論文第3章の主題は、クルティウスのホフマンスタール論である。序論の第3節で触れたエヴァンズ編の論文集には、シュヴァルツのホフマンスタール論が収録されている⁵²⁸。この論文集で一章が割かれているくらいだから、ホフマンスタールには、グンドルフ、クルティウス、カントロヴィッチと比肩出来る人文主義的な教養があったのである。それゆえ、歴史的な広がりのあるヨーロッパを主題とした『ヨーロッパ文学とラテン中世』において、ホフマンスタールは近現代人であるのに、言及される回数が多い。以下、主著において彼が触れられている部分を検討していくことにする。

『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第1章「ヨーロッパ文学」で、ホフマンスタールは過去の文学作品が現代文学に連続していることの一例として、触れられる。

⁵²⁷ Curtius, « Amitié de Gide », op. cit., p. 14.

⁵²⁸ Schwarz, "Hugo von Hofmannsthal as a Critic", op. cit., pp. 3-84.

Oder in unserer Zeit: *Tausendundeine Nacht* und Calderón in Hofmannsthal; die *Odyssee* in Joyce; Aischylos, Petronius, Dante, Tristan Corbière, spanische Mystik in T. S. Eliot⁵²⁹.

あるいは現代なら、ホフマンスタールにおける『千夜一夜物語』やカルデロン、ジョイスにおける『オデュッセイア』、T・S・エリオットにおけるアイスキュロス、ペトロニウス、ダンテ、トリスタン・コルビエール、スペインの神秘主義がそうである。

現代における歴史的なヨーロッパ精神の持ち主として、ホフマンスタール、ジョイス、エリオットの三人が挙げられている。ホフマンスタールは、『千夜一夜物語』とカルデロンの二つに結び付けられている。主著においてホフマンスタールは、カルデロンと一緒に言及されることが多い。クルティウスはこの本で、ホフマンスタールとカルデロンの出会いをダンテとウェルギリウスのそれに匹敵するとまで言っているほどである⁵³⁰。

エヴァンズは、1927年頃のクルティウスにおいて、伝統を重視したエリオットとホフマンスタールに同時に関心を強めたと考えている⁵³¹。しかし、この引用部分で言及されているエリオットは、ホフマンスタール以上に過去の多くの文学作品と絆を持っていることが語られており、過去の作品の中には主著の要であるダンテも含まれている。この一節は、ホフマンスタールに人文主義的教養があったとはいえ、エリオットの方が『ヨーロッパ文学とラテン中世』のヴィジョンに合うことを示唆しているのかもしれない。

第2章の「ラテン中世」では、近世のスペインにおける中世のラテン語文学の熱心な受容が語られる場面で、クルティウスはホフマンスタールのフレーズに触れている。

Aber auch die großen lateinischen Autoren des 12. Jahrhunderts fanden im 16. und 17. Jahrhundert noch eifrige Leser, wie Neudrucke zeigen. Die lateinische Literatur des Mittelalters hat neben, in, unter dem großen Bewegungen der beginnenden Neuzeit – Humanismus, Renaissance, Reformation, Gegenreformation – weitergewirkt, am stärksten in dem Lande, das von der Reformation kaum, von Humanismus und Renaissance nicht in seinem Kern berührt worden ist: in Spanien. Hofmannsthals Wort von dem Barock als der verjüngten Form « jener älteren Welt, die wir die mittelalterlich nennen », trifft auf die Literatur der spanischen Blütezeit in besonderem Maße zu⁵³².

だが、複数の再版が示すように、12世紀の偉大なる作家達は16世紀や17世紀でもまだ熱心な読者を得ていた。中世のラテン文学は、人文主義、ルネサンス、宗教改革、反宗教改革といった初期近代の様々な大きな運動と並行して、あるいは、その中で、その下で、作用し続けた。中世のラテン文学が最も濃厚な影響を与えたのは、宗教改革とはほとんど関わらず、人文主義とルネサンスもその中心には接触しなかった国スペインである。バロ

⁵²⁹ ELLMA, S. 25

⁵³⁰ Ebd., S. 363.

⁵³¹ Evans, “Ernst Robert Curtius”, op. cit., p. 106.

⁵³² ELLMA, S. 37.

ックをめぐって、“我々が中世的なものと呼ぶ、あのより古い世界”の若返った形と形容したホフマンスタールの言葉は、最盛期の頃のスペイン文学に非常に当てはまることだった。

この一節で彼は、ヨーロッパの国家でスペインが最も主著の主題に適していると言っている。スペインの文化的特殊性は、彼が「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」において、宗教改革やルネサンスなどのヨーロッパ初期近代の大きな運動には、スペインはほとんど、または全然参加しないという表現で指摘していたことであつた⁵³³。近代語による文学の発達が遅れたために、スペインでは中世のラテン文学が最も残っていたのである。

近世のスペイン文学と中世文学の緊密な繋がり、そして、最盛期のスペイン演劇を近現代においてホフマンスタールが甦らせたことは、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第7章「隠喩法」において、様々な演劇の隠喩を考察している部分でも記述されている。

Hofmannsthal empfand sich als Erben der habsburgischen Tradition, deren Brennpunkte im 17. Jahrhundert Madrid und Wien waren. Die Dichtung der spanischen Blütezeit war unberührt von den klassizistischen Literatursystemen Frankreichs und Italiens. Sie schöpfte künstlerisch weltanschaulich aus der unversiegten Fülle einer Überlieferung, die niemals mit dem Mittelalter gebrochen hatte. Sie bewahrte die Substanz des christlichen Abendlandes. In der Geschichte sah sie ein « Archiv der Zeiten », in dem die Völker aller Epochen und Räume ihre Erinnerungen verzeichnet hatten⁵³⁴.

ホフマンスタールは、自分が、その17世紀の焦点はマドリッドとウィーンであつたハプスブルクの伝統の相続者であると感じていた。スペインの最盛期の文学は、フランスやイタリアの古典主義的な文学体系とは接触を持たず、中世との関係が一度も断つたことのない伝統の无尽蔵の豊富さを、芸術的にも世界観上でも源泉としていた。あの頃のスペイン文学は、キリスト教的西欧の本質を保存し、歴史の中に、あらゆる時代のあらゆる場所の民族が彼らの記憶を書き留めた“諸時代のアーカイヴ”を見ていたのだ。

本論文第4章第1節で触れたように、彼は、クルティウスの同時代人の中で、文学的伝統を一番受け継いでいた文学者であつた。引用部分では、彼が意識していたのがどのような伝統なのか示されている。つまり、中世のキリスト教的西欧を保存していた17世紀のスペイン文学をホフマンスタールは受け継いでいたのだ。さらに、この大著の第15章「マニエリスム」では、より具体的に、ホフマンスタールの戯曲『塔』では、カルデロンやバルタサル・グラシアン Baltasar Gracián の文体の模倣が見られることが語られている⁵³⁵。

⁵³³ KEEL, S. 142.

⁵³⁴ ELLMA, S. 153.

⁵³⁵ Ebd., S. 284.

以上のことから、ハプスブルク家を背景にした 17 世紀におけるマドリッドとウィーンの連結性を論じた批評「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」は、クルティウスにおける批評と主著の関係を考える上で、極めて重要なものであったと言える。

ところで、主著の第 2 章では、中世のロマンス語圏において存在した文化的共同体であるロマーニア Romania が語られている。ジャン＝イヴ・マッソン Jean-Yves Masson が指摘するように⁵³⁶、ロマーニアはロマンス諸語に通じていたホフマンスタールと関連する。

Im heutigen wissenschaftlichen Sprachgebrauch versteht man unter Romania die Gesamtheit der Länder, in denen romanische Sprachen geredet werden. Diese Sprachen sind auf dem Boden des Römerreiches entstanden – vom Schwarzen Meer bis zum Atlantik. Beginnen wir im Osten, so folgen sie einander in der Reihenfolge Rumänisch, Italienisch, Französisch, Provenzalisch, Katalanisch, Spanisch, Portugiesisch. Die Verwandtschaft zwischen den Sprachen der iberischen Halbinsel, Frankreichs und Italiens war schon dem Mittelalter bekannt. [...] Im Mittelalter besteht über die Sprachgrenzen hinaus eine kulturelle Gemeinsamkeit der Romania. [...] Von etwa 1300 ab differenziert sich die Romania nach Sprach und Kultur immer mehr. Dennoch bleiben die romanischen Nationen durch ihre Entstehungsgeschichte und durch ihre stets wache Beziehung zum Latein gebunden. In diesem loserem Sinne kann man auch weiterhin von einer Romania reden, die den germanischen Völkern und Literaturen gegenüber eine Einheit bildet⁵³⁷.

今日の学術的用法では、人はロマンス諸語が話される国々の全体をロマーニアという名称で理解する。これらの言語は黒海から大西洋までのローマ帝国の領土に生まれた。東方から始めるとするなら、ルーマニア語、イタリア語、フランス語、プロヴァンス語、カタルーニャ語、スペイン語、ポルトガル語の順序で続いていく。イベリア半島、フランス、イタリアの言語の間には近親性は既に中世の頃から知られていた。[...] 中世では、言語的な境界を越えてロマーニアの文化的な共同体が成立している。[...] 1300 年頃からロマーニアは言語的に文化的にいよいよ分化する。それにもかかわらず、ロマンス諸語の国民は彼らの成立の歴史によって、またラテン語に対する彼らの常に自覚的な関係によって結ばれたままである。このような厳密でない意味においては、ゲルマン諸民族、諸文学に比べてみれば、一つの統一体を成しているロマーニアに関して人は引き続き話をする事が出来る。

この引用部分で触れられている文化的共同体ロマーニアに対して、若い頃にロマンス語文献学の訓練を受け、そしてハプスブルク帝国への帰属意識を強く持っていたホフマンスタールも意識的であったであろう。「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」でも、クルティウスは、フランス、イタリア、スペインがドイツ民族には一つの大きな共通の存在と映ることに触れていた⁵³⁸。このロマーニアはラテン語文化の伝統で関連するので、歴史的

⁵³⁶ Jean-Yves Masson, *Hofmannsthal, renoncement et métamorphose*, Lagrasse, Verdier, 2006, p. 60.

⁵³⁷ ELLMA, S. 40-42.

⁵³⁸ KEEL, S. 128.

なヨーロッパであると同時に空間的なヨーロッパであるように思われる。

クルティウスの主著において、カルデロンだけを論じる章は存在しない。「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」では、ダンテの作品は秩序への意志や遠慮のない裁判官のようであり、カルデロンの作品には世界を彩り豊かに描き出す象徴の存在であると記された⁵³⁹。従って、カルデロンとホフマンスタールの結び付きは、主著を彩り豊かな性格にするのに貢献したであろう。また、古典文学に明るいホフマンスタールは、クルティウスにとって特別な作家であった。なぜなら、ロマンス語文献学を修めたホフマンスタールは、文化的共同体ロマーニアをクルティウスと共有していたと解釈出来るからである。

本論文第5章で扱ったオルテガは、『ヨーロッパ文学とラテン中世』において二度言及された。クルティウスは、冒頭の指導原理の一つとしてオルテガの文章を引用している。

Un libro de ciencia tiene que ser de ciencia; pero también tiene que ser un libro. José Ortega y Gasset, *Obras*, 1932, 963⁵⁴⁰.

学術書は学術的である必要があるが、同時に書物である必要もある。(ホセ・オルテガ・イ・ガセット『著作集』、1932年、963頁)。

学術書は専門家が読むに堪える本であると同時に、専門以外の者も読めるものでなくてはいけないという意味だろうか。オルテガは学術雑誌には投稿せず、一般の読書人に向けて執筆活動を行った。古典文学を扱う場合も、オルテガに倣って書くことをクルティウスは宣言しているのである。ここには、批評活動と主著の連続性が言い表されている。

『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第18章「エピローグ」において、クルティウスは、リアリズムをスペイン文学の特徴とする従来からある見解を改めることが試みたことが記されている⁵⁴¹。この部分の注において、オルテガの文章が引用されている。

Schon 1927 sagte Ortega, die Geschichtsauffassung von Menéndez Pidal habe zwei schwache Punkte: Der eine ist der –ganz willkürliche– Glaube, der künstlerische Wesenszug Spaniens sei der Realismus. Damit ist die –ebenso willkürliche– Überzeugung verknüpft, der Realismus sei die höchste Form der Kunst. Der andere, ungesicherte Vordersatz ist die Überschätzung des « Volkstümlichen » (*Obras*, 1932, 966)⁵⁴².

オルテガは既に1927年に言った、「メネンデス・ピダルの歴史観は二つの弱点を持つ。一つ目は、スペインの芸術的特徴はリアリズムだという“完全に恣意的な”信念だ。これに、リアリズムが最も高次の芸術形式だという“同じくらい恣意的な”確信が結び付く。もう一つの不確かな前提は“民衆的なもの”の過大評価である。」。(『著作集』、1932年、966頁)

⁵³⁹ Ebd., S. 150-151.

⁵⁴⁰ *ELLMA*, S. 7.

⁵⁴¹ Ebd., S. 390.

⁵⁴² Ebd.

クルティウスは『ヨーロッパ文学とラテン中世』で、スペイン文学と中世のラテン文学の修辞学の側面での連続性について何度も論じている。ピダルがスペイン文学の特徴とする民衆的なリアリズムは、クルティウスが主著で扱う修辞学の伝統とは相反する。

民衆よりもエリートを重視するオルテガの姿勢は、1924 年のオルテガ論で論じられていたことであった。この論考でクルティウスは、スペインの近代化が遅れていることに触れた⁵⁴³。これは、スペインには中世のままである部分が多いということである。彼は、この点をポジティブに見た。主著の目的の一つは中世文化の維持であるが、これをスペインは行っている。従って、1924 年のオルテガ論にも、主著と関連する部分はあるのである。

クルティウスが 1949 年に発表したオルテガ論にも、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の内容と関わる部分はいくつかある。この批評は、当時のドイツの文化的荒廃を嘆く文章で始まる⁵⁴⁴。彼が文化的荒廃を述べるのは、『大衆の反逆』の内容と関連することである。クルティウスの主著はナチスが行った文化の大衆化に対抗して書かれた。それゆえ、大衆から距離を置いて執筆されたという点で、二人の主著は共通していたのである。

だが、この批評の後半ではクルティウスは、オルテガに対する違和感も述べている。

« Eine griechische Statue », sagt Ortega, « scheint mir vollkommen, aber diese griechische Vollkommenheit läßt mich unbefriedigt. [...] Die Klassiker üben einen unzarten Terrorismus über die armen Seelen von heute aus, die ihrer selbst so wenig sicher sind... Das klassische Leben besteht aus Gemeinplätzen ». Das sind Sätze, die schneidend und unwiederlegbar klingen⁵⁴⁵.

オルテガは言う、「ギリシアの彫像は私には完璧なものと思われる。しかし、ギリシア的な完璧さは私を満足させない。[...] 古典期の作家達は、それほど自分自身に自信に持っていない今日の哀れな人間達に対して、思いやりのない恐怖政治を行っている…。古典的な生は、常套句で構成されている。」。これらは辛辣で反論の余地のないように思われる文章だ。

オルテガは、現代において、古典的な文学や芸術に盲目的になることを批判した。さらに、彼は古典的な常套句にもあまり関心がなかった。これは、クルティウスが『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第 5 章でトポス論を詳しく記述していることとは、対照的である。このように古典文学の伝統や歴史観に関して二人の考えが異なることは、『ヨーロッパ文学とラテン中世』でオルテガの言及が少ないことを説明するものである。

本論文第 5 章第 4 節では、クルティウスとオルテガの往復書簡に触れた。クルティウスが書き送った手紙には、スペイン文化への関心が高まっていく様子が記述されているものが何通もある。我々は、オルテガや彼の雑誌『西欧評論』から刺激を受けクルティウスが行ったスペインに関する勉強が、主著で生かされていると考えることが出来る。

⁵⁴³ KEEL, S. 257.

⁵⁴⁴ Ebd., S. 266.

⁵⁴⁵ Ebd., S. 278.

また、1938 年春に亡命中のオルテガが送った手紙では、哲学と文献学の関係が論じられている⁵⁴⁶。『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第 11 章「詩と哲学」では、古代以来の哲学者と詩人の論争が語られており、この手紙と内容的に重なるものとなっている。

本節では、ロマン・ロラン、ジッド、ホフマンスタール、オルテガ以外を対象としたクルティウスの批評と主著の関係にも触れておきたい。第 1 章で述べたように、バルザック論、プルースト論、ナードラー論、グンドルフ論、ラルボー論、ジョイス論、ウェルギリウス論、『危機に立つドイツ精神』の中には、クルティウスの主著の萌芽が存在する。

しかし、クルティウスが批評で扱った近現代の文学者の中でも、際立って、エリオットの仕事が主著に影響を与えている。なぜなら、エリオットが、ダンテへの関心が強かったからである。クルティウスは、主著でエリオットの古典論を原文で引用している。

Für England erklärt T. S. Eliot: We feel that if the classic is really a worthy ideal, it must be capable of exhibiting an amplitude, a catholicity...which are fully present in the medieval mind of Dante. For in the *Divine Comedy*, if anywhere, we find the classic in a modern European language⁵⁴⁷.

英国については、T・S・エリオットがこう説明している、「もし古典作品が本当に価値のある理想であるなら、ダンテの中世的な精神において十分に存在している、広さや普遍性を表すことが出来なければならないと、我々は感じている。ヨーロッパの近代語で書かれた作品の中に古典がもしあるとするならば、『神曲』の中にある。」。

この一節は、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の山場と言える第 17 章「ダンテ」の冒頭の一部分である。このように、エリオットにとって『神曲』こそが古典文学だった。

それでは、クルティウスとエリオットは、どのような文学観を共有していたのだろうか。主著の第 2 章「ラテン中世」のロマーニアに関する部分で、彼は、エリオットが『クライテリオン』の 1923 年 10 月号に発表した文章を、ドイツ語に翻訳しながら引用している。

Im 20. Jahrhundert werden die römischen Traditionen jeder Art wieder betont... [...] Von größerer Tragweite ist die Literaturkritik und Literaturpolitik, die T. S. Eliot seit 1920 vertreten hat: « Drei oder vier großer Romanciers machen keine Literatur aus, obwohl ‚Krieg und Friede‘ ein sehr großer Roman ist. Wenn alle geschichtlichen Wirkungen Roms beseitigt würden – alles, was wir von der normannisch-französischen Gesellschaft, von der Kirche, vom Humanismus, von jedem direkten und indirekten Kanal erhielten – was würde übrig bleiben? Einige wenige teutonische Wurzeln und Hülsen. England ist ein ‚lateinisches‘ Land, ... »⁵⁴⁸

20 世紀では、あらゆる種類のローマの伝統が再び力説される…。[...] より大きな影響力を持っているのは、エリオットが 1920 年以来代表を務めている文芸批評と文学政治である。

⁵⁴⁶ EOC, pp. 1-2.

⁵⁴⁷ ELLMA, S. 353.

⁵⁴⁸ Ebd., S. 45.

つまり、『戦争と平和』は偉大な小説であるのだが、三人や四人の大作家達が文学を成すのではない。もし、我々が、ノルマン・フランスの社会、教会、人文主義、あらゆる直接的・間接的な水路といったものから受け取ったもの全てが、つまり、ローマからのあらゆる歴史的影響が、除去されるのなら、何が残ったままだろうか。残るのは、ほんの僅かなチュートン族の根と豆果である。英国は、“ラテン的”な国なのだ…。」。

エリオットは、ロマンス語圏には含まれない英国の文化が、実はラテン語の文化から強い影響を受けていたと主張している。彼がラテン語の文化を尊重したために、そのダンテ観は、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の文学観と響き合うものであったであろう。

クルティウスのエリオット論は、1927年のものと1949年のものがある。最初の論考には、自分の詩に過去の文学作品からの一節を含ませる学匠詩人の姿が描かれている。

Er ist zunächst ein gelehrter Dichter. Er kennt die Sprachen, die Literaturen, die Techniken. Er schmückt sein Werk mit den Juwelen des Zitats, mit den Reminiszenzen der Lektüre. Er tut also genau das, was die Alexandriner und die Römer taten, nur daß er die Fundorte gleich in Anmerkungen beigt. Seine Poesie ist genährt mit dem Mark der Spätlateiner, der Trecentisten, der Elisabethaner und späten Franzosen⁵⁴⁹.

第一に、エリオットは学匠詩人である。彼は諸言語、諸国の文学、様々な技巧に通じている。彼は自分の作品を引用句の宝石や読書の思い出で装飾する。つまり、エリオットはまさにアレクサンドリア派の人々やローマ人達をしたことをしているのだ、ただし彼はすぐに注の中で源泉の場所を付けるのであるが。彼の詩は、末期ラテン、14世紀イタリア、エリザベス朝、世紀末フランスの精髓に養われたものである。

エリオットの外国語能力や古典文学の教養が指摘されている。1927年の時点ではクルティウスは、詩人、学者、批評家を兼ねていたエリオットが歴史的にも空間的にも広がりのあるヨーロッパ精神の持ち主であると見做していたのだ。そして、これは、本論文第4章第4節で触れたように、ホフマンスタールに関するクルティウスの見解と近い。それゆえ、エリオットとホフマンスタールを結び付けようとするエヴァンズの指摘は鋭いものである。

1949年に『メルクーア』で発表されたエリオット論で、彼はエリオットの仕事の総括を行っている。まず、彼はエリオットが書いた詩の難解さをこう説明している。

Man sollte nicht vergessen, daß Eliot Dante als Vorbild für Dichter empfiehlt. Wie Dante hat er eine gewisse Neigung, den Leser zu mystifizieren⁵⁵⁰.

エリオットがダンテを模範として詩人達に薦めていることを、忘れるべきではない。彼に

⁵⁴⁹ KEEL, S. 318.

⁵⁵⁰ Ebd., S. 331.

はダンテと同じように、読者を煙に巻くという傾向がある。

クルティウスは読者にエリオットのダンテ愛を喚起する。この姿勢は、ダンテを軸にして書かれている『ヨーロッパ文学とラテン中世』との連続性を感じさせる。

エリオットの批評に関して、クルティウスは、まず、彼の古典主義について述べる。エリオットが規範を重視していなかったことがグールモンとの違いである、とクルティウスは考えている⁵⁵¹。続いて、エリオットの文章を引用しながら、彼が伝統をどのように考えていたのか述べている。

Aber eine Forderung seiner Frühzeit würde er vielleicht auch heute anerkennen: der Kritiker und der Dichter sollen die zweieinhalb Jahrtausende umspannende Tradition der europäischen Literatur im Bewußtsein haben. « [...] ; und der historische Sinn besteht darin, nicht nur die Vergangenheit des Vergangenen wahrzunehmen, sondern seine Gegenwart; der historische Sinn zwingt einen Menschen, nicht nur mit seiner eigenen Generation in den Knochen zu schreiben, sondern mit dem Gefühl, daß das Ganze der europäischen Literatur von Homer ab und darin die ganze Literatur seines eigenen Landes eine gleichzeitige Existenz hat und eine gleichzeitige Ordnung darstellt. »⁵⁵²

だが、エリオットは、おそらく今日でも、初期の頃の要求を認めるだろう。その要求とは、批評家や詩人は 2500 年にも及ぶヨーロッパ文学の伝統を意識すべきだというものだ。「[...]」そして、その歴史感覚は、過ぎ去った過去だけでなく、過去が現在にもあることを知覚することから成る。この感覚は、人に、自分の世代のことを全身で受け止めて書くことだけでなく、ホメロス以来のヨーロッパ文学の全体、そして、その中に含まれる自国の文学全体が、一つの同時代的存在を持ち、同時代的秩序を表すことを感じさせることも強いる。」

エリオットは、人文主義的な文芸批評家である。クルティウスは、彼の文学的伝統の尊重が一貫していたことを指摘している。クルティウスは、現代文学を扱う批評家でも古典文学に精通すべきだというエリオットの考えに共感しながら文学史の本を執筆したのであろう。そして、主著を発表した後の彼の批評は、エリオットと同じように、歴史的な広がり十分に意識されたものになったと考えられる。

その一方で、クルティウスは、歴史的なヨーロッパを主張し続けたエリオットが、空間的なヨーロッパに関しては考えを変えていったことも指摘している。

Aber der aufgeschlossene Europäismus von 1920 war eine Verheißung, die sich nicht erfüllt hat. Eliot hat sich immer mehr auf die Revision der dichterischen Tradition Englands von 1580 bis 1780 konzentriert⁵⁵³.

⁵⁵¹ Ebd., S. 351.

⁵⁵² Ebd., S. 352.

⁵⁵³ Ebd., S. 352-353.

しかし、1920 年頃の開放的なヨーロッパ主義は実現しなかった約束だった。エリオットは、次第に、1580 年から 1780 年までの英国の文学的伝統の再検討に専心するようになった。

エリオットは戦後、空間的なヨーロッパの探求も試みた。だが、彼は英文学の専門家に終わったことをクルティウスは嘆く。従って、エリオットの場合は、歴史的なヨーロッパの探求は卓越しているが、空間的なヨーロッパを挫折したと彼は判断しているのだ。

このエリオット論の前年に、クルティウスは論考「批評家としてのゲーテ」„Goethe als Kritiker“ を発表した。ゲーテは『ヨーロッパ文学とラテン中世』で、人文主義的伝統の最後の後継者として扱われた。一方、この論考はゲーテの批評活動を主題としている。

ここで、ゲーテの世界文学という理念に注目してみたい。1810 年代の彼は 14 世紀ペルシアの詩人ハーフェズ Hafez の作品との邂逅を契機に 1819 年に詩集『西東詩集』*West-östlicher Divan* を刊行し、世界文学の理念を深める。クルティウスは、以下のように記述している。

Die Aneignung der orientalischen Poesie erweiterte das Reich des Kritikers Goethe. Es war ein Alexanderzug... [...] Goethe hat etwas von jenem literarischen Polyhistorismus, den wir auch bei Herder und Jean Paul finden. Auch das ist eine Wurzel von Goethes Konzeption der Weltliteratur. Aber die Polyhistorie wird bei Goethe einer höheren Betrachtungsweise dienstbar gemacht: der vergleichenden⁵⁵⁴.

オリエントの詩を自分のものにしたことは、批評家ゲーテの領域を拡張した。それは、アレクサンダー大王の遠征のようなものだった…。[...] 彼は、我々がヘルダーやジャン・パウロにも見出すあの文学の博識主義のようなものを持っている。これも彼の世界文学の構想の根底だ。だが、博識はゲーテの下では、比較するという、より高いレベルの考察の方法のために利用されている。

現代文学だけでなく古典文学にも通じていたゲーテ⁵⁵⁵が、オリエントの詩の受容により、さらに読書の幅を広げたことが、アレクサンダー大王の領土拡大になぞらえられている。そして、クルティウスは比較という方法を可能にさせる文学の博識主義こそ、ゲーテの世界文学の特徴であると考えている。比較による文学の博識主義は、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の様々な箇所実践されていることである。

ペルシアの詩人ハーフェズに関しては、クルティウスは主著の第 16 章「象徴としての書物」でオリエントが語られている部分で言及されている。

Dem Calderón-Übersetzer Gries schrieb er 1816, « daß mein Aufenthalt im Orient mir den trefflichen Calderón, der seine arabische Bildung nicht verleugnet, nur noch werter macht ». Der

⁵⁵⁴ Ebd., S. 44, 47-48.

⁵⁵⁵ クルティウスによると、ゲーテは古典と現代文学を視野に入れ世界文学の理念を抱いた (LZ, S. 56-57.)。

Gedanke ist in den *West-östlicher Divan* übergegangen:

Herrlich ist der Orient

Übers Mittelmeer gedrungen;

Nur wer Hafis liebt und kennt,

Weiß, was Calderón gesungen.

In der Geschichte der modernen Literaturen steht das spanische *siglo de oro* durch die Fülle und Präziosität seiner Metaphorik – auch der von Schrift und Buch genommenen – einzig da. Sucht man sich diese Tatsache zu erklären, so bieten sich, wie mir scheint, zwei Gründe: erstens die Nachwirkung der mittellateinischen Dichtung (in Spanien weit stärker als irgendwo sonst), zweitens die Jahrhunderte umfassende Kulturgemeinschaft zwischen christlichem und maurischem Spanien. Mittellatenischer und orientalischer Zierstil konnten sich nur in Spanien zusammenfinden und vermischen. Sie haben jenen spielerischen Manierismus Spaniens mitgeformt, den man Gongorismus und Konzeptismus nennt⁵⁵⁶.

ゲーテは、1816年にカルデロン⁵⁵⁷の翻訳者グリースに宛てた手紙で、「私のオリエント滞在は、アラビア文化の教養を隠さない素晴らしきカルデロンを、私にとって一層価値あるものになっています。」と書いている。このゲーテの着想は、『西東詩集』の中にも移されている。

見事に、オリエントは、

地中海を越えて、到達した。

ハーフィスを好み、知っている者だけが、

カルデロンが歌ったものを分かるのだ。

近代文学の歴史において、スペインの“黄金世紀”は、その隠喩法の豊富さやプレシオジテによって（文字や書物から取られた隠喩法の豊富さやプレシオジテでも）、比類のないものだ。この事実を説明しようと努めようとするなら、二つの理由が提供されると私には思われる。第一の理由は、（どこか他のところよりスペインではずっと強い）中世ラテン文学の影響だ。第二の理由は、キリスト教的スペインとムーア的スペインの間にある数世紀に渡る文化的結び付きである。中世ラテンの装飾的文体とオリエントの装飾的文体は、スペインだけで一緒に纏まり、混ざり合っている。これらの文体は、文飾主義やコンセプティズムと解されている、あのスペインの遊び心のあるマニエリスムを形作ったのだ。

本論文第4章第5節を中心に、我々は何度もクルティウスがホフマンスタールのカルデロン受容に着目していることに触れた。しかし、この引用部分では、ゲーテのカルデロン受容が世界文学との関連で話題にされている。若い頃からゲーテを読んでいたクルティウスは1920年代前半の段階で、ゲーテの世界文学の理念とペルシアの詩人の関係を知識としては知っていた⁵⁵⁷。しかし、彼はこの関係を具体的に論じることはなかった。1920年代半ば

⁵⁵⁶ ELLMA, S. 348-349.

⁵⁵⁷ LZ, S. 57.

から、クルティウスはスペイン文学研究に熱心に取り組んだおかげで、スペイン文学とラテン中世やペルシア文学との影響関係も理解出来るようになり、ゲーテのハーフェズ受容をカルデロン受容の結び付きを語れるようになったのであろう。だから、この引用部分は、彼がゲーテの世界文学の理念を自分のものに出来るようになったことを示す。

エヴァンズが指摘するように、ゲーテの世界文学という理念とクルティウスのヨーロッパ文学という理念は、深く関連していた⁵⁵⁸。本論文の主題は、クルティウスにおける“ヨーロッパ精神”の形成過程を検討するというものである。従って、この引用部分は、彼の“ヨーロッパ精神”が完成の域に達したことを示していると思われる。

第3節 結論

クルティウスは一般的には、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の著者として認知されている。だが、本論文は彼に文芸批評家としての側面があったことに注目している。

この大著で描かれるのは、ヨーロッパの歴史的な広がりである。しかし、戦間期のクルティウスにおける批評活動で希求されていたのは、空間的なヨーロッパであった。本章では、彼の批評と主著の関係に接点を見出すことを目的とした。というのは、彼が批評対象にした作家達には古典文学をよく読んでいる者も含まれていたし、ロマンス語文献学を学んだクルティウスも若い頃から古代や中世の文学作品も読んでいたからである。

第1節では、修辞学の伝統を主題とする『ヨーロッパ文学とラテン中世』を概観した。1920年代の批評活動における“ヨーロッパ精神”とは、各民族の文化を総合することにより形成させるポリフォニックな和音のようなヨーロッパを希求することを指し、“ヨーロッパ精神”の持ち主は、様々な近代語を身につけている者を意味するだろう。しかし、主著におけるヨーロッパ人というのは、ラテン語の文学的伝統を身につけた者を指す。

この本で彼は、ダンテとウェルギリウスを頻繁に登場させた。これは、ラテン世界を代表するのがウェルギリウスで、中世世界を代表するのがダンテであるからである。彼は二人の結び付きを描くことにより、未開拓であったラテン中世の文学を提示しようとした。

『ヨーロッパ文学とラテン中世』では、特に、文学作品の形式的側面の歴史を語ることによって、古代から19世紀までの文学的表現の連続性が主張された。修辞学の伝承は教育と結び付いていたために、この本では文学の教育の変遷も語られている。

第2節では、クルティウスの批評と主著の関係を考察した。まず、本論文の第2章から第5章で扱った四人のヨーロッパ人達や彼らを扱った批評と主著の関係を分析した。

クルティウスが論じた現代文学で『ジャン・クリストフ』以上に、ヨーロッパの文化的中心としてのローマを描いた作品はない。だから、この小説からの間接的影響がある可能性はあるかもしれない。しかし、ロマン・ロランは、主著では言及はされなかった。

⁵⁵⁸ Evans, “Ernst Robert Curtius”, op. cit., p. 133.

一方、クルティウスが約 30 年間友情を保ったアンドレ・ジッドは、古典文学作品に本当に興味を持っていた。これは、『新フランス評論』の作家達、ポンティニーの旬日会やコルパハのサロンの出席者にも言えることであった。アカデミズムの古典文学研究から距離を置いていたクルティウスにとって、こうした教養人者達の古典作品に関する言葉は、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の構想に刺激を与えたであろう。

ジッドと同じように空間的な“ヨーロッパ精神”と歴史的な“ヨーロッパ精神”の両方を持っていたホフマンスタールも、クルティウスの主著と大きく関わっている。『ヨーロッパ文学とラテン中世』では、カルデロンは、ダンテ、ウェルギリウスに次ぐくらい言及が多い。クルティウスは、このカルデロンとホフマンスタールの強い結び付きを何度もこの大著で語っている。また、若い頃にロマンス語文献学を修めたホフマンスタールは、ローマニアと呼ばれる中世の文化的共同体をクルティウスと共有していたはずである。

空間的な欧州統合を説いたオルテガの『大衆の反逆』は、文化の野蛮化に対抗して執筆されたという点では、クルティウスの主著と共通していた。また、スペイン文化の大衆的な側面にばかり注目することへの批判も、オルテガとクルティウスは共有していた。しかし、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の目的とオルテガの思想は、あまり接点を持たなかった。それは、オルテガがヨーロッパの修辞学の連続性には無関心であったためである。

ロマン・ロラン、ジッド、ホフマンスタール、オルテガ以外の同時代人達に関する批評でも、主著と関連しているものがいくつもある。特に、クルティウスと主著の中心主題であるダンテへの知的関心を共有したエリオットの仕事が深く関連している。彼は、2500 年に及ぶヨーロッパ文学の伝統をずっと肯定していたためである。ただ、エリオットの場合、空間的な広がりのあるヨーロッパへの意識は欠けていた。

戦後のゲーテ論では、世界文学という理念が論じられた。これは、主著の第 16 章「象徴としての書物」で論じられたペルシアの詩人ハーフェズとスペイン文学の繋がりに関連し、また、クルティウスにおける“ヨーロッパ精神”が完成したことを示すものである。

本章は、第 2 章から第 5 章にかけて展開された空間的ヨーロッパと主著の主題である歴史的ヨーロッパが対話をするという役割を持っている。『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第一主題が歴史的なヨーロッパであるとしても、本論文で論じられることで、この本における空間的ヨーロッパも、より具体的に可視化し易くなるはずである。また、本章により、主著以降に発表されたクルティウスの批評が、歴史的な広がりも備えたものになったことが見えてくるであろう。

結論

本論文『批評家クルティウスのヨーロッパ精神—同時代の作家や知識人との交流の中で—』は、ジャックマール＝ド・ジュモールの論文、カール・テニセン Karl Thönnissen の論文、ミュラーの論文、アントニオ・デ・ムルシア・コネサ Antonio de Murcia Conesa の論文に続く、世界で五本目のクルティウスに関する博士論文である。

クルティウスは、文学におけるヨーロッパを探究した。大きく分けると、彼の仕事は、文献学者としての仕事と批評家としての仕事に分けられる。前者の特徴が歴史的な広がりのあるヨーロッパであって、後者の特徴は空間的な広がりのあるヨーロッパであった。

本論文が対象としているのは、批評家クルティウスの仕事である。本論文は、同時代で“ヨーロッパ精神”を持っていたロマン・ロラン、ジッド、ホフマンスタール、オルテガに関するクルティウスの批評や彼らとの交友を分析し、クルティウスにおける空間的な広がりのあるヨーロッパの形成過程を辿ることを目的としている。しかし、最終章では、彼の批評と主著である『ヨーロッパ文学とラテン中世』の関係を考察している。

クルティウスにおいて、どのような過程で“ヨーロッパ精神”は育って行ったのだろうか。彼が 1950 年に自分の批評活動を回顧した文章を、引用することにする。

Für einen Deutschen, zumal für einen im Elsaß geborenen und aufgewachsenen wie mich, war Frankreich die notwendige Ergänzung. Es war zugleich eine Spannung, die man nirgends stärker fühlte als im Elsaß. [...] Es hat seinen guten geschichtlichen Sinn, daß heute in Straßburg über eine europäische Union verhandelt wird. Aber mir war das deutsch-französische Europa nicht weit genug. [...] Rom war die Mutter des Abendlandes. [...] Von Madrid lief eine europäische Querverbindung nach dem Wien der Habsburger. Auf dieser Linie stand Hofmannsthal, der mir seit je Höchstes bedeutete. So wurde mir Europa immer weiter und reicher⁵⁵⁹.

ドイツ人にとって、特に私のようにアルザスで生まれ育ったものにとって、フランスは不可欠な補足物だった。同時にそれは緊張を生み出すものであり、アルザスほど強力にこの緊張を感じる場所はなかった。[...] 現在ストラスブールで欧州連合に関する話し合いが行われていることは歴史的にとっても意味がある。しかし、私にはドイツとフランスによるヨーロッパはそれほど十分ではなかった。[...] ローマは西洋の母であった。[...] マドリードからはハプスブルク家のウィーンへは、ヨーロッパを横断する連結が走っていた。かねてから私には至高の存在を意味していたホフマンスタールも、この連結の上に位置していた。このようにして、私にとってのヨーロッパはますます広大にますます豊かなものになった。

クルティウスは、彼のヨーロッパにおいて、いかにドイツとフランスの関係、ローマ、スペインとオーストリアの関係が根幹をなしているのか説明している。また、この引用部分

⁵⁵⁹ KEEL, S. 7.

は、本論文で扱った彼の同時代人達の仕事との繋がりを示すものとなっている。このような過程を辿って、『ヨーロッパ文学とラテン中世』は執筆された。

本論文の第 1 章では、文献学者として認知されているクルティウスがどのようなジャーナリズムの媒体で何を論じていたのかを、時期を区別しながら見ていった。フランス現代文学の紹介者として出発したクルティウスが、1920 年代後半のハイデルベルク時代以降は、エリオットやジョイスなどの英文学やオルテガやウナムーノなどのスペイン文学も批評の対象にする。彼は 1930 年代前半にはフランスへの興味があまりなくなり、ドイツ文化の現状を深く考え始め、古代ローマや西洋中世への関心を深めるようになるのである。

第 2 章では、これまで研究されてこなかったクルティウスとロマン・ロランの関係を考察した。ロランは、イタリアとドイツの文化に通じていたヨーロッパ人であった。ローマは、クルティウスの終着点である。このローマにロランは通じており、独仏の対話を描いた『ジャン・クリストフ』でもローマは重要である。クルティウスは、ロマン・ロラン論で三度、ライン河に言及した。本論文では、『ジャン・クリストフ』で繰り返し描かれるライン河が、主著においてどのような形で登場するのかを検討した。さらに、このロラン論を通じて、ロランやクルティウスの“ヨーロッパ精神”と第一次世界大戦の関係に触れた。最後に、共産主義に共感するロランから離れるクルティウスについて論じた。

第 3 章では、クルティウスとジッド、ポンティニーの旬日会とコルパハのサロンについて扱った。クルティウスはジッド論で、彼の特徴を古典主義や外国文学の受容に熱心さとした。二人は、汎ヨーロッパ的な集いであったポンティニーの旬日会やルクセンブルクの文化的なサロンに出席した。クルティウスによる二つのポンティニー論は、フランス文化を礼賛している。一方、アリーヌ・マイリッシュが主宰したサロンはドイツ的であり、クルティウスはこのサロンには 1930 年代も断続的に通った。また、クルティウスの批評活動をアリーヌの夫エミール・マイリッシュに近付けると、ロカルノ体制という文脈の中で位置付けられる。一方、クルティウスとジッドの書簡には、ドイツとフランスの政治的緊張関係、クルティウスの新しいフランス文学や古典文学に対する知的関心の変化が反映されていた。フランス古典主義の文体で執筆したジッドは、ヨーロッパ文学全体にも好奇心を持つ知識人作家であったために、クルティウスと相互に影響を与え合った。

第 4 章では、クルティウスのホフマンスタールに関する批評を取り上げた。クルティウスは、若い頃から晩年まで、ホフマンスタールの仕事を熱心に受容し、彼からの影響でバルザック論を執筆し、カルデロンなどのスペイン古典文学の研究を行った。クルティウスによるホフマンスタールの追悼文と批評「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」を比較すれば、彼の知的関心がフランスからスペインに移っていることが明白である。また、ホフマンスタールは、クルティウスと同じように保守革命の思想を持っていた。そして、クルティウスは、ハプスブルク帝国への帰属意識と結び付いているホフマンスタールのロマンス語文化の教養を重視した。ホフマンスタールの貴族的な要素を、クルティウスは、旧体制期のフランス文学やヴェネツィアを中心にイタリア文化の受容に見出す。ホフマン

スタールもクルティウスも、ロマンス語文献学を修めた文芸批評家であった。従って、ホフマンスタールのロマンス語文学の教養は、クルティウスの主著の執筆を励ますものの一つであったであろう。しかし、スラヴ文化にも愛着を持っていた点でホフマンスタールにおけるヨーロッパはクルティウスとは異なる部分があることにも目を向けた。

第5章では、クルティウスとオルテガの関係を扱った。オルテガは、ジャーナリズムで健筆を奮いアカデミズムから批判された点や、若い頃は自国のジャーナリズムで外国文化の紹介に熱心であった点で、クルティウスと共通していた。この章では、まず、オルテガの『大衆の反逆』と『ヨーロッパに関する考察』を検討した。次に、1924年のクルティウスのオルテガ論を対象とし、彼が、知的胃袋の大きさ、秩序や構成への意志、仏独の上手な結び付け方を指摘したことに触れた。クルティウスによる『背骨のないスペイン』や『現代の課題』の解説は、彼のヨーロッパはスペインを重視したことを示している。続いて、1949年のオルテガ論を扱い、クルティウスがジャーナリズム活動を擁護していることに着目した。オルテガのドイツ留学を地中海と北方ドイツの出会いとするのは、クルティウスの主著における地中海文化の重視と関連する。これに加え、クルティウスとオルテガの往復書簡は、二人の知的関心の変化を示すものである。1938年のオルテガからの手紙は、主著の第11章「詩と哲学」などに影響を与えたであろう。

第6章では、クルティウスの批評と主著の関係を対象とした。“ヨーロッパ精神”という表現は、1920年代の批評でも、『ヨーロッパ文学とラテン中世』でも登場する。しかし、この表現の意味は批評と主著では異なっている。戦間期のクルティウスにおいて拡張していたのは空間的なヨーロッパであって、歴史的なヨーロッパが広がるのは、1929年にボン大学に移ってからのことである。本論文で詳しく扱った同時代人では、ジッドとホフマンスタールは主著の内容と関わる仕事をした。一方、ロマン・ロランやオルテガの仕事はクルティウスの主著の執筆にはそれほど影響を与えていない。他の同時代人では、エリオットが最も主著の内容と関わる仕事をした。それはダンテや古代からの文学的伝統に対し、エリオットが本当に興味を持っていたからである。最後に、第二次世界大戦後のゲーテ論で扱われる世界文学という理念は、クルティウスも共有し、主著で実践したことにも触れた。この章で『ヨーロッパ文学とラテン中世』の内容を検討したことにより、この大著以降のクルティウスの批評が、歴史的な広がり具备了なものになったことが明瞭になった。

これまでのクルティウス研究の中で最も充実していたのは、クリスティーヌ・ジャックマール＝ド・ジュモーの『E. R. クルティウス (1886-1956) ヨーロッパ精神の起源と進展』(1998)であった。この本では、前半の第一部で、主著を執筆するまでのクルティウスの知的遍歴が語られ、後半の第二部で、『ヨーロッパ文学とラテン中世』が様々な角度から検討されている。本論文で一章を割いている、クルティウスとロマン・ロランやジッドとの関係は、ジャックマール＝ド・ジュモーの本でも触れられている。しかし、本論文は、彼女が軽視している『ジャン・クリストフ』のヨーロッパ性、ロマン・ロラン論におけるライン河、そして、クルティウスとジッドの書簡について詳述した。また、彼女は、ポンティ

ニーの旬日会とコルパハのサロンの共通性には注目しているが、差異については論じていない。これに加え、彼女は主著における牧歌文学論をクルティウスのボンの邸宅の庭園と結び付けているのに対し、本論文ではコルパハの城館の庭園との関連性も指摘した。

スイスとオーストリアには、ヨーロッパへと繋がるような多民族性がある。ジャックマール＝ド・ジュモーの本の独創性の一つは、クルティウスの母方であるスイスと彼のヨーロッパ人としてのアイデンティティとの繋がりを記述したことである。だが、この本は、オーストリアの多文化性とクルティウスのヨーロッパの関係には触れていない。本論文の第4章では、クルティウスがホフマンスタールの作品を受容することを通じて、ハプスブルク帝国のヨーロッパ性に意識的であったことを論じている。

彼女の本において説得力があるのは、フランス、ドイツ、スイスの文化を論じている部分である。一方、本論文では、この本ではあまり扱われていないクルティウスのオルテガ論やエリオット論も分析の対象としている。これにより、ジャックマール＝ド・ジュモーが主張するクルティウスの貴族主義がオルテガのエリート主義に近いこと、近代化されていない国であるスペインが主著で重視されている理由、批評と主著の関係を考える上で歴史的な広がりのあるヨーロッパを希求していたエリオットが重要な存在であることが、より明瞭になると思われる。また、彼女がロシアの神秘主義者イヴァーノフと結び付けるクルティウスの神秘主義が、1924年のポンティニー論やホフマンスタール論とも関わるものであることが、本論文では示されている。

クルティウスの文芸批評は、それぞれの作家の研究史においても名高いものである。だが、その作家を専門的に研究する者を除いては、彼の批評は忘れられている。

この博士論文を契機として、日本語の言説空間においても、批評家としてのクルティウスが議論されることになるに違いない。また、本論文は、近現代におけるヨーロッパ文学の様相を考察するのに必要な材料を提供することになるであろう。さらに、彼の書簡やヨーロッパ的意識を持った作家や知識人の作品も扱った本論文により、クルティウスを20世紀前半におけるインテレクチュアル・ヒストリーにおいて位置付けることが可能になる。

初出一覧

序論

Ivano Paccagnella e Elisa Gregori (a cura di), *Ernst Robert Curtius e l'identità culturale dell'Europa*, Esedra, Padova, 2011 (xx + 386 pp.) (『上智ヨーロッパ研究』、第5号、上智大学ヨーロッパ研究所、2013年、179-184頁)

第1章

« Curtius lecteur de Proust: littérature et mystique dans les années 1920 », in: Carole Auroy, Aude Préta-de Beaufort et Jean-Michel Wittmann (éds.), *Roman mystique, mystiques romanesques aux XXème et XXIème siècles*, Paris, Classiques Garnier, à paraître en 2016.

第2章

« Deux grands fleuves en géopolitique européenne: Curtius et Magris », Extraterritoriality of languages, literatures and civilizations: assessments and prospects, Paris 12 Val de Marne University, October 18-20, 2012.

「クルティウスとローマの関係をめぐって 同時代人との交友を手がかりに」(大阪大学文学研究科共同研究「ヨーロッパ文化としてのグランドツアー」シンポジウム、2013年3月5日、北海学園大学)

« Aux sources de l'intégration européenne: l'Alsacien Curtius et la Luxembourgeoise Aline Mayrisch », in: Justyna Giernatowska et Witold Konstanty Pietrzak (éds.), *Pluralité des cultures : chances ou menaces?*, Łódź, Wydawnictwo Uniwersytetu Łódzkiego, 2014, pp. 79-86.

« Curtius et son appartenance au Rhin », Longing and Belonging, European Network for Comparative Literary Studies, 6th Biennial Congress, Dublin City University and National University of Ireland, August 24-28, 2015.

第3章

「100年に及ぶポンティニーからスリジーまでの歴史」François Chaubet, Édith Heurgon et Claire Paulhan (sous la direction de), *SIECLE Colloque de Cerisy: 100 ans de rencontres intellectuelles de Pontigny à Cerisy*, Paris, Institut Mémoires de l'édition contemporaine, 2005, 544pp. (『世界言語研究センター論集』第7号、大阪大学世界言語研究センター、2012年、255-262頁)

« Un véritable lieu d'accueil pour les intellectuels venus essentiellement de France, d'Allemagne et de Belgique », Cultural mediators in Europe 1750-1950, Catholic University of Leuven, June 5-7, 2014.

「1920 年代のルクセンブルクにおけるアリーヌ・マイリッシュのサロン」(『ルクセンブルク学研究』、第 5 号、ルクセンブルク学研究会、2014 年、21-49 頁)

第 4 章

「クルティウスとホフマンスタール ロマンズ語文化の受容をめぐって」(『独文学報』、No.26、大阪大学ドイツ文学会、2010 年、75-96 頁)

第 5 章

“Curtius’s Awareness of a European Citizen through his Relationship with Unamuno and Ortega”, International Euroculture Conference 2012, How does Europe engage with cultural citizenship?, University of Deusto, June 22-23, 2012.

「ヨーロッパの体現者クルティウスのスペイン受容をめぐってーカルデロン、ウナムーノ、オルテガを中心にー」(『組織的な若手研究者等海外派遣プログラム 多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム派遣成果最終報告書』、大阪大学大学院文学研究科、2013 年、227-229 頁)

« Curtius et Ortega: sur la réception de Spengler », Comparative Literature as a Critical Approach, International Comparative Literature Association XXth Congress, Paris-Sorbonne (Paris IV), July 18-24, 2013.

第 6 章

「クルティウスにおける批評と文献学の関係」(言語圏の文学、第 13 回研究会、2016 年 1 月 11 日)

いずれも大幅に加筆、訂正を加えている。

参考文献

クルティウスの作品

Ernst Robert Curtius, *Ferdinand Brunetière; Beitrag zur Geschichte der Französischen Kritik*, Straßburg, K. J. Trübner, 1914.

— *Die literarischen Wegbereiter des neuen Frankreich*, Potsdam, Gustav Kiepenheuer, 1919; repr. 1923.

— *Maurice Barrès und die geistigen Grundlagen des französischen Nationalismus*, Bonn, F. Cohen, 1921; repr. Hildesheim, Olms, 1962.

— *Balzac*, Bonn, F. Cohen, 1923; repr. Bern, Francke, 1951.

— *Französischer Geist im neuen Europa*, Stuttgart, Deutsche Verlag, 1925.

— *Die französische Kultur: eine Einführung*, Stuttgart, Deutsche Verlag, 1930; repr. Bern und München, Francke, 1975.

— *Deutscher Geist in Gefahr*, Stuttgart, Deutsche Verlag, 1932.

— *Essai sur la France*, traduit par Jacques Benoist-Méchin, Paris, Bernard Grasset, 1932; repr. La Tour-d'Aigues, Éditions de l'Aube, 1995.

— *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*, Bern, Francke, 1948; repr. 1993.

— *Literarische Kritik in Deutschland*, Hamburg, Hanseatische Druckanstalt, 1950.

— *Kritische Essays zur europäischen Literatur*, Bern, Francke, 1950; repr. 1954.

— « Amitié de Gide », in: *Hommage à André Gide*, *La Nouvelle Revue Française*, Paris, novembre 1951, pp. 13-15.

— *Französischer Geist im zwanzigsten Jahrhundert*, Bern, Francke, 1952.

— *European Literature and the Latin Middle Ages*, translated by Williard R. Trask, New York, Princeton University Press, 1953; repr. 1973.

— *Essais sur la Littérature européenne*, traduit par Claude David, Paris, Bernard Grasset, 1954.

— *La littérature européenne et le Moyen Âge latin*, traduit par Jean Bréjoux, Paris, Presses universitaires de France, 1956.

— *Büchertagebuch*, Bern, Francke, 1960.

— *Gesammelte Aufsätze zur romanischen Philologie*, Bern, Francke, 1960.

— *The Civilization of France*, translated by Olive Wyon, New York, Vintage Books, 1962.

— *Essays on European Literature*, translated by Michael Kowal, Princeton, Princeton University Press, 1973.

— *Letteratura della letteratura*, Lea Ritter Santini (a cura di), Bologna, Il Mulino, 1984.

— *Marcel Proust*, Lea Ritter Santini (a cura di), Bologna, Il Mulino, 1985; repr. Milano, Ledizioni, 2009.

— *Goethe, Thomas Mann und Italien - Beiträge in der Luxemburger Zeitung (1922-1925)*, Bonn, Bouvier, 1988.

— *Ensayos críticos acerca de la literatura europea*, traducción de Eduard Valentí, Madrid, Visor, 1989.

- *El espíritu francés en el siglo XX: Gide-Rolland-Claudél-Suarès-Péguy*, traducción de Ruth Zauner, Madrid, Visor, 1992.
- *Letteratura europea e Medio Evo latino*, Roberto Antonelli (a cura di), Milano, La Nuova Italia, 1995; repr. 2010.
- *Escritos de humanismo e hispanismo*, edición de Antonio de Murcia Conesa, Madrid, Verbum, 2011.
- 『クルティウス佛蘭西文學』(土方定一訳、楽浪書院、1935 年)
- 『現代フランスの文學開拓者』(大野俊一訳、白日書院、1947 年)
- 『ヨーロッパ文学とラテン中世』(南大路振一・岸本通夫・中村善也訳、みすず書房、1971 年)
- 『読書日記』(生松敬三訳、みすず書房、1973 年)
- 『フランス文化論』(大野俊一訳、みすず書房、1977 年)
- 『現代ヨーロッパにおけるフランス精神』(大野俊一訳、みすず書房、1980 年)
- 『危機に立つドイツ精神』(南大路振一訳、みすず書房、1987 年)
- 『バルザック論』(小竹澄栄訳、みすず書房、1990 年)
- 『ヨーロッパ文学評論集』(川村二郎・小竹澄栄・高本研一・松浦憲作・圓子修平訳、みすず書房、1991 年)
- 『文学と旅 ゲーテ、トーマス・マン、イタリア』(小竹澄栄訳、みすず書房、1991 年)

クルティウスの書簡

- Gottfried Benn, *Briefe an Ernst Jünger, E.R. Curtius, Max Rychner u.a.*, Zürich, Verlag der Arche, 1960.
- Ernst Robert Curtius, « Lettres à Catherine Pozzi (1928-1934) », in: Jeanne Bem et André Guyaux (éds.), *Ernst Robert Curtius et l'idée d'Europe*, Paris, Honoré Champion, 1995, pp. 329-392.
- *Briefe aus einem halben Jahrhundert. Eine Auswahl*, Baden-Baden, Valentin Koerner, 2015.
- Ernst Robert Curtius und José Ortega y Gasset, „Ein Briefwechsel 1923-1949“, in: *Merkur* 18, 1964, S. 903-914.
- Ernst Robert Curtius e Karl Eugen Gass, *Carteggio e altri scritti*, Lavis, La Finestra Editrice, 2009.
- Ernst Robert Curtius e Friedrich Gundolf, *Epistolario (1908-1930)*, Lavis, La Finestra Editrice, 2010.
- Ernst Robert Curtius und Max Rychner, *Freundesbriefe 1922-1955*, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 2015.
- Herbert et Jane M. Dieckmann (Hg.), *Deutsch-französische Gespräche 1920-1950: La Correspondance de Ernst Robert Curtius avec André Gide, Charles Du Bos et Valéry Larbaud*, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1980.
- Friedrich Gundolf, *Briefwechsel mit Herbert Steiner und Ernst Robert Curtius*, Amsterdam, Castrum Peregrini Presse, 1963, S. 129-286.
- Ortega y Curtius, “Epistolario”, in: *Revista de Occidente*, 6 (septiembre 1963), Madrid, pp. 1-27., y 7 (octubre 1963), pp. 329-341.
- Max Rychner und Ernst Robert Curtius, *Aus dem Briefwechsel*, Marbach, Deutsche Schillergesellschaft

Marbach/Neckar, 1987.

Dieter Wuttke (Hg.), *Kosmopolis der Wissenschaft: E.R. Curtius und das Warburg Institute*, Baden-Baden, V. Koerner, 1989, S. 29-220.

H./J. M. ディークマン『クルティウス=ジッド往復書簡』(円子千代訳、法政大学出版局、1985年)

クルティウスに関する文献

Roberto Antonelli, “Filologia e Modernità”, in: Curtius, *Letteratura europea e Medio Evo latino*, Milano, La Nuova Italia, 1995; repr. 2010, pp. VII-XXXIV.

Jeanne Bem et André Guyaux (éds.), *Ernst Robert Curtius et l'idée d'Europe*, Paris, Honoré Champion, 1995.

Walter Berschin und Arnold Rothe (Hg.) *Ernst Robert Curtius: Werk, Wirkung, Zukunftsperspektiven: Heidelberger Symposion zum hundertsten Geburtstag 1986*, Heidelberg, Winter, 1989.

William Calin, *The Twentieth-Century Humanist Critics*, Toronto, University of Toronto Press, 2007, pp. 29-42.

Norman F. Cantor, *Inventing the Middle Ages*, New York, William Morrow and Company, 1991, pp. 189-204.

Stefano Chemelli, “Karl Eugen Gass, l'allievo prediletto di Ernst Robert Curtius”, in: Curtius e Gass, *Carteggio e altri scritti*, Lavis, La Finestra Editrice, 2009, pp. 5-14.

— “Gundolf e Curtius: un dialogo limpido e aperto ai diversi punti di vista”, in: Curtius e Gundolf, *Epistolario (1908-1930)*, Lavis, La Finestra Editrice, 2010, pp. I-VIII.

J. H. Copley, “The Politics of Friendship”, in: Elisabeth Däumer and Shyamal Bagchee (eds.), *The International Reception of T. S. Eliot*, London, Continuum, 2007, pp. 243-267.

Nemesio González Caminero, “Convergencias y divergencias entre Ortega y Curtius”, in: *Miscelánea Comillas. Revista de Ciencias Humanas y Sociales*, Vol. 26, N° 50, Madrid, Universidad Comillas, 1968, pp. 123-186.

Antonio de Murcia Conesa, “Espacio político y morfología de la literatura europea. Aproximación a la tópica histórica de Ernst Robert Curtius”, Murcia, *Daimon*, n°31, 2004, pp. 43-69.

— “Tópica e historia en la obra de Ernst R. Curtius”, Málaga, *Analecta Malacitana*, 2005, pp. 7-24.

— “Prefacio”, in: Curtius, *Escritos de humanismo e hispanismo*, Madrid, Verbum, 2011, pp. IV-LXXIV.

Herbert et Jane M. Dieckmann, « introduction », in: H. et J. M. Dieckmann (Hg.), *Deutsch-französische Gespräche 1920-1950: La Correspondance de Ernst Robert Curtius avec André Gide, Charles Du Bos et Valéry Larbaud*, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1980, S. 9-17.

Christoph Dröge, „Ernst Robert Curtius und Colpach“, in: *Galerie*, numéro 1, Luxembourg, 1988, S. 26-36.

Charles Du Bos, « Ernst Robert Curtius », in: *Approximations*, Paris, Éditions des Syrtes, 2000, pp.

1039-1059.

Arthur R. Evans, "Ernst Robert Curtius", in: R. Evans (ed.), *On Four Modern Humanists. Hofmannsthal, Gundorf, Curtius, Kantorowicz*, Princeton, Princeton University Press, 1970, pp. 85-145.

Claude Foucart, « Ernst Robert Curtius et André Gide. Les débuts d'une amitié 1920-1923 », in: *Revue de littérature comparée*, 3, 1984, pp. 317-339.

Stefan Gross, *Ernst Robert Curtius und die deutsche Romanistik der zwanziger Jahre*, Bonn, Bouvier, 1980.

Klaus Grosse Kracht, « Les intellectuels allemands à Pontigny », in: François Chaubet, Édith Heurgon et Claire Paulhan (sous la direction de), *SIECLE Colloque de Cerisy: 100 ans de rencontres intellectuelles de Pontigny à Cerisy*, Paris, Institut Mémoires de l'édition contemporaine, 2005, pp. 107-116.

Hans Ulrich Gumbrecht, *Vom Leben und Sterben der großen Romanisten. Karl Vossler, Ernst Robert Curtius, Leo Spitzer, Erich Auerbach, Werner Krauss*, München, Carl Hanser, 2002, S. 49-71.

Christine Jacquemard-de Gémeaux, *Ernst Robert Curtius (1886-1956): origines et cheminements d'un esprit européen*, Bern, Peter Lang, 1998.

Frank-Rutger Hausmann, „Vorbemerkung“, in: Curtius, *Briefe aus einem halben Jahrhundert. Eine Auswahl*, Baden-Baden, Valentin Koerner, 2015, S. 9-22.

— „Vorwort“, in: Curtius und Rychner, *Freundesbriefe 1922-1955*, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 2015, S. 7-21.

Lothar Helbing, „Zur Einführung“, in: Gundolf, *Briefwechsel mit Herbert Steiner und Ernst Robert Curtius*, Amsterdam, Castrum Peregrini Presse, 1963, S. 11-70.

Romain Kirt, „Vorwort des Herausgebers“, in: Curtius, *Goethe, Thomas Mann und Italien - Beiträge in der Luxemburger Zeitung (1922-1925)*, Bonn, Bouvier, 1988, S. 5-18.

Michael Kowal, "Introduction", in: Curtius, *Essays on European Literature*, Princeton, Princeton University Press, 1973, pp. ix-xxiv.

Gustav René Hocke, *Im Schatten des Leviathan*, München, Deutscher Kunstverlag, 2004.

Dirk Hoeges, *Kontroverse am Abgrund: Ernst Robert Curtius und Karl Mannheim. Intellektuelle und freischwebende Intelligenz in der Weimarer Republik*, Frankfurt am Main, Fischer, 1994.

Luzius Keller, « Ernst Robert Curtius », in: Annick Bouillaguet et Brian G. Rogers (éds.), *Dictionnaire Marcel Proust*, Paris, Honoré Champion, 2004, pp. 278-279.

Wolf-Dieter Lange (Hg.), „In Ihnen begegnet sich das Abendland“ *Bonner Vorträge zur Erinnerung an Ernst Robert Curtius*, Bonn, Bouvier, 1990.

José Lasaga Medina, "Introducción a Curtius y Ortega: una línea transversal del Rhin al Manzanares", Madrid, *Revista de Estudios Orteguianos*, 5, 2002, pp. 185-190.

Heinrich Lausberg, *Ernst Robert Curtius (1886-1956)*, Stuttgart, Franz Steiner Verlag, 1993.

Mario Mancini, *Stilistik als Erfahrung*, Würzburg, Königshausen & Neumann, 2012, S. 87-110.

Aline Mayrisch-de Saint-Hubert, « Regards sur l'Allemagne. Articles publiés à la NRF (1919-1921) », in:

Galerie, numéro 1, Luxembourg, 1988, pp. 13-18.

Stefanie Müller, *Ernst Robert Curtius als journalistischer Autor (1918-1932): Auffassungen über Deutschland und Frankreich im Spiegel seiner publizistischen Tätigkeit*, Bern, Peter Lang, 2007.

Ivano Paccagnella e Elisa Gregori (a cura di), *Ernst Robert Curtius e l'identità culturale dell'Europa*, Padova, Esedra, 2011.

— *Attorno a Curtius*, Padova, Esedra, 2011.

Fritz Schalk, „Geleitwort“, in: Curtius, *Die französische Kultur: eine Einführung*, Bern und München, Francke, 1975, S. VII- XIV.

Earl Jeffrey Richards, *Modernism, Medievalism and Humanism: a research bibliography on the reception of the works of Ernst Robert Curtius*, Tübingen, Niemeyer, 1983.

— “Bibliografia scelta su Ernst Robert Curtius”, in: Curtius, *Letteratura della letteratura*, Bologna, Il Mulino, 1984, pp. 431-486.

Max Rychner und Walter Boehlich (Hg.), *Freundesgabe für Ernst Robert Curtius zum 14. April 1956*, Bern, Francke, 1956.

Lea Ritter Santini, “Il piacere delle affinità”, in: Curtius, *Letteratura della letteratura*, Bologna, Il Mulino, 1984, pp. 9-76.

— “Insetti e lillà”, in: Curtius, *Marcel Proust*, Milano, Ledizioni, 2009, pp. 9-33.

Linda Simonis, *Genetisches Prinzip. Zur Struktur der Kulturgeschichte bei Jacob Burckhardt, Georg Lukács, Ernst Robert Curtius und Walter Benjamin*, Tübingen, Niemeyer, 1998, S. 189-246.

Raimond Theis, *Auf der Suche nach dem besten Frankreich. Zum Briefwechsel von Ernst Robert Curtius mit André Gide und Charles du Bos*, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1984.

Karl Thönnissen, *Ethos und Methode: zur Bestimmung von Beruf und Wesen der Metaliteratur nach Ernst Robert Curtius*, Diss. Paderborn, 2000.

René Wellek, “The Literary Criticism of Ernst Robert Curtius”, in: *A Journal for Descriptive Poetics and Theory of Literature*, 3, Amsterdam, North-Holland Publishing Company, 1978, pp. 25-44.

Nikolaus Werz, “El diagnóstico del tiempo en Curtius, Jaspers y Ortega”, in: Jaime de Salas y Dietrich Briesemeister (eds.), *Las influencias de las culturas académicas alemana y española desde 1898 hasta 1936*, Madrid, Vervuert, 2000, pp. 75-90.

Dieter Wuttke (Hg.), *Kosmopolis der Wissenschaft: E.R. Curtius und das Warburg Institute*, Baden-Baden, V. Koerner, 1989.

エーリッヒ・アウエルバッハ「エルンスト・ロベルト・クルティウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』」(『世界文学の文献学』、高木昌史訳、みすず書房、1998年、448-459頁)

秋元律郎「文化危機の理論と知識社会学 E. R. クルティウスと K. マンハイムの論争に寄せて」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要 哲学・史学編』、(37)、1991年、45-60頁)

生松敬三「E・R・クルティウス覚え書(一)」(『中央大学文学部紀要』、(75)、1975年、3-14頁)

—「E・R・クルティウス覚え書(二)」(『中央大学文学部紀要』、(78・79)、1976年、33-40頁)

- 今井道児「E. R. クルティウスとフランス」(『人文科学研究』、(31)、新潟大学人文学部、1967年、1-26頁)
- 「E. R. クルティウスにおける批評」(『ドイツ文学』、(39)、日本独文学会、1967年、69-78頁)
- 「南大路振一・岸本通夫・中村善也訳『E・R・クルティウス ヨーロッパ文学とラテン中世』」(『ドイツ文学』、(49)、1972年、108-109頁)
- 太田隆士「ワイマール時代の知識人 ホフマンスタールと E. R. クルティウス」(『駿河台大学論叢』、(1)、1987年、23-42頁)
- 大野俊一「あとがき」(『現代フランスの文学開拓者』、白晝書院、1947年、488-494頁)
- 小川正巳「E. R. Curtius: *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*」(『ドイツ文学』、(27)、日本独文学会、1961年、111-116頁)
- 「比較文学的方法 クルティウスを中心として」(片山良展・三木正之・八木浩編『文学の基礎理論』、ミネルヴァ書房、1974年、114-124頁)
- 「比較文学におけるイマゴロジー」(『神戸外大論叢』、32(5)、神戸市外国語大学研究所、1981年、1-22頁)
- 「E. R. クルティウスとその批判」(『神戸外大論叢』、33(5)、神戸市外国語大学研究所、1982年、1-20頁)
- 海津忠雄「芸術家賞讃のトポス」(『哲学』、94、慶應義塾大学、1993年、163-179頁)
- 桂芳樹「ドイツ・ロマンスティックの系譜 E・R・クルティウスと E・アウエルバッハ」(『ドイツ文学研究』、(6)、日本独文学会東海支部、1970年、57-69頁)
- 「E. R. クルティウスの『ヨーロッパ文学とラテン中世』の問題点」(『ドイツ文学』、(50)、日本独文学会、1973年、16-26頁)
- 「比較文学の課題 E. R. Curtius のヨーロッパ文学の研究方法与ドイツ比較文学の成果にもとづいて」(『ドイツ文学研究』、(8)、日本独文学会東海支部、1976年、183-214頁)
- 片山敏彦「クルティウス論」(『心』、6(12)、平凡社、1953年、32-37頁)
- 菅野昭正「躍動する未知のヨーロッパ クルティウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』ほか」(『朝日ジャーナル』、15(38)、朝日新聞社、1973年、59-61頁)
- 木村宇一「E・R・クルティウスのトポス論 O・ペグラーのトポス論との関連において」(『京都府立大学学術報告 人文』、第20号、1968年、16-33頁)
- 小竹澄栄「訳者あとがき」(『バルザック論』、みすず書房、1990年、366-373頁)
- 橋本郁雄「いわゆる『騎士の徳目体系』に関する覚え書 E・R・クルティウスの批判をめぐって」(『一橋論叢』、47(3)、1962年、311-324頁)
- 服部英次郎「Ernst Robert Curtius, *Europäische Literatur und Lateinisches Mittelalter*, pp. 601., Bern, Francke, 1948. Ernst Robert Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages*, translated from the German by Willard R. Trask, pp. XVIII+662, London, Routledge and Kegan Paul, 1953.」(『西洋古典学研究』、3、日本西洋古典学会、1955年、166-169頁)
- 船越克己「E. R. クルティウスのホフマンスタール評論について」(『独仏文学』、(11)、大阪府立

大学独仏文学研究会、1977 年、1-20 頁)

松浦憲作「解説 (初出: 1969 年)」(『ヨーロッパ文学評論集』、みすず書房、1991 年、409-415 頁)

南大路振一「訳者あとがき 解題をかねて」(『ヨーロッパ文学とラテン中世』、みすず書房、1971 年、854-869 頁)

鷺田哲夫「クルティウス以後のフランス中世文学研究 その社会学的研究を中心として」(『比較文学年誌』、(9)、早稲田大学比較文学研究室、1973 年、50-61 頁)

ヨーロッパ論

Sylvain Allemand, Édith Heurgon et Claire Paulhan (éds), *De Pontigny à Cerisy: Des lieux pour « penser avec ensemble »*, Paris, Hermann, 2011.

Angelo Ara ed Eberhard Kolb (a cura di), *Regioni di frontiera nell'epoca dei nazionalismi: Alsazia e Lorena / Trento e Trieste*, Bologna, Il Mulino, 1995.

Angelo Ara e Claudio Magris, *Trieste. Un'identità di frontiera*, Torino, Einaudi, 1982; repr. 2007.

Tony Bourg et Joseph-Émile Muller (sous la direction de), *Les Mayrisch. L'apport et le rayonnement européen d'une famille luxembourgeoise*, Luxembourg, Musée d'histoire et d'art, 1980.

François Chaubet, *Paul Desjardins et les Décades de Pontigny*, Villeneuve d'Ascq, Presses Universitaires du Septentrion, 2000; repr. 2009.

François Chaubet, Édith Heurgon et Claire Paulhan (sous la direction de), *SIECLE Colloque de Cerisy: 100 ans de rencontres intellectuelles de Pontigny à Cerisy*, Paris, Institut Mémoires de l'édition contemporaine, 2005.

Landry Charrier, *La Revue de Genève (1920-1925)*, Genève, Slatkine, 2009.

Claire Paulhan (sous la direction de), *De Pontigny à Cerisy. Un siècle de rencontres intellectuelles*, Paris, Institut Mémoires de l'édition contemporaine, 2002.

Tania Collani et Peter Schnyder (éds.), *Critique littéraire et Littérature européenne*, Paris, Orizons, 2010.

Antoine Compagnon (éd.), *La République des Lettres dans la Tourmente (1919-1939)*, Paris, Alain Baudry, 2011.

Madame de Staël, *De l'Allemagne*, I- II, Paris, Garnier Flammarion, 1968.

Charles Dédéyan, *Le cosmopolitisme littéraire de Charles Du Bos*, t.1-3, Paris, Société d'Édition d'Enseignement Supérieur, 1965-1971.

Pascal Dethurens, *De l'Europe en littérature. Création littéraire et culture européenne au temps de la crise de l'esprit (1918-1939)*, Genève, Droz, 2002.

Anne-Marie Duranton-Crabol, Nicole Racine et Rémy Rieffel (éds.), *Pontigny, Royaumont, Cerisy: au miroir du genre*, Paris, Éditions Le Manuscrit, 2008.

Germaine Goetzinger, Gast Manne et Frank Wilhelm (éds.), *Hôtes de Colpach. Colpacher Gäste*. Mersch, Centre national de littérature, 1997.

Harry Graf Kessler, *Tagebücher 1918-1937. Politik, Kunst und Gesellschaft der zwanziger Jahre*, Frankfurt am Main, Insel Verlag, 1961; repr. 1979.

Anne Heurgon-Desjardins, *Paul Desjardins et les Décades de Pontigny*, Paris, Presses Universitaires de France, 1964.

Philippe Hoch, *Robert Schuman. Bibliophile/der Bücherfreund. Une bibliothèque extraordinaire/Eine außerordentliche Bibliothek*, Milano, Silvana Editoriale, 2011.

Manuel Maldonado Alemán (ed.), *Austria, España y Europa: Identidades y Diversidades*, Sevilla, Secretariado de Publicaciones de la Universidad de Sevilla, 2006.

Pierre Masson et Jean-Pierre Prévost, *L'esprit de Pontigny*, Paris, Orizons, 2014.

Jean-Pierre Morel, Wolfgang Asholt et Georges-Arthur Goldschmidt, (éds.), *Dans le dehors du monde. Exils d'écrivains et d'artistes au XXe siècle*, Paris, Presses Sorbonne Nouvelle, 2010.

Guido Müller, *Europäische Gesellschaftsbeziehungen nach dem Ersten Weltkrieg. Das Deutsch-Französische Studienkomitee und der Europäische Kulturbund*, München, R. Oldenbourg, 2005.

Salvatore Pappalardo, *The United States of Europe*, New Brunswick, Umi Dissertation Publishing, 2012.

Anne-Marie Saint-Gille, *La Paneurope*, Paris, Presses Université Paris-Sorbonne, 2003.

Predrag Matvejevitich, *Le monde « ex ». Confessions*, Paris, Fayard, 1996.

Jean-Xavier Ridon, Pierre-Alexis Mével et Nadine Laporte (éds.), *Européens, qui sommes-nous?*, Pau, Presse de l'Université de Pau, 2012.

Léa Scholl, *Aline und Émile Mayrisch-de St. Hubert und der Europadiskurs in der Zwischenkriegszeit*, Albert-Ludwigs-Universität Freiburg i. Br., 2010.

Robert Schuman, *Pour l'Europe*, Paris, Les Editions Nagel 1963; repr. 2010.

Oswald Spengler, *Der Untergang des Abendlandes*, München, Deutscher Taschenbuch Verlag, 2003.

Robert Stumper (éd.), *Colpach*, Luxembourg, Amis de Colpach, 1957; repr. 1978.

Gilbert Trausch (éd.), *Le maître de forges Émile Mayrisch et son épouse Aline*, Luxembourg, Banque de Luxembourg, 1998.

Pierre Viénot, *Questions de Paix. Articles publiés à Luxembourg en 1925*, Luxembourg, Archives nationales Luxembourg, 1997.

Verena von der Heyden-Rynsch, *Europäische Salons: Höhepunkte einer versunkenen weiblichen Kultur*, München, Artemin & Winkler Verlag, 1992.

饗庭孝男『ヨーロッパとは何か』(小沢書店、1991年)

木戸紗織「ルクセンブルクの多言語社会に関する考察 欧州連合の“母語プラス二言語”政策の実践例として」(『都市文化研究』、(10)、大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、2008年、53-66頁)

—「EUが掲げる言語理念とルクセンブルクにおけるその実践 アイデンティティのグローバル化とローカル化」(『京都ドイツ語学研究会』(8)、2009年、64-67頁)

木畑洋一編『ヨーロッパ統合と国際関係』(日本経済評論社、2005年)

ウルズラ・ケラー、イルマ・ラクーザ編『ヨーロッパは書く』（新本史斉、吉岡潤、若松準、フ
ランツ・ヒンターエーダー＝エムデ訳、鳥影社、2008 年）

島田悦子『欧州経済発展史論 欧州石炭鉄鋼共同体の源流』（日本経済評論社、1999 年）

—『欧州石炭鉄鋼共同体 EU 統合の原点』（日本経済評論社、2004 年）

杉谷眞佐子、高田博行、浜崎桂子、森貴史編『ドイツ語が織りなす社会と文化』（関西大学出版
部、2005 年）

建部和仁『小さな大国ルクセンブルク』（かまくら春秋社、2010 年）

パスカル・ドゥテュランス『ヨーロッパ紋切型小事典 A から Z の煌めき』（田中訓子訳、作品
社、2011 年）

ジルベール・トラウシュ『ルクセンブルクの歴史』（岩崎允彦訳、刀水書房 1999 年）

エティエンヌ・バリバール『ヨーロッパ市民とは誰か 境界・国家・民衆』（松葉祥一、亀井大
輔訳、平凡社、2007 年）

ウージェーヌ・フィリップス『アイデンティティの危機 アルザスの運命』（宇京頼三訳、三元
社、2007 年）

星野太「ポンティニーからスリジーへ ポンティニーの旬日会とスリジー＝ラ＝サルのコロック」
（西山雄二編『人文学と制度』、未来社、2013 年、375-378 頁）

牧野雅彦『ロカルノ条約 シュトレゼマンとヨーロッパの再建』（中央公論新社、2012 年）

ロマン・ロランに関する文献

Bernard Duchatelet, *La genèse de Jean-Christophe*, Paris, Minard, 1978.

— *Romain Rolland et la NRF. Correspondances avec Jacques Copeau, Gaston Gallimard, André Gide, André Malraux, Roger Martin du Gard, Jean Paulhan, Jean Schlumberger et fragments du Journal*, Paris, Albin Michel, 1989.

— « La correspondance Curtius – Romain Roland », in: Jeanne Bem et André Guyaux (éds.), *Ernst Robert Curtius et l'idée d'Europe*, Paris, Honoré Champion, 1995, pp. 145-165.

— *Romain Rolland tel qu'en lui-même*, Paris, Albin Michel, 2002.

— (sous la direction de), *Europe*, Romain Rolland, n° 942, Paris, 2007.

Richard Francis, « Romain Rolland, l'Europe et la quête de l'harmonie », in: Jean-Xavier Ridon, Pierre-Alexis Mével et Nadine Laporte (éds.), *Européens, qui sommes-nous?*, Pau, Presse de l'Université de Pau, 2012, pp. 75-86.

Victor Hugo, *Le Rhin*, Strasbourg, Nuée bleue, 1990.

Aude Leblond, *Vestiges du livre-monde: poétique du roman-fleuve, de Jean-Christophe à Maumort*, Université Sorbonne nouvelle-Paris 3, 2010.

Romain Rolland, *Jean-Christophe*, Paris, Albin Michel, 1931; repri. 2007.

Anne-Marie Saint-Gille, *Les idées politiques d'Annette Kolb (1870-1967)*, Berne, Peter Lang, 1993.

Michel Winock, *Le siècle des intellectuels*, Paris, Éditions du Seuil, 1997; repr. 1999.

Stefan Zweig, *Die Welt von Gestern*, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1942; repr. 1970.

宇京頼三『異形の精神 アンンドレ・スュアレス評伝』(岩波書店、2011 年)

加藤雅彦『ライン河 ヨーロッパ史の動脈』(岩波新書、1999 年)

河原忠彦『シュテファン・ツヴァイク』(中公新書、1998 年)

新村猛『ロマン・ロラン』(岩波新書、1958 年)

ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ I-III』(片山敏彦訳、河出書房新社、1960-1961 年)

—『ロマン・ロラン全集 33 ローマの春』(宮本正清・山上千枝子訳、みすず書房、1964 年)

『ロマン・ロラン＝マルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク 往復書簡 1890-1891』(南大路振一訳、みすず書房、1988 年)

アンンドレ・ジッドに関する文献

Alban Cerisier, Marie-Odile Germain, William Marx, Pascal Mercier, Anne-Rachel Hermetet et Claire Paulhan (sous la direction de), *La Nouvelle Revue française. Les colloques du centenaire: Paris, Bourges, Caen*, Paris, Gallimard, 2013.

Paul Claudel et André Gide, *Correspondance 1899-1926*, Paris, Gallimard, 1949.

Jacques Copeau et Valéry Larbaud, *Correspondance 1911-1932*, Paris, Classiques Garnier, 2015.

Clara Debord, Pierre Masson et Jean-Michel Wittmann (sous la direction de), *André Gide & la réécriture*, Lyon, Presses universitaires de Lyon, 2013.

André Gide, *Journal I 1887-1925*, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1996.

— *Journal II 1926-1950*, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1997.

André Gide et Valéry Larbaud, *Correspondance 1905-1938*, Paris, Gallimard, 1989.

André Gide et Aline Mayrisch, *Correspondance 1903-1946*, Paris, Gallimard, 2003.

André Gide et Jean Schlumberger, *Correspondance 1901-1950*, Paris, Gallimard, 1993.

André Gide et Paul Valéry, *Correspondance 1890-1942*, Paris, Gallimard, 1955.

André Gide, *Correspondance avec Paul Desjardins, Jacques Heurgon & Anne Heurgon-Desjardins*, Paris, Éditions des Cendres, 2011.

Hommage à André Gide, *La Nouvelle Revue Française*, Paris, novembre 1951.

Pierre Masson et Jean-Michel Wittmann (sous la direction de), *Dictionnaire Gide*, Paris, Classiques Garnier, 2011.

Aline Mayrisch-de Saint-Hubert, *Toute la noblesse de sa nature*, Luxembourg, Cercle des Amis de Colpach, 2014.

Aline Mayrisch et Jacques Rivière, *Correspondance 1912-1925*, Limonest, Centre d'études gidiennes, 2007.

Aline Mayrisch et Jean Schlumberger, *Correspondance 1907-1946*, Luxembourg, Publications Nationales, 2000.

Ève Rabaté, *La Revue Commerce*, Paris, Classiques Garnier, 2012.

Gilbert-Lucien Salmon (éd.), *Jean Schlumberger et la Nouvelle Revue Française*, Paris, L'Harmattan, 2004.

Maria van Rysselberghe, *Les Cahiers de la Petite Dame*, tome I-IV, Paris, Gallimard, 1973-1977.

ピエール・アスリーヌ『ガストン・ガリマール フランス出版の半世紀』（天野恒雄訳、みすず書房、1986年）

アンドレ・ジッド『ジッドの日記 I-V』（新庄嘉章訳、小沢書店、1992-2003年）

クロード・マルタン『アンドレ・ジッド』（吉井亮雄訳、九州大学出版会、2003年）

吉井亮雄「1922年のポンティニー旬日懇話会 ジッドのポール・デジャルダン宛未刊書簡」（九州大学フランス語フランス文学研究会『ステラ』、第19号、2000年、127-140頁）

—『『新フランス評論』創刊百周年 アンドレ・ジッド関連の出版・行事を中心に』（『仏文研究』、京都大学フランス語学フランス文学研究会、第40号、2009年、1-12頁）

フーゴー・フォン・ホフマンスタールに関する文献

Theodor W. Adorno, „George und Hofmannsthal. Zum Briefwechsel“, in: *Prismen. Kulturkritik und Gesellschaft*, Baden-Baden, Suhrkamp, 1955; repr. 1969, S. 232-282.

Mark Anderson, « La restauration de la décadence », in: Jeanne Bem et André Guyaux (éds.), *Ernst Robert Curtius et l'idée d'Europe*, Paris, Honoré Champion, 1995, pp. 167-181.

Walter Benjamin, *Ursprung des deutschen Trauerspiels*, Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1978.

Benjamin Bennett, *Hugo von Hoffmannsthal. The Theater of Consciousness*, Cambridge, Cambridge University Press, 1988.

Hermann Broch, « Hofmannsthal et son temps », in: *Création littéraire et connaissance*, traduit de l'allemand par Albert Kohn, 1966; repr. 1985, pp. 45-184.

Riccardo Concetti, “Romanisti a Vienna nel primo Novecento: Spitzer e Hofmannsthal a confronto”, in: Ivano Paccagnella e Elisa Gregori (a cura di), *Leo Spitzer: lo stile e il metodo*, Padova, Esedra, 2010, pp. 33-47.

José María Díez Borque y Andrés Peláez (eds.), *Calderón en escena: siglo XX*, Madrid, Consejería de Cultura, 2000.

Charles Du Bos, « Avant-Propos pour les Écrits en prose de Hugo von Hofmannsthal » et « Le legs de Hofmannsthal », in: *Approximations*, Paris, Éditions des Syrtes, 2000, pp. 717-737, 937-974.

Jacques Le Rider, « L'Europe selon Hugo von Hofmannsthal de la première guerre mondiale à 1929 », in: Antoine Compagnon (éd.), *La République des Lettres dans la Tourmente (1919-1939)*, Paris, Alain Baudry, 2011, pp. 61-73.

— *Les juifs viennois à la Belle Époque*, Paris, Albin Michel, 2013.

Patrizia Lombardo, « Curtius et la finis Austriae », in: Jeanne Bem et André Guyaux (éds.), *Ernst Robert Curtius et l'idée d'Europe*, Paris, Honoré Champion, 1995, pp. 183-198.

Claudio Magris, “Hugo von Hofmannsthal”, in: *Il mito absburgico*, Torino, Piccola Biblioteca, Einaudi,

1963; repr. 2009, pp. 235-256.

— “La ruggine dei segni. Hofmannsthal e la *Lettera di Lord Chandos*”, in: *L’anello di Clarisse. Grande stile e nichilismo nella letteratura moderna*, Torino, Einaudi, 1984; repr. 1999, pp. 32-62.

— *Danubio*, Milano, Garzanti, 1986; repr. 2006.

Jean-Yves Masson, *Hofmannsthal, renoncement et métamorphose*, Lagrasse, Verdier, 2006.

Anton Reininger, *Storia della letteratura tedesca. Fra l’illuminismo e il postmoderno 1700-2000*, Torino, Rosenberg & Sellier, 2005, pp. 364-374.

Egon Schwarz, *Hofmannsthal und Calderón*, Hague, Mouton & Co, 1962.

— “Hugo von Hofmannsthal as a Critic”, in: Evans (ed.), *On Four Modern Humanists. Hofmannsthal, Gundorf, Curtius, Kantorowicz*, Princeton, Princeton University Press, 1970, pp. 3-53.

Werner Volke, *Hugo von Hofmannsthal*, traduit par Jean-Yves Masson, Nîmes, Jacqueline Chambon, 1995.

Hugo von Hofmannsthal, *Gesammelte Werke, Prosa*, I-IV, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1952-1959.

リヒャルト・アレヴィン、カール・ゼルツレ『大世界劇場』（円子修平訳、法政大学出版局、1985年）

池内紀『ザルツブルク 祝祭都市の光と影』（音楽之友社、1988年）

石井美樹子『中世劇の世界』（中公新書、1984年）

川島隆『カフカの＜中国＞と同時代言説 黄禍・ユダヤ人・男性同盟』（彩流社、2010年）

ヘルマン・ケステン『現代ドイツ作家論』（飯塚信雄訳、理想社、1959年、40-51頁）

塚越敏『創造の瞬間』（みすず書房、2000年）

フーゴー・フォン・ホフマンスタール『ホフマンスタール選集 1-4』（高橋英夫・富士川英郎・小堀桂一郎・松本道介他訳、河出書房新社、1972-1974年）

三谷研爾『世紀転換期のプラハ モダン都市の空間と文学的表象』（三元社、2010年）

ホセ・オルテガ・イ・ガセットに関する文献

Pedro Laín Entralgo, *La generación del noventa y ocho*, Buenos Aires, Espasa-Calpe, 1948.

Nemesio González Caminero, *Unamuno y Ortega: estudios*, Madrid, Publicaciones de la Universidad Pontificia Comillas, 1987, pp. 763-929.

Charles Cascalès, *L’humanisme d’Ortega y Gasset*, Paris, Presses Universitaires de France, 1957.

John T. Graham, *A Pragmatist Philosophy of Life in Ortega y Gasset*, Columbia and London, University of Missouri Press, 1994.

— *Theory of History in Ortega y Gasset. The Dawn of Historical Reason*, Columbia and London, University of Missouri Press, 1997.

Luis S. Granjel, *Panorama de la generación del 98*, Madrid, Guadarrama, 1959.

Evelyne López Campillo, *La Revista de Occidente y la formación de minorías: 1923-1936*, Madrid, Taurus, 1972.

- José Ortega y Gasset, *Obras completas*, t.1-11, Madrid, Revista de Occidente, 1957-1969.
- Revista de Estudio Orteguianos*, 12/13, Madrid, Centro de Estudio Orteguiano, 2006.
- Soledad Ortega Spottorno, *José Ortega y Gasset, imágenes de una vida, 1883-1955*, Madrid, Ministerio de Educación y Ciencia: Fundación José Ortega y Gasset, 1983.
- Ramón Menéndez Pidal, *Los Españoles en la Historia*, Buenos Aires, Espasa-Calpe Argentina, 1959.
- Harold C. Raley, *Jose Ortega y Gasset: Philosopher of European Unity*, Alabama, University of Alabama Press, 1971.
- Colette y Jean-Claude Rebaté, *Miguel de Unamuno*, Madrid, Taurus, 2009.
- Jaime de Salas y Dietrich Briesemeister (eds.), *Las influencias de las culturas académicas alemana y española desde 1898 hasta 1936*, Madrid, Vervuert, 2000.
- ホセ・オルテガ・イ・ガセット『オルテガ著作集 1-8』（佐々木孝、生松敬三、神吉敬三、桑名一博、アンセルモ・マタイス他訳、白水社、1969-1970 年）
- 木庭宏『ハイネとオルテガ』（松籟社、1991 年）
- 色摩力夫『オルテガ 現代文明論の先駆者』（中公新書、1988 年）
- アンセルモ・マタイス、ヨハネ・マシア編『ウナムーノ、オルテガ往復書簡』（以文社、1974 年）
- 『ウナムーノ、オルテガの研究』（以文社、1975 年）
- フリアン・マリーアス『裸眼のスペイン 燃えあがる史の開頭』（西澤龍生・竹田篤司訳、論創社、1992 年）
- 渡辺修『オルテガ』（清水書院、1996 年）

文学史に関する文献

- Erich Auerbach, *Mimesis. Dargestellte Wirklichkeit in der abendländischen Literatur*, Tübingen und Basel, Francke, 1946; repr. 2001.
- Jean Baruzi, *L'intelligence mystique*, Paris, Editeurs Berg International, 1985.
- *Saint Jean de la Croix et le problème de l'expérience mystique*, Paris, Salvator, 1999.
- Massimo Cacciari, *Walter Rathenau e il suo ambiente*, Bari, De Donato, 1979.
- William Calin, *The Twentieth-Century Humanist Critic*, Toronto, University of Toronto Press, 2007.
- Italo Calvino, *Perché leggere i classici*, Milano, Mondadori, 1995; repr. 2002.
- Antoine Compagnon, *Connaissez-vous Brunetière?*, Paris, Édition du Seuil, 1997.
- Bénédicte Coste, *Walter Pater, esthétique*, Paris, Michel Houdiard, 2011.
- Jérôme David, *Spectres de Goethe. Les métamorphoses de la « littérature mondiale »*, Paris, Les Prairies ordinaires, 2011.
- Elisabeth Däumer and Shyamal Bagchee (eds.), *The International Reception of T.S. Eliot*, London, Continuum, 2007.
- Catherine Gravet (éd.), *Traductrices et traducteurs belges*, Mons, Université de Mons, 2013.
- Klaus Große Kracht, *Zwischen Berlin und Paris: Bernhard Groethuysen 1880-1946*, Tübingen, Niemeyer,

2002.

Hans Ulrich Gumbrecht, *Vom Leben und Sterben der großen Romanisten. Karl Vossler, Ernst Robert Curtius, Leo Spitzer, Erich Auerbach*, Werner Krauss, München, Carl Hanser, 2002.

Max Kommerell, *Die Kunst Calderons*, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1946; repr. 1977.

Mario Mancini, *Stilistik als Erfahrung*, Würzburg, Königshausen & Neumann, 2012.

Ivano Paccagnella e Elisa Gregori (a cura di), *Mimesis. L'eredità di Auerbach*, Padova, Esedra, 2009.

— *Leo Spitzer: lo stile e il metodo*, Padova, Esedra, 2010.

Mario Praz, *Bellezza e bizzarria*, Milano, Mondadori, 2002.

Jaime de Salas y Dietrich Briesemeister (eds.), *Las influencias de las culturas académicas alemana y española desde 1898 hasta 1936*, Madrid, Vervuert, 2000.

Jean Schlumberger, *Plaisir à Corneille*, Paris, Gallimard, 1936; repr. 1945.

Peter Schnyder et Tania Collani (éds.), *Critique littéraire et littérature européenne*, Paris, Orizons, 2010.

George Steiner, *Extraterritorial. Papers on Literature and the Language Revolution*, New York, Atheneum, 1971.

エーリッヒ・アウエルバッハ『世界文学の文献学』（高木昌史、岡部仁、松田治訳、みすず書房、1998年）

—『ロマンス語学・文学散歩』（谷口伊兵衛訳、而立書房、2007年）

片山良展・三木正之・八木浩編『文学の基礎理論』（ミネルヴァ書房、1974年）

桂芳樹「ドイツ・ロマニスティックの系譜 E・R・クルティウスと E・アウエルバッハ」（『ドイツ文学研究』、(6)、日本独文学会東海支部、1970年、57-69頁）

—「ドイツ比較文学研究の理論と現状」（『名古屋大学教養部紀要 外国語・外国文学』、(20)、1976年、149-166頁）

エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』（板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社ライブラリー、1993年）

佐竹謙一『概説 スペイン文学史』（研究社、2009年）

イヴ・シュヴレル『比較文学入門』（小林茂訳、白水社、2009年）

デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か』（秋草俊一郎・奥彩子・桐山大介・小松真帆・平塚隼介・山辺弦訳、国書刊行会、2011年）

塚本昌則、鈴木雅雄編『前衛とは何か？ 後衛とは何か？ 文学史の虚構と近代性の時間』（平凡社、2010年）

土肥美夫編『ドイツの世紀末第五巻 チューリヒ 予兆の十字路』（国書刊行会、1987年）

福田和也『奇妙な廃墟』（国書刊行会、1989年）

ジャック・プレヴォタ『アクション・フランセーズ』（斎藤かぐみ訳、白水社、2009年）

グスタフ・ルネ・ホッケ『文学におけるマニエリスム 言語錬金術並びに秘教的組み合わせ術』（種村季弘訳、平凡社ライブラリー、2012年）

丸谷才一編『現代作家論 ジェイムズ・ジョイス』（早川書房、1992年）

三浦安子『エルンスト・シュタードラーの抒情詩』（同学社、2005 年）
宮崎裕助「ヒューマニズムなきヒューマニティーズ サイード、フーコー、人文学のディアスポラ」（西山雄二編『人文学と制度』、未来社、2013 年、43-69 頁）
ハンス・ロベルト・ヤウス『挑発としての文学史』（轡田収訳、岩波書店、1976 年）
山口知三・平田達治・鎌田道生・長橋英美子『ナチス通りの出版社 ドイツの出版人と作家達 1886-1950』（人文書院、1989 年）

その他の文献

Charles Du Bos, *Approximations*, Paris, Éditions des Syrtes, 2000.
— *Journal, 1920-1925, 1926-1929, 1930-1939*, Paris, Buche/Chastel, 2003-2005.
Maître Eckhart, *Telle était Sœur Katrei... Traité et Sermons*, traduit par Aline Mayrisch-de Saint-Hubert, Paris, Cahiers du Sud, 1954.
T. S. Eliot, *Opere 1904-1939*, Milano, Bompiani, 1992.
— *The Waste Land*, New York, W. W. Norton, 2001.
— *Opere 1939-1962*, Milano, Bompiani, 2003.
James Joyce, *Ulysses*, London, Penguin Books, 2000.
Aline Mayrisch-de Saint-Hubert et Marie Delcourt-Curvers, *Correspondance 1923-1946*, Luxembourg, Cercle des amis de Colpach, 2009.
Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, Bibliothèque de la Pléiade, tome I-IV, Paris, Gallimard, 1987-1989.
Vittorio Sermoni, *L'Inferno di Dante*, Milano, Rizzoli, 2004.
— *Il Purgatorio di Dante*, Milano, Rizzoli, 2004.
— *Il Paradiso di Dante*, Milano, Rizzoli, 2004.
有田英也『ふたつのナショナリズム ユダヤ系フランス人の近代』（みすず書房、2000 年）
生松敬三『ハイデルベルク ある大学都市の精神史』（TBS ブリタニカ、1980 年）
—『二十世紀思想渉猟』（岩波現代文庫、2000 年）
T・S・エリオット『文芸批評論』（矢本貞幹訳、岩波文庫、2006 年）
鯖江秀樹『イタリア・ファシズムの芸術政治』（水声社、2011 年）
中本真生子『アルザスと国民国家』（晃洋書房、2008 年）
二宮宏之『マルク・ブロックを読む』（岩波書店、2005 年）
フェリックス・ベルトー『現代の独逸文学』（大野俊一訳、ゆまに書房、1994 年）
ヴァレリー・ラルボー『罰せられざる悪徳・読書』（岩崎力訳、みすず書房、1998 年）